

1. 文献や文字による記録が存在しない、人類史の 99%を占める時代をなんというか。(先史時代)
2. 人類は(猿人)(原人)(旧人)(新人)の順に進化を遂げた。
3. 今から約 700 万年前にアフリカで誕生したと考えられる人類が持つ特徴は何か。(直立二足歩行)
4. 最初に出現した人類を猿人といい、(アウストラロピテクス)などがこれに属する。
5. 猿人の中には簡単な(打製石器)別名、礫石器を用いるものもいた。
6. やがて約(240万)年前、アフリカに(原人)が登場した。
7. 原人には(ホモ=ハビリス)やホモ=エレクトゥス(ジャワ原人)(北京原人)が属する。
8. 中でもホモ=エレクトゥスは(ハンドアックス)などの打製石器と(火)を使用して(狩猟・採集生活)を営んだ。
9. 原人は(氷期)の厳しい環境を生き抜いて、アフリカからヨーロッパ・東アジア・南アジアにまで広がった。
10. やがて約(60万)年前、より進化した(旧人)が出現した。
11. 旧人の代表例は(ネアンデルタール人)である。
12. 旧人は現代人類と変わらぬ脳容積を持ち、(死者を埋葬)するなど精神文化を発達させた。
13. 旧人はヨーロッパから西アジアにかけて住み、また目的に応じて(剥片石器)を使用したり、毛皮を身につけることで氷期に適応した生活をしていた。
14. ついで約(20万)年前にアフリカに現れた人類を(新人)という。我々と同じ現世人類(ホモ=サピエンス)に属する。
15. 新人の代表例は(クロマニヨン人)と(周口店上洞人)である。
16. 新人は剥片石器を作る技術を更に進歩させ、角や骨で作った(骨角器)を用いていた。
17. 新人が残した文化的遺産に(洞穴絵画)や(女性裸像)がある。
18. 有名な洞穴絵画の遺跡はフランスの(ラスコー)で(1940)年に発見されたものとスペインの(アルタミラ)が有名。
19. 女性裸像は乳房や臀部が強調された小さなビーナス像で、(ピレネー山脈)～ロシアにかけて多く分布している。
20. 人類が打製石器を用いて狩猟・採集生活を営んでいた時代を(旧石器時代)と呼ぶ。
21. 約260万年前から約1万1700年前の数十回の氷期と間氷期を繰り返した時代を(更新世)という。

22. 約1万1700年前から現在にかけての最新の地質年代を（完新世）という。
23. 約（9000）年前に西アジアで麦の栽培とヤギ・羊・牛などの飼育が始まったことにより（農耕・牧畜）が開始された。
24. これにより人類は積極的に自然環境を改変する能力を身につけ、食料を生産する生活が営めるようになった。人類史は狩猟・採集を中心とした（獲得経済）から農耕・牧畜による（生産経済）に移るという重大な変革を遂げた。
25. 農耕・牧畜が始めると、人類は集落に住み、織物や（土器）を作り、また石斧や石臼などの（磨製石器）が作られた。
26. 西アジアで農耕・牧畜が始まり、磨製石器が使われるようになったこの時代を（新石器時代）という。
27. 新石器時代の初期の農耕は雨水だけに頼る（乾地農法）や肥料を用いない（略奪農法）に頼っていたため、収穫が少なく、耕地も移動していた。
28. しかし、メソポタミアで（灌漑農業）が始まると食料生産が発達して多くの人口を養うことが可能となった。
29. 食料生産が発達して人口が増えると、多数の人間を統一的に支配する国家という仕組みが生まれた。（ナイル）川（ティグリス）川（ユーフラテス）川（インダス）川（黄河・長江）の各流域に文明が誕生した。
30. 文明では宗教と交易の中心である（都市）が生まれ、支配するものとされるもの間に（階級）差が生じた。
31. この頃武器や工具などの金属器が作られ、政治や商業の記録を残すための（文字）が発明された。ここから人類史は歴史時代へ入っていくのである。
32. 世界各地に拡散した人類はそれぞれの地に適応し、皮膚の色など身体的特徴の違いが生まれた。身長・頭の形・皮膚の色・毛髪といった身体的特徴で人類を（黄色人種）（白色人種）（黒色人種）に分けようとする考え方を（人種）による分類という。この考え方は19世紀以来ヨーロッパやアメリカで盛んになった。
33. また、言語・宗教・習慣などの文化的特徴によって人類を（民族）という集団に分ける場合もある。
34. 特に共通の言語から生まれた同系統の言語グループを（語族）という。

1. ヨーロッパから見た「日ののぼるところ、東方」を意味し、現在の中東に当たる地方を（オリエント）という。
2. （ナイル）川（ティグリス）川（ユーフラテス）川など大河の流域では早くから灌漑農業が行われ高度な文明が発達した。
3. ティグリス川・ユーフラテス川流域の（メソポタミア）では（前3000）年ごろから都市文明が栄えた。
4. この地域にはアラビア半島や周辺の高原から（セム語系）やインド=ヨーロッパ語系の遊牧民が豊かな富を求めて移住した。
5. ナイル川の恵みを受けるエジプトでは一時は異民族の侵攻があったが、メソポタミアと異なり周りを砂漠と海に囲まれているためエジプト語系の人々が長期にわたって高度な文明を築いた。
6. 対してシリア・パレスチナ地方ではメソポタミアにかけて（肥沃な三日月地帯）を形成し、小麦やオリーブの栽培を行うとともにセム語系の人々が地中海の交易に活躍した。
7. オリエント社会では大河を利用した治水・灌漑を行うためにはやくから宗教の権威によって統治する強力な（神権政治）が出現した。その結果、神としての王の権力やその信仰生活の有様を表現する独特の文化が生まれた。
8. メソポタミア南部では前3500年頃から人口が急激に増え、神殿を中心に大村落が成立した。
9. 前3000年頃には大村落はやがて都市へと発展していった。各都市はそれぞれ独立の道を歩み、前2700年頃までに（ウル）、（ウルク）、（ラガシュ）など（シュメール人）による都市国家が数多く形成された。
10. シュメール人の都市国家ウルの遺跡にある、復元されたレンガ造りの塔を（ジググラト）という。
11. これらの都市国家では階級社会が成立し、支配層には莫大な富が集まり豪華なシュメール文化が栄えたが、前24世紀にはセム語系の（アッカド人）によって征服された。その時の代表者は（サルゴン1世）
12. アッカド人はメソポタミアやシリアの都市国家を最初に統一して広大な領域国家を築いたが、その崩壊後は代わってセム語系の（アムル人）が（バビロン第一王朝）別名、古バビロニア王国を興した。
13. 古バビロニア王国は（ハンムラビ王）の治世のときに全メソポタミアを支配した。
14. また、この人物は（ハンムラビ法典）を發布し法に基づく強力な政治を行った。この中で王は神の代理として統治し、（目には目を歯には歯を）の復讐法の原則で罰則を決めていたが、刑罰は被害者の身分によって違っていた。

15. 早くから鉄製の武器を使用していたインド=ヨーロッパ語族の（ヒッタイト人）は前17世紀半ば頃アナトリア高原に強力な国家を建設し、メソポタミアにも遠征して古バビロニア王国を滅ぼした。その後シリアでエジプトとも戦った。
16. また（カッシート人）はザクロス山脈方面から南メソポタミアに侵入して古バビロニア王国滅亡後のバビロニアを支配した。
17. 北メソポタミアに興った（ミタンニ王国）も西方のシリアへ領土を広げ、ヒッタイトに服属するまで国力を保った。
18. メソポタミアは（多神）教の世界である。
19. シュメール人が始めた（楔型）文字が多くの民族の間で使用され（粘土板）に刻まれて記録された。
20. スサで発見されたハンムラビ法典碑の楔型文字はイギリスの（ローリンソン）によって解読の手がかりが示された。
21. シュメール～バビロニアの時代には天文・暦法・数学・農学が発達したが、その代表が（六十進法）、（太陰暦）、（1週7日制）である。
22. エジプトではナイル川の増減水を利用して豊かな農業が行われた。これをギリシアの歴史家（ヘロドトス）は「エジプトはナイルのたまもの」と表現した。
23. エジプトでは早くから地域の政治的単位である県（ノモス）がいくつも形成された。
24. 前3000年頃、エジプトではメソポタミアよりも早く王（ファラオ）による統一国家が作られた。
25. 以後、エジプトでは約30の王朝が交替したが、そのうち特に反映した時代を（古王国）、（中王国）、（新王国）の3期に分類する。
26. 古王国の成立期間は（前27）～（前22）で、（第3）～（第6）王朝の治世である。
27. 中王国の成立期間は（前21）～（前18）で、（第11）～（第12）王朝の治世である。
28. 新王国の成立期間は（前1567）～（前1085）で、（第18）～（第20）王朝の治世である。
29. ナイル下流域の（メンフィス）を中心に反映した古王国では（クフ王）らが恐らく自分の墓としてピラミッドを築かせた。
30. 中王国時代には政治の中心は上エジプトの（テーベ）に移ったが、その末期にはシリアから遊牧民（ヒクソス）が侵入し国内は一時混乱状態となった。
31. しかし前16世紀に新王国が興ってヒクソスを追放し、更にシリアへと侵入した。前14世紀に（アメンホテプ4世）が都を（テル=エール=アマルナ）に定め、従来の神々への信仰を禁じ一つの神（アトン）への信仰とする改革を行った。
32. この改革は王の死により終わったが、信仰改革の影響で古い伝統にとらわれない写実的な（アマルナ美術）が生み出された。

33. エジプト人の宗教は太陽神（ラー）を中心とした多神教で、新王国時代には首都テーベの守護神アモンの信仰と結びついて（アモン=ラー）の信仰が盛んになった。
34. エジプト人は靈魂の不滅と死後の世界を信じてミイラを作り、（死者の書）を記した。これは（新王国）時代に作られ、椅子に座る冥界の王（オシリス）の前で死者が最後の審判を受け、生前の行為の弁明をする様子などが描かれている。
35. エジプト人が用いたエジプト文字には、碑文や墓室・石棺などに刻まれる象形文字の（神聖文字）別名:ヒエログリフと、パピルス草一種の紙（パピルス紙）に書かれる（民用文字）別名:デモティックとがある。
36. ナポレオンのエジプト遠征中に発見された（ロゼッタストーン）には上段に（神聖文字）、中段に（民用文字）、下段に（ギリシア文字）が書かれている。フランスの（シャンポリオン）はこのギリシア文字を手がかりに神聖文字の解読に成功した。
37. エジプトで発達した（測地術）はギリシアの幾何学の基となり、太陰暦とならんで用いられた（太陽暦）は後にローマで採用されてユリウス暦となった。
38. 地中海東岸の（シリア・パレスチナ地方）はエジプトとメソポタミアを結ぶ通路として、はた地中海への出入り口として海陸交通の要衝であった。
39. 古くは前1500年頃からセム語系の（カナン人）が交易で活躍した。
40. 前13世紀頃ギリシア・エーゲ海方面から（海の民）が進出し、この地方を支配していたエジプト・ヒッタイトの勢力が後退したのに乗じて、セム語系の（アラム人）、（フェニキア人）、（ヘブライ人）が活動を開始した。
41. シリアに多くの都市国家を建設した（アラム人）は前1200年頃から（ダマスカス）を中心に内陸都市を結ぶ中継貿易に活躍した。そのため（アラム語）はオリエント世界の共通語として広く使われるようになり、（アラム文字）はオリエント世界で用いられる多くの文字の源流となった。
42. フェニキア人は（シドン）、（ティルス）などの都市国家を作り、クレタ・ミケーネ文明が衰えた後は地中海貿易を独占し、北アフリカの（カルタゴ）など多くの都市国家を建設した。
43. フェニキア人の文化史上の功績はカナン人の表音文字から線状の（フェニキア文字）を作り、これをギリシアに伝えて（アルファベット）の起源を作ったことにある。
44. 遊牧民であった（ヘブライ人）は前1500年頃パレスチナへ定住しその一部はエジプトへ移住した。しかしエジプトでは新王国のファラオによる圧政に苦しみ、前13世紀に指導者（モーセ）に率いられてパレスチナへ脱出した。これを（出エジプト）という。

45. 前1000年頃ヘブライ人は統一王国の基礎を固め、(ダヴィデ王) とその子(ソロモン王) のもとに栄えたが、その死後国は北の(イスラエル王国) と南の(ユダ王国) に分裂した。
46. 北に発生した(イスラエル王国) は前722年に(アッシリア) によって滅ぼされた。
47. 南に発生した(ユダ王国) は(新バビロニア) に滅ぼされ、前586年に住民の多くがその首都であるバビロンに連れ去られた。これを(バビロン捕囚) という。
48. ヘブライ人は唯一の神(ヤハウェ) への信仰を固く守り、この全能の神によりヘブライ人(ユダヤ人) が特別な恩恵を与られているという(選民思想) や救世主(メシア) の出現を待望する信仰が生まれた。
49. ヘブライ人(ユダヤ人) は約50年後にバビロンから開放されて帰国するとエルサレムにヤハウェの神殿を再興し、(ユダヤ教) を確立した。この宗教の経典は(旧約聖書) である。

1. 前2千年紀初めに北メソポタミアに興った（アッシリア王国）[前2千年紀～前612]は小アジア方面との中継貿易によって栄えたが、前15世紀には一時（ミタンニ王国）に服属した。しかしその後独立を回復し、前7世紀前半に全オリエントを征服した。
2. 強大な専制君主であったこの王国の王は政治・軍隊・宗教をみずから管理し、国内を州に分け（駅伝制）を設け各地に総督を置いて統治した。
3. この王国の王の代表的人物は（アッシュル=バニバル王）である。
4. この王国の首都は（ニネヴェ）である。
5. この王国は重税と圧政によって（前612）年に崩壊し、オリエント世界には（エジプト）、小アジアには（リディア）・（新バビロニア）別名（カルデア）、イラン高原の（メディア）の4王国に分立した。
6. 分立した4王国の内、リディアでは世界で初めての（金属貨幣）が作られた。
7. 前6世紀半ば、イラン人（ペルシア人）のキュロス2世が（アケメネス朝）[前550～前330]を興し、メディアとリディア王国を征服したのち、前539年にはバビロンを開城して翌年ユダヤ人を捕囚から開放した。
8. この王朝の第3代である（ダレイオス1世）より、オリエントは再び統一された。
9. 第3代は各州に（サトラップ）と呼ばれる知事をおき、全国を統一し、（王の目）、（王の耳）と呼ばれる監察官を巡回させて中央集権化を図った。
10. この王朝は海上ではフェニキア人の交易を保護して財政の基礎を固め、陸上では全国の要地を結ぶ（王の道）と呼ばれる国道を作り、都（スサ）を中心に駅伝制を整備した。
11. この王朝の都は（スサ）であるが、ダレイオス1世以来3代に渡り作られた都市がある。その都市を（ペルセポリス）といい、アレクサンドロス大王により廃墟とされた。
12. この王朝が前5世紀前半にギリシアと戦って敗れた戦争を（ペルシア戦争）という。
13. この王朝は前330年に（アレクサンドロス大王）により征服された。

14. イラン人（ペルシア人）は（ゾロアスター教）別名（拜火教）を信仰し、この宗教ではこの世を善（光明）の神（アフラ=マズダ）と悪（暗黒）の神（アーリマン）との絶え間ない闘争と説き、人間の幸福は光明神の恩恵を得て（最後の審判）により楽園に入ることとした。
15. 地中海に面するマケドニアでは、前4世紀後半にギリシアを支配下に置き、（アレクサンドロス大王）は（前334）年に東方遠征へ出発した。
16. この人物はアケメネス朝を滅ぼし、更にはインド北西部にまで進出して東西にまたがる大帝国を築いたが、彼が没するとアジアの領土はすべてギリシア系の（セレウコス朝）[前312～前64]に受け継がれた。
17. その後前3世紀半ばにアム川上流のギリシア人が独立して（バクトリア）[前255頃～前139]を建国した。
18. 遊牧イラン人の族長（アルサケス）もカスピ海東南部に（パルティア）中国名は（安息）を建国した。
19. カスピ海東南部に建国されたこの王朝の首都は（クテシフォン）である。
20. この王朝を倒して建国されたのがイラン人の（ササン朝）[224～651]である。
21. この王朝の建国者（アルダシール1世）は首都を（クテシフォン）に置き、（ゾロアスター教）を国教と定め国の統一を図った。
22. 第2代皇帝の（シャープール1世）はシリアに侵入してローマ軍を破り、皇帝ヴァレリアヌスを捕虜とした。
23. この王朝は5世紀後半に中央アジアの遊牧民（エフタル）の侵入を受けたが、（ホスロー1世）の時代にトルコ系遊牧民の（突厥）と結んで返り討ちにした。しかし、642年の（ニハーヴァンドの戦い）でアラブ軍に敗れ王朝が事実上崩壊し、7世紀半ばにアラブ人によって滅ぼされた。
24. 初期のパルティアの文化はヘレニズム文化の影響を強く受け、その王は「ギリシア人を愛するもの」という称号をおびていた。しかし紀元1世紀頃、イランの伝統文化が復活し始めると国内ではギリシアの神々とイランの神々がともに祀られるようになった。
25. ササン朝の時代になると、イランの民族的宗教である（ゾロアスター）教の経典（アヴェスター）が編集された。
26. 3世紀の宗教家（マニ）はゾロアスター教・仏教・キリスト教を融合して（マニ教）を作り上げた。
27. ササン朝時代には建築・美術・工芸の分野が大いに発達した。これを（ササン朝美術）という。
28. 精巧に作られた銀器・ガラス器・毛織物・彩釉陶器の技術や様式は次のイスラーム時代へと受け継がれていくとともに、西方ではビザンツ帝国を経て地中海世界に、東方では南北朝・隋唐時代の中国を経て飛鳥・奈良時代の日本にまで伝えられた。法隆寺の（獅子狩文錦）、正倉院の（漆胡瓶）はその代表的な例として知られる。

1. 古代地中海世界で大きな役割を果たしたのはインド=ヨーロッパ語系の（ギリシア人）と古代イタリア人である。
2. 東地中海沿岸ではオリエントからの影響をもとにヨーロッパで初めての青銅器文明、（エーゲ文明）が誕生した。
3. この文明はまず（クレタ）島で栄えた。
4. 前2000年ごろに始まる（クレタ文明）は壮大で複雑な構造を持つ宮殿建築が特徴である。（クノッソス）に代表される宮殿は宗教的権威を背景に巨大な権力を握った王の住居であった。
5. この文明は外部勢力への警戒心が薄く、宮殿は（城壁）を持たなかった。
6. この文明はイギリスの（エヴァンズ）によってその姿が明らかにされた。
7. 一方ギリシア本土では前2000年頃北方から移住したギリシア人がクレタやオリエントの影響を受けて前16世紀から（ミケーネ文明）を築き始めた。
8. この文明のギリシア人はミケーネ・（ティリンス）・（ピュロス）などに巨石でできた城塞王国とそれを中心とした小王国を築いた。
9. この文明はクレタ文明に比べ（戦闘的で軍事に関心が高かった）のが特徴である。
10. この文明は前15世紀にはクレタ島に侵入して支配するようになり、その勢力は小アジアの（トロイア）にまで及んだ。
11. この文明はドイツの（シュリーマン）によってその姿が明らかにされた。
12. 粘土板に残された（線文字B）文書の解読により、これら小王国では専制的な権力を持った王が役人組織を使って地方の村々の農民から農作物・家畜や武器などの手工業品を貢納として取り立て、それによって王宮で働く多数の職人や奴隷を養っていたことが明らかにされた。この仕組を（貢納王政）という。
13. 線文字Bはミケーネ時代のギリシア人がクレタ文明の戦文字Aに学んで作った音節文字で、イギリスの（ヴェントリス）らによって解読された。
14. ミケーネ文明の諸王国は前1200年頃に突然破壊され滅亡した。滅亡の性格な理由は明らかになっていないが、一説には（海の民）による侵入があったと言われている。
15. その後ギリシアは約400年に渡り（暗黒時代）と呼ばれる混乱した時代に入る。
16. 最終的にギリシア人は方言の違いから（イオニア）人・（アイオリス）人・（ドーリア）人に分かれていった。

17. 前8世紀に入ると、各地で有力帰属の指導のもとにいくつかの集落が連合し、（**アクロポリス**）（城山）を中心として人々が（**集住**）（シノイクスモス）として都市を建てた。これらの都市を（**ポリス**）という。
18. この頃になると暗黒時代も終わり、人口が増加し土地が不足し始めた。前8世紀半ばからギリシア人は大規模な植民活動を開始し、地中海と黒海の沿岸各地に（**植民市**）を建設した。
19. 同じ頃、フェニキア文字を元に作られた（**アルファベット**）が商業活動で用いられるとともにホメロスの詩など文学の成立をもたらした。
20. 各ポリスは独立した国家で、古代のギリシアは常に小国分立状態にあり、統一国家を作ることはなかった。しかし、文化的側面ではギリシア人は共通の言語と神話、デルフォイの（**アポロン神の信託**）、4年に一度開かれる（**オリンピア**）の祭典を通じて同一民族としての意識を持ち続けた。
21. ギリシア人は自分たちを（**ヘレネス**）と呼び、異民族を（**バルバロイ**）（わけのわからない言葉を話すもの）と区別した。
22. ポリスの住民は自由人の市民とこれに隷属する奴隷からなり、市民の中には貴族と平民の区別があった。貴族は国防の主力を担い、前7世紀までには少数の貴族が政治を独占する（**貴族政ポリス**）が一般的になった。ただし、平民と貴族の関係は対等であった。
23. ポリスは城壁で囲まれた市域と周囲の田園から成り立っていた。市域の中心にある（**アクロポリス**）は砦であると同時に神殿が建てられる神聖な場所であった。
24. （**アゴラ**）（広場）では市場や集会が開かれ、市民が談話や議論を楽しんだ。
25. 田園には市民たちの所有地である「持ち分地」（**クレーロス**）があり、彼らの大多数はここで農業を営んだ。
26. ポリスの中でも奴隷制度が最も発達したのは（**アテネ**）であり、その数は総人口の1/3にも及んだ。
27. アテネと並んで領土の広い（**スパルタ**）ではドーリア系である1万人足らずのギリシア人がはるかに多数の非ドーリア人の被征服民を奴隷身分の農民とし、農業に従事させた。
28. この非ドーリア人の被征服民を（**ヘイロータイ**）といい、商工業に従事する（**ペリオイコイ**）と同様にスパルタ市民に隷属していた。
29. スパルタでは多数を占める被征服民の反乱を防ぐため、貨幣の使用禁止や持ち分地の公平な分配など市民団内部の平等を徹底し結束を高めた。さらに外国からの影響で市民内の結束が崩れないように、他国との自由な往来を禁止する鎖国政策を取った。この体制は（**リュクルゴス**）によって確立された。

30. 公益活動が盛んになると、ポリスの平民の中にも富裕層が生まれ始めた。彼らは武具を買って戦争に参戦できるようになった。これにより、密集隊形（**ファランクス**）を組んで戦う（**重装歩兵部隊**）が騎馬を使う貴族に代わり国防の主力となった。国防を担うものが参政権を持っていたため、今後平民も政治に参加するようになり、民主制への歩みが始まった。
31. 民主制が典型的な形で出現したのはアテネであった。まず前7世紀に（**ドラコン**）によって法律が成文化された。
32. ついで前6世紀初頭にソロン貴族、平民の調停者として改革を行った。血統ではなく財産額の大小によって市民の参政権を定める（**財産政治**）を行い、負債を帳消しにし、以後借財を負った市民を奴隷として売ることを禁止する（**債務奴隷の禁止**）を行った。
33. やがて多くのポリスでは僭主と呼ばれる独裁者が平民の支持により非合法に政権を奪って（**僭主政治**）を始めた。
34. アテネでは前6世紀半ばに（**ペイシストラトス**）が僭主政治を確立させた。
35. 僭主政治の崩壊後前508年にアテネの指導者となった（**クレイステネス**）は血縁に基づく旧来の4部族制を地縁共同体である区（**デーモス**）を基礎として10部族制に改める大改革を行った。
36. またこの時期、僭主の出現を防止する（陶片追放）別名オストラキスマスが行われるようになった。
37. オストラキスマスでは陶器の破片（**オストラコン**）に僭主となりそうな人物の氏名を記入し投票する。全体で6000票集まった時に最多得票者を10年間国外追放とする制度である。
38. この時期は全オリエントを支配して大帝国を築いた（**アケメネス朝**）[前550～前330/キュロス2世建国]の支配に対して（**ミレトス**）を中心としたイオニア地方のギリシア人植民市が反乱を起こした。これをきっかけに発生したのが（**ペルシア戦争**）である。
39. アテネ市民の重装歩兵部隊は前490年の（**マラトンの戦い**）でペルシア軍を打ち破った。
40. 続いて（**テミстокレス**）によって海軍を拡充し、前480年（**サラミスの海戦**）でもギリシア連合軍がペルシア軍を大敗させた。
41. そして翌年前479年の（**プラタイアの戦い**）でギリシア側の勝利は決定的となった。
42. ペルシア戦争終了後、エーゲ海周辺の多くのポリスはペルシアの再侵攻に備えて（**デロス同盟**）を結び、（**アテネ**）がその盟主となった。
43. 同盟内ではアテネが強大な軍事力を背景に同盟諸国への支配力を強める一方、国内では軍艦の漕ぎ手として参加する（**無産市民**）の発言力が高まった。なお、この軍艦は漕ぎ手が上下3段になっていて、いっせいにオールを漕いで敵船に体当たりすることで攻撃する船で、名前を（**三段櫂船**）という。
44. 無産市民の発言力の高まりを背景に、前5世紀半ば頃将軍（**ペリクレス**）の指導のもとでアテネ民主政は完成された。

45. アテネ民主政では青年男性市民の全体集会である（**民会**）が多数決で国家の政策を決定し、将軍など一部を除き、一般市民から抽選された任期1年の役人が行政を担当した。裁判は抽選された（**陪審員**）が民衆裁判所において投票で判決を下した。市民は貧富に関わらず平等に参政権を持っていたが、奴隷・在留外人・女性には参政権はなかった。また、代議制ではなく市民全員が参加する（**直接民主政**）であった。

1. デロス同盟によって急速に勢力を広げたアテネに対して、(ペロポネソス同盟)の盟主スパルタは脅威を感じ、やがて対立関係になっていく。
2. そしてアテネとスパルタは(前431)年に(ペロポネソス)戦争へ突入した。
3. 全ギリシア世界は主に民主政ポリスを中心とする(アテネ)側と、貴族制ポリスを中心とする(スパルタ)側の二陣営に分かれて争った。
4. この戦争は当所アテネ側が優勢であったが、疫病の流行により(ペリクレス)を失ってから政治が混乱し、(デマゴーマス)と呼ばれる戦争指導者を見いだせず、そのままペルシアと組んだスパルタに敗れた。
5. (デマゴーマス)と呼ばれる戦争指導者の著名な人物に、(クレオン)がいる。
6. この戦争後は前4世紀半ばにスパルタに代わり(テーベ)が一時主導権を握り、その後アテネが勢力を回復するなど、有力ポリス間の争いは続いた。
7. 絶え間なく続く戦争によってポリスでは土地を失い市民の身分から転落する者が増え始めた。加えて、市民軍に代わって金で雇われて働く(傭兵)が流行するようになると、市民団の団結は失われ、ポリス社会は変容し始めた。
8. その後前4世紀後半、ポリスを作らなかったギリシア人の一派である北方の(マケドニア)が(フィリッポス2世)のもとで軍事力を強め、(前338)年に(カイロネイア)の戦いでテーベとアテネの連合軍を破った。
9. この戦いの後、スパルタを除く全ギリシアのポリスはフィリッポス2世によって(コリントス同盟)別名：ヘラス同盟に集められて支配下に置かれた。
10. フィリッポス2世の子である(アレクサンドロス大王)はこれまでギリシャ諸国の争いに度々干渉してきたペルシアを討つため、マケドニアとギリシアの連合軍を率いて(前334)年に(東方遠征)に出発した。
11. この人物は(前333)年に(イッソスの戦い)でペルシア王ダレイオス3世を打ち破った後、エジプトを征服した。なお、この戦いを描いたモザイク画が(ポンペイ)の床より発見されている。
12. その後(前331)年に(アルベラの戦い)でペルシアを滅ぼしてインド西北部にまで進出し、東西にまたがる大帝国を築いた。

13. この大王の死後、彼の領土は（ディアドコイ）と呼ばれる部下の将軍たちによって争われ、（アンティゴノス朝マケドニア）・（セレウコス朝シリア）・（プトレマイオス朝エジプト）などの諸国に分裂した。
14. アレクサンドロス大王の東方遠征から、最も長く存続した（プトレマイオス朝エジプト）が滅亡した前30年までの約300年間を（ヘレニズム時代）と呼ぶ。
15. この時代はギリシア風の都市がオリエントやその周辺に多数建設され、これらの都市を中心にギリシア文化が広まった。なかでもエジプトの（アレクサンドリア）は経済・文化の中心として大いに栄えた。
16. ギリシア人の宗教は多神教で、ギリシア神話における（オリンポス12神）らの神々は人間と同じ姿や感情を持つとされた。
17. ギリシアの文学は、神々と人間の関わりをうたった（ホメロス）や（ヘシオドス）らによる叙事詩から始まった。
18. 一方で論理と議論を重視するギリシア人の気風は、自然現象を神話ではなく合理的根拠で説明する科学的態度に現れた。前6世紀にはイオニア地方のミレトスを中心に（イオニア自然哲学）が発達した。
19. この他に有名なのは万物の根源を水と考えた（タレス）や、ピタゴラスの定理を発見したピタゴラスである。
20. 前5世紀以降文化の中心となったのは民主政アテネで、民主政の重要行事である祭典では悲劇や喜劇のコンテストが行われた。「三大悲劇詩人」と呼ばれる（アイスキュロス）・（ソフォクレス）・（エウリピデス）や政治や社会問題を題材に取り上げた喜劇作家（アリストファネス）が代表的な劇作家である。
21. 民会や民衆裁判所での弁論が市民生活にとって重要になってくると、物事が心理かどうかではなく、いかに相手を説得するかを教える（ソフィスト）と呼ばれる職業教師が現れた。
22. この職業教師の典型的人物は「万物の尺度は人間」と主張した（プロタゴラス）である。
23. これに対して、（ソクラテス）は真理の絶対性を説き、よきポリス市民としての生き方を追求したが、民主政には批判的で市民の誤解と反感を受けて処刑された。
24. ソクラテスの哲学を受け継いだ（プラトン）は事象の背後にある（イデア）こそ永遠不変の実在であるとし、さらに選ばれた少数の有徳者だけが政治を担当すべきという理想国家論を説いた。
25. この人物の弟子である（アリストテレス）は自然・人文・社会のあらゆる方面に思索を及ぼし、「万学の祖」と呼ばれ、イスラームの学問やヨーロッパ中世のスコラ学に大きな影響を与えた。

26. また、(ヘロドトス) や (トゥキディデス) はともに歴史記述の祖と呼ばれ、過去の出来事を神話によってではなく史料の批判的探求によって説明した。
27. 建築・美術の領域では調和と均整の美しさが追求され、建築では柱の様式により (ドーリア) 式・(イオニア) 式・(コリント) 式の3様式に分類される。
28. ギリシア建築の柱の3様式とは、荘厳で力強い (ドーリア) 式、優美な (イオニア) 式、華麗な (コリント) 式の3つである。
29. ペリクレスの企画のもと15年をかけて完成したアテネのパルテノン神殿は (ドーリア) 式の神殿である。
30. 美術の領域では、パルテノン神殿のアテナ女神像の作者である彫刻家 (フェイディアス) に代表される彫刻美術が理想的な人間の肉体美を表現した。
31. ヘレニズム時代に入るとギリシア文化は東方にも波及し、各地域の文化からも影響を受けて独自の文化が生まれた。これを (ヘレニズム文化) という。
32. この時代にはポリス中心の考え方に変わって、ポリスの枠にとらわれない生き方を理想とする (世界市民主義) 別名: コスモポリタニズムの思想が知識人の間に生まれた。
33. そこから哲学もポリス政治からの逃避と個人の内面的幸福の追求を説くようになり、精神的快楽を求める (エピクロス) の (エピクロス) 派や禁欲を重視する (ゼノン) の (ストア) 派が盛んになった。
34. ヘレニズム時代には自然科学が特に発達した。(エウクレイデス) は今日「ユークリッド幾何学」と呼ばれる平面幾何学を集大成した。
35. また、「アルキメデスの原理」で知られる (アルキメデス) は数学・物理学の諸原理を発見した。
36. また、(コイナー) と呼ばれるギリシア語が共通言語となり、エジプトのアレクサンドリアには王立研究所 (ムセイオン) が作られて自然科学・人文科学が研究された。
37. 次のギリシア文化にまつわる作者・著者を答えなさい。
38. (ホメロス) ・・・・「イリアス」「オデュッセイア」
39. (ヘシオドス) ・・・・「神統記」「労働と日々」
40. (アイスキュロス) ・・・・悲劇「アガ멤ノン」
41. (ソフォクレス) ・・・・悲劇「オイディプス王」
42. (エウリピデス) ・・・・悲劇「メデア」

43. (アリストファネス) 喜劇「女の平和」「女の議会」
44. (タレス) イオニア学派の祖「万物の根源は水」
45. (ピタゴラス) 「ピタゴラスの定理」
46. (デモクリトス) 原子論
47. (ヒポクラテス) 西洋医学の祖
48. (プロタゴラス) ソフィスト。普遍的真理を否定
49. (ソクラテス) 西洋哲学の祖。知徳合一を説く。「無知の知」
50. (プラトン) イデア論を説く。著書「国家」
51. (アリストテレス) 万学の祖。著書「政治学」
52. (エピクロス) 精神的快樂主義。エピクロス派の祖
53. (ゼノン) 精神的禁欲主義。ストアはの祖
54. (エラトステネス) 地球の円周を計測
55. (アリスタルコス) 太陽中心説・地動説
56. (エウクレイデス) 「ユークリッド幾何学」
57. (アルキメデス) 「アルキメデスの原理」
58. (フェイディアス) パルテノン神殿のアテナ女神像
59. (ミロのヴィーナス) 作者不明のヘレニズム彫刻。エーゲ海ミロス（ミロ）島で出土
60. (ラオコーン) ローマで発見されたヘレニズム彫刻。
61. (ヘロドトス) 著書「歴史」ペルシア戦争史を記述
62. (トゥキディデス) 著書「歴史」ペロポネソス戦争史を記述
63. 前1000年頃、古代イタリア人が北方からイタリア半島に南下し定住した。そのなかの（ラテン）人の一派によってティベル川のほとりに建設された都市国家が（ローマ）である。
64. ローマでは先住民の（エトルリア）人を通してギリシア文化の影響を受け、はじめ（エトルリア）人の王に支配されていたが、前6世紀末に王を追放して（共和制）となった。

65. ローマでは貴族（パトリキ）とおもに中小農民からなる平民（プレブス）の身分差があり、最高官職である執政官（コンスル）は貴族から選ばれていた。
66. 執政官（コンスル）は任期（1）年・（2）名からなり、貴族の会議である（元老院）が指導し実質的な権力を握っていた。
67. しかし重装歩兵として中小農民が国防に参加するようになると、貴族による独裁政治に不満を持ち始め、身分闘争が発生した。結果、前5世紀の前半に元老院やコンスルの決定に拒否権を行使できる平民出身の（護民官）と平民だけの民会である（平民会）は設けられた。
68. ついで、前5世紀半ばには慣習法を始めて成文化した（十二表法）が制定、公開された。
69. （前367）年にはコンスルのうち一人を民会から選ぶよう定めた（リキニウス・セクスティウス法）が制定された。
70. そして（前287）年には平民会の決議が元老院の認可なしに全ローマ人の国法となることを定めた（ホルテンシウス法）が制定された。
71. このように平民にも参政権が与えられると、従来の貴族に加えて一部の富裕な平民が加わった新しい支配階層が生まれた。これを（新貴族）別名：（ノビレス）という。
72. しかし実質的には元老院が支配権力を持ち続け、非常時には独裁官（ディクタトル）が独裁権を行使できた。これは元老院の提案でコンスルが指名することができ、任期は6ヶ月で再任は認められない役職だった。
73. ローマは中小農民の重装歩兵を軍事力の中核にして、元老院の指導のもとほかのラテン人やエトルリア人、及び南部に住むギリシア人の都市国家を次々と征服し、前272年、全イタリア半島を支配した。イタリア半島統一における最後の都市は南イタリアの（タレントゥム）である。
74. ローマによって征服された都市は個別にローマと同名を結ばされ、それぞれ異なる権利と義務を与えられた。これを（分割統治）という。これにより都市同士の同盟によるローマへの反乱を防いだ。また、ギリシアのポリスと異なり、服属した住民の一部にローマ市民権を分け与えていたため、住民による反乱を防いでいた。
75. ローマは地中海性西方を支配していたフェニキア人植民市（カルタゴ）の勢力と衝突し、前264～前146の間3回にわたって（ポエニ戦争）を引き起こした。
76. この戦争ではカルタゴの将軍（ハンニバル）が前216年、（カンナエの戦い）でイタリアに侵入するなどローマは一時危機に陥ったが、ローマの将軍（スキピオ）が前202年に（ザマの戦い）でカルタゴ軍を打ち破るなどし、最終的にはローマの勝利となった。

77. その後ローマは前2世紀半ばには地中海全体を支配するようになるが、(中小農民)が長期の征服戦争へ出兵するうちに農地が荒廃して没落してしまった。こうした農民の多くは都市ローマへ流入し、この無産市民たちはイタリア半島以外のローマの征服地である(属州)から大量に輸入される安い穀物で生活した。
78. イタリア半島以外のローマの征服地を(属州)といい、最初の地は第1回ポエニ戦争の勝利によって獲得した(シチリア)である。
79. 対して属州統治の任務を請け負った元老院議員や属州の徴税請負人となった騎士階層は、属州の拡大によって莫大な富を手に入れた。彼らはイタリアで農民が手放した農地を買い集めたり、征服戦争によりローマのものとなった公有地を手に入れ、戦争捕虜である奴隷を多数使った大土地所有制(ラティフンディア)によって大規模な農業経営を行った。
80. 国防の中核である重装歩兵を支える農民の没落に危機感を抱いた(グラックス兄弟)は護民官に選ばれた後、大土地所有者の土地を没収し、無産市民に分配しようとしたが、大地主の反対にあい失敗し、兄は殺され弟は自殺した。
81. これ以降、有力政治家は自分の保護下に置く人々を配下として多く抱え、彼らを使って互いに暴力で争うようになる。こうしてローマは(内乱の1世紀)と呼ばれる時代に突入した。
82. 前1世紀に入ると軍隊は有力者がむさん市民を集めてつくる私兵となり、平民派の(マリウス)と閥族派の(スラ)が互いに私兵を率いて争った。
83. また、イタリア半島の同盟都市は、ローマ市民権をもとめて(同盟市戦争)と呼ばれる反乱を起こした。[前91～前88]
84. さらに見世物に使われていた剣闘士(剣奴)が(スパルタクス)に率いられて大反乱を起こすなど、内乱は頂点に達した。
85. この混乱を武力によって沈めたのが実力者の(ポンペイウス)・(カエサル)・(クラッスス)だった。
86. 彼らは前60年に私的な政治同盟を結んで元老院と閥族派に対抗し、政権を握った。これを(第1回三頭政治)という。
87. その後(カエサル)は今日のフランスに相当する(ガリア)遠征の成功によって指導権を獲得し、政敵ポンペイウスを倒して前46年に全土を平定した。
88. この人物は連続して独裁官に就任して社会の安定化に務め民衆に多大な人気を得たが、元老院を無視して王になる意志を見せたため(前44)年に元老院共和派の(ブルートゥス)らに暗殺された。
89. 前43年、カエサルの部下(アントニウス)・(レピドゥス)とカエサルの養子(オクタウィアヌス)が再び政治同盟を結んで閥族派を抑えた。これを(第2回三頭政治)という。

90. カエサルの養子（オクタウィアヌス）はプトレマイオス朝エジプトの女王（クレオパトラ）と結んだ（アントニウス）を前31年に（アクティウムの海戦）で破り、プトレマイオス朝を滅ぼしてローマの属州とした。こうして地中海は平定され、内乱は終わりを告げた。
91. 権力の頂点に立ったこの人物は前27年に元老院から尊厳者（アウグストゥス）の称号を与えられ、ここに（帝政）時代が始まった。
92. 彼はカエサルと違い元老院など共和制の制度を尊重し、自らを市民の中の第一人者（プリンケプス）と称した。
93. しかし実際にはほぼすべての要職を兼任し、全政治権力を手中に収めていた。この政治を（元首政）別名：（プリンキパトゥス）といい、事実上の皇帝独裁であった。
94. これ以後約200年間はローマの平和（パクス・ロマーナ）と呼ばれる繁栄と平和の時代が続いた。
95. 特に96年～180年の（五賢帝）の時代はローマの最盛期と言われる。
96. 96年～180年の（五賢帝）の時代とは、（ネルウァ）帝、（トラヤヌス）帝、（ハドリアヌス）帝、（アントニヌス・ピウス）帝、（マルクス・アウレリウス・アントニヌス）帝の5皇帝による治世である。
97. この内、最初の皇帝は（ネルウァ）帝である。
98. この内、ローマの最大領土を築いたのは（トラヤヌス）帝である。
99. この内、ブリタニアに長城を築いたのは（ハドリアヌス）帝である。
100. この内、哲人皇帝と呼ばれ、「自省録」を著したのは（マルクス・アウレリウス・アントニヌス）帝である。
101. ローマは都市を通して属州を支配し、都市の上位市民は（ローマ市民権）を与えられる代わりに帝国支配に貢献した。この権利は212年（カラカラ）帝のときに帝国の全ローマ自由人に与えられた。

1. ローマ帝国は五賢帝最後の（マルクス・アウレリウス・アントニヌス）帝の治世末期頃から帝国財政の行き詰まりや経済の不振がしだいにあらわになってきた。
2. 3世紀には帝国のまとまりが崩れ始め、各属州の軍団が独自に皇帝を立てて元老院と争い、短期間に皇帝が即位しては殺害されるという（軍人皇帝）の時代になった。
3. 社会の仕組みも変化していき、都市は重税によって下層市民が貧困化し、一部の上層市民は都市を去って田園に大所領を経営するものが現れた。彼らは貧困化した下層市民などを小作人（コロヌス）として大所領で働かせた。この生産体制を小作成（コロナトゥス）と呼び、従来の奴隷制経営、ラティフンディアに取って代わった。
4. 284年に即位した（ディオクレティアヌス）帝は帝国を東と西に分け、それぞれ正帝と副帝の2人が統治する（四帝分治制）、（テトラキア）を敷いて政治的秩序を回復した。
5. またこの皇帝は、皇帝を神として礼拝させ、専制君主として支配したので政治体制は元首政から（専制君主制）、（ドミナトゥス）へと変化した。
6. この皇帝の後を継いだ（コンスタンティヌス）帝はそれまで迫害されていた（キリスト）教を公認することで帝国の統一を図った。
7. さらにこの皇帝は330年、ビザンティウムに新たな首都を築いて名を（コンスタンティノープル）と改称し巨大な官僚体制を築いた。皇帝が官吏を使って帝国を専制支配する体制が出来上がった。
8. こうした改革にもかかわらず、膨大な数の軍隊と官僚を支えるための重税は属州の相次ぐ反乱を招いた。さらに375年に始まる（ゲルマン人）の大移動によって帝国内部は混乱し、帝国の分裂は不可避となった。
9. 395年（テオドシウス）帝は帝国を東西に2分して2子に分け与えた。
10. コンスタンティノープルを首都とする（東ローマ帝国）、別名：（ビザンツ帝国）は都市経済が比較的健在で1453年まで続いた。
11. ローマを首都とする（西ローマ帝国）は476年ゲルマン人傭兵隊長（オドアケル）によって滅亡した。
12. キリスト教は1世紀にローマ支配下のパレスチナから生まれた。当時ユダヤ教を指導していた祭司や律法の実行を重んじた（パリサイ派）はユダヤを支配する支配者層としてローマの支配を受け入れた。

13. パレスチナの民衆は貧困に苦しんでいたが、ユダヤの支配者層はその声に応えなかった。やがてその現状からの救済を求める声が高まり、そのうちイエスは祭司やパリサイ派を形式主義だと批判し、貧富の区別なく及ぼされる（**神の絶対愛**）と（**隣人愛**）を説き神の国の到来と最後の審判を約束した。
14. 民衆はイエスを救世主ギリシア語で（**キリスト**）と信じて彼の教えに従うようになった。
15. 祭司やパリサイ派はイエスをローマに対する反逆者として総督（**ピラト**）に訴えたため、彼は十字架にかけられ処刑された。
16. その後イエスの弟子たちの間ではイエスが復活し、その十字架上での死は人間の罪を贖う行為だったという信仰が生まれ、これを中心に（**キリスト教**）が成立した。
17. その後まもなく（**ペテロ**）や（**パウロ**）など使徒によって伝道活動が始まった。
18. （**パウロ**）は神の愛は異邦人にも及ぶとしてローマ帝国各地に布教し、パレスチナ以外の地域にもキリスト教を広げた。
19. やがてキリスト教は社会的弱者を中心に上層市民にも浸透し、帝国全土へ広がった。この間に（**新約聖書**）がギリシア語のコイネーで記され、旧約聖書とともにキリスト教の教典となった。
20. 新約聖書は、（**四福音書**）・（**使徒行伝**）を始めとする27書で構成される教典である。
21. この当時のローマは多神教で、皇帝も神の一人とされる（**皇帝崇拜**）が強化されていた。
22. キリスト教徒は唯一絶対神を信仰するため皇帝礼拝を拒み、帝国から反社会集団とみなされ迫害された。64年の（**ネロ**）帝の迫害に始まり、303年の（**ディオクレティアヌス**）帝の大迫害までキリスト教は迫害の対象となっていた。
23. しかしキリスト教が帝国に広まるにつれて、帝国の統一にはキリスト教が不可欠と判断されるようになり、313年（**コンスタンティヌス**）帝は（**ミラノ勅令**）でキリスト教を公認した。
24. 325年にコンスタンティヌス帝が開催した（**ニケーア公会議**）ではキリストを神と同一視する（**アタナシウス**）派が正統教義であるとされ、キリストを人間とする（**アリウス**）派は異端とされた。
25. キリストを神と同一視する（**アタナシウス**）派はのちに（**三位一体説**）として確立され、正統教義の根本となった。
26. 4世紀後半にはキリスト教会から「背教者」と呼ばれる（**ユリアヌス**）帝が古来の多神教を復興しようとしたが失敗した。
27. 392年には（**テオドシウス**）帝が（**アタナシウス**）派キリスト教を国教とし、他の宗教を禁じた。
28. キリストを人間とする（**アリウス**）派は異端とされたのちに北方のゲルマン人へと広がっていった。

29. 431年には（**エフェソス公会議**）が行われ、キリストの神性と人性を分離して考える（**ネストリウス**）派は異端とされた。これはササン朝を通じて唐代の中国に伝わり、（**景教**）となった。
30. 451年には（**カルケドン公会議**）が行われ、コプト教会が唱える単性論が否定された。
31. ローマ帝国の文化的意義はその支配を通して地中海世界の隅々にギリシア・ローマの古典文化を広めたことにある。例えば、ローマ人が話した（**ラテン**）語は近代にいたるまで教会や学術の国際的な公用語であった。
32. ローマの実用的文化が典型的に現れたのは土木・建築技術である。都市には浴場・凱旋門・闘技場・道路・水道橋が建設され、円形闘技場：（**コロッセウム**）、万神殿：（**パンテオン**）、（**アッピア**）街道、（**ガール**）水道橋など今日に残る遺物も多い。
33. 浴場は特に（**カラカラ**）帝がローマ市に築いたものが有名である。
34. 都市ローマには100万人もの人々が住み、「（**パンと見世物**）」に表される享樂的な都市文化が花開いた。
35. ローマが様々な習慣を持つ多くの民族を支配するようになると、万人が従う普遍的な法律が必要となった。十二表法を期限とする（**ローマ法**）は始めローマ市民にのみ適用されていたが、やがてヘレニズム思想、特にストア派哲学の影響を受けて帝国に住むすべての人民に適用される（**万民法**）へと成長した。
36. 6世紀に東ローマ帝国の（**ユスティニアヌス大帝**）が（**トリボニアヌス**）など法学者を集めて編纂させた「ローマ法大全」がその集大成である。
37. また、現在用いられている（**グレゴリウス**）暦はカエサルが制定した（**ユリウス**）暦から作られたものである。
38. ローマ人の宗教は多神教であり、帝政期の民衆の間には（**ミトラ**）教やマニ教など東方から伝わった神秘的宗教が流行したが、最終的に国家宗教の地位を獲得したのはキリスト教である。
39. ローマ帝政末期にはエウセビオスや（**アウグスティヌス**）らの教父と呼ばれるキリスト教思想家たちが正統教義の確立につとめ、のちの神学の発展に貢献した。
40. 下記のローマ文化に関する作者・作品名を答えなさい。
- （**ヴェルギリウス**）・・・「アエネイス」（ローマ建国叙事詩）
 - （**ホラティウス**）・・・「叙情詩集」
 - （**オウィディウス**）・・・「転身譜」「愛の歌」
 - （**ポリビオス**）・・・「歴史」・第3回ポエニ戦争に参加した歴史家

- e. (リウイウス) 「ローマ史」
- f. カエサル 「(ガリア戦記)」
- g. (タキトゥス) 「年代記」「ゲルマニア」
- h. (プルタルコス) 「対比列伝(英雄伝)」
- i. (ストラボン) 「地理誌」(イベリア半島～インドの地理・歴史を著した)
- j. (キケロ) 「国家論」
- k. (セネカ) 「幸福論」ストア派哲学者で、ネロ帝の師
- l. (エピクテトス) ストア派哲学者。自分にできることとできないことを弁明することを重視
- m. マルクス・アウレリウス・アントニヌス 「(自省録)」
- n. (プリニウス) 「博物誌」自然科学の集大成
- o. (プトレマイオス) 「天文学大全」天動説
- p. (アウグスティヌス) 教父。「告白録」「神の国」

- 41. 現在のインドやその周辺は南アジアとも呼ばれる。気候的には雨季と乾季の差がはっきりとした(モンスーン気候帯)に属している。
- 42. インドの人々は大きく分けて(アーリヤ)系と(トラヴィダ)系に分けられる。
- 43. インドで最も古い文明は前2600年頃におこった青銅器時代の文明である(インダス文明)である。
- 44. この文明ではインダス川流域に(モエンジョ=ダール)や(ハラッパー)など文明を代表する遺跡が築かれている。
- 45. 遺跡からはインダス文字が刻まれた印鑑である(印章)や彩文土器が発見されている。なお、このインダス文字は現在でも解読されていない。
- 46. 前1500年頃中央アジアからカイバル峠を越えてインド=ヨーロッパ語系の牧畜民である(アーリヤ)人がインド西北部の(パンジャーブ)地方へ侵入し始めた。
- 47. 彼らの社会は人々の間に富や階級による差のない部族的なもので、雷や火など自然神が崇拝され、様々な祭式がとり行われた。それらの宗教的な知識を収めたインド最古の文献を(ヴェーダ)という。そのうち最古のものを(リグ・ヴェーダ)という。
- 48. 前1000年を過ぎると彼らはより肥沃な(ガンジス川)上流域へと移動を開始した。

49. 彼らは移動した土地で先住民と交わって農耕技術を学び、定住農耕社会を形成した。その過程で（ヴァルナ制）と呼ばれる身分的上下観念が生まれた。
50. この上下観念のなかでは、人は司祭：（バラモン）、武士：（クシャトリヤ）、農民・牧畜民・商人：（ヴァイシャ）、隷属民：（シュードラ）という4つの身分に分けられていた。そしてこの上下観念の枠を超えて、この4身分の下には（不可触民）という被差別民が存在していた。
51. この中の司祭たちは複雑な祭祀を正確に行わなければ神々から恩恵を受けることが出来ないとして自らを最高の身分とした。彼らが司る宗教を（バラモン教）という。
52. また、インド社会には特定の信仰や職業との結びつきによって、あるいは他の集団の者と結婚したり食事したりすることを制限することによって結合を図る（カースト/ジャーティ）集団が多数生まれてきた。
53. これがヴァルナ制と結びつき、長い時間をかけて形成されたのが、インド独自の社会制度として知られる（カースト制度）である。
54. この前600年ころまでの時代はバラモン教の聖典である各種ヴェーダが編まれたことから（ヴェーダ時代）と呼ばれる。

1. ヴェーダ時代が終わると部族社会が崩れ、政治経済の中心はガンジス川上流域から中・下流域へと移動し、前6世紀頃には城壁で囲まれた都市国家がいくつも生まれ始めた。その中で有力となったのは(コーサラ国)と(マガダ国)の2国であった。
2. 上記のような都市国家では勢力を伸ばしてきた武士階層のクシャトリヤや商人のヴァイシャの指示を受けて新しい宗教が生まれた。主に(仏)教と(ジャイナ)教である。
3. まず仏教は開祖(ガウタマ=シッダールタ)(尊称:ブツダ、他の呼び方に釈迦)が難解なヴェーダ祭式やバラモンを最上位とするヴァルナ制などを否定し、生前の行為によって死後に別の生を受ける過程が繰り返されるという(輪廻転生)からいかに脱却するかという解脱の道を解いて誕生した。
4. もとはブツダの遺骨を納めるための建造物で、仏像が作られる以前は信者が礼拝していた仏塔を(ストゥーパ)という。
5. ジャイナ教は始祖(ヴァルダマーナ)が仏教と同じくバラモン教の祭式やヴェーダ聖典の権威を否定し、特に断食などの苦行と不殺生を強調した点が特徴である。
6. 仏教やジャイナ教などがバラモンの権威を否定する流れとともに、バラモン教自体にも改革運動が生まれた。従来の祭式至上主義から脱却し、内面の思索を重視した(ウパニシャッド哲学)という風潮である。
7. この風潮は宇宙の本体である梵(ブラフマン)と人間存在の本質である我(アートマン)が本来一つのもの(梵我一如)であり、どの同一性を悟ることによって解脱に達することができるという考えである。
8. 前4世紀になるとマケドニアのアレクサンドロス大王が前330年に(アケメネス朝)を滅ぼし、さらに西北インドにまで進出した。
9. 王はインダス川流域を転戦し、その影響で各地にギリシャ系の政権が誕生した。この混乱から前4世紀の終わりに誕生したインド最初の統一王朝が(マウリヤ朝)である。
10. この王朝の創始者である(チャンドラグプタ王)はガンジス川流域を支配していたマガダ国のナンダ朝を倒して、首都を(パータリプトラ)に置いた。
11. この王朝の最盛期を築いたのは(アショーカ王)である。この人物は征服活動の過程で多くの犠牲を出したことを悔い、次第に(仏教)に帰依するようになった。そして武力による征服活動を放棄し、法・まもるべき社会倫理である(ダルマ)による統治と平穏な社会を目指した。

12. この人物は他にも、第（3）回目となる釈迦の弟子による教典の編集（**仏典結集**）や仏教の各地への布教を行った。各地への布教は特に（**スリランカ**）が有名である。
13. マウリヤ朝の衰退に乗じて前2世紀にギリシア人勢力がバクトリア地方から西北インドに進出した。（バクトリアのこと。）続いてイラン系遊牧民が西北インドに進出し、紀元後1世紀になるとバクトリア地方からクシャーン人がインダス川流域に入り（**クシャーナ朝**）を立てた。
14. この王朝は2世紀半ばの（**カニシカ王**）の時代が最盛期であり、都は（**プルシャプラ**）に置かれた。
15. 紀元前後になると仏教に新しい運動が生まれた。従来では出家者が厳しい修行を行って自身の救済を求めているが、これに対して自身ではなく人々の救済を目的として出家しないまま修行を行う（**菩薩信仰**）が広まった。
16. この新しい考えの人々は、自らをあらゆる人々の大きな乗り物という意味を込めて（**大乘**）仏教と呼び、旧来の仏教を自身のみの悟りを目的とした利己的なものであると批判して（**小乗**）仏教と呼んだ。
17. また、ブッダには具体的な像が作られていなかったが、ヘレニズム文化の影響を受け、（**仏像**）が作られた。
18. （**クシャーナ**）朝の保護を受けた大乘仏教は、（**ガンダーラ**）を中心とする仏教美術とともに各地に伝えられ、中央アジアから中国・日本にまで影響を与えた。
19. また、すべてのものは存在せず、ただその名称だけが存在すると説いた竜樹の（**ナーガールジュナ**）の空の思想はその後の仏教思想に大きな影響を与えた。
20. 仏教は現在では大乘側からの蔑称である小乗に代わって、多くの部派に分かれたそれまでの仏教を（**部派仏教**）と呼んでいる。その中で小乗仏教は（**上座部**）仏教と呼ばれている。小乗仏教は前3世紀にスリランカに伝えられた後、（**ビルマ**）→（**タイ**）へと東へ広がり、東南アジアの大陸部で大きな勢力を持つようになった。
21. この時代にクシャーナ朝と並んで有力だったのは西北インドから南インドにかけての広い勢力を持った（**サータヴァーハナ朝**）である。
22. 4世紀に入るとチャンドラグプタ1世により（**グプタ朝**）おこり、この王朝は（**チャンドラグプタ2世**）の治世で最盛期を迎え、北インド全域を統治する大王国となった。この王朝では分権的な統治体制が特徴であり、支配地域は中央部の王国直轄領、従来の支配者がこの王朝の臣下として統治する地域、および領主が貢納する周辺の属領から構成された。
23. この王朝の首都は（**パータリプトラ**）である。
24. この時代では仏教やジャイナ教が盛んとなり、中国（東晋）から陸路で（**法顕**）がこの王朝に訪れている。

25. 一方でバラモンが再び重んじられるようになり、バラモンの言葉である（サンスクリット語）が公用化された。
26. 民間の信仰や慣習を吸収して徐々に形成されていた（ヒンドゥー）教が社会に定着するようになったのもこの王朝の時代である。
27. この宗教では（シヴァ神）や（ヴィシュヌ神）など多くの神々を信仰する多神教である。特定の教義や聖典に基づく宗教ではなく、バラモン教と土着信仰が結びついて発生した。
28. この時代には、4つのヴァルナがそれぞれ遵守すべき規範について規定された（マヌ法典）やサンスクリッドの二大叙事詩（マハーバーラタ）、（ラーマーヤナ）などが長い期間をかけて完成した。
29. サンスクリッドの二大叙事詩のうち18日間の戦争物語は（マハーバーラタ）である。
30. 王子ラーマとその妻シーターの冒険物語は（ラーマーヤナ）である。
31. また、宮廷詩人（カーリダーサ）により戯曲「シャクンタラー」が作られた。
32. 天文学や文法学・数学も発達し、十進法による数字の表記法や（ゼロ）の概念も生み出された。
33. 美術面では、ガンダーラの影響から抜け出て純インド的表情を持つ（グプタ様式）が成立し、インド古典文化の黄金期が出現した。
34. グプタ朝は中央アジアの遊牧民（エフタル）の進出により西方との交易が打撃を受けたことや、地方勢力が台頭したことにより衰退、6世紀半ばに滅亡した。
35. グプタ朝の滅亡後、（ハルシャ王）が（ヴァルダナ朝）をおこし北インドの大半を支配したが、王の死後衰退した。
36. 当時の支配者の多くはヒンドゥー教の信者であったが、他の宗教に対して排他的ではなく、仏教やジャイナ教にも保護を与えた。唐からインドに往復陸路で旅した（玄奘）はハルシャ王の保護を受けながら（ナーランダー僧院）で仏教を学び、帰国後（大唐西域記）を著した。
37. 7世紀後半には往復海路で（義浄）がインドを訪れ、（南海寄帰内法伝）を著した。
38. しかし仏教はグプタ朝の衰退後の商業活動の不振によって商人からの支援を失い、加えて仏教やジャイナ教を攻撃する（バクティ運動）が6世紀半ばから盛んになったことなどにより衰退に向かった。
39. 8世紀から、イスラーム勢力が進出してくる10世紀頃までのインドは地方政権の時代となり、北インドは（ラージプート）と呼ばれるヒンドゥーの諸勢力の抗争が続いた。
40. 南インドは（トラヴィダ）系の人々の地域であり、紀元前後から（タミル語）を使用した文芸活動が盛んに行われた。

41. 南インドは古くからインド洋を通じてローマ帝国と交易関係を持ち、ローマの貨幣も各地で大量に発見されている。地中海から紅海やペルシア湾を通り、アラビア海を渡ってインドに達し、さらに東南アジアや中国に至る（海の道）が開け、船による交易が活発に行われていたからである。
42. インドと西方との交易はローマの発展に呼応してギリシア系商人が活動を始める1世紀頃から盛んであった。西方とインドを結ぶインド洋交易に関しては紀元後の早い時期にギリシア人が著したとされる（エリュトゥラー海案内記）に詳しい記録が残されている。
43. 同じ頃にはインドと東方の中国を結ぶ航路もひらけていた。マラッカ海峡・インドシナ半島南部が航海上の要衝とされ、この地域では、スリランカ・扶南・チャンパー・シュリーヴィジャヤなどの（港市国家）が相次いで建設された。
44. 「海の道」に関わった南インドの代表的な王朝が（チョーラ朝）である。この王朝は積極的な灌漑施設の建設によって安定した農業生産を実現し、10世紀から11世紀にスリランカや東南アジアに軍事遠征を行うなど、最盛期を迎えた。
45. 東南アジアでは前2千年紀にベトナムやタイ東北部を中心に青銅器が制作されていた。前4世紀になると、中国の影響下にベトナム北部と中心に独特の青銅器や鉄製農具を生み出した（ドンソン文化）が発展した。
46. この文化特有の青銅器である（銅鼓）は中国南部から東南アジアの広い地域で発見されている。これは権力の象徴として祭祀に用いられていた。
47. 紀元前後から盛んになるインドや中国との交流の中で、1世紀末に東南アジア最古の国家ともされる（扶南）がメコン川下流域に建国された。この国はインドから来航したバラモンと土地の女性が結婚して国を作ったという神話があり、この国の港オケオではローマ貨幣やインドの神像が出土している。
48. また、2世紀末にはベトナム中部にチャム人がのちに（チャンパー）と呼ばれる国を建てた。この国は中国名が3つあり、それぞれ（林邑）・（環王）・（占城）と呼ばれる。
49. 4世紀末から5世紀になると広い地域でインド化と呼ばれる諸変化が生じ、各地の政権の中にインドの影響が強く見られるようになった。大陸部では6世紀末にメコン川中流域に（クメール人）によってヒンドゥー教の影響の強いカンボジア（中国名：真臘）がおこり、扶南を滅ぼした。
50. この王国は8世紀に南北に分裂するが、9世紀にジャヤヴァルマン2世によって再統一され、都を（アンコール）に置いて（アンコール）朝となった。そして12世紀にヒンドゥー教や仏教の強い影響を受けつつ独自の様式と規模を持つ（アンコール=ワット）や（アンコール=トム）が造営され最盛期を迎えた。

51. イラワディ川下流域では9世紀までビルマ（ミャンマー）系のピュー人の国があった。11世紀には（**パガン朝**）がおこり、スリランカとの交流により（**上座部**）仏教が広まった。
52. チャオプラヤ川下流では7世紀から11世紀ごろにかけて（**モン人**）によるドヴァーラヴァティー王国が発展し、（**上座部**）仏教が盛んに行われた。
53. 13世紀半ばにタイ北部におこったタイ最古の王朝である（**スコータイ朝**）の歴代の王も（**上座部**）仏教を信仰した。
54. 諸島部でもインド化が進み、いくつかの王国が成立した。7世紀半ばには、スマトラ島のパレンバンを中心に（**シュリーヴィジャヤ王国**）が成立した。この国へは（**義浄**）が中国からインドへの往復の途中滞在し、仏教が盛んな様子を伝えている。
55. 中部ジャワでは仏教国の（**シャイレンドラ朝**）やヒンドゥー国の（**マタラム朝**）がおこった。シャイレンドラ朝では仏教寺院である（**ポロブドゥール**）が建造された。
56. ベトナムでは前漢時代以来紅河デルタを中心にした北部地域が中国に服属していたが、独立への動きも強く、10世紀末には北宋に独立を認めさせ、11世紀初めには李氏が（**大越**）を建て、（**李朝**）を成立させた。その後の統治は（**陳朝**）へ引き継がれたが、いずれも広域支配にはならず、チャンパー勢力と対立を続けた。

1. 東アジアの歴史の始まりは（黄河）・（長江）[揚子江]流域に発生した中国古代文明にさかのぼる。
2. 前6000年頃までに（黄河）の流域ではアワなどの雑穀を中心として、また（長江）の流域では稲を中心として粗放な農耕が始まっていた。
3. 前5千年紀には、気候の温暖化とともに農耕技術も発達し、数百人規模の村落がうまれてきた。黄河中流域では、彩文土器（彩陶）を特色とする（仰韶文化）が有名であり、長江中・下流域でも同じ頃に人工的な水田施設を伴う集落が作られていた。
4. 前3千年紀にはこれら地域間の交流が緊密となった。黄河下流域を中心に、南は長江中・下流域、北は遼東半島にいたるまで分布する黒色磨研土器（黒陶）がそれを示している。この黒色磨研土器を特色として、前2500～前2000年頃に黄河下流域を中心に成立した新石器文化を（竜山文化）という。
5. 土器には他にも、日常用の厚手の土器であり三足器が多く作られた（灰陶）が存在する。
6. 黄河中・下流域では城壁で囲まれた都市が発達し、やがてそれらを統合する広域的な（王朝国家）が誕生した。これは同じ家柄に属する者が世襲で王位を継承する国家である。
7. 伝説上では（夏）王朝が最初の王朝とされる。これは治水に功のあった禹が舜から位を譲られて始めた王朝とされる。しかし、その王都の所在は確認されていない。
8. 現在確認できる最古の王朝はこの王朝に続いておこったとされる、（殷）[商]である。
9. この王朝は20世紀初めの（殷墟）[河南省安陽市]の発掘によって、（甲骨文字）を刻んだ大量の亀甲・獣骨や、多数の人畜が殉葬された王墓および大きな宮殿跡が発見され、この王朝が前2千年紀に実在したことが証明された。
10. この王朝は同じ祖先を持つという意識によって結びついた多数の氏族集団が連合し、王都のもとに多くの（邑）[城郭都市]が従属する形で成り立った国家であった。
11. この王朝の支配領域の西部、渭水流域におこった（周）[前11世紀頃～前256]は始めこの王朝に服属していたが、前11世紀頃にそれを滅ぼし、（鎬京）[現在の西安付近]に都をおいて華北を支配した。
12. このように、古い王朝を滅ぼし新しい王朝が支配する王朝交替を中国では（易姓革命）という。「天命が革まり天子の姓が易る」という意味である。

13. この王朝の王は一族・功臣や各地の土着の首長に（封土）とよばれる領地を与えて（諸侯）とし、代々その地を領有させた。
14. 土地を領有する（諸侯）や王に従う（卿）・（大夫）・（士）などの家臣にもそれぞれ地位と封土が与えられた。
15. こういった封土を与える統治の仕方を（封建）という。
16. 代々続く家柄を重んじるこのような統治制度のもとでは、氏族のまとまりが重要であり、親族関係の秩序やそれに応じた祭祀の仕方を定めた（宗法）がつけられた。
17. やがてこの王朝の西北方面で周辺民族の活動が活発になり、この王朝は前8世紀に首都（鎬京）を攻略され、都を東方の（楽邑）[現在の洛陽]に移した。
18. この王朝が前8世紀に都を移して勢力を低下させて以後、前3世紀後半に秦が中国を統一するまで分裂と抗争の時代が続いた。この期間のうち、韓・魏・趙が諸侯と認められるまでの前半時代を（春秋時代）といい、そこから秦が中国を統一するまでの後半を（戦国時代）と言う。
19. 前半時代では、有力諸侯が周王の権威のもとに多くの諸侯を招集し、盟約の儀式を行って列国の主導権を握った。この有力諸侯を（覇者）という。主な人物には初めて周王に覇者と認められた斉の（桓公）や、次いで覇者となった晋の（文公）などがある。
20. 当初、諸侯は周王の権力のもとに力を蓄えていたが、諸国間の抗争が激しくなるにつれて周王を無視し自らを王と称する者が増えていった。それによって諸国間の統一的な秩序が崩れ、（戦国）時代とよばれる実力主義の時代となった。
21. この時代の中で、王に権力を手中して富国強兵政策を進める国々は周辺の小国を併合し、やがて（戦国の七雄）と呼ばれる7つの強国が並び立ち、互いに同盟を結びつつ入り乱れて争った。
22. この7つの強国とは、（秦）・（斉）・（燕）・（楚）・（韓）・（魏）・（趙）である。
23. 7つの強国の中でも西方の（秦）は先進諸国から有能な人材を集めて積極的な制度改革を行い、急速に勢力を伸ばした。
24. この時代は各国の領土拡大競争によって中国文化圏が拡大し、諸国間の交流によって「中国」としての一体感が生まれてきた時代である。この「中国」意識は、中国を文明の中心と見なし、風俗や言語の異なる周辺地域の人々を（夷狄）として文明的に劣ったものと見なす考え方と結びついていた。この考え方は（華夷思想）と呼ばれ、19世紀に至るまで東アジアの人々の世界観に影響を与え続けた。
25. 中国では春秋時代以降、（鉄製農具）の使用や牛に犁を引かせる牛耕が始まって農業生産力がしだいに高まり、小家族でも自立した農業経営が可能となったため、氏族の統制は緩んでいった。

26. また、戦国時代の富国策によって商工業が発展し、（青銅）の貨幣が用いられるようになり、大きな富を持つ商人もあらわれた。
27. この貨幣には、韓・魏・趙で用いられた（布銭）、燕・斉で用いられた（刀銭）、齊・魏・秦で用いられた（円銭・半両銭・環銭）があり、秦の中国統一により（円銭・半両銭・環銭）が中国貨幣の形式に統一された。
28. 戦争の続く時代の中で、人々は新しい社会秩序のあり方を模索した。また、春秋・戦国時代には独創的な主張によって君主に認められる機会も多かった。その結果、この時代には多様な新思想が生まれ、（諸子百家）と総称される多くの思想家や学派が登場した。
29. その中でも最も後世に影響を与えたのは春秋時代末期の人物である（孔子）を祖とする（儒家）の思想である。この人物は、親に対する「孝」といった最も身近な家族道徳を社会秩序の基本に置き、家族内の親子兄弟の間のけじめと愛情を広く天下に及ぼしていけば、理想的な社会秩序が実現できるとした。
30. この人物の言行はのちに（論語）としてまとめられ、その思想は万人の持つ血縁的愛情を重視する性善説の（孟子）や、礼による規律維持を強調する性悪説の（荀子）などに受け継がれた。
31. その他、血縁を超えた無差別の愛[兼愛]を説く（墨子）の学派（墨家）や、あるがままの状態に逆らわない（無為自然）とすべての根源である（道）への合一を説く（老子）・（荘子）の（道家）や、強大な権力を持つ君主が法と策略により国家の統治を行うべきだとする（商鞅）・（韓非）・李斯らの（法家）などがあり、いずれもその後の中国社会思想の重要な源となっている。
32. 他にも論理学を説いた名家、兵法を講じた孫子の（兵家）、外交策を講じた（蘇秦）・（張儀）の縦横家、天体の運行と人間生活の関係を説いた（陰陽家）、農業技術を論じた（農家）など多様な分野で思想・学問の基礎が築かれた。
33. 縦横家のうち、合従策を説き6国を同盟して秦に対抗する策を講じたのが（蘇秦）であり、秦王の信任篤く、他の6国それぞれに秦との同盟を結ばせる連衡策を唱えたのが（張儀）である。
34. 戦国時代には「春秋」や中国最古の詩集である「（詩経）」など儒家の経典を始めとする諸子百家の文献に加えて、楚の韻文集である「（楚辞）」などの文学作品もまとめられた。
35. 戦国時代に7つの強国の1つであった（秦）[前8世紀頃～前206]は前4世紀に商鞅の改革で国力をつけ、東方の6国を次々に征服し（前221）年に中国を統一した。
36. この国の王（政）は「王」にかえて、「光輝く神」の意味を持つ「皇帝」の称号を採用し（始皇帝）と呼ばれた。
37. この人物はすでに自国内で行っていた、全国を36郡[最終的には48郡]に分けて郡の下に県を置き中央から派遣した官吏に治めさせる（郡県制）を全国に施行した。

38. この人物は他にも貨幣を（半両錢・円錢・環錢）に統一し、度量衡や文字も統一した。さらに医薬・占い・農業関係以外の書物を全て焼く（焚書）、数百人の儒者を穴に埋めて殺した（坑儒）による思想統制を行い皇帝権力の絶対化と中央集権化を推し進めた。
39. この国は戦国時代に各国別に造営されていた北方騎馬民族の侵入に対抗するための防御壁である（長城）を修築して匈奴の侵入に対抗し、南は華南を征服して（南海）・（桂林）・（象）の3郡を置いた。[前214年]
40. しかしこの国の急激な統一政策と対外戦争・土木工事の負担は人々を苦しめ、特に征服された東方6国の地域でこの国への反感が高まった。始皇帝の死後、（陳勝）・（呉広）による農民反乱を始めとする反乱が各地でおこり、この国は中国統一後わずか15年で滅んだ。
41. （陳勝）が挙兵する際の「（王侯将相いづくんぞ種あらんや）」という言葉は、血統ではなく実力や才能が重要という実力主義の世情を表している。
42. 各地の反乱勢力の中で、郷里の町の民衆を率いて蜂起した庶民出身の（劉邦）と楚の名門の出である（項羽）が力を伸ばし、4年間の激闘の末、（劉邦）が勝利、中国を統一して皇帝の位につき（高祖）、（漢）王朝を建てた。この国を（前漢）[前202～後8]という。
43. この国の皇帝（高祖）は秦の都咸陽の近くに新都（長安）[現在の西安]を建設した。
44. この国は秦の制度の多くを受け継いだが、その急激な統一政策の失敗を教訓として、郡県制と封建制を併用する（郡国制）を採用した。
45. しかしその後歴代皇帝は諸侯の領土を削減・中央集権体制の強化を行った。それに対抗するために（前154）年に発生した（呉楚七国の乱）の鎮圧後、第7代皇帝（武帝）の時に事実上郡県制へ移行した。
46. 前2世紀後半の第7代皇帝（武帝）は初の年号「建元」を制定し、儒学を官学化し、外征では北方でこの国を圧迫していた匈奴を撃退し、領土を広げて土地を開拓した。
47. また、この皇帝は大月氏と同盟して匈奴を攻撃するために（張騫）を西域に派遣したことをきっかけにタリム盆地のオアシス諸都市にまで支配を広げた。
48. この皇帝は東北では衛氏朝鮮を滅ぼして朝鮮北部に（楽浪）・（真番）・（臨屯）・（玄菟）の楽浪4郡を置き、南方では秦の滅亡時に広東・広西からベトナム北部の地域に独立した（南越）を滅ぼしてベトナム北部までを支配下に入れた。
49. このような積極政策によりこの国は財政難に陥った。7代皇帝（武帝）は（塩）・（鉄）・（酒）の専売や、特産物を貢納させてその物資が不足している地域に転売する物価調整法の（均輸）、物資が豊富なときに貯蔵して物価が上がると売り出す物価抑制法の（平準）などの経済統制策により財政難を乗り切ろうとしたが成功しなかった。
50. 7代皇帝（武帝）の時期には権力は皇帝へ集中したが、その死後は皇帝の側近で去勢された男性である（宦官）や、皇后の親族である

- (外戚) が実験を握ろうとして争い、その中で勢力を伸ばした外戚の (王莽) がこの国の皇帝を廃位して新[8～23]を建てた。
51. 新を建国したこの人物は、儒教の理想である周代の制度を復活しようと実情に合わない急激な改革を行ったため、各地で (赤眉の乱) と呼ばれる農民反乱がおき、新はまもなく倒れた。
52. この農民反乱のなかで勢力を伸ばした漢の一族の (劉秀) は新を倒して (後漢) を建国し、皇帝 (光武帝) となった。
53. この皇帝は都を洛陽に移し、内政重視の方針をとって漢王朝を再興した。が、その後儒学を学び官界に進出した豪族の勢力と皇帝側近の宦官や外戚との対立が深まり、宦官による官僚・学者に対する弾圧 (党錮の禁) など党派争いが繰り返された。
54. その後2世紀末の184年に宗教結社を主体とした農民反乱 (黄巾の乱) がおこると、各地の豪族が自立してこの国は滅亡を避けられなくなり、220年に献帝が魏の王に禅譲して滅んだ。
55. 中国では春秋・戦国時代に氏族制度が崩れて以来、5～6人程度の少家族によって行われる農業経営が経済を支えてきた。だが実情は飢饉や重税・徭役のために土地を売って没落する農民も多く、広大な土地を買い集めた (豪族) は没落した農民を奴隷や小作人として支配下に入れ、勢力を伸ばした。
56. この実情に対して、豪族の土地所有を制限しようとする政策も取られたが、効果は上がらず、前漢第7代皇帝 (武帝) が制定した地方長官の推薦による官吏登用法 (郷挙里選) によって、後漢時代には勢力ある豪族が官僚として国の政治に進出するようになった。
57. 漢代の初めには法家や道家の思想が力を持ったが、前漢第7代皇帝 (武帝) の治世には (董仲舒) の提案により儒学が官学とされ、礼と徳の思想による社会秩序の安定化が目指された。
58. 儒学の主要な経典として (易経) ・ (書経) ・ (詩経) ・ (礼記) ・ (春秋) の「五経」が定められた。
59. 後漢の時代には馬融・ (鄭玄) らの学者により五経の字句解釈を重んずる (訓詁学) が発展した。
60. 当時の書物は主に竹簡に書かれていたが、 (後漢) の時代に製紙技術が改良されて紙が次第に普及した。
61. 漢代以前の歴史を我々に伝える最も重要な書物は前漢第7代皇帝 (武帝) の時期の人物である (司馬遷) がまとめた中国初の通史であり、中国初の正史である (史記) である。この書物は太古から前漢第7代皇帝までを皇帝の事績と功臣などの伝記を中心に構成される書き方である (紀伝体) で叙述し、個性ある人物群を通して動乱の時代をいきいきと描いている。
62. この書物と、後漢の歴史家である (班固) による「漢書」で皇帝の事績と功臣などの伝記を中心に構成される書き方である (紀伝体) が完成され、以後中国の歴史書の最も基本的な形となった。
63. この時期には中国側でも世界に対する知識が広がった。前漢時代に第7代皇帝 (武帝) の命により西域に派遣された (張騫) や、後漢時

代の人であり「虎穴入らずんば虎児を得ず」で有名であり、「漢書」の著者（班固）の弟（班超）によって西方の事情が中国に伝わり、ローマ帝国[中国名：（大秦）]という大国の存在も知られるようになった。

64. 2世紀中頃にはローマ帝国五賢帝最後の人物とされる（マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス）[中国資料内では：（大秦王安敦）]によって中国に派遣された使節が海路で（日南郡）[現ベトナム中部]に至ったという。
65. 東アジア内部の周辺地域との交流も盛んになり、その首長に国王などの称号を与えて皇帝中心の秩序のなかに位置づけることが行われるようになったのもこの時期である。（倭人）[日本人]の使者が光武帝から（漢委奴国王）の金印を受けていることはその一つの例である。なお、この金印は1784年筑前国[現在の福岡県]志賀島で偶然発見されたものである。
66. 現在のメキシコと中央アメリカである（メソアメリカ）と南アメリカのアンデス地帯では、（トウモロコシ）などを栽培する農耕文化が前2千年紀から発展し、やがて高度の都市文明が成立した。
67. アメリカ大陸の文明はユーラシア大陸の文明とは別に独自の発展を遂げたが、トウモロコシ・（ジャガイモ）・（トマト）などのアメリカ大陸の物産は15～17世紀の大航海時代以降、ヨーロッパ人を通して世界各地に伝えられ、その食生活を大きく変えることになった。
68. アメリカ大陸では前1200年頃までに（オルメカ文明）がメキシコ湾岸で成立し、その後周辺の諸文明に影響を与えた。この文明は独特な巨石人頭像・ジャガー崇拜・ヒスイの重視・神殿ピラミッドが特徴である。
69. ユカタン半島には前1000年頃から16世紀にかけて（マヤ文明）が展開し、4世紀から9世紀に繁栄期を迎えた。この文明はピラミッド状の建築物・二十進法による数の表記法・精密な暦法・マヤ文字など独自の文明を発達させた。
70. 前1世紀～6世紀には（テオティワカン文明）がメキシコ高原にうまれた。その後10～12世紀にトルテカ文明が生まれ、14～16世紀には（アステカ人）が（テノチティラン）を首都とするアステカ王国を築いた。
71. アンデス高地では前1000年頃、ペルー北高地のチャビン＝デ＝ワントルを中心とした（チャビン文化）が成立して以降様々な王国が現れたが、15世紀半ばには現在のコロンビアからチリに及ぶ広大な（インカ帝国）が首都（クスコ）を中心に繁栄した。この国では国王は（太陽）の化身とされた。
72. この国はアンデス山中、標高2400mにある皇帝の離宮遺跡（マチュ＝ピチュ）が示すように石造建築の技術に優れ、灌漑施設を利用した農業を行っていた。
73. この国は文字を持たなかったが、縄の色や結び方で統計や数字を記録する（キープ/結縄）と呼ばれる伝達手段で記録を残した。

1. 乾燥した気候のため農耕の難しい内陸アジアの草原地帯では、羊・牛・馬などの家畜を主要な財産とする（遊牧民）が草と水を求めて季節的に移動し、遊牧と狩猟の生活を営んでいた。
2. 彼らの主な食料は乳製品や肉類であり、衣服は毛皮など、そして住居も木製の骨組みをフェルトで覆う解体・移動に適した組み立て式であった。前9～前8世紀頃には、青銅製の馬具や武器を持ち、騎馬の技術に優れ機動性に富んだ軍事力をもつ（騎馬遊牧民）が草原地帯に登場した。
3. 彼らの作った国家の領域は急速に拡大・縮小し、移動もするが、それは彼らの作る国家が血縁的なまとまりを持つ氏族・部族集団の連合体である部族連合国家（遊牧国家）であったからである。
4. 彼らの勢力はユーラシアの東西を結ぶ交易や文化交流にも貢献し、このルートは（草原の道）と呼ばれる。
5. 文献史料の上で知られる最初の遊牧国家は、前6世紀頃南ロシアの草原地帯を支配した（スキタイ）[前6～前3]である。
6. 彼らが生み出した騎馬文化と、その影響を受けて形成された中央ユーラシア草原地帯の騎馬文化を（スキタイ文化）という。特有の動物文様をもつ馬具や武器が特徴である。
7. これに続いて内陸アジア東部でも前4世紀頃から騎馬遊牧民の活動が活発になり、陰山山脈の（匈奴）、天山山脈方面の（烏孫）、甘粛・タリム盆地東部の（月氏）などが現れた。
8. この内陰山山脈の（匈奴）は（単于）と呼ばれる統率者の元で強力な遊牧国家を作り、特に前3世紀末に即位した（冒頓単于）は西では中継交易で利益をあげていた月氏を攻撃して中央アジアのオアシス地帯を勢力下に収め、東では前漢を圧迫し、この国の最盛期を築いた。
9. これに対し前漢の（高祖/劉邦）は和親策をとったが、第7代皇帝（武帝）は彼らを北へ退け、逆に西域へ進出した。このためこの国は内陸交易の利を失って衰え、前1世紀中頃に東西に分裂した。
10. 紀元後4世紀には内陸アジアの草原地帯の東西で遊牧民の活動が活発になり、「五胡」と呼ばれる国々の華北侵入と（フン人）の西進とが前後して始まった。この動きは農耕地帯に大きな衝撃を与え、ユーラシアの全域に変動をもたらした。この後モンゴル高原には（柔然）[5～6世紀]・（突厥）[6～8世紀]・（ウイグル）[8～9世紀]などの遊牧国家が出現することになる。
11. 6～9世紀頃トルコ民族が用いていた表音文字を（突厥文字）という。これは北方遊牧民最古の文字とされ、約40字からなっている。
12. 乾燥した砂漠・草原地帯のなかでも雪解け水による河川や地下水を利用できる中央アジアのオアシスでは、古くから定住民の生活が営ま

れていた。オアシスは防御施設を備え、手工業生産や、ラクダなどの乾燥地帯でも耐久力のある動物に荷物を積んだ商人たちが一段を組んで行った内陸地域での長距離交易（**隊商交易**）の拠点としても重要であった。

13. パミール高原の東部では（**タリム盆地**）周縁部の敦煌・クチャ・ホータン・カシュダル、西部ではソグド人の本拠地である（**ソグディアナ**）の中心都市（**サマルカンド**）やブハラなどが知られ、アム側下流域のホラズムやシル川流域にも多数のオアシス都市が点在していた。
14. これらの都市は、ラクダに荷を載せた隊商がユーラシアの東西を結んで往来する（**オアシスの道**）を形作っていた。これは地中海東岸からイラン高原・中央アジアを通過して中国に至る地域をオアシス都市経由で結ぶ最短距離の交易路である。
15. これらのオアシス都市は自ら連合して大きな国家を作ることはなく、周辺の大規模国家の支配下に入ることが多かった。前6世紀からの（**アケメネス朝**）の進出、前4世紀後半の（**アレクサンドロス大王**）の東方遠征、前2世紀後半の（**前漢武帝**）の西域進出、6世紀後半からの（**突厥**）による支配、7世紀に始まる（**唐**）の西域経営などはその例である。
16. 紀元後1世紀半ばに（**匈奴**）が南北に分裂したのち、南（**匈奴**）の中には中国内地に移住するものが増えた。その他に、別種の（**羯**）、東北方面からは（**鮮卑**）、西方からは（**氐**）や（**羌**）なども中国に侵入していた。
17. これらの、4～5世紀に華北に国を建てた非漢族の（**匈奴**）・（**羯**）・（**鮮卑**）・（**氐**）・（**羌**）の5つを五胡という。
18. 華北には遊牧民の建てた国が興亡する一方、多くの漢人が華北から（**江南**）[長江下流域]に移住した。
19. 北方民族が力を伸ばし始めた頃、中国では184年に発生した（**黄巾の乱**）を経て各地に軍事集団が現れ、混戦を繰り返していた。220年に曹操の子（**曹丕**）が後漢の皇帝から皇帝位を譲り受けて華北で（**魏**）建てた。[首都：洛陽]
20. これに対して長江下流域の（**孫権**）が（**呉**）[首都：建業]を建て、四川の（**劉備**）が（**蜀**）[首都：成都]を建てて中国は3国が三分する形成となった。これを（**三国時代**）という。
21. この3国の中で最も有利だった（**魏**）がまず263年に（**蜀**）を滅ぼした。しかしその後、将軍の一人である（**司馬炎**）が265年に国を奪い、初代皇帝：（**武帝**）となって（**晋/西晋**）[首都：洛陽]を建てた。
22. この国は280年に（**呉**）を滅ぼし、中国を統一した。
23. しかし、初代皇帝（**司馬炎/武帝**）の死後、帝位をめぐる一族が290～306年に渡り（**八王の乱**）を引き起こした。
24. この内乱のなかで兵力として活躍した遊牧諸民族（**匈奴**）・（**羯**）・（**鮮卑**）・（**氐**）・（**羌**）の五胡が勢力を伸ばし、各地で蜂起した。
25. 311年～316年には山西で挙兵した（**匈奴**）などの北方諸民族が（**永嘉の乱**）をおこし、（**晋**）の首都、洛陽を陥落させ滅ぼした。
26. この兵乱により（**晋**）は一度滅んだが、その後一族の（**司馬睿**）が江南の建康に都を置き、この国を復興した。（**東晋**）[317年～4

20年]

- 27.その後華北では遊牧諸民族により、(五胡十六国)と呼ばれる様々な政権が興亡したが、5世紀前半に鮮卑の(拓跋氏)が建てた(北魏)[386年～534年]の(太武帝)が華北を統一した。
- 28.この国の第6代皇帝(孝文帝)は、国家による土地の給付と変換を原則とした(均田制)や5家を隣、5隣を里、5里を党としてそれぞれに長を置いた(三长制)をしいて農耕民社会の安定に務めた。
- 29.この国の第6代皇帝(孝文帝)は更に平城から(洛陽)へと都を移し、鮮卑の服装や言語を禁止するなど積極的な(漢化政策)を行った。しかし、これらの政策に反発する軍人の反乱を招きこの国は東西に分裂した。
- 30.東側の(東魏)[534年～550年]は(北齊)[550年～577年]に倒され、西側の(西魏)[535～556年]は(北周)[556～581年]に倒された。そして東側の(東魏)[534年～550年]を倒した(北齊)[550年～577年]は(北周)[556～581年]に併合された。
- 31.華北を統一した(北魏)から、東西分裂後の(東魏)[534年～550年]、(西魏)[535～556年]、そしてそれを倒した(北齊)[550年～577年]、(北周)[556～581年]へと続いた華北の5王朝を(北朝)[439～581年]という。
- 32.一方、江南では東晋政権のもと、華北への反抗で戦果を上げた武将である劉裕が実権を握り東晋を倒して(宋)を建てた。
- 33.この後、江南では(齊)・(梁)・(陳)の各王朝が短期間に興亡した。(宋)以降の4王朝を(南朝)[420～589年]という。
- 34.三国時代以後の3世紀半あまりに渡る南北両朝の分裂時代を(魏晋南北朝時代)という。
- 35.また、この時期に建康[建業]に都を置いた6つの王朝、(呉)・(東晋)・(宋)・(齊)・(梁)・(陳)をあわせて(六朝)と呼ぶ。
- 36.後漢末から南北朝を通じて、豪族は各地で力を強めた。官吏の任用制度は郷挙里選に代わって、三国時代の(魏)から(九品中正)が始められた。これは地方に置かれた(中正官)が人材を9等に分けて推薦するものであるが、結果的に有力豪族の子弟のみが上品に推薦されて高級官職を独占することとなり、名門の家柄の固定化につながった。高級官職を独占した彼らを(門閥貴族)という。
- 37.戦乱の中で土地を失った多くの農民は、故郷を捨てて流浪し、あるいは広い土地をもつ豪族の元に隷属した。魏による、国家が耕作者の集団を導入して官有地を耕作させる(屯田制)、晋による、身分に応じて土地所有の上限を定め現物税や兵役を課した(占田)や(課田法)、北魏の国家による土地の給付と変換を原則とした(均田制)などは農民生活の安定と税収確保のため国家が土地所有に介入して農民に土地を与えようとする政策であったが、その効果は一部に留まった。

38. 魏晋南北朝時代は国家の統制も弱まり、多民族が交じり合う状況の中で、多様な思想・文化が花開いた時代であった。1世紀頃には西域から伝えられていた仏教は4世紀後半から中国で広まった。後趙で重用され30年余りに渡っての布教活動でおよそ900の寺院を建立した（**仏図澄**）や後秦に迎えられ般若・法華などの大乘諸経を約300巻漢訳した（**鳩摩羅什**）は西域からやってきて活躍した。他にも東晋時代の人物で、西域経由でインド[グプタ朝]へいたり、その後2年ほどスリランカで修行した後帰国した（**法顕**）はその旅行記（**仏国記**）を記した。
39. 仏教の普及に伴い、華北では多くの石窟寺院が作られた。4～14世紀にかけて千仏洞と呼ばれる石窟寺院が作られた（**敦煌**）では粘土製の塑像と絵画により、北魏の時代から造営された（**雲崗**）・（**龍門**）では石像と石彫により仏教の世界が表現された。（**雲崗**）の仏像はガンダーラ様式・グプタ様式の影響が見られ、（**龍門**）の仏像は中国的色彩が強いのが特徴である。
40. 華北では仏教は庶民にまで広がったが、江南では貴族の教養として受け入れられた。仏教の普及に刺激されて、この頃（**道教**）が成立した。これは古くからの民間信仰に、仙人や不老不死を信じる（**神仙思想**）と道家の思想が取り入れられてできたものである。後漢末の太平道や五斗米道から組織化が始まり、北魏の（**寇謙之**）によって新天師道という教団が形成された。
41. 当時の文化の一つの特色として精神の自由さを重んじていた。貴族の間では、道徳や規範に縛られない趣味の世界が好まれた。魏・晋の時代には、世俗を離れた老子・荘子の哲学である老荘思想に基づく哲学議論である（**清談**）が高尚なものとして文化人の間で流行した。
42. 文学では田園生活へのあこがれをうたった東晋の（**陶潜**）[（**陶淵明**）]や山水の美しさを表現した南朝宋の（**謝靈運**）の詩が名高い。4字6句の対句を多用し、韻を踏む華やかな（**四六駢儷体**）がこの時期の特色ある文体であり、その名作は南朝梁の（**昭明太子**）が編纂した「**文選**」に収められている。
43. 絵画では「女史箴図」の作者とされのちに「画聖」と称される東晋の画家（**顧愷之**）、書では「蘭亭序」や「喪乱帖」を書いたとされのちに「書聖」と称される（**王羲之**）が有名である。
44. 中国周辺の諸民族の活動の活発化は中国の北方のみならず東方でも見られ、朝鮮半島や日本列島で新しい国家が形成された。新興国家の支配者は中国王朝の承認を得ることで自らの力を強めようとし、一方で分裂時代の中国の諸王朝の側でも自らの権威を高めるために周辺の新興国家との繋がりを強化しようとした。その結果、周辺諸国から中国王朝への（**朝貢**）使節の派遣や、中国王朝から周辺諸国の支配者への官職・称号の授与など、国家間の関係が積極的に結ばれた。この体制を（**冊封体制**）という。この体制は東アジアの国際秩序の特徴として19世紀まで存続することになる。

45. 中国東北地方の南部に前1世紀頃勃った（高句麗）[前1世紀頃～668]は4世紀初めに南下して、前漢武帝が前108年に設けた朝鮮4郡の一つである（楽浪郡）を滅ぼし、朝鮮半島南部を支配した。
46. この頃小国が分立していた朝鮮半島南部でも統一が進み、東側に（新羅）[4世紀半ば～935]、西側に（百済）[4世紀半ば～660]が成立して、南側の地は（加羅／任那）諸国となった。
47. 4世紀半ば～7世紀後半にかけて朝鮮半島で（高句麗）・（新羅）・（百済）が抗争した時代を朝鮮の（三国時代）という。
48. この内（高句麗）の最盛期の国王の治績を讃えた碑を（広開土王碑）という。これは中国吉林省に現存する。
49. 日本の古代国家が形成されるのもこの時期である。日本は3世紀にはなお多くの小国に分かれていたが、その中で有力な（邪馬台国）の女王卑弥呼が三国時代の（魏）に朝貢使節を送り（親魏倭王）の称号を与えられた。
50. このことを記す『三国志』の「魏書」東夷伝の日本に関する記述の俗称を（魏志倭人伝）という。
51. 4世紀に入ると（ヤマト政権）による統一が進み、5世紀には（倭国）[日本]の王はたびたび中国の南朝に使いを送り、官職・称号を求めて東アジアにおける国際的地位の上昇を図った。
52. 大陸との交流が活発化する中で、中国や朝鮮半島からやってきた渡来人によって、儒教・仏教などの思想や金属加工・建築・高級織物などの先進的な技術が日本に伝えられた。この内、建築における、天子[皇帝]の居城を中心に整えられた都市制度を（都城の制）という。古代の朝鮮や日本では中国の長安や洛陽をモデルに首都が建設された。

1. 北朝の北周の軍人出身である（文帝）〔（楊堅）〕は（隋）〔581～618〕を建国し、都を（大興城）〔長安〕に定め、南朝の陳を滅ぼし南北に分裂していた中国を統一した。
2. この国は南北朝時代の諸王朝で試みられた制度を取り入れ、北魏で開始された、18～59歳の青年男性に露田80畝・永業田20畝、妻に露田40畝を支給する（均田制）・同じく北魏で開始された夫婦単位で租・調を課し中央への正役を庸とした（租庸調制）・西魏で開始され均田農民が首都の警備と辺境の防衛にあてられる（府兵制）により財政・軍事の基礎を固めようとした。また、（九品中正）を廃止し、儒学の試験によって広く人材を求める（科挙）の制度を作って中央集権化を図った。
3. 初代皇帝（文帝／楊堅）の子であり、第2代皇帝の（煬帝）の時に完成した（大運河）は江南の経済地帯と北方の政治・軍事の中心地を結んだ水路であり、中国市場初めての南北の交通幹線であった。長安と江南の余杭を結んでいた。
4. しかしこれらの大規模な土木事業や周辺諸国への度重なる遠征に徴発された農民の困窮は甚だしく、612・613・614年の秋から冬にかけて行われた（高句麗遠征）の失敗をきっかけに各地で反乱が起こり、この国は中国統一後30年足らずで滅んだ。
5. この反乱の中で挙兵した軍閥の（李淵）〔唐の（高祖）〕は618年に（隋）を倒し、（唐）〔618～907〕を建国し、都を（長安）とした。
6. 2代目の（太宗）〔（李世民）〕は中国を統一するとともに（東突厥）を服属させ、続く第3代の（高宗）は、東は百済・高句麗を破り、西は西域のオアシス都市を領有して勢力圏を広げた。征服地には異民族統治のための軍事行政機関である（都護府）を置き、実際の統治はその地の有力者に任せていた。これを（羈縻政策）という。
7. この国は618年に滅んだ（隋）の制度を受け継ぎ、それを（律）・（令）・（格）・（式）の法制に基づく整然とした体系に作り上げた。。この法制を統治の基本法とした国家体制を（律令国家）という。
8. 中央には皇帝の詔勅の草案などを作成する（中書省）・皇帝の詔勅、臣下の上奏を審議する（門下省）・政務を執行する（尚書省）の（三省）、文官の任免義務を統括する（吏部）・財政・戸籍・産業を統括する（戸部）・国家の典礼・祭祀を統括する（礼部）・軍事、兵籍を統括する（兵部）・司法、刑獄、訴訟を統括する（刑部）・土木、建設、製造を統括する（工部）の（六部）、そして官吏監察機関の（御史台）を中心とする官制を設け、地方には（州県制）を敷いた。
9. この統治体制の根本は、成年男性に土地を均等に支給する（均田制）、穀物・絹布などの税や義務労働の（力役）を課す（租）・

(庸)・(調)の税制である。

10. この制度は地主の勢力を抑え、自作農民に土地を与えてそれを国家が直接支配するというこの国の基本原理を表している。しかし、高級官僚の大土地所有は認められていたので、上級官職を占める貴族は、広大な(莊園)を持って隷属的な農民に耕作させていた。
11. 軍隊については、西魏の時代に始まった徴兵制度である(府兵制)が受け継がれ、農民の中から兵役にあてられたものが、一定期間、都の警護や辺境の警備にあたることになっていた。
12. この国の首都(長安)は皇帝の住む宮城から南に伸びる大通りを軸に各種の施設が東西対称に配される広大な計画都市で、東アジア各地域の首都建設のモデルとなった。
13. この国の首都(長安)には、周辺諸国からの朝貢使節・留学生や商人たちが集まり、仏教寺院や道教寺院のほか、キリスト教の一派の(景教)[ネストリウス派]や(祆教)[ゾロアスター教]、マニ教の寺院も作られた。
14. この国の首都(長安)には651年の(ササン朝)の滅亡時に多くのイラン人が移住した。その結果、馬に乗って棒で玉を打つ競技である(ポロ)などイラン系風俗が流行した。イラン系風俗の流行は、当時の絵画や(唐三彩)の陶器にも反映されている。
15. また、当時は外国人が才能を見込まれて官僚に取り立てられることもあった。日本からこの国に留学して安南節度使などの高官に登用され、李白らと交際した日本人の(阿倍仲麻呂)はその例である。
16. 一方、この時代に海上交易で来航したイスラーム教徒の商人である(ムスリム商人)も増え、(揚州)・(広州)など華南・華中の港町が発展した。
17. またこの時代には仏教が帝室・貴族の保護を受けて栄えた。陸路でインドへ赴き、ナーランダー僧院で学んだ(玄奘)や海路でインドへ行き東南アジア諸国を経て帰国した(義浄)はインドから経典を持ち帰りその後の仏教に大きな影響を与えた。
18. 629年に仏教の原典を求めて陸路でインド[当時は(ヴァルダナ)朝]に赴いた(玄奘)は645年陸路で帰国し、(大唐西域記)を記した。
19. 671年に広州から海路でインドを訪れ、帰路に東南アジアのスマトラ島とマレー半島を支配していた(シュリーヴィジャヤ王国)に滞在した後帰国した(義浄)は(南海寄帰内法伝)を記した。
20. もともと外来の宗教であった仏教は次第に中国に根付き、禅[瞑想]または座禅による修行を行う(禅宗)や阿弥陀仏信仰により極楽浄土への往生を説く(浄土宗)など中国独特の特色ある宗派が形成されてきた。

21. 科挙制度の整備に伴い、漢代以来の訓詁学が改めて重要視され、太宗の勅命で（孔穎達）らが「五経正義」を653年に180巻で成立させた。
22. また、科挙で詩作が重んじられたこともあり、「詩仙」と称された（李白）、「詩聖」と称された（杜甫）、「白氏文集」を残した（白居易）らが独創的な詩風で名声を博した。
23. 唐の時代の中期からは文化の各方面で、形式化してきた貴族趣味を脱し、個性的で力強い漢代以前の手法に戻ろうとする機運が生まれてきた。（韓愈）・（柳宗元）による古文復興の主張、（呉道玄）による山水画、（顔真卿）の力強い書法などはその先駆けといえる。
24. 隋唐時代にモンゴル高原を中心とする北方で勢力を持ったのはトルコ系の（突厥）[552～744年]、ついで（ウイグル）[744～840年]である。
25. 6世紀中頃に中央アジアから中国東北地方にいたる大遊牧国家を作った（突厥）は、6世紀末に東西に分裂したものの、唐の建国に際して（東突厥）が騎馬軍団をもって援助するなど大きな勢力であった。
26. 8世紀半ばに東突厥を滅ぼして建国された（ウイグル）は、唐代中期以降の混乱に乗じて中国を圧迫したが、9世紀には（キルギス）に敗れて滅亡し、一部はタリム盆地へ移動した。
27. 隋唐時代にモンゴル高原を中心とする北方で勢力を持ったトルコ系の（突厥）[552～744年]と（ウイグル）[744～840年]では、北方アジア民族[トルコ系民族]最初の文字である（突厥文字）が生み出された。この文字は（東突厥）の時代に誕生した。
28. チベットでは、7世紀に（ソンツェン・ガンポ）が統一国家である（吐蕃）[7世紀～9世紀][首都：ラサ]を建国した。
29. 建国者（ソンツェン・ガンポ）の命により、カシミール地方のインド文字を基に（チベット文字）が作られた。
30. また、インド仏教とチベットの民間信仰が融合した、チベットの大乗仏教である（チベット仏教／ラマ教）も誕生した。
31. 8世紀後半には、唐とチベットの争いに乗じて雲南で（南詔）[?～902]が勢力を広げて唐文化の影響を受けて栄えた。
32. 東方の朝鮮や日本は、朝貢制度を通じて律令体制・都城の制・仏教文化などを導入し、自らの国家の整備に役立てた。朝鮮半島では、唐が（新羅）と連合して百済・高句麗を滅ぼし、（新羅）が朝鮮半島の大部分を支配した。百済が滅ぼされる時、日本は百済に援軍を送ったが、663年の（白村江の戦い）で大敗した。
33. 唐と結んで百済・高句麗を滅ぼし朝鮮半島の大部分を支配した（新羅）は、唐の官僚制を導入したが社会の基盤は（骨品制）といわれる氏族的な身分制度であった。
34. この国は仏教を保護し、首都の（慶州）を中心に仏教文化が繁栄した。首都（慶州）郊外には仏教寺院である（仏国寺）が751年に創

建された。なお、この寺院は16世紀末の豊臣秀吉による朝鮮出兵で焼失し、石造物だけが残っている。

35. 高句麗の滅亡後、(大祚榮)が中国東北地方に建国した(渤海)は唐の官僚制や、長安をモデルに造営された都城である首都の(上京竜泉府)など唐の文化を取り入れ、日本とも通交し、8～9世紀に栄えた。
36. 日本でも(遣隋使)・(遣唐使)を送って中国文化の輸入に努め、645年に中大兄皇子と中臣鎌足を中心に行われた(大化の改新)を経て律令国家体制を整えていった。「日本」という国号や「天皇」号が正式に定められたのはこの時期である。他にも唐の首都(長安)をモデルに、奈良に平城京が建設された。
37. 遣唐使は仏典を持ち帰ったほか、唐で作られたり西アジアやインドから唐に伝わったりした美術品や工芸品を多数日本へ持ち帰った。こうして、国際的な唐の文化の影響を受けた(天平文化)が平城京を中心に栄えた。
38. 唐の勢力は東南アジアにも及び、6世紀後半にクメール人がメコン川中流域に建てた(カンボジア/真臘)や、2～17世紀にかけてチャム人を中心にベトナム中部に存続した(チャンパー)、7～14世紀にスマトラ島南部を中心に海上交易で栄えた(シュリーヴィジャヤ王国)などインド文化の影響を受けた諸国も唐に朝貢した。
39. 8世紀に入ると唐の支配体制は大きく変化してくる。690年に中国史上唯一の女性皇帝である(則天武后)が帝位についた際、科挙官僚を積極的に任用したことは政治の担い手が古い家柄の貴族から科挙官僚へと移っていく一つの転機となった。
40. その後武韋の禍と呼ばれる政治的混乱時代を経て、8世紀初め712年に即位した(玄宗)[在位：712～756年]は政治の引き締めを務めたが、人口の増加や商業の発達に伴い農民の間に貧富の差が開き、没落して逃亡する農民が増えて均田制・租庸調制とともに府兵制も崩れていった。
41. 府兵制の代わりに傭兵を用いる(募兵制)が採用され、その指揮官である(節度使)が辺境の防備にあたるようになった。
42. 712年に即位した皇帝(玄宗)の晩年には彼の寵愛を受けていた(楊貴妃)に一族が実権を握り、それに対する反発から節度使の(安祿山)とその武将である(史思明)が反乱を起こした。この反乱を(安史の乱)という。
43. この反乱は8年続き、ウイグルの援軍を得てようやく鎮圧された。しかしその後中央政府の統制力は弱まり、有力な節度使が地方の行政・財政の権力を握って独立する勢いを示した。この有力な節度使を別称(藩鎮)という。
44. 唐は財政再建のため、780年に当時の宰相楊炎により、租庸調制にかわって(兩税法)が実施された。これは現実に所有している土地に応じて夏[6月]と秋[11月]の2回の税を課すものである。

45. また、塩の専売も重要な財源となり、密売者は厳しく取り締まられた。9世紀後半塩の密売人（**黄巢**）が起こした反乱（**黄巢の乱**）[875～884年]は全国に広がった。
46. その後唐は節度使の（**朱全忠**）によって（**907**）年に滅ぼされた。
47. 唐を滅ぼした（**朱全忠**）は汴州（**開封**）を首都として（**後梁**）[907～923年]を建国した。
48. これ以後、50余年間に華北では有力節度使の建てた5つの王朝が交代し、その他の地方でも10あまりの国が興亡したのでこの時代を（**五代十国**）時代という。なお、この時代に生まれた5つの王朝とは
（**後梁**）[907～923年][首都：開封]、
（**後唐**）[923～936年][首都：洛陽]、
（**後晋**）[936～946年][首都：開封]、
（**後漢**）[947～950年][首都：開封]、
（**後周**）[951～960年][首都：開封]である。
49. 貴族の衰えは唐代の後半から進行していたが、当滅亡後の（**五代十国**）時代には貴族がその経済上の基盤である荘園を失い、ますます没落していった。変わって力を強めた新興の地主層は従来のように荘園を直接経営して自給的な生活を送るのではなく、買い集めた土地を（**佃戸**）と呼ばれる小作人に貸して小作料を取る方式で経済力を伸ばした。
50. イスラーム教が社会で大きな役割を持つ地域のことを（**イスラーム世界**）という。
51. アラビア半島を現住地とし、セム語系のアラビア語を母語とする人々を（**アラブ人**）という。
52. 紅海・インド洋・ペルシア湾に囲まれた、大部分が砂漠からなる南西アジアの半島を（**アラビア半島**）という。この地域では点在するオアシスを中心に古くから遊牧や農業生活を営み、隊商による商業活動が行われていた。
53. 6世紀後半になると、ササン朝とビザンツ帝国が戦いをくり返したために、東西を結ぶ「オアシスの道」は両国の国境で途絶え、ビザンツ帝国の国力低下とともに支配していた紅海貿易も衰退した。そのため「オアシスの道」や「海の道」によって運ばれた運ばれた各種の商品はいずれもアラビア半島西部を経由するようになり、のちにイスラーム教第1の聖地となる（**メッカ**）の大商人はこの国際的な中継貿易を独占して大きな利益をあげていた。
54. この地の名門一族であるクライシュ族に生まれた（**ムハンマド**）は610年頃唯一神（**アッラー**）のことばを授けられた（**預言者**）であると自覚し、さまざまな偶像を崇拜する多神教に変わって、厳格な一神教である（**イスラーム教**）を唱えた。

55. 掲示された神のことばを預かるものを（**預言者**）という。イスラーム教の根本聖典である「コーラン」ではノア・アブラハム・モーセ・イエス・（**ムハンマド**）が挙げられる。
56. この宗教を唱えた（**ムハンマド**）は、富の独占を批判したため、メッカの大商人による迫害を受け、622年に少数の信者を率いて（**メディナ**）へ移住した。この地はイスラーム教における第2の聖地といわれる。
57. 第2の聖地（**メディナ**）へ移住した後、彼らはイスラーム教徒[ムスリム]の共同体（**ウンマ**）を生み出した。この地への移住を（**ヒジュラ**）[聖遷]という。イスラーム教徒が用いる太陰暦である（**イスラーム暦／ヒジュラ暦**）では移住した西暦622年7月16日を紀元元年1月1日とする。
58. 630年、ムハンマドは無欠のうちにメッカを征服し、多神教の神殿であった（**カーバ**）をイスラーム教の聖殿に定めた。
59. イスラーム教の聖典（**コーラン**）はムハンマドに下された神のことばの集成であり、アラビア語で記されている。
60. ムハンマドは「旧約聖書」と「新約聖書」をイスラーム教に先立つ啓示の書とみなしたため、ユダヤ教徒とキリスト教徒は最初から（**啓典の民**）として信仰の自由を認められた。
61. イスラーム教の教義の中心は唯一神（**アッラー**）への絶対的服従であり、その掟は信仰生活だけでなく、政治的・社会的・文化的活動のすべてに及んでいる。後世の学者たちがムスリムの信仰と行為の内容を簡潔にまとめたのが（**六信五行**）である。
62. ムハンマドの死後、イスラーム教徒は共同体の指導者として（**アブー＝バクル**）をカリフに選出した。
63. アラブ人はカリフの指導のもとに（**ジハード**）[聖戦]と呼ばれる大規模な征服活動を開始し、東方では651年にササン朝を滅ぼし、西方ではシリアとエジプトをビザンツ帝国から奪い、多くのアラブ人が家族を伴って征服地に移住した。これらの征服地に建設された軍営都市を（**ミスル**）という。
64. しかしまもなくカリフ権をめぐるイスラーム教徒間に対立が起こり、第4代カリフの（**アリー**）が暗殺されると、彼と敵対していたシリア総督の（**ムアーウィア**）は661年ダマスクスに（**ウマイヤ朝**）を開いた。この王朝の首都ダマスクスには現存する最古のモスクである（**ウマイヤ＝モスク**）がある。
65. この王朝は8世紀のはじめ、東方では中央アジアのソグディアナとインド西部、西方では北アフリカを征服し、やがてイベリア半島に進出して711年に（**西ゴート王国**）を滅ぼした。その後、しばしばフランク王国に侵入したが、732年の（**トゥール・ポワティエ間の戦い**）に敗れピレネー山脈に南に退いた。
66. このようにして成立したイスラーム世界では、アラブ人が帝国の支配者集団を形成し、配下の異民族とは異なる特権を与えられ、その代

表者であるカリフの権限は領土の拡大につれて強大なものとなっていった。国家財政の基礎である農地に課せられる地租（ハラージュ）、異教徒が支払う人頭税（ジズヤ）は征服地の先住民に課せられ、彼らがイスラーム教に改宗しても免除されることはなかった。

67. ムハンマドの死後、ムスリムの選挙によって選出された、（アブー=バクル）・（ウマル）・（ウスマーン）・（アリー）の4代のカリフを（正統カリフ）という。
68. イスラーム教徒の多数派は（スンナ）派と呼ばれ、ムハンマドの言行を生活の規範とし、共同体の統一を重視する。一方で（シーア）派は第4代カリフであった（アリー）の子孫だけが共同体を指導する資格があると主張して、以後多数派の（スンナ派）に対立してきた。

1. イスラーム教の経典（**コーラン**）には全ての信者は平等であると説かれている。
2. 上記の教えのため、征服地の新改宗者（**マワーリー**）は、ウマイヤ朝の政策を経典の教えに背くものとみなし、またアラブ人の中にもウマイヤ朝による排他的な支配を批判するものが出てきた。
3. このような人々はムハンマドの叔父の子孫であるアッバース家の革命運動に協力し、これが成功して750年に（**アッバース朝**）[750～1258]が開かれた。
4. この王朝の第2代カリフ（**マンスール**）は肥沃なイラク平原の中心に円形の首都（**バグダード**）を造営し、新帝国の基礎を固めた。
5. この王朝の時代には、アラブ人の他にイラン人を中心とする新改宗者も政府の要職につけられ、宰相の統率する官僚制度が発達し、行政の中央集権化が進んだ。こうしてアラブ人の特権は次第に失われ、イスラーム教徒であれば、アラブ人以外でも人頭税が課せられず、またアラブ人でも征服地に土地を保つ場合は地租が課せられた。カリフの政治はイスラーム法（**シャリーア**）に基づいて実施されるようになった。このためこの王朝は（**イスラーム帝国**）とも呼ばれる。
6. イスラーム法は、経典の（**コーラン**）や預言者の言行を伝える伝承（**ハディース**）を基礎にして、9世紀頃までに整えられた。法の内容は学派ごとに異なるが、概ね礼拝・断食[ラマダン]・巡礼等に関する「儀礼的規範」と、婚姻・相続・刑罰などに関係する「法的規範」とからなっている。また、租税や戦争の規定などカリフ制時の基本も示されている。
7. この王朝が建国されると、ウマイヤ朝の一族はイベリア半島に逃れ、756年コルドバを首都とする（**後ウマイヤ朝**）[756～1031]を建てた。
8. 750年に建国された（**アッバース朝**）は、第5代カリフの（**ハールーン＝アッラシード**）の治世中に最盛期を迎えた。
9. しかし、この第5代カリフの死後、帝国内にはエジプトの（**トゥールーン朝**）や西トルキスタンの（**サーマーン朝**）など独立王朝が次々と成立し、カリフの主権が及ぶ範囲は次第に縮小した。
10. シーア派の中でも急進的なイスマーイール派の一派の（**ファーティマ朝**）[909～1171]は、10世紀初めに北アフリカにおこり、969年にはエジプトを征服してナイル川の東岸に首都（**カイロ**）を造営した。彼らは第4代カリフのアリーを父、ムハンマドの娘でありアリーの妻であったファーティマを母と称する者の子孫であると自称した。
11. この王朝は建国の始めからカリフの称号を用いていて、750年に建国された（**アッバース朝**）のカリフの権威を正面から否定した。7

- 56年に建国された（後ウマイヤ朝）の君主もカリフの称号を用いたので、イスラーム世界は3人のカリフが立ち並ぶ分裂状態となった。
12. さらに、イラン人の軍事政権（ブワイフ朝）[932～1062]は946年にバグダードに入場し、カリフから（大アミール）に任じられるとともに、カリフに代わってイスラーム法を施行する権限を与えられた。
 13. 中央アジアの遊牧民であったトルコ人は騎馬戦士として優れていたもので、750年に建国された（アッバース朝）のカリフは9世紀初め頃から（マムルーク）と呼ばれるトルコ人奴隸を親衛隊として用いた。このトルコ人奴隸の勢力増大はカリフの権力が低下することを招く原因となったが、異教の世界から彼らを購入し、軍事力の中心とすることはその後のイスラーム世界では一般化していった。
 14. 中央アジアから西方に進出したトルコ人の（セルジューク朝）[1038～1194]もトルコ人奴隸を採用し、強力な軍隊組織を整えた。
 15. この王朝の建国者（トゥグリル・ベク）はアッバース朝カリフの要請で1055年にバグダードへ入場し、アッバース朝カリフから（スルタン）[支配者の意]の称号を授けられた。
 16. スンナ派を奉ずる（セルジューク朝）はシーア派の（ファーティマ朝）に対抗してバグダードやイスファハーンなど領内の主要都市に学園（マドラサ）を建設し、スンナ派の神学と法学を奨励して学問の育成に務めた。これらの学院は、建設を指導したイラン人の宰相ニザーム＝アルムルクの名にちなんで（ニザーミーヤ学院）と呼ばれた。
 17. 一方、トルコ人の（カラハン朝）は、東・西トルキスタンを合わせてこの地方にイスラーム文化を導入し、またアフガニスタンの（ガズナ朝）は10世紀末から富の獲得を目的に北インドへの侵入を開始した。イスラーム帝国の分裂にもかかわらず、このようなトルコ人の活躍によりイスラーム世界は着実に拡大した。
 18. その後モンゴルの勢力が発展し、（フラグ）の率いるモンゴル軍は西アジアに進出して1258年にバグダードを征服し、（アッバース朝）は滅亡した。同時に600年余り続いたカリフ制度もいったん消滅した。
 19. 1258年にバグダードを征服した（フラグ）はイラン・イラクを領有して（イル＝ハン国）[首都：タブリーズ]を建国し、エジプトの（マムルーク）朝と敵対した。この国は第7代国主の（ガザン＝ハン）の時にイスラーム教を国教と定めた。
 20. この国の宰相（ラシード＝アッディーン）はペルシア語によるモンゴル中心のユーラシア世界史（集史）を著した。
 21. エジプトに（アイユーブ朝）[1169～1250]を樹立したクルド人の（サラディン／サラフ＝アッディーン）は、ファーティマ朝を倒してスンナ派の信仰を回復し、1187年には十字軍を破って88年ぶりに聖地イェルサレムを奪回した。これに対し第（3）回十字軍は聖地の再征服を目指したが実現しなかった。

22. この王朝の（スルタン）[支配者]も、トルコ人の奴隷を購入して（マムルーク）軍団を組織したが、やがてその力は強大となり、1250年に滅ぼされ、結果としてエジプト・シリアに（マムルーク朝）[1250～1517年]が建国された。
23. エジプト・シリアに建国された（マムルーク朝）[1250～1517年]の第5代スルタンのバイバルスは、1260年イラクからシリアに侵入してきたモンゴル軍を撃退するとともに、アッバース朝のカリフを（カイロ）に復活させ、さらにメッカ・メディナの両聖都を保護下に収めることによって、イスラーム国家としての権威を高めた。
24. （アイユーブ朝）[1169～1250年]から（マムルーク朝）[1250～1517年]にかけてのエジプトの首都（カイロ）はバグダードにかわるイスラーム世界の政治・経済・文化の中心地として栄えた。特にファーティマ朝時代に建設された、現存するイスラーム最古の大学・教育機関である（アズハル学院）はこの時代になるとスンナ派イスラーム教の信仰と学問活動の分野で中心的役割を果たすようになった。
25. 11世紀半ばの北アフリカでは、先住民（ベルベル人）のあいだに熱狂的な宗教運動がおこり、イスラーム教への改宗が急速に進んだ。
26. この先住民はマグリブ地方のモロッコを中心に相次いで（ムラービト朝）[1056～1147年]と（ムワッヒド朝）[1130～1269]を建設し、ともにマラケシュに都を置いた。
27. この頃イベリア半島ではキリスト教徒による国土回復運動（レコンキスタ）が盛んになり、両王朝ともこれに対抗するためイベリア半島へ進出したが、結局敗退した。この間に（ムラービト朝）は西部スーダンの黒人王国（ガーナ）を破り、内陸アフリカにイスラーム教を広げる道を開いた。
28. イベリア半島では、最後のイスラーム王朝となった（ナスル朝）がわずかに（グラナダ）とその周辺地域を保っていた。しかし1492年スペイン王国がグラナダを陥落させ、800年に及ぶイスラーム支配に終止符をうった。これにより、ムスリムの多くは北アフリカに引き上げたが。キリスト教との融合や改宗によって残留の道を選ぶものも少なからずあった。彼らがグラナダに建設した宮殿兼城塞の（アルハンブラ宮殿）はスペイン＝イスラーム建築の代表と言われ、イベリア半島に開花した高度なイスラーム文化を現在に伝えている。
29. 10世紀半ばにバグダードに入場した（ブワイフ朝）は、まもなく土地の徴税権を軍人に与え、各人の俸禄に見合う金額を直接農民や都市民から徴税させることにした。これを（イクター制）という。

30. 中央アジア・西アジアの街道や都市に作られた隊商宿・商業施設を（**キャラヴァンサライ**）という。ムスリム商人がこれを結び、奴隷や香辛料の交易に携わった。
31. インド洋を中心に、東は中国沿岸・日本、西は紅海地域からアフリカ東岸にかけて展開された海上交易ルートを（**海の道**）という。ムスリム商人はこの交易に進出し、中国・インド・東南アジア・アフリカ大陸へのイスラーム教の伝播に大きく貢献した。
32. ハルシャ王がおこした（**ヴァルダナ朝**）の滅亡後、インド各地にラージプートと呼ばれる様々な勢力が割拠するなかで、10世紀末から中央アジアのイスラーム勢力がインドへの軍事進出を開始した。アフガニスタンを拠点とするトルコ系の（**ガズナ朝**）[962～1186年]とこの王朝から独立したイラン系とされる（**ゴール朝**）[1148頃～1215年]が富の略奪を目指してインドへの侵攻をくり返したのである。
33. ラージプートと総称されるインドのヒンドゥー教諸勢力はこれに一致して対抗することができず、13世紀初めにインドで最初のイスラーム政権が誕生した。これは（**ゴール**）朝のインド遠征に同行し、支配地を任された将軍の（**アイバク**）がデリーに創始した王朝である。創始者が奴隷出身であったことから、この王朝を（**奴隷王朝**）[1206～90]という。
34. この王朝を含め、その後テリーを本拠にしたイスラーム諸王朝はまとめて（**デリー＝スルタン朝**）[1206～1526年]と言われる。諸王朝は順に、トルコ系の（**奴隷王朝**）・トルコ系の（**ハルジー朝**）・トルコ系の（**トゥグルク朝**）・トルコ系の（**サイイド朝**）・アフガン系の（**ロディー朝**）である。
35. この諸王朝の中でも（**ハルジー朝**）は地租の金納化をはじめとする経済改革を実施し、それらはのちにムガル帝国の統治に引き継がれた。
36. 14世紀末～1511年にマレー半島の西南に成立していた港市国家を（**マラッカ王国**）という。この地は明が15世紀に入って鄭和を数回インド洋地域へ遠征させた際の重要な拠点となり、国際貿易港として栄えた。
37. ナイル川上流の（**クシュ王国**）はエジプトを除けば現在最も古いアフリカ人の国として知られる。
38. この王国は前8世紀に一時エジプト王朝を滅ぼしたが、その後前667年にアッシリアの侵入を受け、ナイル川上流域へと撤退した。前670頃～後350頃は（**メロエ**）に都を置き、この時代は製鉄と商業によって栄えたが、4世紀にエチオピアの（**アクスム王国**）によって滅ぼされた。
39. 西アフリカの（**ガーナ王国**）は金を豊富に産出したので、ムスリム商人が岩塩を持って訪れ、金と交換した。1076年・77年の（**ムラービト朝**）による攻撃で衰退し、西アフリカのイスラーム化を促した。

40. その後は現在のセネガルからマリにかけての地域を版図とした（マリ王国）[1240～1473年]、ニジェール川流域を支配した（ソングアイ王国）[1464～1591年]がおこったが、その支配階級はイスラーム教徒であった。
41. この内、ソングアイ人がガオを都に創始した（ソングアイ王国）は西アフリカの隊商都市の大半を支配し、北アフリカとの交易で栄え、特にニジェール川中流の交易都市（トングクトゥ）は内陸アフリカにおけるイスラームの学問の中心地として栄えた。
42. モガディシュ以北のアフリカ東岸の海港では、古くからアラビア・イランとの海上交易が行われていた。10世紀以降、その南の（マリンディ）・（モンバサ）・（ザンジバル）・（キルワ）などの海港都市にムスリム商人が住み着き、各都市は彼らによるインド洋交易の西の拠点として栄えた。
43. やがてこの海岸地にはアラビア語の影響を受けた（スワヒリ語）が共通語として用いられるようになった。
44. 更にその南方、ザンベジ川の南では11世紀頃から金や象牙の輸出と綿布の輸入によるインド洋交易によって（モノモタパ王国）などの国々が栄えた。この地域の繁栄ぶりは（大ジンバブエ遺跡）によく示されている。

1. イスラーム帝国は古くから多くの先進文明が栄えた地域に建設された。（イスラーム文明）は、これらの文化遺産と、征服者であるアラブ人がもたらしたイスラーム教とアラビア語が融合して生まれた新しい都市文明である。
2. 西アジアのイスラーム社会はイスラーム都市を中心に発達した。この年には（モスク）[礼拝施設]・（マドラサ）[学院]・（スーク／バザール）[市場]などを中心に、商人・知識人・官僚・軍人などのイスラーム教徒が多く住んでいた。
3. 法学・神学・伝承学・歴史学などのイスラーム諸学を修めた知識人たちを（ウラマー）という。
4. イスラーム帝国の成立によって、これらのイスラーム都市を結ぶ交通路が整備され、このネットワークを通じて新しい知識や生産の技術が短期間のうちに遠隔の地へ広められた。特にパピルスや羊皮紙にかわる紙の普及はイスラーム文明の発展に計り知れないほどの影響を及ぼした。751年アッバース朝と唐の間に起きた（タラス河畔の戦い）を機に唐軍の捕虜から製紙法を学んだイスラーム教徒は、サマルカンド・バグダード・カイロなどに製紙工場を建設し、やがてこの技術はイベリア半島とシチリア島を経て13世紀にヨーロッパへ伝えられた。
5. また、10世紀以後のイスラーム社会では、都市の職人や農民の間に形式的な信仰を廃して神との一体感を求める神秘主義（スーフィズム）が盛んになった。神秘主義を信仰する神秘主義者を（スーフィー）[粗末な羊毛をまとったものの意]という。
6. 12世紀になると、聖者と呼ばれる特定の神秘主義者をリーダーとした多くの（神秘主義教団）が結成された。
7. イスラーム文明の担い手は、都市に住む人々とこれらの神秘主義者たちであった。またカリフやスルタンをはじめとする支配者たちがモスクや学院を建設し、これらの建物に土地や商店の収入を（ワクフ）として寄進することによって文明活動を積極的に保護したこともイスラーム文明の発達を促した。これはモスクや学院建設のために、または子孫のために財産を寄進することを言う。
8. 最初に発達したイスラーム教徒の学問は、アラビア語の言語学と、経典「コーラン」の解釈に基づく神学・法学であった。その補助手段として多くの伝承[ハディース]が集められ、それが歴史学の発達を促した。9～10世紀の歴史家タバリーは年代記形式の大部な世界史「預言者たちと諸王の歴史」を編纂し、14世紀の歴史学者（イブン＝ハルドゥーン）は「世界史序説」を著して、都市と遊牧民との交流を中心に、王朝興亡の歴史に法則性があることを論じた。
9. イスラーム教徒の学問が飛躍的に発達したのは、9世紀初め以後バグダードの「知恵の館」[バイト＝アルヒクマ]を中心に、ギリシア語文献が組織的に（アラビア語）に翻訳されてからである。

10. 彼らはギリシアの医学・天文学・幾何学・光学・地理学などを学び、臨床や観測・実験によってそれらをさらに豊富で正確なものとした。インドからも医学・天文学・数学を学んだが、特に数字[のちの(アラビア数字)]と十進法と(ゼロの概念)を取り入れることによって独創的な成果を上げることができた。
11. アッバース朝時代の数学・天文学・地理学者の(フワーリズミー)らは代数学と三角法を開発し、これらの成果は錬金術や光学でもちいられた実験方法とともにヨーロッパへと伝えられ、近代科学への道を開いた。
12. また、「四行詩集」[ルバイヤート]の作者である、セルジューク朝時代のイラン系科学者・詩人の(ウマル=ハイヤム)数学・天文学にも優れ、極めて正確な太陽暦の作成に携わった。
13. イスラーム教徒はギリシア哲学、特にアリストテレスの哲学を熱心に研究した。イスラーム思想界は10世紀以後しだいに神秘主義思想の影響を強く受けるようになったが、信仰と理性の調和はよく保たれていた。それは神学者がギリシア哲学の用語と方法論を学び、合理的で客観的なスンナ派の神学体系を樹立したからである。イスラーム信仰の基礎として神秘主義を容認した(ガザーリー)はこのような神学者の代表である。
14. 哲学の分野では、ともに医学者としても有名な、(イブン=シーナー) [ラテン名：アヴィケンナ]と(イブン=ルシュド) [ラテン名：アヴェロエス]がいる。このうち、(イブン=シーナー)は「医学典範」を著している。
15. 文学では、詩の分野が大いに発達し、説話文学も数多く書かれたが、アラブ文学を代表する(千夜一夜物語) [アラビアン=ナイト]はインド・イラン・アラビア・ギリシアなどを起源とする説話集の集大成であり、16世紀初め頃までにカイロで現在の形にまとめられた。
16. サーマーン朝・ガズナ朝時代のイラン系詩人(フィルドゥシー)はイラン建国からササン朝までの各王朝の歴代の王や英雄の生涯や戦いを綴った民族・英雄叙事詩である(「シャー=ナーメ」) [「王の書」]を著した。これはペルシア文学の最高傑作と称される。
17. メッカ巡礼記を中心とする旅の文学も盛んであり、(イブン=バットゥータ)はモロッコから中国にいたる広大な世界を旅して帰国後、口述筆記によるアラビア語の「旅行記」(三大陸周遊記)を残した。
18. モスクやマドラサなどに付随する尖塔を(ミナレット)という。これはイスラーム世界に固有な都市景観を生み出した。
19. 美術・工芸の分野では繊細な細密画(ミニアチュール)や象眼を施した金属器、また装飾文様として唐草文やアラビア文字を図案化した(アラベスク)が発達した。
20. 北東部ほど寒冷で乾燥するヨーロッパの自然条件は、東から西へ、また北から南への大規模な人間の移動を絶えず引き起こした。先史時

代から繰り返されたこの民族移動と多様な文化の混合は、ヨーロッパ史の重要な特徴といえる。言語的には（インド＝ヨーロッパ語族）の西方系言語を話す人々がこの歴史舞台の主な登場人物であった。南欧のギリシア人・イタリア[ローマ]人・スペイン人、西欧のケルト人・ゲルマン人、東欧のスラヴ人などがそれにあたる。

21. また、他にもマジヤール人・フィン人・フン人など、（ウラル語系）・アルタイ語系の人々の活動も重要である。
22. アルプス以北のヨーロッパには、前6世紀頃から（ケルト人）が多く住み着いていた。バルト海沿岸を居住地とする（ゲルマン人）は、ケルト人を西に圧迫しながら勢力を拡大していった。
23. その頃のゲルマン人は数十の部族に分かれ、各部族が一人の王や数人の首長を持っていた。貴族・平民・奴隷の身分差はすでに発生していたが、重要な決定は貴族と平民からなる青年男性自由人の全体集会である（民会）が行った。起源前後頃の原始ゲルマン人の社会については、カエサルの「（ガリア戦記）」やタキトゥスの「（ゲルマニア）」が重要な史料である。
24. 4世紀後半、アジア系の（フン人）がドン川を越えて西へ進み、ゲルマン人の一派である東ゴート人の大半を征服、さらに（西ゴート人）を圧迫した。
25. そこで（西ゴート人）は375年に南下を始め、翌年にはドナウ川を渡ってローマ帝国領内へ移住した。
26. これをきっかけに他のゲルマン諸部族も大規模な移動を開始し、約200年に及ぶ、（ゲルマン人の大移動）が始まった。
27. （西ゴート人）は410年にローマを略奪した後、ガリア西南部とイベリア半島に移動して建国した。
28. 北アフリカには（ヴァンダル）人、ガリア東南部には（ブルグンド）人、ガリア北部には（フランク）人がそれぞれ建国した。
29. また、大ブリテン島に渡った（アングロ＝サクソン人）は9世紀までの間に（アングロ＝サクソン七王国）[ヘプターキー]を建てた。
30. 一方、フン人は5世紀前半に（アッティラ王）がパンノニア[今日のハンガリー]を中心に大帝国を建てた。しかし、451年（カタラウヌムの戦い）で西ローマとゲルマンの連合軍に敗れ、建国者の死後大帝国は崩壊した。
31. この混乱の中、西ローマ帝国は476年、ゲルマン人傭兵隊長（オドアケル）によって崩壊した。
32. （テオドリック大王）のもとでフン人の支配から脱出した東ゴート人は、イタリアに移動してゲルマン人傭兵隊長（オドアケル）の王国を倒し、ここに建国した。
33. 568年北イタリアに（ランゴバルド王国）が建てられたのを最後に民族大移動は一応の終息をみた。

- 34.先住民ケルト人は、今日の（アイルランド）・（スコットランド）・（ウェールズ）およびフランスのブルターニュ半島に追いやられたが、その後も独自の文化を保ち続けた。
- 35.ゲルマン人諸国家の大半が短命だったのに対して、その後着実に領土を広げ、最有力国として西ヨーロッパ世界形成に大きな役割を果たしたのが（フランク王国）であった。
- 36.この王国は481年にメロヴィング家の（クローヴィス）によって全フランク人が統一され、ガリア一帯に建国された。
- 37.当時ゲルマン人の多くが異端である（アリウス派）キリスト教を信仰していたのに対し、建国者の（クローヴィス）は正統派の（アタナシウス派）に改宗した。これは王妃クロティルドの奨めと言われる。
- 38.6世紀半ば、この王国はジュネーブを中心に建てられていた（ブルグンド王国）などを滅ぼして全ガリアを統一したが、8世紀になるとメロヴィング朝の権力は衰え、王家の行政と財政の長官である（宮宰）[マヨル＝ドムス]が実権を掌握するようになった。
- 39.この頃、アラビア半島から急速に広がって地中海地方に侵入したイスラーム勢力がこの王国にも迫りつつあった。ウマイヤ朝時代、アラブ人のイスラーム勢力が北アフリカを西進し、イベリア半島を渡って711年に（西ゴート王国）を滅ぼし、さらにピレネー山脈を越えてガリアへ侵攻しようとしたのである。
- 40.これに対しメロヴィング朝の宮宰（カール＝マルテル）は732年（トゥール・ポワティエ間の戦い）でイスラーム軍を撃退し、西方キリスト教世界を外部勢力から守った。
- 41.その子（ピピン）は751年メロヴィング朝を廃して王位につき、（カロリング朝）[751～987年]を開いた。
- 42.メロヴィング家の（クローヴィス）によって481年に開かれた（フランク王国）と協同して西ヨーロッパ世界形成に貢献したのが、（ローマ＝カトリック協会）である。
- 43.ローマ帝政末期には、ローマ・コンスタンティノーブル・アンティオキア・イェルサレム・アレクサンドリアの（五本山）と呼ばれるキリスト教会が重要となったが、中でも最有力だったのが（ローマ教会）と（コンスタンティノーブル協会）であった。
- 44.西ローマ帝国が滅亡すると、ローマ教会は次第にビザンツ皇帝が支配するコンスタンティノーブル協会から分離する傾向を見せ始め、独自の活動を展開するようになった。6世紀末の教皇（グレゴリウス1世）以来、ローマ教会はゲルマン人への不況を熱心に行った。
- 45.また、6世紀から広がる（修道院運動）は、学問・教育や農業技術の発展に大いに貢献した。
- 46.こうしてローマ教会は西ヨーロッパに勢力を拡大し、とくに使徒ペテロ殉教の地であるとされるローマの司教はペテロの後継者を自任し、（教皇）[法王]として権威を高めるようになった。

47. さらに東西の協会の断絶を深めたのは、聖像をめぐる対立であった。キリスト教徒は以前からキリスト・聖母・聖人に聖像を礼拝していた。これが偶像崇拜を禁ずるキリスト教の初期の教理に反すると考えられたこと、また偶像を厳しく否定するイスラーム教と対抗する必要に迫られたことから、726年ビザンツ皇帝（**レオン3世／レオ3世**）は（**聖像禁止令**）を發布した。
48. ゲルマン人への不況に聖像を必要としたローマ教会はこれに反発し、東西の両協会は対立と分裂を一層強めることになった。これ以後ローマ教会はビザンツ皇帝に対抗できる強力な政治勢力を保護者として求めねばならなくなった。ちょうどこの時、（**カール＝マルテル**）が732年に（**トゥール・ポワティエ間の戦い**）でイスラーム軍を破って西方キリスト教世界を守った。そこでローマ教皇は彼が宮宰を務める（**フランク**）王国に接近を図り、宮宰の子（**ピピン**）が王位を継承することを認めた。
49. 王位継承を認めた返礼として、宮宰の子（**ピピン**）はイタリアのランゴバルド王国を攻め、奪った（**ラヴェンナ地方**）を教皇に寄進した。この出来事を（**ピピンの返礼**）といい、この地が今後の（**教皇領**）の始まりとなる。こうして利害が一致したローマ教会と（**フランク**）王国はさらに結びつきを強めていった。
50. ローマ教会と（**フランク**）王国との関係は宮宰の子（**ピピン**）の子である（**カール大帝**）[（**シャルルマーニュ**）]の時代に最も深まった。
51. 彼はランゴバルド王国を征服、北東の（**ザクセン**）人を服従させた。その結果、大陸における大多数のゲルマン諸部族は統合され、ローマ＝カトリックに改宗させられた。
52. 彼はまた、東ではアルタイ語系の（**アヴァール**）人を、南ではイスラーム勢力を撃退し、西ヨーロッパの主要部分には彼が支配する（**フランク**）王国によって統一された。
53. 彼は広大な領土を集権的に支配するため、全国を州に分け、地方の有力豪族を各州の長官である（**伯**）に任命し、（**巡察使**）を派遣して彼ら有力豪族を監督させた。こうしてこの（**フランク**）王国はビザンツ帝国にならぶ強大国となった。
54. ここにおいてローマ教会は、ビザンツ皇帝に匹敵する政治的保護者を彼（**カール大帝**）に見出した。800年のクリスマス日に教皇（**レオ3世**）は彼にローマ皇帝の帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言した。この出来事を（**カールの戴冠**）という。
55. この出来事は、西ヨーロッパ世界が政治的・文化的・宗教的に独立したという重要な歴史的意義を持つ。ローマ以来の古典古代文化・キリスト教・ゲルマン人が融合した西ヨーロッパ中世世界がここに誕生した。ローマ教会はビザンツ皇帝への従属から独立し、のち1054年にキリスト教世界は教皇を首長とする（**ローマ＝カトリック協会**）と、ビザンツ皇帝を首長とする（**ギリシア正教会**）の2つに完全に分裂した。

56. ローマ教会から帝冠を受けた（カール大帝）の帝国（フランク）王国は一見中央集権的であったが、実態は彼と各州の長官である（伯）の個人的な結びつきの上に成り立つものに過ぎなかった。そのため彼の死後内紛がおこり、843年の（ヴェルダン条約）と870年の（メルセン条約）によりこの帝国は東西とイタリアの3国に分裂した。これらはそれぞれのちのドイツ・フランス・イタリアに発展した。
57. （東フランク）[ドイツ]では、10世紀初めに大帝の血統である（カロリング家）の血筋が途絶え、各部族を支配する諸侯の選挙で王が選ばれるようになった。ザクセン家の王（オットー1世）はウラル語系の（マジャール）人やスラヴ人の侵入を退け、北イタリアを制圧して962年教皇からローマ皇帝の位を与えられた。これが（神聖ローマ帝国）[962～1806年]の始まりである。
58. この帝国の皇帝はローマのあるイタリア政策に熱心で本国を疎かにし、国内に不統一をもたらした。
59. （西フランク）[フランス]でも10世紀末に大帝の血統（カロリング家）の血筋が途絶え、パリ伯（ユーグ=カペー）が王位について（カペー朝）を開いた。しかし王権はパリ周辺など狭い領域を支配するのみで極めて弱く、王に匹敵する大諸侯が多数分立していた。
60. イタリアでも大帝の血筋（カロリング家）が断絶し、その後ローマの支配を狙う（神聖ローマ帝国）[ドイツ]の介入やイスラーム勢力の侵入などで国内は乱れた。ローマを中心とした教皇領と並んで、北イタリアにはジェノヴァやヴェネツィアなどの都市が独立した。

1. 8世紀から10世紀までの間、絶えず外部勢力の侵入に見舞われていた西ヨーロッパは、深刻な不安と混乱を経験しなければならなかった。東方からは（スラヴ）人がフランク王国を脅かし、イスラーム勢力はその後も絶えず南イタリアや南フランスに侵攻した。
2. （スカンディナヴィア半島）やユトランド半島には、ゲルマン人の一派[北ゲルマン]に属する（ノルマン人）が住んでいた。
3. 彼らの一部は8世紀後半から、商業や海賊・略奪行為を目的として、ヨーロッパ各地に本格的に海上遠征を行うようになった。（ヴァイキング）として恐れられた彼らは、細長くて底の浅い（ヴァイキング船）に乗り、河川を遡って内陸深く侵入した。
4. 10世紀初め（ロロ）が率いる一派は、北フランスに上陸してノルマンディー公国を建てた。
5. ここから更に別れた一派は、12世紀前半、南イタリアとシチリア島に侵入し、（両シチリア王国）を建国した。
6. また、大ブリテン島の中・南部占めるイングランドに成立していたアングロ＝サクソン王国も（ノルマン）人の侵入に悩まされ、9世紀末に（アルフレッド大王）が一時これを撃退したものの、1016年デーン人[デンマーク地方の（ノルマン）人]の王（クヌート／カヌート）に征服された。
7. その後アングロ＝サクソン系の王家が復活したが、1066年（ノルマンディー公ウィリアム）が王位を主張して攻め込み、（ウィリアム）1世として即位し（ノルマン朝）[1066～1154年]を建てた。これを（ノルマン＝コンクエスト）という。
8. 一方、（リューリク）を首領とするノルマン人の一派[ルーシ]は、（ドニエプル）川流域のスラヴ人地域に進出して、9世紀に（ノヴゴロド国）を、ついで（キエフ公国）を建設し、これがロシアの起源となった。
9. 別の一派は（アイスランド）・グリーンランドに移住し、更に遠くの北アメリカにまで到達したのもいた。
10. ノルマン人の原住地にはユトランド半島の（デンマーク）、スカンディナヴィア半島東部の（スウェーデン）、スカンディナヴィア半島西岸の（ノルウェー）の諸王国が建てられ、彼らがキリスト教化されると、ようやくノルマン人の移動も終わった。こうして北欧は西ヨーロッパ世界に組み入れられることになった。
11. 民族大移動の長い混乱期の中に、西ヨーロッパの商業と都市は衰え、社会は農業経済に大きく頼るようになった。貨幣よりも土地や現物が価値を持つようになり、また度重なる外部勢力の侵入から生命財産を守るため、弱者は身近な強者に保護を求めた。ここから生まれた西ヨーロッパ中世世界特有の仕組みが、封建的主従と荘園であり、この2つの仕組みの上に成り立つ社会を（封建社会）という。
12. 皇帝・国王・大領主である（諸侯）[大貴族]・兵士である（騎士）[小貴族]や聖職者などの有力者たちは、自分の安全を守るため、互い

に政治的な結びつきを求めるようになった。

- 13.そこで、主君が家臣に（封土）[領地]を与えて保護する代わりに、家臣は主君に忠誠を誓って軍事的奉仕の義務を負うという、人と人の結びつきが生まれた。これを（封建的主従関係）という。この関係は主君と家臣の個別の契約によって結ばれたが、やがて世襲化した。
- 14.西ヨーロッパのこの関係は、主君と家臣の双方に契約を守る義務がある（双務的契約）なのが特徴で、主君が契約に違反すれば家臣には服従を拒否する権利があった。また1人で複数の主君を持つこともできた。
- 15.この関係は、土地所有者が自分の土地を有力者に献上してその保護下に入った後、改めて有力者からその土地を貸与してもらうローマの（恩貸地制度）と貴族や自由民の子弟が他の有力者に忠誠を誓ってその従者になる慣習であるゲルマンの（従土制）に起源がある。この関係に基づく支配体制は地方分権的で、多くの騎士を家臣として従えた大諸侯は国王に並ぶ権力を持って自立し、国王は実質的に大諸侯の1人に過ぎなかった。
- 16.この関係を取り結ぶ支配者たちは、それぞれが大小の領地を所有し、農民を支配する（領主）であった。彼らの個々の所有地を（荘園）という。これは村落を中心に（領主直営地）・農民保有地及び牧草地や森などの共同利用地から成り立つ。
- 17.農民は（農奴）と呼ばれる不自由身分で、移動の自由がなく、結婚により領土外へ出る場合に発生する（結婚税）や現在の相続税といえる（死亡税）を領主に納める義務を負うなど自由を制限された。
- 18.この不自由身分の農民たちは（領主直営地）で労働する義務[賦役]と、自分の所有地から生産物を納める義務である（貢納）を領主に負った。
- 19.不自由身分の農民たちはローマ帝政末期のコロヌスや没落したゲルマンの自由農民の子孫で、長い混乱期に身分の自由を失い、領主に保護を求めるようになった人々である。領主は国王の役人が荘園に立ち入ったり課税したりするのを拒む（不輸不入権）[インテムニート]を持ち、農民を（領主裁判権）によって裁くなど、荘園と農民を自由に支配することができた。
- 20.封建社会では、王権が貧弱で統一的権力になれなかったのに対し、ローマ＝カトリック協会は西ヨーロッパ世界全体に普遍的な権威を及ぼした。教皇を頂点とし、（大司教）・（司教）・（司祭）・（修道院長）など、聖職者の序列を定めたピラミッド型の（階層制組織）が作られ、このうち（大司教）や（修道院長）などは国王や貴族から寄進された荘園を持つ大領主でもあった。
- 21.また教会は農民から（十分の一税）を取り立て、教会法に基づく独自の裁判権さえ持っていた。
- 22.高位の聖職者が諸侯と並ぶ支配階級となると、皇帝や国王などの世俗権力は、しばしば本来聖職者ではない人物[俗人]をその地位に任命

し、教会に介入するようになった。こうして世俗権力の影響を受けた教会では、教会の聖職位や財産を売買する（**聖職売買**）など様々な弊害が生じた。これに対して10世紀以降、フランス中東部の（**クリュニー修道院**）を中心に改革の運動がおこった。

23. 当時の教皇（**グレゴリウス7世**）はこの改革を推し進め、教会の聖職位や財産を売買する（**聖職売買**）や聖職者の（**妻帯**）を禁じ、また聖職者を任命する権利（**聖職叙任権**）を世俗権力から教会の手に取り戻して教皇権を強化しようとした。
24. 神聖ローマ皇帝（**ハインリヒ4世**）はこれに反発し、教皇と皇帝の間で（**叙任権闘争**）が始まった。皇帝は改革を無視しようとしたため、ついに教皇は彼を破門した。
25. ドイツ諸侯は破門解除がなければ皇帝を廃位すると決議したため、1077年皇帝はイタリアのカノッサで3日間雪中に立って許しを請い、皇帝に謝罪し許された。この出来事を（**カノッサの屈辱**）という。
26. その後1122年の（**ヴォルムス協約**）で両者の妥協が成立し、ここに教皇と皇帝の間におきた（**叙任権闘争**）は終結した。
27. 教会の権威は西ヨーロッパ社会全体に及ぶようになり、教皇権は13世紀の（**インノケンティウス3世**）の時に絶頂に達した。
28. 西ヨーロッパがカール大帝の頃までに1つの世界として自立する一方、東ヨーロッパでは（**ビザンツ帝国**）[395～1453年]がギリシア正教とギリシア古典文化を融合した独自の文化的世界をつくり、西ヨーロッパに対して経済的・文化的な先進文明圏として優位を保った。
29. この国は西ヨーロッパと異なり、ゲルマン人の大移動によっても深刻な打撃は受けず、商業と貨幣経済は繁栄を続けた。首都（**コンスタンティノープル**）[旧名：（**ビザンティウム**）]はヨーロッパ世界最大の貿易都市として中世を通じて栄えた。政治面では、ローマ帝政末期以来の巨大な官僚制による皇帝専制支配が維持されてきた。西ヨーロッパでは皇帝と教皇という2つの権力が並び立っていたのに対し、この国の皇帝は地上におけるキリストの代理人としてギリシア正教会を支配する立場にあり、政治・宗教両面における最高の権力者であった。
30. 西ローマ帝国滅亡後しばらくは、西方のゲルマン諸国家もローマ帝国の唯一の後継者であるこの国の皇帝の権威を認めて服従した。（**ユスティニアス大帝**）は地中海帝国の復興を図り、北アフリカの（**ヴァンダル王国**）やイタリアの（**東ゴート王国**）を滅ぼして一時的に地中海のほぼ全域にローマ帝国を復活させた。
31. 内政においては、トリボニアスら法学者を集めて行った（**ローマ法大全**）の編纂や、6世紀に建立されたビザンツ様式を代表する建築物の（**ハギア=ソフィア聖堂**）などの事業に力を注ぎ、また中国から養蚕技術を取り入れ、（**絹織物産業**）発展の基礎を築いた。
32. しかし、長期の征服戦争で国力は低下し、しだいに勢力を縮小させていった。10世紀から11世紀前半にかけて異民族を撃退して一旦

は勢力を回復したが、11世紀後半には東方からセルジューク朝の侵入を受け、13世紀前半には第4回十字軍が首都を奪って（ラテン帝国）を建てるなど国内は混乱した。

33. 第4回十字軍で首都を奪われた後、一度は復活したが、もはやかつての地中海帝国時代の勢いは戻らず、ついに1453年（オスマン帝国）に滅ぼされた。
34. この帝国の初期は、コロヌスを使った大土地所有制度が支配的であった。しかし、7世紀以降異民族の侵入に対処するため、帝国を幾つかの軍管区に分けてその司令官に軍事と行政両方の権限を与えるという軍管区制（テマ制）が敷かれると、土地所有のあり方も変化した。すなわち、軍管区では農民に土地を与える代わりに兵役義務を課す（屯田兵制）が行われたため、小土地所有の自由農民が増え、彼らが帝国を支える基盤となったのである。
35. 軍管区制は10世紀に完成したが、その後再び貴族が農奴を使って経営する大土地所有が拡大した。そして11世紀末以降、皇帝は中央集権を維持するために、軍役奉仕と引き換えに貴族に領地を与える（プロノイア制）を用いざるを得なくなった。
36. この帝国の公用語は7世紀以降（ギリシア語）が用いられた。
37. 美術では、ドームと（モザイク壁画）を特色とするビザンツ様式の教会建築が有名で、（ハギア＝ソフィア聖堂）や（サン＝ヴィターレ聖堂）がその代表である。
38. また聖母子像などを描いた（イコン美術）もこの帝国に特徴的な美術である。
39. カルパティア山脈の北方を居住地とする（スラヴ人）は、6世紀に入ると、大移動前にゲルマン人が住んでいたビザンツ帝国北側の広大な地域に急速に広がった。大きく分けて東スラヴ・南スラヴの諸民族はビザンツ文化とギリシア正教、西スラヴ人は西方文化とローマ＝カトリックの影響を受けつつ自立と建国の道を進んでいった。
40. ドニエプル川中流域に展開した（東スラヴ人）[ロシア人・ウクライナ人など]が住むロシアでは、9世紀にスウェーデン系ノルマン人が（ノヴゴロド国）ついで（キエフ公国）を建国、まもなく先住民に同化してスラヴ化した。
41. 10世紀末、ウラディミル1世は周辺諸民族と戦って領土を広げ、（キエフ公国）に最盛期をもたらした。彼はギリシア正教に改宗してこれを国教とし、ビザンツ風の専制君主政を真似たので、以後ロシアは西欧とは別の文化圏に入ることになった。
42. その後農民の農奴化と貴族の大土地所有が進み、大土地所有者である諸侯が多数分立して国内は分裂した。13世紀にバトゥの率いるモンゴル人が侵入、南ロシアに（キプチャク＝ハン国）を建てると、これに屈服し、約240年の長きに渡ってモンゴル支配に服した。こ

れをロシアでは（**タタールのくびき**）と呼んだ。

43. 15世紀になると商業都市モスクワを中心とした（**モスクワ大公国**）が急速に勢力を伸ばし、大公（**イヴァン3世**）の時に東北ロシアを統一、1480年にはようやくモンゴル支配から脱した。
44. 彼は諸侯の力を抑えて強大な権力を握り、ビザンツ最後の皇帝の姪ソフィアと結婚してローマ帝国の後継者をもって自任し、初めて（**ツァーリ**）[皇帝]の称号を用いた。
45. また、彼は農民を土地に縛り付けて農奴制を強化し、その孫（**イヴァン4世**）による中央集権化に道を開いた。
46. 一方、バルカン半島に南下した南スラヴ人のなかで最大の勢力（**セルビア人**）は、初めビザンツ帝国に服属しギリシア正教に改宗したが、12世紀に独立し、14世紀前半にはバルカン半島北部支配する強国になった。
47. 同じ南スラヴ人の（**クロアチア人**）・（**スロヴェニア人**）は西方のフランク王国の影響下でローマ＝カトリックを受け入れた。南スラヴ人の大半は、14世紀以降オスマン帝国の支配下に置かれる様になった。
48. （**西スラヴ人**）[ポーランド人・チェック人・スロヴェキア人]は西ヨーロッパの影響を受けてローマ＝カトリックへ改宗し、西方ラテン文化圏に入った。
49. （**ポーランド人**）は10世紀頃建国し、14世紀前半にはカジミェシュ[カシミール]大王のもとで繁栄した。
50. その北にいたバルト語系の（**リトアニア人**）はドイツ騎士団と対抗するため14世紀にポーランドと合体して（**ヤゲウォ／カゲロー**）朝[1386～1572年]リトアニア＝ポーランド王国を作り、15世紀に最も強大になった。
51. （**チェック人**）は10世紀に（**ベーメン王国／ボヘミア王国**）を統一したが、ドイツとの関係が密接で、11世紀には神聖ローマ帝国に編入された。
52. これらスラヴ諸民族と関係を持ちながら、東ヨーロッパの非スラヴ系諸民族も自立の道を歩んだ。（**ブルガール人**）は7世紀にバルカン半島北部で（**第1次ブルガリア帝国**）を建国し、その後スラヴ化してギリシア正教に改宗した。
53. この国はビザンツ帝国に合併されたのち、12世紀に再び独立し（**第2次ブルガリア帝国**）となったが、14世紀にオスマン帝国に併合された。
54. （**マジャール人**）は黒海北岸からドナウ川中流のパンノニア平原に移動し、10世紀末に（**ハンガリー王国**）を建国してローマ＝カトリックを受け入れた。
55. ローマ教会がスラヴ人へのキリスト教布教に用いた文字を（**キリル文字**）という。
56. 西ヨーロッパの封建社会は西暦1000年頃から、300年ほど続く安定と成長の時代に入った。この時代は概ね気候が温和で、耕地を春耕地・秋耕地・休耕地にわけて3年で一巡する農地利用システムである（**三圃制**）の普及や犁・水車の改良など農業技術の進歩により農業生産は増大し、人口も飛躍的に増えた。

57. それに伴い西ヨーロッパ世界は、しだいに内外に向けて拡大し始めた。修道院を中心とした開墾運動、オランダの干拓、エルベ川以東への東方植民、イベリア半島の国土回復運動、巡礼の流行がそれにあたる。なかでも特に大規模な西ヨーロッパへの拡大がイスラーム勢力に奪われたイェルサレムを脱会するためにおこした（**十字軍**）である。
58. 巡礼の流行は（**イェルサレム**）・（**ローマ**）・（**サンチャゴ＝デ＝コンポステラ**）がキリスト教徒の三大巡礼地として信仰を集めた。
59. 11世紀に東地中海沿岸に進出し、聖地イェルサレムを支配下に置いた（**セルジューク**）朝はビザンツ帝国おも脅かしたので、ビザンツ皇帝は教皇に救援を要請した。
60. 当時の教皇（**ウルバヌス2世**）は1095年（**クレルモン宗教会議**）を招集し、聖地回復の聖戦をおこすことを提唱した。こうして翌年1096年各国の諸侯や騎士からなる（**第1回十字軍**）[1096～1099年]が出発し、1099年イェルサレムを占領して（**イェルサレム王国**）を建てた。
61. その後勢力を盛り返したイスラーム勢力に対して（**第2回十字軍**）[1147～1149年]がおこされ、ついでアイユーブ朝のサラディンに再び奪われた聖地イェルサレムを回復するために、神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世、フランス王フィリップ2世、イギリス王リチャード1世が参加して（**第3回十字軍**）[1189～1192年]がおこされたが、いずれも成功しなかった。
62. 第3回十字軍に参加した国王のうち、「獅子心王」と呼ばれアッコンの攻防戦で活躍したイギリス王は（**リチャード1世**）である。
63. 1202～1204年には教皇（**インノケンティウス3世**）の提唱により第4回十字軍がおこされたが、人数・資金ともに不足したため、援助をしたヴェネツィア商人の要求に従わざるを得ず、聖地イェルサレム回復という本来の目的を捨て、ヴェネツィア商人が交易上のラバルとしていたコンスタンティノープルを占領し（**ラテン帝国**）を建てた。
64. その後も第7回まで十字軍はおこされたが、聖地イェルサレム回復という本来の目的は結局果たされなかった。この間、聖地への巡礼の保護を目的として（**ドイツ騎士団**）などの宗教騎士団が各地で活躍した。

1. 封建社会が安定し、農業生産が増大した結果、余剰生産物の交換が活発になり、都市と商業が発達し始めた。また、ムスリム商人やノルマン人の商業活動によって（貨幣経済）が大きな広がりを見せるようになった。
2. さらに、十字軍の影響で交通が発達すると、遠方の他の経済圏や地域との商業活動である（遠隔地貿易）で発達する都市も現れた。
3. 遠隔地貿易はまず、ヴェネツィア・ジェノヴァ・ピサなどの（地中海商業圏）で発達した。
4. これらのイタリアの港市には、東方貿易[（レヴァント貿易）]によって香辛料・絹織物・宝石など奢侈品がもたらされた。
5. また、イタリア北部の中心都市（ミラノ）は商工業で、イタリア中部トスカナ地方の中心都市（フィレンツェ）は毛織物業と金融業で栄えた。
6. 他にも、北海・バルト海を中心として新たに（北ヨーロッパ商業圏）も発展した。リューベック・ハンブルク・ブレーメンなどの北ドイツ諸都市は海産物・木材・穀物などの生活必需品を取引し、ガン[ヘント]やブリュージュなどの（フランドル地方）は毛織物生産で繁栄した。
7. これらの2つの大商業圏を結ぶ内陸の通商路にも都市が発達し、特にフランスの（シャンパーニュ地方）は定期市で繁栄し、毛織物や香料、革製品やぶどう酒などの中世最大の商品集積地となった。
8. イタリアとドイツを結ぶ南ドイツでは、ニュルンベルクや、15～16世紀にフッガー家によりヨーロッパ金融業の中心となる（アウクスブルク）が発展した。
9. 11～12世紀に多くが自治都市に発展した（中世都市）は、ローマ帝政末期以来の司教座都市や城郭都市などの従来の都市が核となつてできた。はじめは封建領主の保護と支配を受けていたが、商工業が発達するにつれて領主支配からの自由と自治を求め始めた。
10. 11～12世紀以降、各地の都市は次々に（自治権）を手に入れ、自治都市となった。
11. 自治権の強さは国や地域で様々だった。北イタリア諸都市は、領主である司教権力を倒して自治都市[（コムーネ）]となり、周辺の農村も併合し一種の都市国家として完全に独立した。
12. これについて独立性が強かったのはドイツの諸都市で、諸侯の力を抑えようとする皇帝から（特許状）を得て自治権を獲得し、皇帝直属の自由都市[（帝国都市）]として諸侯と同じ地位になった。
13. これらの有力都市は、イタリアに介入する神聖ローマ皇帝に対抗するために結成された（ロンバルディア同盟）や、北海・バルト海沿岸

のドイツ商人の利益を目的とした（ハンザ同盟）のように共通の利害のために都市同盟を結成した。特にリューベックを盟主とする（ハンザ同盟）は14世紀に北ヨーロッパ商業圏を支配し、共同で武力を用いるなどして大きな政治勢力になった。

14. これら西ヨーロッパの自治都市は周囲を城壁で囲み、その中で市民たちは封建的束縛から逃れて自由を手にすることができた。ドイツでは、農奴が荘園から都市に逃れて1年と1日住めば自由な身分になれるとされ、「（都市の空気は人を自由にする）」と言われた。
15. 各自治都市は独自の行政組織をもって自治にあたった。自営運営の基礎になった組織が（ギルド）と呼ばれる同業組合である。
16. 彼らのうち初め市政を独占していたのは、遠隔地貿易に従事する大商人を中心とする（商人ギルド）であった。
17. しかしのちにはこれに不満を持つ手工業者が職種別の同職ギルド[（ツunft）]をつくって分離し、市政への参加を求めて争い始めた。これを（ツunft闘争）という。
18. 同職ギルドの組合員になれたのは、独立した手工業経営者である（親方）に限られていた。彼らは職人や徒弟を指導して労働させた。職人や徒弟の間には厳格な身分序列があった。
19. ギルドは自由競争を禁じ、非組合員の商業活動を禁止して市場を独占した。これにより手工業者の経済的地位は安定した。上層市民の中にはアウクスブルクの（フッガー家）のように皇帝に融資してその地位を左右したり、フィレンツェの（メディチ家）のように一族から教皇を出す富豪も現れた。
20. 1300年頃から、封建社会の仕組みは次第に衰退に向かった。商業と都市が発展し（貨幣経済）が浸透するにつれて、荘園に基づく経済体制は崩れ始めた。
21. 領主は貨幣を手に入れるため、賦役をやめて直営地を分割して農民に貸し与え、生産物や（貨幣地代）を納めさせるようになった。
22. 14世紀に入ると気候が寒冷化し、凶作や飢饉、西ヨーロッパ人口の約3分の1を失わせた（黒死病）[（ペスト）]の流行、相次ぐ戦乱などで農業人口が減少した。このため領主は荘園での労働力を確保するために農民の待遇を向上させねばならず、農民の身分的束縛はますます緩められた。
23. これ以降、16世紀までの西ヨーロッパでは農民が隷属的な農奴から経済的・人格的に開放され、小土地所有の農民になる（農奴解放）の動きが広まった。
24. イギリスではこの現象がはっきりと現れ、かつての農奴は（ヨーマン）と呼ばれる独立自営農民となった。
25. やがて経済的に困窮した領主が再び農民への束縛を強めようとする、農民たちはこれに抵抗し、農奴制の廃止などを求めて各地で大規模な（農民一揆）をおこした。

26. 14世紀後半1358年のフランスの（ジャックリーの乱）やイギリスで1381年に起きた（ワット＝タイラーの乱）が農民の反乱として代表的である。
27. イギリスで1381年に起きた（ワット＝タイラーの乱）の思想的指導者であった聖職者ジョン＝ポールは「（アダムが耕しイヴが紡いだ時、だれが貴族であったか）」と説教し、身分制度を批判した。
28. こうした反乱はいずれも鎮圧されたが、領主層の窮乏はますます深刻になっていった。とくに中小領主である騎士の中には国王や大諸侯に領地を没収されるものが多かった。さらに14～15世紀に（火砲）が発明されて戦術が一変すると、かつて一騎打ち線で花形だった彼らは地位を弱め、一層没落した。
29. 一方、商業圏が拡大するにつれ、都市の市民たちは市場を統一する中央集権的な政治勢力の出現を望んだ。そこで国王は彼らと協力して諸侯を抑え、権力集中を図るようになった。力を失った諸侯や騎士は国王の宮廷に仕える（廷臣）となった。
30. 各国ごとの統一的な政治権力が弱かった時代には西ヨーロッパ全体に及んでいた教皇の権威も、十字軍の失敗から傾き始め、各国で王権が伸びるとさらに衰えを見せるようになった。13世紀末に教皇となった（ボニファティウス8世）は教皇権の絶対性を主張し、聖職者への課税に反対してイギリス・フランス国王と争った。
31. しかし、1303年教皇はフランス国王（フィリップ4世）に捕らえられ、まもなく釈放されたが屈辱のうちに死んだ。これを（アナーニ事件）という。
32. 教皇を捕らえたフランス国王（フィリップ4世）はその後、教皇庁を南フランスのアヴィニョンに移し、以後約70年間教皇はフランスの支配下に置かれた。これを古代のバビロン捕囚にたとえて（教皇のバビロン捕囚）という。[1309～1377年]
33. その後教皇がローマに戻ると、フランスにも別の教皇がたち、両教皇がともに正当性を主張して対立した。これを（教会大分裂）[（大シスマ）]という。この事態によって教皇と教会の権威失墜は決定的となった。
34. 教会の墮落や腐敗を批判し、教会を改革しようとする運動が各地でおこったが、これに対して教会は（異端審問）や（魔女裁判）によってカトリックの教えに背くものを容赦なく罰しようとした。
35. 14世紀後半、イギリスの（ウィクリフ）は聖書こそ信仰の最高の権威であり、教会はその教えから離れていると批判し、聖書を英訳するなどして次節の普及に務めた。ベーメンの（フス）は彼の説に共鳴し、ともに教会を批判した。
36. こうした宗教界の混乱を收拾するため、神聖ローマ皇帝ジギスムントの提唱により1414年～1418年にかけて（コンスタンツ公会

議)が開かれ、(ウィクリフ)と(フス)はを異端と宣告し、2人のうち(フス)を火計に処した。その上でローマの教皇と正当と認めて教会大分裂を終わらせた。

37. しかしベーメンではチェコの民族運動と結んだ(フス)派の反乱である(フス戦争)[1419~1436年]が続くなどものはやかつての教皇権の勢いは戻らなかった。
38. 13~14世紀以後ヨーロッパの各国の王は、課税などを要請するため、貴族・聖職者及び都市の代表が出席する(身分制議会)を開き、話し合いを通して国内統一を図った。この議会は、イギリスの上・下院、フランスの三部会、ドイツの帝国議会・領邦議会、イベリア半島のコルテスが有名。
39. イギリスの封建社会は(ノルマン)朝がウィリアム1世の征服によって建てられたことから、例外的に最初から王権が強かった。
40. 中世イギリスを支配した(プランタジネット朝)の初代の王ヘンリ2世は血統の関係上フランス系でもあり、イギリスに加えてフランス西半部おも領有して大勢力を築いていた。

41. ところがヘンリ2世の子の第3代王(ジョン王)はフランス国王フィリップ2世と戦ってフランスの領地の大半を失い、さらに教皇インノケンティウス3世と争って破門された。その上財政困難に陥って重税を課したため、貴族は結束して彼に反抗し、1215年国王と貴族の関係を定めた憲章である(大憲章)[(マグナ=カルタ)]を認めさせた。これはあらたな課税には高位聖職者と大貴族の会議の承認を必要とすることなどを定めたもので、ここにイギリス立憲政治の最初の基礎が置かれた。
42. 第4代王の(ヘンリ3世)はこの憲章を無視したため、(シモン=ド=モンフォール)は1265年に貴族を率いて反乱を起こし、王を破った。そして以前からあった高位聖職者・大貴族の会議に州や都市の代表を加えて国政を協議した。これがイギリス議会の起源である。
43. 1295年には(エドワード1世)によって、大貴族・高位聖職者のほか2名ずつ各州騎士・各都市代表が参加し、当時の身分制社会を「模範的」に反映していた身分制議会である(模範議会)が招集された。
44. さらに14世紀半ばには、議会は高位聖職者と大貴族を代表する(上院)と、州と都市を代表する(下院)とにわかれ、法律の制定や新課税には(下院)の証印が必要になった。
45. イギリスでは騎士がはやくから軍事的性格を失って、地方の地主である(郷紳)[(ジェントリ)]となり州を代表して都市の市民と並ぶ下院の勢力となった。

46. フランスの（カペー朝）[987～1328年]のもとでは、はじめ王権は北フランスの一部を所有するだけの極めて弱い勢力で、大諸侯の勢いが強かった。しかし、12世紀末に即位した国王（フィリップ2世）は、ヘンリ2世の子（ジョン王）と戦って国内のイギリス領の大半を奪い、また（ルイ9世）は南フランス諸侯の保護を受けた異端のアルビジョア派[（カタリ派）]を征服して王権を南フランスにも広げた。
47. さらに（フィリップ4世）は、ローマ教皇ボニファティウス8世との争いに際して1302年に聖職者・貴族・平民の代表者が出席する（三部会）を開き、その支持を得て教皇を抑え、王権を更に強化した。
48. フランス国王は毛織物産業として重要な（フランドル地方）を直接支配下に置こうとしたが、この地方に羊毛を輸出して利益をあげていたイギリス国王は、フランスがこの地方に勢力を伸ばすのを阻止しようとした。
49. フランスの（カペー）朝[987～1328年]が断絶して（ヴァロワ朝）[1328～1589年]がたつと、イギリス国王（エドワード3世）は、母がフランスの家系出身であることからフランス王位継承権を主張し、これをきっかけに両国の間に（百年戦争）[（1339～1453年）]が始まった。
50. はじめ長弓兵を駆使したイギリス軍が、1346年の（クレシーの戦い）でフランス軍を破るなど優勢で、エドワード黒太子の活躍によりフランス南西部を奪った。
51. フランス国内はさらに（黒死病）の流行や1358年におきた農民一揆である（ジャックリーの乱）などで荒廃し、（シャルル7世）とときには王国は崩壊寸前の危機にあった。
52. しかしこの時、国を救えとの神の託宣を信じた農民の娘（ジャンヌ＝ダルク）があらわれてフランス軍を率い、オルレアンの包囲を破ってイギリス軍を大敗させた。
53. これによりフランスは勢いを盛り返し、ついに（カレー）を除く全国土からイギリス軍を追い出して、戦争はフランスの勝利に終わった。
54. 戦後のイギリスでは、（ランカスター）家・（ヨーク）家による王位継承の内乱がおこった。これを（バラ戦争）[1455～1485年]という。イギリスの諸侯・騎士は両派に分かれて激しく戦ったが、その結果彼らは没落した。
55. 結局内乱を収めた（ランカスター）家のヘンリが1485年に（ヘンリ7世）として即位し、（テューダー朝）を開いた。
56. この後を継いだヘンリ8世の治世には、17世紀半ばのイギリス革命で王権乱用の象徴として廃止されることになる（星室庁裁判所）も整備された。

57. イベリア半島では8世紀初めにイスラーム教徒が西ゴート王国を滅ぼし、(後ウマイヤ)朝を建てた。
58. 北部のキリスト教徒は、以後800年に渡り(国土回復運動) [(レコンキスタ)]の戦いを続け、12世紀までには半島の北半分がキリスト教圏にはいった。
59. 回復された領土には、(カスティリヤ)・(アラゴン)・(ポルトガル)の3王国が建てられたが、その後(カスティリヤ)王女イサベラと(アラゴン)王子フェルナンドの結婚により、両家は(1479)年に統合されて(スペイン王国)が成立した。
60. 共同統治にあたった2人は、(1492)年イスラーム勢力最後の拠点である(ナスル)朝の(グラナダ)を陥落させて国内統一を果たした。
61. (ポルトガル)は12世紀に(カスティリヤ)から独立したのち、15世紀後半に国王ジョアン2世が貴族の反乱を鎮めて王権を強化した。
62. (神聖ローマ帝国) [ドイツ]では、大諸侯の力が強く、また自由都市もこれらと並ぶ独立勢力となる一方、歴代の皇帝は(イタリア政策)を追求して国内を留守にしがちであったため、帝国の統一はおぼつかなかった。
63. (シュタウフェン)朝[1138~1208年, 1215~1254年]が断絶した後、政治的混乱は事実上、皇帝不在の(大空位時代)のときに頂点に達した。
64. その後も皇帝権力はふるわず、皇帝(カール4世)は1356年に「金印勅書」を發布して、神聖ローマ皇帝選挙の手続きを定め、皇帝選出権を聖俗の七(選帝侯)に認めた。
65. 14世紀以降ドイツでは、帝国ではなく大諸侯の領地であるそれぞれの(領邦)で集権化が進められ、それぞれ地方主権を伸ばしていった。一部では自ら身分制議会を開き、独自に絶対王政への道を歩んでいった。
66. 15世紀以降前半以降、皇帝は(ハプスブルク家)から出されるようになり、帝国統一につとめたが失敗した。国内には大小の諸侯や自由都市など、あわせて300ほどの(領邦)が分立するようになり、統一はますます難しくなった。
67. 一方、かつてスラヴ人やマジャール人が住んでいたエルベ川以東の地には、12世紀から14世紀にかけてドイツ人による大規模な植民(東方植民)が行われ、(ブランデンブルク辺境伯領)やドイツ騎士団領などの諸侯国がつけられた。これらの地方では15世紀以降、西ヨーロッパ向けの穀物生産を大規模に行うようになった
68. スイス地方の農民は、13世紀末に神聖ローマ帝国の(ハプスブルク)家による支配に反抗して独立闘争を始め、今日のスイス連邦の母

体を作った。その後、数度に渡る戦いに勝利を収め、（1499）年には神聖ローマ帝国から事実上独立し、（1648）年の（ウェストファリア条約）で国際的に承認された。

69. イタリアはドイツ同様、中世末期には多数の国・諸侯・都市に分かれていた。南部では両シチリア王国が（シチリア王国）と（ナポリ王国）に分裂し、中部の教皇領を挟んで、北部ではヴェネツィア・フィレンツェ・ジェノヴァ・ミラノなどの都市国家が分立していた。
70. 神聖ローマ皇帝がイタリア政策によって介入してくると、諸都市の内部では教皇党（ゲルフ）と皇帝党（ギベリン）が互いに争い、国内統一をさらに困難なものにした。
71. 北ヨーロッパでは14世紀末にデンマーク女王（マルグレーテ）が主導して、デンマーク・スウェーデン・ノルウェーの北欧3国の間に（カルマル同盟）が結ばれ、2つ以上の独立した国々が1人の君主をいただいて連合する（同君連合）の王国が成立して一大勢力となった。
72. 西ヨーロッパ中世はキリスト教の時代であり、人々の日常生活全般にローマ＝カトリック教会の絶大な権威が行き渡っていた。教会の外に追放される「破門」は極めて重い罰であった。世俗を離れた修行の場である（修道院）も大きな文化的役割を果たした。6世紀に（ベネディクトゥス）がイタリアのモンテ＝カシノに開いた（ベネディクト修道会）は清貧・純血・服従の厳しい戒律を修道士に課した。この修道会の「（祈り、働け）」のモットーは生産労働を奴隷の仕事といていた古典文化以来の労働観を大きく変えた。
73. 12～13世紀は森林を切り開いて耕地を広げる大開墾時代であったが、その先頭に立ったのは（シトー修道会）をはじめとする修道院であった。
74. この他に著名な修道院運動として、13世紀にフランチェスコが始めた（フランチェスコ修道会）、ドミニコが始めた（ドミニコ修道会）などがあった。特にこの2つの修道会は財産を持たず、信者からの施しを拠り所とし清貧を貫いたので（托鉢修道会）と呼ばれる。
75. このような中世にあっては、学問もまたキリスト教の支配下にあった。キリスト教の信仰や教理を研究する（神学）が最高の学問とされ、哲学や自然科学はその下に置かれた。
76. 当時の学者・知識人とは聖職者や修道士であり、彼らは学問の国際的共通語である（ラテン語）を用いていた。

1. ピピンの子（**カール大帝**）[（**シャルルマーニュ**）]は宮廷に（**アルクイン**）ら学者を多数招き、そこからラテン語による文芸復興がおこった。これを（**カロリング＝ルネサンス**）という。アルファベットの小文字が発明されたのはこの時期である。
2. 教会の権威の理論的確立のために、キリスト教神学を論理的に体系化しようとする（**スコラ学**）もこの頃はじめた。この学問は西欧中世に特有の学問で、実在論と唯名論との間の普遍戦争はその中心議論であった。実在論の議論は（**アンセルムス**）、唯名論の議論は（**アベラール**）や（**ウィリアム＝オブ＝オッカム**）によって代表され、特に（**ウィリアム＝オブ＝オッカム**）は近代合理論への基礎を築いた。
3. 十字軍をきっかけに東方との交流が盛んになる12世紀には、ビザンツ帝国やイスラーム圏からもたらされたギリシャの古典がギリシャ語やアラビア語から本格的にラテン語に翻訳されるようになり、それに刺激されて学問や文芸も大いに発展した。これを（**12世紀ルネサンス**）という。
4. キリスト教神学を論理的に体系化しようとする（**スコラ学**）はアリストテレス哲学の影響を受けて壮大な体系となり、（**トマス＝アクィナス**）により大成されて教皇権の理論的支柱となった。
5. イスラーム科学の影響も大きく、実験を重視する（**ロジャー＝ベーコン**）の自然科学はのちの近代科学を準備するものであった。
6. 教会・修道院の附属学校に起源を持つ高等教育機関である（**大学**）が誕生するのも12世紀頃からである。それまで教育と学問の中心は田園地域の修道院にあったが、商業の発達とともに都市にあるこれらの教育機関に移った。これは教会や修道院の付属学校を母体に、教授や学生の連合としてできたのが始まりで、教皇や皇帝の特許状によって自治権を与えられた一種のギルドであった。
7. 主な大学には神学・法学・医学の3学部があり、それらの下に一般教育を行う人文学部がおかれた。最古の大学と言われイタリアの（**ボローニャ大学**）は法学で、（**パリ大学**）は神学でそれぞれ有名であった。
8. イギリスでは、イギリス最古の大学とされる（**オクスフォード大学**）が（**パリ大学**）を模範として創設された。
9. 中世の美術を代表するものは、教会建築とその壁画などである。中世初期にはビザンツ様式の模倣が行われていたが、11世紀には厚い石壁に小さな窓を持つ重厚な（**ロマネスク様式**）が生み出され、なかでも（**ピサ大聖堂**）が有名である。
10. 続く12世紀は建築美術にとっても転換期であった。この頃現れた（**ゴシック様式**）は、頭部のとがった尖頭アーチと空高くそびえる塔を特徴とする。壁を薄くする技術が進歩したため広くなった窓は、美しいステンドグラスで飾られ、外壁や柱には彫刻が施された。天上の神を讃える厚い信仰心を象徴するこの様式の教会は、繁栄する商人の経済力を背景に各都市に建設された。パリの（**ノートルダム大聖堂**）

堂) やフランスの (シャルトル大聖堂)、ドイツの (ケルン大聖堂) はその典型である。

11. 学問にラテン語が用いられたのに対し、口語で表現された中世文学の代表が (騎士道文学) である。騎士は西欧中世の人間の理想像で、武勇と主君への忠誠、神への信仰、女性・弱者の保護などを重視する彼らの道徳が騎士道である。このような騎士の武勲や恋愛をテーマにした文学作品として、(ローランの歌) ・ (ニーベルンゲンの歌) ・ (アーサー王物語) などが知られている。
12. また、主に宮廷を巡り歩いて騎士の恋愛を叙情詩に歌ったのが (吟遊詩人) であり、その最盛期は12世紀であった。
13. 中央アジアのオアシス都市を結ぶ東西の交易路 (オアシスの道) に沿う地域の住民の言語は、多くがインド=イラン系であった。
14. しかし、6世紀にトルコ系の (突厥) が起こり、モンゴル高原と中央アジアを統合する国家を建設すると、しだいにトルコ系の要素が加わるようになった。
15. さらに8世紀半ばに東突厥にかわってモンゴル高原に進出したトルコ系のウイグル人は (ソグド人) の協力を得て、豊かな遊牧国家を建設した。
16. (ソグド人) は、ブハラ・サマルカンドなどのオアシスに住むイラン系の民族で商業活動に優れ、突厥・ウイグルなどの遊牧国家の領内に植民集落を作ったのみならず、隋・唐の領内にも進出して中継貿易を行い、ユーラシアの東西を結ぶ交易ネットワークを構築した。中国の生糸や絹を西方にもたらしたこの「(オアシスの道)」は「(絹の道)」(シルク=ロード) と呼ばれ、それは西方の文物のほか、マニ教・仏教・キリスト教などが東伝するルートともなった。
17. また、ソグド人がもたらしたアラム系文字 (ソグド文字) を基に (ウイグル文字) が作られ、これは後にモンゴル文字や満州文字の原型になった。
18. しかし840年、ウイグルは同じトルコ系民族の (キルギス) の攻撃を受けて滅び、住民は四散した。彼らの一部は南下して唐の西部辺境に移住し、他の一部は西走して天山山脈の東部に至った。このような動きははやくから天山山脈西方に進出していた別のトルコ系集団を圧迫し、彼らをさらに西方へと向かわせるきっかけとなった。
19. ペルシア語で「トルコ人の地域」を意味する (トルキスタン) は、パミール高原を境にして大きく東西に分けられる。
20. 西 (トルキスタン) では、イスラーム化以前にはソグド人を中心に主にゾロアスター教が信仰されていた。
21. これに対して東 (トルキスタン) では、ウイグル人を中心にマニ教や仏教の信仰が盛んであり、彼らはソグディアナを中心に隊商交易で繁栄した (ソグド商人) にかわって13世紀まで内陸アジアの国際交易でも活躍した。
22. 8世紀初め以降、アラブのムスリム軍はイランを越えてトルキスタン西南部に進出し、トルコ系遊牧勢力を退けて、751年には (タラ

ス河畔の戦い) で唐の軍隊を破った。

23. イラン系のイスラーム国家 (サーマーン朝) [875~999] が西トルキスタンに建国されると、この政権のもとでトルコ人のイスラームへの改宗が進んだ。トルコ人のイスラーム化は、10世紀末に最初のトルコ系イスラーム王朝である (カラハン朝) が (サーマーン朝) [875~999] を滅ぼし、東西トルキスタンを合わせたことによってさらに進展した。
24. 唐末から五代十国の時代は東アジアの諸政権が一斉に交代した時期であった。9世紀半ばにウイグルが (キルギス) に滅ぼされたのち、トルコ系民族の西方への移動にともなって東アジア北方世界の主役は、モンゴル高原東南部を本拠とするモンゴル系の (契丹) に移った。
25. 10世紀前半には唐の滅亡を皮切りに、渤海は (契丹) に降伏し、朝鮮では新羅にかわって (王建) が開場を都として (高麗) [918~1392] を建て、雲南では南詔から大理へと政権が交代した。
26. 千年以上に渡り中国の支配を受けてきたベトナムでも10世紀後半に独立国家が作られ、11世紀初めには李氏が (大越国) を建てて支配を固めた。
27. 新羅にかわって建てられた (高麗) では国家の保護のもと、仏教が盛んになり、仏教系典を集成して作られた (大蔵経) は日本の有力者にも熱心に求められた。独自の風格をもつ高麗青磁が作られたのもこの時期である。
28. 日本では8世紀末に都が平安京に移って貴族政治が行われた。9世紀末には唐末の中国の動乱が激しくなったこともあって (894) 年を最後に遣唐使が廃止された。
29. 文化面では、中国文化の基礎の上に日本風の特徴が加味され、仮名文字や大和絵に代表される (国風文化) が栄えた。
30. この時期、唐の時代後に中国を新たに統一した宋の時代には朝貢関係は衰えたが、東アジア諸地域間の民間交易はかえって活発となり、銅銭や陶磁器などの交易によって (広州) ・ (泉州) ・ (明州) などの港が繁栄を見せた。これらの港には (市舶司) が置かれて、海上交易を管理した。
31. 唐滅亡後の東アジアの歴史を大きく左右していったのは、北方民族の動向である。遼河上流で半農半牧の生活を営んでいた、遼王朝の (契丹) は、ウイグルの衰退とともに勢力を強めた。この国は10世紀初めには東モンゴルを中心に (耶律阿保機) が強力な国家を作り、東は渤海を滅ぼし、西はモンゴル高原を抑えた。
32. その後この国は五代十国の後晋の建国を助けた代償として、河北・山西の北部 (燕雲十六州) を領土に加えた。
33. 中国に宋が成立した後も、この国は華北に侵入して宋を脅かし、1004年には宋が毎年多額の銀や絹を送ることを条件に和議を結んだ。これを (澶淵の盟) という。

34. この国は北方民族として本拠地を保ちながら中国内地をも支配した最初の国家であり、その領内には狩猟・遊牧・農耕などさまざまな生業を持つ諸民族がいた。したがって官制においても、部族性に基づく北面官、州県制に基づく南面官といった区別を設けて、性格の異なる社会をまとめていこうとした。これを（二重統治体制）という。
35. この国は国名に属名である（契丹）を用いる時期と、中国風の遼[916～1125年]という名を用いる時期とがあった。
36. この国ははじめウイグル文化の影響を受けたが、やがて中国文化を吸収し、仏教を受け入れた。建国者の（耶律阿保機）らが作ったとされる民族文字（契丹文字）は、ウイグル文字と漢字との双方の影響を受けている。
37. 宋の西北辺境の陝西・甘粛方面には、チベット系の（タングート）がおり、近隣の吐蕃やウイグルを破り、やがて独立して（李元昊）が皇帝を称し、国号を大夏[一般的には（西夏）][1038～1227年]とした。
38. この国は中国と西方を結ぶ通商路の要を握り、しばしば宋に侵入した。仏教が盛んであり、漢字の構造にならった（西夏文字）で多くの仏典が翻訳された。
39. 遼の勢力範囲の東部、中国東北地方にはツングース系の民族である（女真）[（女直）]がおり、遼の支配を受けていた。やがて12世紀初めに（完顔阿骨打）が独立して国名を（金）[1115～1234年]とした。
40. 宋は新興のこの国と結んで遼を攻め、遼はその攻撃により（1125）年に滅亡した。
41. 遼の滅亡時に、遼の皇族（耶律大石）は中央アジアに逃れて（西遼）[1132～1211年]を建て、遼の文化を西方で維持した。
42. 遼の滅亡後、宋と（金）[1115～1234年]は領土をめぐる争い、（金）は華北に侵入して宋の首都開封を占領した。
43. 開封を占領したこの国は、部族性に基づく（猛安）・（謀克）という元来の軍事・社会組織を維持する一方、華北では宋の州県制を継承した。
44. この国でも民族独自の（女真文字）が作られた。
45. 五代十国の後周の将軍であった（趙匡胤）は、960年に（宋）[（北宋）][960～1127年]を建国した。
46. 二代目皇帝の（太宗）は各地に残っていた地方政権を平定し、979年に全国統一を完成した。
47. この国ではこれまでの藩鎮勢力の乱立や武断政治の風潮を抑えるために、武力に頼らず儀礼・法制・教化によって社会の安定を維持しようとする（文治主義）をとり、節度使に欠員が出るたびに文官をあてて兵力や財力を奪い、皇帝の親衛軍を強化するなど、中央集権の確立に務めた。
48. 隋唐時代に行われていた（科挙）がこの時代にはほぼ唯一の官吏登用試験となった。皇帝自ら試験官となって宮中で行う最終試験の（殿

試)はこの時代に始まり、君主と官僚との間の直接の繋がりが強調された。

49. この試験を受験する道は男性であれば階層を問わず広く開かれていたが、儒学・詩文を学んで狭き門を突破できるのは、おもに経済力のある新興地主層の人々であった。貴族に変わって新しく勢力を伸ばしたこのような人々を(形勢戸)といい、官僚を出した家を(官戸)という。
50. 960年に建国された(宋/北宋)では、北方民族の圧迫を受けていたため防衛費の増大による国家財政の窮乏がつねに大きな問題であり、その対策が国内の政治抗争の焦点となった。11世紀後半の第6代皇帝神宗は、(王安石)を宰相に起用して、政治の根本的改革を図った。
51. 一般に(新法)と呼ばれる彼の改革は、
- 植え付け時の貧農への金銭や穀物などの低利貸し付けである(青苗)
 - 物資流通の円滑化と物価安定策の(均輸)
 - 中小商人への低利貸し付けである(市易)
 - 力役のかわりに免役銭を出させて希望者を雇用する方法の(募役)
 - 民兵の訓練や慰安維持のための農村組織である(保甲)
52. 地主や大商人の利益を抑えて政府の収入増加をめざすこの急激な改革に対しては反発する官僚たちも多く、主導した宰相(王安石)の引退後、賛成派の(新法党)と反対派の(旧法党)との対立が長く続いて、国力を弱めることになった。
53. 12世紀遼を滅ぼした(金)[1115~1234年]は続いて華北を占領し、960年に建国された(宋/北宋)の首都の開封を陥落させて上皇の徽宗と皇帝の欽宗を捕らえた。この事件を(靖康の変)[1126~1127年]という。
54. そこで皇帝の弟の(高宗)が江南に逃れて帝位につき、(南宋)[1127~1276年]を建国した。この国は臨安を首都とした。
55. その後政治抗争の焦点は開封を占領した(金)に対する政策へと移り、和平派(秦檜)らと主戦派(岳飛)らとの対立の末、結局和平派が勝利をおさめて和平を結んだ。
56. 唐末以降、商業に対する規制が緩み、都市の中で商業活動が活発に行われただけでなく、城壁の外や交通の要地に小規模な定期市である(草市)や商工業活動の活発化でうまれた小都市の(鎮)などと呼ばれる商業の中心地が発生した。
57. 商品流通はますます大規模になり、商人の同業組織(行)、手工業者の同業組織(作)などの同業組合もうまれ、専売の塩・茶のほか、

米・絹などを扱う大商人が活躍した。

58. 貨幣経済も発展し、大量に発行された主貨幣の（銅銭）のほか金・銀も地金のまま用いられ、唐代後半から宋代の送銭手段である飛銭として発生した、北宋で発行された世界最古の紙幣（交子）、南宋で発行された紙幣（会子）が紙幣として使われるようになった。
59. 宋の南渡以来、江南の開発が進み、中国経済の中心は長安を中心とする西北地域から、東南の江蘇・浙江・福建などの地域へと移動した。水はけの悪い低湿地が多かった長江下流地域でも、湿地帯の土地を堤防で囲み干拓して作られた囲田などが造成されて、稲田の面積が急速に増大し、「（蘇湖[江浙]熟すれば天下足る）」のことわざが生まれた。江蘇・浙江では日照りに強い早稲種の（占城稻）が導入され、収穫の安定化が図られた。
60. また、陶磁器や（茶）、絹などの特産品の集中生産が各地でおこり、それらを結びつける海運・河運がめざましく発達した。

1. 唐代を代表する陶磁器の唐三彩と、宋代を代表する（白磁）・（青磁）を比べてみると、色彩豊かで具象的な唐三彩に対し、宋の（白磁）・（青磁）はすっきりとした理知的な美しさを持っている。それは外面的な装飾をそぎ落とし、物事の本質に直接迫ろうとする宋代文化の特徴を表している。
2. このような変化は、学問・思想から美術までさまざまな分野に見られるが、唐代後期以来のこの文化革新の流れを担ったのは、貴族に代わり官界に進出した（士大夫）という儒学の教養を身につけた知識層であった。
3. 儒学では経典の中の一つ一つの字句を解釈する訓詁学にかわって、経典全体を哲学的に読み込んで宇宙万物の正しい本質[理]にいたろうとする（宋学）がおこった。これは北宋の（周敦頤）に始まり、南宋の（朱熹）[（朱子）]によって大成されたので、別名を（朱子学）という。
4. この学問はその後長く儒学の正統とされ、日本や朝鮮の思想に大きな影響を与えた。経典のなかには、特に「大学」「中庸」「論語」「孟子」の（四書）が重んじられるようになった。
5. 宋代の儒学の発展は、儒学の教養を身につけた知識層である（士大夫）の社会秩序を正そうとする実践的意欲とも結びつき、華夷・君臣・父子などの区別を重視する（大義名分論）が盛んになった。
6. 宋代の歴史学を代表する司馬光の（資治通鑑）は、君主の統治に役立つことを目的に書かれた（編年）体の通史である。
7. 唐末以来の古文復興の動きを受け継ぎ、宋代にも唐宋八大家の一人で「新唐書」や「新五代史」を編纂した（欧陽脩）や、王安石の新法に反対した唐宋八大家の一人（蘇軾）らの名文家が出た。
8. 美術では、宮廷画家を中心とし、写実性・伝統的手法・鑑賞的様式を重んじた（院体画）と並んで、非職業画家による（文人画）も盛んになった。
9. 都市商業の繁栄を背景に庶民文化も発展し、小説・雑劇や、音曲に合わせて歌う（詞）が盛んに作られた。
10. 宗教では（禅宗）が官僚層によって支持され、また金の統治する華北では、儒・仏・道を調和した（全真教）が王重陽によって開かれた。
11. 唐代頃に始まった木の板に文字や絵を刻んで行う（木版印刷）は宋代に普及し、また活字印刷術も発明された。
12. 同じ頃にすすんだ（羅針盤）や（火薬）の実用化の技術は、イスラーム世界を通じてヨーロッパへ伝わった。
13. モンゴル高原では、9世紀中頃にウイグルが滅亡した後は統一勢力が現れず、諸部族の多くは遼王朝の（契丹）に服属した。

14. 12世紀初めに遼が滅びると、モンゴル高原の諸部族の間で統合の動きは強まった。やがて高原東部のモンゴル部族のなかで勢力を伸ばした（テムジン）は、1206年の（クリルタイ）[モンゴル語で「集会」の意]でハン位につき、（チンギス＝ハン）となりモンゴル系・トルコ系の諸部族を統一して（大モンゴル国）を形成した。
15. 彼は軍事・行政組織として、全遊牧民を1000戸単位に編成した（千戸制）を敷いた。
16. モンゴル軍は1218年に西遼を奪った（ナイマン）を、1220年には西トルキスタン・イラン方面の新興国家（ホラズム＝シャー朝）を倒して西北インドに侵入し、また1227年に（西夏）を滅ぼした。
17. 建国者（テムジン／チンギス＝ハン）の死後即位した第2代皇帝（オゴタイ）は1234年に（金）を滅ぼし華北を領有するとともに、モンゴル高原の（カラコルム）に都を建設した。
18. ついでモンゴル軍のヨーロッパ方面司令官であった（バトゥ）率いる軍は西北ユーラシアの草原を制圧して東欧に侵入し、1241年（ワールシュタットの戦い）でドイツ・ポーランド連合軍を破ってヨーロッパ世界を脅かした。
19. 一方、西アジアでは1258年に（フラグ）がバグダードを占領して（アッバース）朝を滅ぼした。
20. その結果、13世紀半ばまでにモンゴルの支配は、東は中国北部から西はロシア・イランにいたる広大な領域に広がった。この大領土の中には、
 - a. イラン・イラク方面の（イル＝ハン）国[1258～1353年][建国者：（フラグ）]
 - b. 南ロシアの（キプチャク＝ハン）国[1243～1502年][建国者：（バトゥ）]
 - c. 中央アジアの（チャガタイ＝ハン）国[1227～14世紀後半][建国者：（チャガタイ）]など、初代皇帝（テムジン／チンギス＝ハン）の子孫たちが治める地方政権が作られ、それらが大ハンのもとにゆるやかに連合するという形を取った。しかしそれら諸勢力の間では大ハン位をめぐる相続争いも起こった。第2代皇帝の孫（ハイドゥ）とフビライの長期に渡る争いである（ハイドゥの乱）はその例である。
21. 相続争いを経て即位した第5代皇帝（フビライ）は自分の勢力の強い東方に支配の重心を移し、（大都）を都に定め、1271年に国名を中国風の（元）と称し南宋を滅ぼして中国全土を支配した。
22. 彼はモンゴル高原と中国を領有したほか、チベットや（高麗）を属国とした。さらに日本・（陳）朝のベトナム・チャンパー・（パガン）朝のビルマ・（マジャパヒト）王国のジャワにも遠征軍を送った。
23. この国による日本への侵攻は2度あり、1274年の1度目を（文永の役）、1281年の2度目を（弘安の役）といいまとめて（元寇）

という。

24. この国は中国の統治に際して、中国の伝統的な官僚制度を採用したが、実質的な政策決定は、中央政府の首脳部を独占するモンゴル人によって行われた。また、(色目人) と呼ばれる中央アジア・西アジア出身の人々が財務官僚として重用された。
25. この国では金に支配されていた人々を(漢人)、南宋の支配下にあった人々を(南人) と呼んだ。
26. この国の時代には中国もモンゴル帝国の広域的な交易網の中に組み込まれ、長距離商業が活発となった。モンゴル帝国は初期から交通路の安全を重視し、その整備や治安の確保に努めた。幹線道路に沿って駅を設け、駅に周辺の住民から馬・食料などを提供させた(駅伝制) [モンゴル語: (ジャムチ)] を施行した。その結果主にムスリム商人の隊商によって東アジアからヨーロッパにいたる陸路交易が盛んになった。
27. 海上交易も宋代に続いて発展し、(広州) ・ (泉州) ・ (杭州) などの港市が繁栄した。
28. 江南と首都(大都) を結ぶ南北の交通としては、隋代に開削された(大運河) が補修され新運河が開かれた他、長江下流から山東半島を回って首都へいたる(海運) が発達した。
29. 貨幣は銅銭・金・銀が用いられていたが、やがて(交鈔) が政府から発行された。この紙幣は多額の取引や輸送に便利であったため、この国の主要な通貨となった。
30. この国の政府は支配下の地域の社会や文化には概して放任的な態度を取ったので、大土地所有も宋代以来引き続き発展し、また都市の庶民文化も栄えた。中でも戯曲は(元曲) として中国文学史上に重要な地位を占め、
 - a. 宰相の娘と書生との恋愛を描いた(西廂記)
 - b. 都で栄華な生活をおくる夫と、故郷で貞節な生活をおくる妻とを対比し当時の士大夫階級を批判した(琵琶記)
 - c. 義賊108人の武勇を題材とした口語長編小説(水滸伝)
 - d. 玄奘のインド求法を題材とした(西遊記)がその代表作として知られる。
31. モンゴル帝国の成立により、東西の交通路が整備されたため、東西文化の交流が盛んになった。当時十字軍を起こしていた西ヨーロッパは、イスラーム地域を征服したモンゴル帝国に関心を持ち、ローマ教皇インノケンティウス4世は(プラノ=カルピニ) を、フランス王ルイ9世は(ルブルック) を使節としてモンゴル高原へ送った。
32. また、イタリアの商人(マルコ=ポーロ) は首都の(大都) へ来てこの国に仕え、その見聞をまとめた(世界の記述) [東方見聞録] はヨ

ヨーロッパで反響を呼んだ。

33. この国では（色目人）と呼ばれる中央アジア・西アジア出身の人々にイスラーム教徒が多かったことから、中国にもイスラーム教が次第に広まった。イスラームの天文学を取り入れて（郭守敬）が作った授時暦はのちに日本にも取り入れられた。[江戸時代の（貞享暦）]
34. また、モンゴル帝国のイラン・イラク方面地方政権（イル＝ハン国）に中国絵画が伝えられ、それがイランで発達した細密画（ミニアチュール）に大きな影響を与えた。
35. モンゴル帝国のイラン・イラク方面地方政権（イル＝ハン国）はその初期にネストリウス派キリスト教を保護し、ヨーロッパのキリスト教諸国やローマ教皇庁と使節を交換していたが、これがきっかけとなって13世紀末には（モンテ＝コルヴィノ）が派遣された。中国でカトリックは布教されたのはこれが初めてであった。
36. モンゴル支配下の広大な地域では、漢語・チベット語・トルコ語・ペルシア語・ロシア語・ラテン語など多様な言語が用いられていた。モンゴル語を表記する（パスパ文字）は、フビライの師であったチベット仏教の教主の（パスパ）が作ったものであるが、次第に廃れてウイグル文字でモンゴル語を表記することが一般的となった。
37. 14世紀に入るとユーラシア全域に天災が続き、モンゴル支配下の各地では内紛により政権が動揺した。中国地方では放漫財政や内紛で統治がゆらぎ、交鈔の乱発や専売制度の強化が飢饉と相まって民衆を苦しめ、白蓮教などの宗教結社がおこした農民反乱である（紅巾の乱）を始めとして反乱がおこり、このモンゴル帝国[中国式名：（元）]は明軍に首都（大都）を奪われて1368年に滅亡し、その残存勢力はモンゴル高原へ退き北元を建てた。
38. 14世紀には世界各地で自然災害や疫病が多発したが、東アジアはこの時期、飢饉が続き、モンゴル帝国[中国式名：（元）]の支配力が衰えて混乱の時代を迎えた。中国では白蓮教徒による（紅巾の乱）をきっかけに群雄が蜂起した。
39. 白蓮教は仏教的要素の強い民間の宗教結社で、宋代に始まり、モンゴル帝国の末期の頃には（弥勒仏）が救世主としてこの世に現れるという下生信仰と結びついて勢力を拡大した。
40. 反乱の中で頭角を現した貧農出身の（朱元璋）は儒学の素養を持つ知識人の協力を得ながら、長江下流域の穀倉地帯を抑え、1368年に南京で皇帝の位につき（洪武帝）となり、（明）[1368～1644年]を建国した。その後都を（南京）とし、中国を統一した。
41. この時期日本では鎌倉幕府が倒れて南北朝が対立し、政治の混乱で海上の秩序もみだれ、海賊や私貿易の集団である（倭寇）の活動が活発になった。

42. この時期の高麗では（李成桂）が高麗を倒して1392年に王位につき、国号を（朝鮮）と定めて漢城[現ソウル]に都を置いた。
43. 1368年に皇帝位についた（洪武帝）は反乱による混乱を抑えるため、皇帝のもとに権力を集中するとともに、農村の末端にまで統制を及ぼして秩序の再建と民衆生活の安定を図った。まず、モンゴル帝国時代に政治の中樞を握っていた中書省とその長官の（丞相）を廃止し、唐代に体系化された中央行政執行機関の（六部）を皇帝に直属させて万事を皇帝が直接決定する体制を作った。
44. 一方、農村では全国的人口調査を基礎に（里甲制）を定め、租税台帳[（賦役黄冊）]や土地台帳[（魚鱗図冊）]を整備した他、民衆教化のために6箇条の教訓（六諭）を定めた。
45. （里甲制）とは、農家110戸で1里を構成し、富裕な10戸を里長戸、残りの100戸を10甲に分けて甲首戸を置き、10年に一巡する輪番で里甲内の徴税事務や治安維持にあたらせた。また、里内の人望ある長老を（里老人）とし、里内の裁判や教化にあたらせた。
46. 官制・法制の面では朱子学を官学として科挙を整備し、唐の律・令にならって（明律）・（明令）を制定した。
47. 後に明の第3代皇帝（永楽帝）の時代には、科挙での経典解釈の正しい基準を示すため（四書大全）や（五経大全）が編纂され、また古今の図書を集めてその内容を事項別に分類整理した（永楽大典）という百科事典も作られた。
48. 軍制の面では、一般の民戸と別に軍戸の戸籍を設けて、（衛所制）を編成した。これは軍戸の112人で百戸所、10百戸所で千戸所、5千戸所で1衛を編成するものであった。
49. 東南沿海では（海禁政策）をとって民間人の海上交易を許さず、政府の管理する朝貢貿易を推進した。
50. 1368年に皇帝位についた（洪武帝）は自分の子供達を王として北方の辺境に配置し、対モンゴル防衛にあたらせた。その諸王のうち北平[現：北京]に本拠を置いた（燕王）は父である初代皇帝の死後、位を継いだ第2代皇帝（建文帝）が諸王勢力の削減を図るとこれに対抗して挙兵し（靖難の役）[1399～1402年]を引き起こした。その後南京を占領し、代わって第3代皇帝（永楽帝）として帝位についた。
51. 第3代皇帝（永楽帝）は首都を（北京）に移して積極的な対外政策を取り、北方では自ら軍を率いてモンゴル高原へ遠征し、南ではベトナムを一時占領した。またイスラーム教徒の宦官（鄭和）に命じ、艦隊を率いてインド洋からアフリカ沿岸まで遠征させた。艦隊は（7）回派遣され、南海諸国のこの国への朝貢を勧誘した。
52. この国を中心とする（朝貢貿易）は、東アジアからインド洋にいたる広い範囲で活発に行われた。特に15世紀初めに（中山王）によつ

て統一された（琉球）[現在の沖縄]は、この国との貿易で得た物資を用いて東シナ海と南シナ海とを結ぶ貿易の要となった。

53. 14世紀末頃マレー半島南西部に成立した（マラッカ王国）も、（鄭和）が遠征艦隊の基地としたことで急成長し、インド洋と東南アジアを中継する位置を利用して、ジャワの（マジヤパヒト王国）にかわる東南アジア最大の貿易拠点となった。
54. 朝鮮は明の重要な朝貢国の一つであり、科挙の整備や（朱子学）の導入など、明の制度を取り入れた改革を行った。15世紀前半の朝鮮第4代国王（世宗）の時には（金属活字）による出版や（訓民正音）[ハングル]の制定など、特色ある文化事業が盛んに行われた。
55. 日本でも遣唐使停止以来途絶えていた中国への朝貢が明初に復活し、室町幕府3代将軍足利義満は明から「日本国王」に封ぜられ、明との（勘合）貿易を始めた。
56. 明軍を撃退して独立したベトナムの（黎朝）も明と朝貢関係を結び、明の制度を取り入れ朝鮮と同じ（朱子）学を振興して支配を固めた。
57. 北方のモンゴル諸部族は明との交易を求めていたが、朝貢制度による回数や規模の制限を不満としてしばしば中国へ侵入した。15世紀半ばに西北モンゴルの（オイラト／瓦剌）がエセン＝ハンの元に強大となり、明の正統帝を（土木堡）で捕らえられる事件が起こった。これを（土木の変）という。
58. この頃から明は対外的に守勢に転じ、北方の（長城）を改修してモンゴルの侵入に備えた。有名な（万里の長城）は明代後期に修築されたものが現在残っている。
59. モンゴルは北元が滅んだのち、東部のモンゴル諸部族と西部からシベリア南部の諸部族とが勢力を競った。明は前者を（韃靼）[別名：（タタール）]、後者を（瓦剌）[別名：（オイラト）]と呼んだ。
60. 16世紀になると、大航海時代の世界的な商業の活発化が明を中心とする朝貢体制を動揺させた。東南アジアでは胡椒など香辛料の輸出が大幅に伸び、貿易の利益をめぐってヨーロッパ勢力や、アチェ王国、ビルマの（タウングー／トゥングー）朝などの新興の交易国家が争いを繰り広げた。これらの新興国家は明の権威に頼らず自ら軍事力を強化して、勢力を拡大しようとした。
61. 中国の周辺でも16世紀には国際商業は繁栄し、それにともなって、明の貿易統制政策は揺らいでいった。特に16世紀半ばには北方のモンゴルや、東南海岸の海賊・私貿易集団（倭寇）の活動が激化して明を苦しめた。これを（北虜南倭）という。
62. この当時モンゴルを支配していた（アルタン＝ハン）は20年に渡り明の北辺に侵入を繰り返し、1550年には一時北京を包囲するなど明を苦しめたが、1570年に和議を結び朝貢関係に入った。
63. また、海賊・私貿易集団（倭寇）には2種類あり、14世紀を中心に活動した日本人を主体とする方を（前期倭寇）、16世紀中頃を中心に活動した中国人を主体とする方を（後期倭寇）という。

64. 明は従来の貿易統制政策を続けることができなくなり、モンゴルと講和して交易場を設けるとともに、海禁を緩めて民間人の海外貿易を許した。その結果、当時急速に生産を伸ばした日本の（銀）、アメリカ大陸のスペイン植民地[メキシコ]で採掘された（銀）が大量に中国に流入した。

1. 国際商業の活発化は、中国国内の商工業の発展を促した。長江下流域では綿織物や生糸に代表される家内制手工業が盛んになり、原料となる綿花や養蚕に必要な桑の栽培が普及した。このため、明末には長江下流域の湖広[現在の湖北・湖南省]が新たな穀倉地帯となり、**（湖広熟すれば天下足る）**と称せられた。
2. また、江西省の**（景德鎮）**に代表される陶磁器も生産をのぼした。こういった、**（生糸）**や**（陶磁器）**は日本やアメリカ大陸・ヨーロッパに輸出される代表的な国際商品であった。
3. 商業・手工業の発展にともない、**（山西商人）**や**（徽州商人／新安商人）**など明の政府と結びついた特権商人が全国的に活動して巨大な富を築いた。
4. 大きな都市には、同郷出身者や同業者の互助や親睦をはかるための**（会館）**や**（公所）**も作られた。
5. 税の納入も銀で行われるようになり、16世紀には各種の税や瑤役を銀に一本化して納入する**（一条鞭法）**の改革が実施された。
6. 貨幣経済の発展とともに都市には商人や、郷里の名士として勢力を持った**（郷紳）**など富裕な人々が集まり、庭園の建設や骨董の収集など文化生活を楽しんだ。
7. 木版印刷による書物の出版も急増し、科挙の参考書や小説、商業・技術関係の実用書などが多数出版されて書物の購買層は広がった。**（三国志演義）**・**（水滸伝）**・**（西遊記）**・**（金瓶梅）**などの小説が多くの読者を獲得し、庶民向けの講談や劇も都市の盛り場や農村で盛んに演じられた。
8. 儒学の中では、16世紀初めに**（王守仁／王陽明）**が無学な庶民や子供でも本来その心の中に真正の道徳を持っている[心即理]と主張し、外面的な知識や修養に頼る当時の朱子学の傾向を批判した。
9. ありのままの善良な心を発揮し[到良知]、その心そのままに実践を行う**（知行合一）**を説いた**（陽明学）**は学者のみならず、庶民の間にも広い支持を得た。
10. 明末文化の一つの特色は、科学技術への関心の高まりである。
 - a. 医学解説書の**（本草綱目）**[李時珍著]
 - b. 農業書の**（農政全書）**[徐光啓編]
 - c. 産業技術書の**（天工開物）**[宋応星著]などの科学技術書がつくられ、日本など東アジア諸国にも影響を与えた。

11. 当時の科学技術の発展には、16世紀半ば以降東アジアに來航したキリスト教宣教師の活動も重要な役割を果たした。日本でのキリスト教普及の基礎を築いたイエズス会宣教師の（フランシスコ＝ザビエル）は中国布教を目指したが実現せず、その後（マテオ＝リッチ）らが16世紀末に中国に入って布教を行った。彼が作成した世界地図の（坤輿万国全図）は中国に新しい地理知識を広め、日本などにも伝えられた。
12. 西洋暦法を元にアダム＝シャルが完成させた（崇禎暦書）や「ユークリッド幾何学」の翻訳である（幾何原本）なども刊行された。
13. 貿易の活発化や、新式の火器のヨーロッパからの伝来は、東アジアの各地で新興勢力の成長を促した。日本では、織田信長や（豊臣秀吉）が南蛮貿易の利益を得つつ、新式の鉄砲を用いて日本統一を進めた。特にこの（豊臣秀吉）は日本統一後にさらなる領土の拡大を目指して朝鮮に進攻した。これを日本では文禄・慶長の役といい、朝鮮では（壬辰・丁酉倭乱）という。しかしこれは明の援軍や朝鮮の（李舜臣）が率いた水軍、民間の義兵などの抵抗を受け失敗した。
14. その後天下人となり江戸に幕府を開いた（徳川家康）は（朱印船）貿易を促進し、日本人は東南アジアの各地に進出して（日本町）を作った。しかし幕府は統治を強めるため、1630年代に日本人の海外渡航や、ポルトガル人の來航を禁じた。所謂（鎖国）である。
15. 中国の東北地方には、農牧・狩猟生活を営むツングース系の（女真族／女直族／満州族）が住み、明の支配を受けていたが、この地方でも薬用人参や毛皮の交易が盛んになり、その利益を巡って部族内の争いが激化した。その中で16世紀末、（ヌルハチ）が自立して諸部族を従え、1616年に建国して国号をアイシン[満州語で（金）]と定めた。
16. この人物は血縁・地縁集団を再編成した軍事・行政組織で、八つの軍団がそれぞれ色の違う旗を標識とした（八旗）の編成や満州文字の制作など独自の国家建設を進め、明に対抗した。
17. アイシンの第二代皇帝（太宗／ホンタイジ）は内モンゴルの（チャハル）を従え、支配下の満州人・漢人・モンゴル人に推されて1636年に皇帝と称し、国名を（清）[1616－1912年]と改めた。
18. このように16世紀後半から17世紀前半には、北虜南倭に続いて、朝鮮半島や中国東北地方でも戦争が広がり、明は軍事費の増加のために財政難に陥った。明の第14代目皇帝万曆帝の時代初期に、（張居正）が行った中央集権的な財政の立て直しはかえって地方出身の官僚たちの反感を招き、その後江蘇省無錫の東林書院の顧憲成らが中心となって政府を批判した（東林）派とその抵抗組織（非東林）派が党争を引き起こし、政治も混乱した。
19. 重税と飢饉のために各地で反乱が起き、明は1644年に（李自成）の反乱軍に北京を占領されて滅亡した。

20. 明が滅亡すると、長城の東端（**山海関**）で進軍の侵入を防いでいた明の武将（**呉三桂**）は清軍に降伏し、清軍は長城内に入って北京を占領した。
21. 盛京から北京に遷都した清は中国全土へと支配を広げ、南方の雲南・広東・福建に3人の漢人武将を置いて藩王とした。これを（**三藩**）という。
22. 一方、東南沿海で武装貿易船団を率いて反清活動を行っていた（**鄭成功**）とその一族はオランダ人を駆逐して1661年に（**台湾**）を占領し、これを拠点に清に抵抗した。この人物は、福建地方の軍事・貿易の実力者（**鄭芝龍**）を父に持ち、日本人を母として平戸に生まれた。明の滅亡後、明の遺王を助けて活動し、明朝皇族の姓である朱姓を賜ったので（**国姓爺**）とも呼ばれた。
23. 清朝が雲南・広東・福建に置かれた（**三藩**）の撤廃をはかると、その地の藩王らは反乱を起こした。これを（**三藩の乱**）[1673-1681年]という。
24. これらの反対勢力に対し、第4代目皇帝（**康熙帝**）は厳しい海禁政策で鄭氏の財源をたち、1683年に鄭氏を降伏させて台湾を領土とするとともに、1673年に起こった（**三藩の乱**）を鎮圧して清朝統治の基礎を固めた。
25. 清朝の皇帝は、中国歴代王朝の伝統を継ぐ皇帝であると同時に、満州人やモンゴル人にとってはモンゴル帝国のハンの伝統を継ぐ北方遊牧社会の君主でもあった。清朝の前半にはロシアとネルチンスク条約を結んだ（**康熙帝**）、キャフタ条約を結んだ（**雍正帝**）、清の最大版図を築いた（**乾隆帝**）と有能な皇帝が続き、彼らは2つの面を兼ね備えて独裁的な権力を振るった。彼らは、平常は北京の（**紫禁城**）で政務をとった。
26. 清朝は中国統治にあたって、科挙・管制などにおいては明の制度をほぼ受け継ぎ、儒学を振興して中国王朝の伝統を守る姿勢を示した。一方で、軍制では漢人で組織する（**緑営**）の他に、満州八旗・モンゴル八旗・漢八旗の3軍で編成される軍[八旗]を各地に駐屯させた。
27. また、中央官制の要職は満・漢同数とし、第5代皇帝（**雍正帝**）の時には皇帝直属の諮問機関（**軍機処**）を設置するなど、独自の制度も創設した。
28. 清朝は4代皇帝の（**康熙帝**）時代には（**康熙字典**）・（**古今圖書集成**）、第6代皇帝の（**乾隆帝**）時代には（**四庫全書**）など大規模な編纂事業をおこして学者を優遇したが、他方で反清的な言論に対しては（**文字の獄**）で厳しく弾圧した。
29. 漢人男性に対しては頭髪を剃り、後頭部の一部をおさげ状に結ぶ（**辮髪**）を強制した。
30. 17世紀末以降、清朝の支配領域は大きく広がった。第4代皇帝（**康熙帝**）の時代には当時黒竜江[アムール川]沿いに南進していたロシアと戦い、（**1689**）年にネルチンスク条約を結んで国境を定めた。

31. また、自ら軍を率いてモンゴル方面に遠征し、（**ジェンガル**）を破って外モンゴルを支配するとともに、チベットにも勢力を伸ばした。
32. 第6代皇帝（**乾隆帝**）の時代には、タリム盆地を支配していた（**ジュンガル**）を滅ぼして東トルキスタン全域を支配し、これを（**新疆**）と称した。18世紀半ばの清朝の最大領域が、ほぼ今日の中国の領土の原型となっている。
33. 清朝はその広大な領土をすべて直接統治したわけではなく、直轄領とされたのは（**中国内地**）・（**中国東北地方**）・（**台湾**）だった。モンゴル・青海・チベット・（**新疆**）は藩部として、（**理藩院**）に統括された。
34. チベットでは14世紀末から15世紀初めに（**ツォンカパ**）が開いた黄帽派チベット仏教の教主である（**ダライ=ラマ**）らが現地の支配者として存続し、清朝の派遣する監督官とともに支配した。
35. 16世紀以降の朝鮮では、科挙制度の中で（**両班**）と言われる有力な家柄が官僚の大部分を占めるようになった。朝鮮は明の滅亡に先立ち、清朝の侵攻を受けて服属し、朝貢態勢に入らざるを得なかったが、清朝に対する抵抗意識は強く、朝鮮こそ明を継ぐ正当な中国文化の継承者であるという（**小中華**）の意識があった。
36. 琉球は17世紀初めに薩摩の大名（**島津**）氏の攻撃を受けてこれに服属したが、中国への朝貢は続き、日本と中国とに（**両属**）する状態となった。その中で日本・中国双方の要素を含む琉球独自の文化が（**首里城**）を中心に形成された。
37. 清朝の支配が安定すると、清朝は海禁を解除し、中国商人のジャンク船による交易やヨーロッパ船の来航を通じて海上貿易は順調に発展した。東南アジアとの貿易を行う福建や広東の一部の人々は清朝の禁令を犯して東南アジアに住み着き、農村と国際市場を結ぶ商業網を握って経済力を伸ばし、のちの（**南洋華僑**）のもととなった。
38. 18世紀半ばになると第6代皇帝（**乾隆帝**）はヨーロッパ船の来航を（**広州**）1港に制限し、（**公行**）という特定の商人組合に貿易を管理させた。
39. 税制では、18世紀初めの（**地丁銀制**）により丁税[人頭税]が土地税に繰り込まれて制度の簡略化が図られた。
40. 学問では、明清交替の混乱を経験した、「日知録」の著者（**顧炎武**）など清初の学者は、社会秩序を回復するには現実を離れた空論でなく、事実に基づく実証的な研究が必要だと主張した。実証を重視するその主張は清代中期の学者に受け継がれ、儒学の経典の校訂や言語学的研究を精密に行う（**考証学**）が発展し、「二十二史考異」の著者（**錢大昕**）などの学者が出た。他にも、「明夷待訪録」の著者（**黄宗羲**）も有名である。
41. 上流社会の栄華没落を描いた（**紅樓夢**）や、官僚の腐敗や墮落を描いた（**樹林外史**）など清代中期の長編小説も細密な筆致で上流階級や士大夫たちの生活を描写している。

42. 清朝はイエズス会の宣教師を技術者として重用した。
- 暦の改定を行ったドイツ出身の（**アダム＝シャル**／**湯若望**）
 - ベルギー出身で清の順治帝に招かれた（**フェル＝ビースト**／**南懷仁**）
 - 中国全図の（**皇輿全覽図**）作成に協力した（**ブーヴェ**／**白進**）
 - ヨーロッパの画法を紹介した（**円明園**）の設計に加わった（**カスティリオーネ**／**郎世寧**）はその例である。
43. イエズス会宣教師たちは布教にあたって中国文化を重んじ、信者に孔子の崇拝や祖先の祭詞などの儀礼を認めたが、これに反対する他派の宣教師がローマ教皇に訴えたことから、儀礼に関わる論争（**典礼論争**／**典礼問題**）がおこった。教皇はイエズス会宣教師の布教方法を否定したため、これに反発した清朝は（**雍正帝**）の時代にキリスト教の布教を禁止した。
44. 宣教師たちによってヨーロッパに伝えられた中国文化はヨーロッパ人の間に中国に対する興味を引き起こし、芸術では（**シノワズリ**）という中国趣味が流行した。

1. 14世紀半ば頃、中央アジアのモンゴル人国家（**チャガタイ＝ハン国**）は東西に分裂した。
2. この内、西側出身の（**ティムール**）は、1370年に（**ティムール**）朝[1370～1507年]を開き、西トルキスタンを統一したのち、西進してイル＝ハン国が滅亡した後のイランからイラクに至る領土を征服した。
3. この人物は北方のキプチャク＝ハン国や南方の北インドに侵入し、後にはアナトリアにも攻め入って1402年（**アンカラ／アンゴラ**）の戦いでオスマン軍を破り、バヤジット1世を捕虜とした。さらに明を討伐しようとして東方遠征へ出発したが、その途中病死した。
4. この人物の死後、この王朝は分裂と統合を繰り返し、やがてトルコ系の遊牧民（**遊牧ウズベク／ウズベク人**）に滅ぼされた。
5. この遊牧民は、ブハラ＝ハン国・（**ヒヴァ＝ハン国**）・コーカンド＝ハン国の3ハン国を建てたが、いずれもロシアの保護下に入った。
6. 1370年に建てられた（**ティムール**）朝の首都（**サマルカンド**）には壮大なモスクや学院が建設され、14～15世紀には中央アジアの商業・学芸の中心として繁栄した。宮廷ではイラン文学や細密画の傑作が作られた他、すぐれたトルコ系の文学作品も現れた。また、この王朝の第4代目君主（**ウルグ＝ベク**）が建設した天文台を中心に天文学や暦法も大いに発展した。
7. 13世紀末、西方に進出したトルコ人はアナトリア西北部に（**オスマン帝国**）[1299～1922年]を建設した。
8. この国はアナトリア側のビザンツ帝国領を奪うと、やがてバルカン半島に進出して1366年（**アドリアノーブル**）[現在のエディルネ]を首都にした。
9. 1396年には、この国の第4代スルタン（**バヤジット1世**）がニコポリスの戦いでバルカン諸国とフランス・ドイツ連合軍を撃破したが、その後1402年の（**アンカラ／アンゴラ**）の戦いでティムールと衝突し、大敗を喫したうえ捕虜となった。
10. しかしその後第7代スルタン（**メフメト2世**）は国力を回復させ、1453年に（**コンスタンティノーブル**）を落としてビザンツ帝国を滅ぼした。なお、この時首都は（**コンスタンティノーブル**）に移され、以後イスタンブルと呼ばれるようになった。
11. その後第9代スルタンの（**セリム1世**）は新興勢力だったサファヴィー朝を破ってシリアへ進出し、さらに1517年に当時エジプト・シリアを支配していたスンナ派政権の（**マムルーク朝**）を滅ぼした。
12. これにより、（**メッカ**）と（**メディナ**）の両聖都の保護権を手に入れ、以降この国のスルタンはカリフ制時の後継者としてスンナ派イスラーム教を守護する中心的存在となった。

13. この国は第10代スルタン（スレイマン1世）の時代に最盛期を迎えた。彼はサファヴィー朝から南イラクを奪い、北アフリカにも支配を広げたばかりでなく、1526年のモハーチの戦いで勝利した勢いそのままに（ハンガリー）を征服し、1529年にはハプスブルク帝国の都（ウィーン）を包囲してヨーロッパ諸国に大きな脅威を与えた。
14. さらに1538年には（プレヴェザの海戦）でスペイン・ヴェネツィアの連合艦隊を破り、地中海の制海権を手に入れた。
15. その後第11代スルタンのセリム2世はフランス商人に領内での居住と通商の自由を公に認めた。これを（カピチュレーション）という。
16. 1571年には（レパントの海戦）でスペイン・ヴェネツィア・ローマ教皇などの連合艦隊に敗れた。
17. この国のスルタンは、強大な権力を持つ専制君主であったが、（イスラーム法／シャリーア）に基づく政治を行い、州・県・郡にわかれる整然とした行政機構を整えた。
18. 一方、帝国内に住むキリスト教徒やユダヤ教徒などの非ムスリムの宗教共同体（ミット）には、法に定められた自治を認め、イスラーム教徒との共存が図られた。
19. スルタンの軍隊は、土地の徴税権であるティマールを保持する騎士軍団と歩兵常備軍である（イエニチェリ）軍団からなっていた。特にこの（イエニチェリ）軍団は、バルカン半島の征服後キリスト教徒の子弟を集めて編成した歩兵軍団であり、スルタンの常備軍としてヨーロッパやアジア各地の征服に活躍した。
20. 西トルキスタンに1370年に建国された（ティムール）朝[1370～1507年]が衰えたのち、イランでは神秘主義教団の長（イスマーイール）が武装した遊牧民の信者を率いてダブリーズを占領し、（サファヴィー）朝[1501～1736年]を開いた。
21. この王朝は国内統一のためにシーア派、特に（十二イマーム）派を国教とし、古代以来イランの王を意味する（シャー）の称号を用いてイラン人の民族意識の高揚に務めた。
22. この王朝は（アッバース1世）の時に最盛期を迎えた。彼はアナトリアの（オスマン帝国）[1299～1922年]と戦って領土の一部を取り返し、ポルトガル人を（ホルムズ）島から追い出した。
23. さらに新都市（イスファハーン）を建設し、イマームの広場に建てられた（イマームのモスク）をはじめとする美しいモスク・学院・庭園などでこの首都を飾り、「（イスファハーンは世界の半分）」と言われるほどの繁栄をもたらした。イランが初めてヨーロッパ諸国と外交・通商関係を結んだのも、この人物の治世である。
24. 16世紀に入ると、西トルキスタンに1370年に建国された（ティムール）朝[1370～1507年]の建国者の子孫（バーブル）が、カーブルを本拠地として北インドに進出し始めた。

25. 彼は1526年の（パーニーパット）の戦いでデリー＝スルタン朝最後の（ロディー）朝に勝利し、（ムガル帝国）の基礎を築いた。
26. この国の実質的な建国者は第3代皇帝（アクバル）である。彼は支配階層の組織化を図り、維持すべき騎兵・騎馬数とそれに応じた給与によって彼らを等級づけ、官位を与えた。これを（マンサブダール制）という。また、首都を（アグラ）に移した。
27. 15－16世紀のインド社会では、イスラーム教とヒンドゥー教との融合を図る信仰が盛んになった。そのなかで、不可触民への差別を批判し、人類が根本的に一つであることを説いたカビールや、愛と献身により神とともに生きることでカーストの区別なく解脱できると説き、シク教の祖となった（ナーナク）が登場した。
28. 実質的な建国者である第3代皇帝（アクバル）も、信仰と統治の両面でヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の融合を図り、支配の基盤を固めようとした。彼は自らヒンドゥー教徒の女性と結婚し、非イスラーム教徒に課されていた人頭税（ジズヤ）を廃止して、ヒンドゥー教徒を味方につけた。
29. 文化面でも融合への積極的な動きが見られた。宮廷にはイラン出身者やインド各地から画家が招かれ、細密画（ミニアチュール）が多数生み出された。
30. 各地の王の宮廷では地方語による作品が生み出されるとともに、それらの作品のペルシア語への翻訳が進んだ。公用語のペルシア語がインドの地方語と混ざった（ウルドゥー）語も誕生した。なお、この言語は現在（パキスタン）の公用語となっている。
31. また、建築においても、第5代皇帝（シャー＝ジャハーン）が妃ムムターズ＝マハルのために造営された墓廟である（タージ＝マハル）など、インド様式とイスラーム様式が融合した壮大な建築が現在に残された。
32. この国は第6代皇帝（アウラングゼーブ）の時代に最大の領土となった。しかし、その治世は支配の弱体化が進んだ時代でもあった。彼は厳格なスンナ派イスラーム信仰を公にし、ヒンドゥー教寺院の破壊や人頭税（ジズヤ）の復活を命じたため、ヒンドゥー教徒からの反発を招いた。
33. こうした情勢の中、各地で農民反乱が発生し、また地方勢力が着実に力をつけて独立への動きを示した。西インドではヒンドゥー国家の建設を目指す（マラーター王国）が登場した。
34. デカン高原には、14世紀に（ヴィジャヤナガル王国）[1336～1649年]が誕生した。この王国はインド洋交易を通じて西アジアから馬を大量に入手して軍事力を高め南インドに支配を拡大した。
35. 東南アジア地域では、16世紀に入ってヨーロッパの諸勢力が新たに進出し始めた。マラッカ王国は1511年に優勢な海軍力を持つ（ポルトガル）に占領された。

36. 大陸部ではタイの（アユタヤ）朝[1351～1767年]やビルマのタウングー朝などが米屋鹿革をはじめとする特産物交易により繁栄を続けた。
37. スペインは16世紀後半からフィリピンへの侵略を開始し、マニラに根拠地を置いて交易と支配を行った。スペイン支配下のアメリカ大陸で大量の金・銀が生産される中、マニラはガレオン船によって太平洋を越えてメキシコの（アカプルコ）と結ばれた。この地へは中国産の絹や陶磁器、インド産綿布などが、この地からは大量のメキシコ銀が運ばれた。
38. ヨーロッパでは、十字軍以来マルコ＝ポーロの（世界の記述／東方見聞録）などに刺激されて、豊かなアジアの富や文化に対する関心が強まる一方、羅針盤の改良、快速帆船の普及などで遠洋航海が技術的にも可能になってきた。
39. 莫大な富をもたらす金や、アジアの（香辛料）は新たな財源を求める君主など、多くの人々を惹きつけた。さらに国土回復運動のなかでイスラーム教徒と戦ってきたポルトガルやスペインでは、キリスト教を海外へ布教しようとする意欲も強かった。
40. ポルトガルの商人は15世紀初頭にはアフリカ西岸の探検に乗り出していたが、「航海王子」こと（エンリケ）がこの事業を更に推進し、ジョアン2世治世の1488年、（バルトロメウ＝ディアス）がアフリカ南端の（喜望峰）に達した。
41. 1498年には（ヴァスコ＝ダ＝ガマ）がインド西岸の（カリカット）に到達し、香辛料を手に入れた。
42. インド航路の開拓は一種の国家事業として行われ、それによって実現した香辛料の直接取引はポルトガルの王室に莫大な利益をもたらし、ポルトガルの首都（リスボン）は一時世界商業の中心となった。
43. アジアへの進出でポルトガルに遅れたスペインでは、1492年に女王イサベルがジェノヴァ生まれの船乗り（コロンブス）の船団を「インド」へ向けて派遣した。この人物は、大地は球形で、大西洋を西に向かって進むほうが「インド」への近道であるとするフィレンツェの天文学者（トスカネリ）の説を信じ、大西洋を横断してバハマ諸島の（サンサルバドル島）に到着した。彼はその後、今日のアメリカ大陸にも上陸したが、これらの土地を「インド」の一部だと思い込んでいたため、その地の先住民を（インディオ／インディアン）と呼んだ。
44. 当時西ヨーロッパの人々は、東アジア・東南アジア・南アジアを含むアジア大陸東半の地域を漠然と「インド」、スペイン語では「（インディアス）」と呼んでいた。
45. 1500年にはポルトガル人（カブラル）がブラジルに漂着し、この地をポルトガル領とした。なお、ブラジルはラテンアメリカで唯一のポルトガル領であった。

46. その後イタリア出身の（**アメリゴ＝ヴェスプッチ**）の南アメリカ探検によってイサベルに派遣された（**コロンブス**）以来探検が進んだ土地がアジアとは別の大陸「新大陸」であることが明らかとなり、この大陸は彼の名前にちなんで「（**アメリカ**）」と名付けられた。
47. また、スペイン王室の命令でポルトガル人（**マゼラン／マガリャンイス**）は1519年に香辛料の特産地モルッカ諸島を目指して西回りの大航海に出発し、南アメリカ南端の海峡（**マゼラン海峡**）を経て太平洋を横切り1521年にフィリピンへ到達した。彼自身はそこで死亡したが、彼の船団のうち1隻がアフリカ回りで1522年にスペインに帰国し、史上最初の世界周航を成し遂げて、地球が球形であることを証明した。
48. なお、パナマ海峡を横断して太平洋に到達した最初のヨーロッパ人は、スペイン人の（**バルボア**）であり、1513年に到達していたが、「太平洋[穏やかな海]」の名はスペイン王室の名で1519年に出発した（**マゼラン／マガリャンイス**）である。
49. アメリカ大陸には先住民による諸国家が形成されていたが、スペイン王室は（**征服者／コンキスタドール**）の率いる軍隊をアメリカ大陸に送り込み、まず（**コルテス**）が1521年にアステカ王国を破ってメキシコを征服した。ついで1533年、（**ピサロ**）がインカ帝国を滅ぼし、首都クスコを破壊した後、新しい首都リマを建設した。
50. 先住民の保護とキリスト教化を条件として、先住民とその土地に対する支配がスペイン人植民者に委託される（**エンコミエンダ制**）が導入されたスペインの植民地では、聖職者（**ラス＝カサス**）のように先住民の救済に務めた人物も一部にいたが、多くの場合抵抗を続ける先住民を植民者が労働力として酷使した。また、天然痘やインフルエンザなど、それまで存在しなかった伝染病がヨーロッパから持ち込まれた結果、先住民の人口は激減した。
51. 大航海時代の到来とともに、世界の一体化が始まった。ヨーロッパ商業は世界的広がりを持つようになり、商品の種類・取引額が拡大し、ヨーロッパにおける遠隔地貿易の中心は地中海から大西洋に望む国々へ移動した。これを（**商業革命**）という。
52. 世界商業圏の形成は、広大な海外市場を開くことで、すでに芽生え始めていた資本主義経済の発達を促した。また、1545年に発見された（**ポトシ銀山**）など、ラテンアメリカの銀山から大量の銀が流入し、ヨーロッパの物価は2～3倍に上昇した。この物価騰貴は（**価格革命**）と呼ばれ、固定地代の収入で生活する領主は打撃を受けた。
53. 西欧諸国は商工業が活発な経済的先進地域となったのに対し、エルベ川以東の東ヨーロッパ地域では西欧諸国への穀物輸出が増加した。この地域では、領主が輸出用穀物を生産するために直営地経営を行う（**農場領主制／グーツヘルシャフト**）が広まり、農奴に対する支配が近世に入るとかえって強化された。この状況を（**再版農奴制**）という。

1. 中世末期の西ヨーロッパでは都市が発達し、そこから中世の文化を引き継ぎながら、人間性の自由・開放を求め、各人の個性を尊重しようとする文化運動があらわれた。これを（ルネサンス）[「再生」の意]という。
2. カトリック教会の権威のもとにあった中世盛期の文化と比べて、この文化運動は現世に生きる楽しみや理性・感情の活動がより重視されたが、これを支えたのが（ヒューマニズム）という人文主義[人間主義]の思想である。
3. この思想の立場を取る知識人は、おもにビザンツ帝国やイスラーム層を介して西ヨーロッパに伝えられたギリシア・ローマの古典文化を深く研究することで、人間らしい生き方を追求しようとした。また、フィレンツェの（マキャヴェリ）は「君主論」を書いて、政治を宗教・道徳から切り離す近代的な政治観を示した。
4. ルネサンスは、地中海貿易の盛んなイタリアや、南北ヨーロッパ商業の中継地として毛織物工業が成長したネーデルランドでは早くから展開したが、まもなく他の国々にも広まった。ルネサンス期の学者や芸術家は都市に住む教養人で、その多くは権力者の保護のもとで活動した。イタリアでは、フィレンツェの金融財閥（メディチ家）やミラノ公、ローマ教皇などがルネサンスの保護者として知られ、イギリス・フランス・スペインでは国王の保護下にルネサンス文化が栄えた。
5. ルネサンス文芸は、古代ローマの伝統が強かったイタリアでまず展開した。イタリアには、『神曲』で知られる詩人（ダンテ）や『デカメロン』の（ボッカチオ）らが出たが、その影響下でイギリスでも（チョーサー）が『カンタベリ物語』を著した。
6. 16世紀頃になると、ネーデルランドの人文主義者（エラスムス）の『愚神礼賛』を始め、社会を風刺する作品が多く書かれ、各国の国民文化が形成されていった。
7. イギリスで16世紀末から17世紀初めに活躍し、『ハムレット』『オセロー』『マクベス』『リア王』『ヴェニスの商人』などの作品を残した（シェークスピア）の戯曲を始めとして、優れた文学作品はそれぞれの国の言語を発達させるのに貢献した。
8. 絵画でもイタリアに新しい動きがおこり、15世紀前半には遠近法の確率により、近代絵画の基調である写実主義の基礎がすえられた。建築の領域では古代ローマ建築の要素を取り入れて、大ドームを持った（ルネサンス）様式が生まれ、16世紀にはローマの（サン＝ピエトロ大聖堂）が新築された。
9. 彫刻家では、『ダヴィデ像』の製作者で、サン＝ピエトロ大聖堂の建築にも関わった（ミケランジェロ）が知られる。

10. ルネサンスの理想であった「万能人」の典型とも言うべき（レオナルド＝ダ＝ヴィンチ）は絵画のほか、解剖学をはじめ自然諸科学と応用技術にも才能を示した。
11. また、多くの聖母子像を描いた（ラファエロ）は、この2人とともにルネサンスの三大巨匠に数えられている。
12. ネーデルランドでは、油絵の技法を改良した（ファン＝アイク兄弟）がフランドル派を開き、ドイツの（デューラー）は版画も多数残した。
13. 次のルネサンス期の文芸と美術の関する作者を答えなさい。

【文芸】

- a. （ダンテ）・・・『神曲』
- b. （ペトラルカ）・・・『叙情詩集』
- c. （ボッカチオ）・・・『デカメロン』
- d. （チョーサー）・・・『カンタベリ物語』
- e. （エラスムス）・・・『愚神礼賛』
- f. （トマス＝モア）・・・『ユートピア』
- g. （ラブレー）・・・『ガルガンチュアとパンタグリュエルの物語』
- h. （モンテーニュ）・・・『エッセー[随想録]』
- i. （セルバンテス）・・・『ドン＝キホーテ』
- j. （シェークスピア）・・・『ハムレット』『オセロー』『マクベス』『リア王』『ヴェニスの商人』

【美術】

- k. （ジョット）・・・『聖フランチェスコの生涯』
- l. （ファン＝アイク兄弟）・・・『ガン[ヘント]の祭壇画』
- m. （ボッティチェリ）・・・『ヴィーナスの誕生』『春』
- n. （レオナルド＝ダ＝ヴィンチ）・・・『最後の晩餐』『モナ＝リザ』
- o. （デューラー）・・・『四人の使徒』
- p. （ミケランジェロ）・・・『ダヴィデ像』『最後の審判』

q. (ラファエロ) . . . 聖母子像

14. 大航海とルネサンスの時代には、科学の新しい考えが生まれた。16世紀前半、ポーランド人の(コペルニクス)は古代の天文学に刺激されて(地動説)を唱え、聖書の天地創造説話に基づいて天動説を採っていた協会の世界観に挑戦した。なお、ガリレオ=ガリレイは彼の地動説を擁護したため異端とされ、宗教裁判にかけている。
15. (羅針盤)は中国で発明されたとされ、12世紀頃イスラーム世界経由でヨーロッパに伝わり、14世紀初頭イタリア人が改良してヨーロッパ人の海外進出を促した。
16. 火薬もすでに元で実践に用いられていたが、その後ヨーロッパで鉄砲や大砲などの(火器)が発達して、従来の戦術を一変させ、騎士が没落することになった。
17. さらに、15世紀半ば頃ドイツ人の(グーテンベルク)が改良した活版印刷術は、製紙法の伝播と結びついて、書物の制作を従来の写本よりも遥かに迅速・安価なものとし、新しい思想の普及に大きく貢献した。
18. カトリック教会への批判は14世紀頃から見られたが、1517年、ドイツ中部ザクセンのヴィッテンベルク大学神学教授(マルティン=ルター)は、魂の救いは善行には依らず、キリストの福音を信じること[福音信仰]のみによるという確信から、(贖宥状)[免罪符]の悪弊を攻撃する(九十五カ条の論題)を発表した。
19. 当時、メディチ家出身の教皇(レオ10世)は、ローマのサン=ピエトロ大聖堂の新築費用を集める目的などで、購入を善行の寄進にあたり、過去の犯した罪も赦されると宣伝し、(贖宥状)[免罪符]を販売していた。特にドイツで盛んに売られ、ルターの協会に対する疑問と批判に繋がった。当時のドイツは政治的に分裂していたため、このように教皇による政治的干渉や財政上の搾取を受けやすく、「ローマの雌牛」と呼ばれていた。
20. ルターの主張がドイツ各地に伝えられると、教皇庁の搾取に反発する諸侯や市民、領主の搾取のもとにあった農民など、広範な社会層がそれを支持した。1521年、ルターは教皇から破門され、神聖ローマ皇帝(カール5世)にヴォルムスの帝国議会に呼び出されたが、自説を撤回せず、ザクセン選帝侯(フリードリヒ)の保護のもとで(新約聖書)のドイツ語訳を完成した。これにより、民衆が直接キリストの教えに接することができるようになった。
21. 他方、ルターの説に影響を受けた(ミュンツァー)は、農奴制・領主制・十分の一税などの廃止を要求する(ドイツ農民戦争)[1524年~25年]を指導して、処刑された。はじめルターは農民たちに同情的であったが、一揆が社会変革を目指して急進化すると領主の側に立ち、反乱弾圧を呼びかけた。

22. ザクセン選帝侯をはじめ、ルターの教えを採用した諸侯はカトリック教会の権威から離れ、領内の協会の首長となる（**領邦教会制**）を進め、修道院の廃止や教会儀式の改革を始めた。
23. その後ドイツでは、カール5世がイタリア戦争やオスマン帝国によるウィーン包囲などの国際情勢のために、しばしばルター派との妥協に迫られた。旧教徒（**カトリック**）と新教徒（**プロテスタント**）の争いは、1530年にルター派の諸侯と帝国都市が（**シュマルカルデン同盟**）を結んで皇帝に対抗したため（**シュマルカルデン戦争**）にまで発展したが、1555年に（**アウクスブルクの和議**）が成立した。これで諸侯はカトリック派とルター派のいずれをも採用することができるが、領民個人には信仰の自由はなく、それぞれの諸侯の宗派に従うという原則が確立した。また、カルヴァン派は認められなかった。
24. スイスでは、（**ツヴィングリ**）がチューリッヒで宗教改革を開始したが、その後フランスの人文主義者で『キリスト教綱要』を公刊した（**カルヴァン**）がジュネーヴで独自の宗教改革を行った。
25. 彼の教えの特徴は、神の絶対主権を強調する厳格な禁欲主義で、ジュネーヴでは一種の神権政治[宗教教義が政治に反映される政教一致体制]が行われた。彼は魂が救われるかどうかは、あらかじめ神によって決定されているという（**予定説**）を説いたが、これが職業労働を神の栄光を表す道と理解する考えと結びついて、西ヨーロッパの商工業者の間に広く普及した。
26. 教会組織の上では、ルターが司教制度を維持したのに対し、彼はこれを廃止し、教会員の間から信仰の厚い者を長老に選び、牧師を補佐させる（**長老主義**）を取り入れた。
27. 彼の教説を信奉する（**カルヴァン**）派は16世紀後半にはフランス・ネーデルランド・スコットランド・イギリスなどにも広まり、ドイツや北欧諸国で有力であったルター派と並んでもはや無視できないキリスト教の宗派となった。なお、彼ら信奉者は国によって呼称が異なり、
- フランスでは（**ユグノー**）
 - ネーデルランドでは（**ゴイセン**）
 - スコットランドでは（**プレスビテリアン**）
 - イギリスでは（**ピューリタン／清教徒**）と呼ぶ。
28. 新教徒（**プロテスタント**）という言葉は、これらローマ教皇の権威を認めず、聖職者の特権を否定する[万人祭司主義]宗派の総称となった。

29. イギリスでは、国王（**ヘンリ 8 世**）がスペイン王家出身の王妃との離婚を認めようとしない教皇と対立して、宗教改革が始まった。彼は 1534 年の（**国王至上法／首長法**）で国王がイギリス国内の教会の首長であると宣言してカトリック世界から離脱し、さらに修道院を議会立法で廃止して、その広大な土地財産を没収した。
30. しかし、教義面の改革がすすんだのは長男のエドワード 6 世の治世であった。次の（**メアリ 1 世**）はスペイン王室と結んでカトリックを復活しようと企てたが、対フランス戦争に加担してカレーを失うなど、国民の反発を招いて失敗した。
31. 次の（**エリザベス 1 世**）の治世になって、1559 年の（**統一法**）でイギリス独自の教会体制が確立した。イギリスの国定教会である（**イギリス国教会**）は、ほぼカルヴァン派の思想を採用しているが、司教制を維持するほか、儀式の面でもカトリック的要素が残っていたため、（**ピューリタン／清教徒**）と呼ばれたイギリスのカルヴァン派はよりカトリック的要素の排除を求めた。
32. 宗教改革の進展を前にカトリック教会は、教義の明確化と内部革新を通じて勢力を立て直そうと努めた。これを（**対抗宗教改革／反宗教改革**）と呼ぶ。
33. 1545 年から 63 年にかけて開かれた（**トリエント公会議**）で教皇の至上権を再確認するとともに、腐敗の防止を図った。また、教会が反カトリック的内容と判断し、その読書と所有を禁じた書物とその著者のリストである（**禁書目録**）を作り、信仰に関わる問題を審問する（**宗教裁判**）を強化して思想統制を行った。
34. スペインの（**イグナティウス＝デ＝ロヨラ**）がフランシスコ＝ザビエルらとともに 1534 年に結成し、40 年に教皇に認可された修道会である（**イエズス会／ジェズイット教団**）は厳格な規律と組織のもとにヨーロッパだけでなく、海外でも積極的な宣教・教育活動を繰り広げ、カトリック教会勢力回復の旗手となった。
35. こうした旧教徒と新教徒の対立から、ヨーロッパ各地でシュマルカルデン戦争・ユグノー戦争・オランダ独立戦争などの（**宗教戦争**）がおこった。さらに、このような社会的緊張の高まりのなかで、悪魔の手先として魔術を行うとの疑いをかけられた者に対する激しい迫害である（**魔女狩り**）が行われた地域もあった。犠牲者の大半は女性であったが、男性も含まれていた。
36. 近世のヨーロッパでは、ローマ教皇や神聖ローマ皇帝などの普遍的権威が衰退したため、各国が自国の利害を求めて戦争と妥協を繰り返し、恒常的な緊張状態にあった。戦争は長期化・大規模化し。軍事技術も進歩していた。小銃と大砲を大量に使用する近世の新しい戦争方式はそれまでも軍事組織や制度を一変させ、軍事革命と呼ばれている。これ以後、多くの国で平時にも（**常備軍**）と呼ばれる軍隊が維持されるようになった。

37. 多くの国は自己の支配領域を明確な国境で囲い込み、国内秩序を維持強化して、外に対しては主権者としての君主のみが国を代表する体制を築くようになった。こうした国家を（主権国家）といい、近代国家の原型となった。
38. 主権国家の形成期、スペイン・フランス・イギリスなどでは、（絶対王政）という国王を中心とした強力な統治体制が生まれた。しかし、この体制のもとでも社会には旧来の身分制度が残っており、領主である貴族や聖職者たちは免税などの特権を持つ中間団体を形成して、国王による国民の直接支配を妨げた。このため、国王は商人や金融業者などの有産市民層（ブルジョワジー）の社会的地位を向上させ、彼らに経済上の独占権を与えるなどして、協力関係を強めて自らの権威を固めようとした。
39. この頃から西ヨーロッパでは、経済活動に対する規制が緩み、商人が手工業生産者に道具や原料を前貸しして生産を支配する制度である（問屋制）が広まった。
40. 当時の工業には、資本家が労働者を仕事場に集め、分業の方式で生産を行う（マニュファクチュア／工場制手工業）という形も見られた。
41. 近世ヨーロッパに誕生した主権国家は、その規模の大小や、政体・宗教・経済力などの点で極めて多様であった。しかし、各国は国際社会の対等な構成員として、外交官を交換しあい、時には国際会議を開いて、相手国と協力・対抗しながら相互の利害を調整しようとした。このようにして形成・維持された国際秩序は（主権国家体制）と呼ばれ、参加国を全地球規模に拡大して、現代まで続くことになる。
42. 15世紀末以降、ヨーロッパの有力諸国は、東方からオスマン帝国の圧力を受ける中で、アメリカ大陸やアジアへの海外進出を競い合い、また相互に領土の獲得や宗教政策を巡って激しく対立してしばしば争うこととなった。教皇領と多くの小国家に分裂していたイタリア半島がまずこの争いの舞台となった。1494年、フランス王がイタリアに侵入すると、神聖ローマ皇帝がこれに敵対して、（イタリア戦争）[1494～1559年]がおこった。
43. 神聖ローマ皇帝位を持つハプスブルク家とフランスのヴァロワ家の間の対立は、イタリアの小国家やローマ教皇のみならず、イギリスなどイタリア外の国々おも巻き込んで16世紀半ばまで続いた。特に1519年にハプスブルク家のスペイン王（カルロス1世）が神聖ローマ皇帝カール5世として選出されて以降、カールとハプスブルク家の領土に囲まれる形となったフランスの（フランソワ1世）はヨーロッパの覇権を巡って激しく争った。その過程で1527年にはカール5世の軍がローマに激しい襲撃・略奪を行い、「ローマの劫略」と呼ばれた。
44. 1559年の（カトー＝カンブレジ条約）でイタリア戦争は集結したが、ハプスブルク家とフランス王家の対立は18世紀半ばまでヨーロッパの国際関係の重要な対立軸となった。

45. オーストリアのハプスブルク家は15世紀後半にネーデルラントを婚姻関係を通じて獲得し、さらにスペイン王位も継承した。スペイン＝ハプスブルク家の（カルロス1世）は神聖ローマ皇帝カール5世を兼ね、伝統的なキリスト教世界の統一を体現する存在となった。
46. 1556年カール5世が退位すると、ハプスブルク家はカール5世の皇太子にスペイン・ネーデルラントを、その弟にオーストリアを継承させてスペイン系とオーストリア系に別れた。スペインはこの（フェリペ2世）のもとで最盛期を迎え、1571年（レパントの海戦）でオスマン帝国の海軍を破ってその脅威を一時和らげた。彼は1580年にポルトガルの王位も兼ね、スペインとポルトガルの同君連合は1640年まで続いた。その間、スペインはポルトガルの海外植民地も支配下に入れ、「常にその領土のいずれかの地で太陽が昇っている国」を意味する、（太陽の沈まぬ国）を体現したが、オランダ・イギリスなどの新興国の攻撃を受けてその力は低下していった。

1. 商業の発達したネーデルラント[オランダ]には、カルヴァン派の新教徒が多かった。この地を支配したスペイン王フェリペ2世はカトリック化政策を強め、それまで大幅に認められてきた自治権を奪おうとして、1568年諸州の激しい反乱を招いた。南部フランドル地方の(10)州はスペインの支配下にとどまったが、北部の(7)州は1579年に(ユトレヒト同盟)を結んで(オラニエ公ウィレム／オレンジ公ウィリアム)のもとに抵抗を続け、1581年(ネーデルラント連邦共和国)の独立を宣言し、スペインから自立した。
2. ネーデルラントの別名『オランダ』は連邦の中心(ホランド)州の名前に由来する。
3. 豊かなオランダが反乱を起こしたことはスペインにとって大きな打撃になった。オランダ独立を支援したイギリスを攻撃するため、スペインは1588年に(無敵艦隊／アルマダ)を送ったが、イギリス海軍に破れて制海権を失うきっかけとなった。
4. その後オランダはバルト海での中継貿易で富を蓄え、1602年に世界初の株式会社である(東インド会社)を説き及ぼして東南アジアにまで貿易網を広げ、国力を強めて1609年の休戦条約で独立を事実上勝ち取った。1568年の反乱から1609年の休戦条約までを(オランダ独立戦争)[1568～1609年]という。
5. オランダの(アムステルダム)はフランドルの(アントウェルペン／アントワープ)に代わって国際金融の中心となった。
6. イギリスの王権はヘンリ7世に始まる(チューダー)朝[1485～1603年]のもとで強化されたが、統治にあたって国王は議会で地域社会を代表した(ジェントリ／郷紳)と呼ばれる大地主の自発的協力を必要とした。
7. 1534年に国王至上法[首長法]から始まった宗教改革で国王は国内の教会組織の頂点に立ち、16世紀後半の(エリザベス1世)の治世で新教国としての国民意識が形成された。宗教改革が議会立法を通じて達成されたことは、イギリス絶対王政における議会の重要性を示している。
8. イギリスでは、15世紀以来領主や地主が農地を農民から取り上げて生垣や塀で取り囲んで牧場にする(囲い込み／エンクロージャー)が進んで羊毛生産が増大し、毛織物工業が国民産業となった。
9. 1600年の(東インド会社)設立に見られるエリザベス1世時代の積極的な海外進出はこれを背景としており、連邦制のもとで強い中央権力を欠き、その反映を中継貿易に依存していたオランダに勝っていた。
10. イギリスの航海者(ドレーク)は途中スペインの植民地やスペイン船を攻撃しながら1577年から80年にかけて世界周航を達成し、のちにスペインとの海戦で活躍した。

11. フランスは1339～1453年の百年戦争の結果、国内のイギリス領をほぼ一掃し、中央集権的国家への道を歩んできた。しかし、旧教国フランスでも16世紀半ばには（ユグノー）と呼ばれるカルヴァン派の新教徒勢力が無視できなくなり、国王シャルル9世とその母で摂政の（カトリック＝ド＝メディシス）のもとで（ユグノー戦争）[1562～1598年]と呼ばれる内乱が勃発した。
12. この内乱は新旧両宗派の対立が貴族間の党派争いと結びついたもので、1572年8月にパリで発生した（サンバルテルミの虐殺）などの事件を伴いながら30年以上に及んだ。
13. ブルボン家の（アンリ4世）が王位につくと、新教から旧教へ改宗し、1598年の（ナントの勅令／王令）でフランスのカルヴァン派（ユグノー）にも条件付きながら信教の自由を与えて内乱を終わらせた。こうして、フランスの国家としてのまとまりは維持された。
14. （アンリ4世）に始まるブルボン朝のもとでフランスは絶対王政の確立期を迎えた。次の国王（ルイ13世）の宰相（リシュリュー）は、王権に抵抗する貴族やカルヴァン派（ユグノー）を抑えて聖職者・貴族・平民の代表からなる三部会を開かず、国際政治の面では三十年戦争の際には新教勢力の側に立ってハプスブルク家の皇帝権力を削ごうと努めた。
15. 王権強化の政策は次の国王ルイ14世の宰相（マザラン）によって継承され、1648年には最高司法機関の（高等法院）や貴族が（フロンドの乱）を起こしたが、数年間で終息した。
16. 17世紀前半に、16世紀から続いていた経済成長が止まり、ヨーロッパは凶作・不況・疫病・人口の停滞などの現象に見舞われた。これを（17世紀の危機）という。
17. 多くの国で戦争や反乱がおこり、それが経済的・社会的問題をさらに悪化させた。特にドイツの危機は深刻で、（三十年戦争）[1618～1648年]と呼ばれる外国勢力も介入する大規模な戦乱という形で表面化した。
18. 神聖ローマ帝国内に大小の領邦が分立していたドイツでは、主権国家の形成が遅れていた。1618年オーストリアの属領（ベーメン／ボヘミア）の新教徒がハプスブルク家によるカトリック信仰の強制に反乱したのをきっかけにこの戦争[1618～1648年]は発生した。この戦乱の一つの対立軸は旧教 VS 新教で、スペインは旧教側のハプスブルク家の皇帝を支持し、新教国デンマークはこれと戦った。傭兵隊長（ヴァレンシュタイン）の率いる皇帝軍が優勢になると、バルト海の覇権を目指す新教国スウェーデンの国王（グスタフ＝アドルフ）が戦いに加わった。しかし、旧教国フランスも新教勢力と同盟して皇帝と戦い始めるなど、この戦争はは宗教的対立を超えたハプスブルク家 VS フランスの戦いでもあった。
19. この戦争は1648年の（ウェストファリア条約）で終結したが、講和条約が大半のヨーロッパ諸国が参加した国際会議でまとめられたことは、ヨーロッパの主権国家体制の確立を示すものであった。なお、大まかな内容は以下の通り。

- a. カルヴァン派はルター派と同等の権利を獲得
 - b. フランスは（アルザス）とロレーヌの一部を獲得
 - c. スウェーデンは西ポンメルンを獲得し、バルト海の制海権を獲得
 - d. （スイス）・（オランダ）の独立が国際的に承認される
 - e. ドイツでは諸侯のほとんど完全な主権が承認され、神聖ローマ帝国が有名無実化する
20. この戦争後、北ドイツでは（プロイセン／プロシア）が急速に成長し始める。この国は、13世紀にドイツ騎士団の東方植民によって建てられたドイツ騎士団領に由来し、その後ブランデンブルク選帝侯国を支配していた（ホーエンツォレルン）家が1618年に（プロイセン公国）の王位を継承してブランデンブルク選帝侯国と同君連合し、更にその後1701年に王国へ昇格された。
21. この国が成立したエルベ川以東の地域は、中世後期の植民を通じてドイツ領となり、初期には入植促進のため農民に有利な地位が与えられたが、15～16世紀以来、（ユンカー）と呼ばれる領主層が農民支配を強化した。彼らは農場領主制[グーツヘルシャフト]で富を得て、この国の官僚・軍隊の中心勢力として君主の権力を支えた。
22. ロシアでは、16世紀に（イヴァン4世）が貴族を抑えて専制政治の基礎を固めた。彼は領土を南ロシアに広げ、当時ロシアから南ロシア辺境地帯に移住していた農民集団コサックの首長（イエルマーク）が占領したシベリアの一部も領土に組み入れ、アジアへの進出を開始した。彼は貴族に対して激しい弾圧を行ったことから、「雷帝」と呼ばれる。
23. 「雷帝」の死後、しばらく内紛が続いたが、1613年に（ミハイル＝ロマノフ）を祖とするロマノフ朝が成立し、専制支配と農奴制が強化された。
24. 近世のヨーロッパでは、国家が経済に介入して自国を富ませる経済政策が採られた。このような政策を（重商主義）という。具体的内容は国や時期によって様々で、
- a. 初期は16世紀のスペインのように金・銀の獲得を目指した重金主義
 - b. 17世紀にはイギリス・フランスなどによる輸入を抑えて輸出を増やすことで貿易収支を改善しようとする貿易差額主義と移行していった。
25. 17世紀後半、フランスでは財務総監（コルベール）が東インド会社を再建し、工場制手工業を取り入れた王立の工場である（特権マニファクチュア）を創立するなどして国内の商工業を育成した。

26. この時期イギリスやフランスなどのヨーロッパの有力国は、香料や宝石などの奢侈品、綿織物や生糸など特産品の獲得、金銀など地下資源の収奪を主な目的として（植民地）を求め、ヨーロッパだけでなく、アジアやアメリカ大陸でも争った。
27. イギリスでは1603年にスコットランド出身の（ステュアート）家が王位を継いだ。当時大地主の貴族と（ジェントリ／郷紳）が地方行政や議会で重要な役割を演じ、その背後では商工業の発達により市民層が力を伸ばしていた。国王（ジェームズ1世）は神から授かった王権は人民に拘束されないという（王権神授説）を唱えたが、国民の間では国王が議会を無視して新税を取り立てたり少数の大商人に独占権を与えたりすることへの批判が強まり、また国教会の強制と価値観の相違により、イギリスのカルヴァン派である（ピューリタン）の不満も強まっていった。
28. 1628年、国王の専制政治を国民の歴史的な権利に基づいて批判した（権利の請願）が議会で可決されたが、翌年議会を解散した当時の国王（チャールズ1世）は、以後11年間議会を開かず専制政治を行った。しかし、同君連合の関係にあったスコットランドで1639年に反乱があったことから、鎮圧の戦費や賠償金費用捻出のために国王は40年に議会を招集した。
29. 1640年に開かれた議会の中で国王への反発が激化し、これをきっかけに（イギリス革命）[1640～1660年]が発生した。この革命はイギリスのカルヴァン派である（ピューリタン）が大きな役割を果たしたことから、（ピューリタン革命）とも呼ばれる。
30. 1640年、国王（チャールズ1世）は議会と開き、スコットランドの反乱鎮圧費を得るための増税案を提出すると、議会の拒否と非難を受け対立した。その後わずか3週間ですぐに議会を解散した。これを（短期議会）という。
31. 議会の解散後、同年に同国王がスコットランドへの賠償金支払いのために再度議会を招集、様々な改革を迫る議会と国王の間で対立が再燃し、議会は長期化し内乱へと至った。これを（長期議会）[1640～1653年]という。
32. 国王と議会の対立は、まず1642年に国王支持派の（王党派）と革命派の（議会派）が対立し内戦が起こった。また、革命を推進しようとする（議会派）は革命に勝利するも後に、
- a. 国王との戦いを徹底しようとする（独立派）[支持層：独立自営農民・商工業者等]
 - b. より穏健で立憲王政を目指す（長老派）[支持層：一部の貴族・非保守的ジェントリ・富裕商人等]
 - c. 急進的で、普通選挙による共和制を唱えた（水平派）[支持層：貧農・小作農・職人等]
- の3派へと分裂した。
33. この内、（独立派）に属する（クロムウェル）は（ピューリタン）[イギリスのカルヴァン派]を中心に構成された鉄騎隊を編成し、革命派を勝利に導いた。

34. 彼はその後議会から立憲王政を目指す（長老派）を追放し、1649年には国王（チャールズ1世）を処刑して共和制を打ち立てた。
35. 彼は更にその後、軍隊内で支持を広めていた急進的な主張を掲げる（水平派）を弾圧し、その上国王派の拠点となったとして（アイルランド）や（スコットランド）を征服した。この内、約2/3に渡る大規模な土地没収が強行された（アイルランド）は事実上植民地化された。
36. 同時に重商主義的な通商政策が推進され、1651年には、中継貿易で反映するオランダに打撃を与え、イギリス貿易の保護・促進を目的に（航海法）が制定された。これはイギリスとその植民地・ヨーロッパ諸国間の貿易において、イギリスか相手国の船を使用することを定めたものである。
37. 1651年に制定された（航海法）をきっかけにイギリスとオランダの間に（イギリス＝オランダ戦争／英蘭戦争）が勃発した。この戦争は1652～1654年の第1次、1665～1667年の第2次、1672年～1674の第3次と3回発生したが、全般的にイギリス優勢で終わった。以後衰退したオランダに変わってイギリスが海上権を握った。
38. 革命派を勝利に導いた（クロムウェル）は1653年に終身の（護国卿）となり、厳格な軍事独裁体制を敷いたが、国民の不満が高まり、彼の死後1660年に、革命時に処刑された先王（チャールズ1世）の子が国王（チャールズ2世）として迎えられた。これを（王政復古）という。
39. この国王は議会を尊重することを約束して国王となったが、その後専制的な姿勢をとって旧教のカトリックの擁護を試みたため議会と対立した。議会はこれに対抗して1673年に公武の公職就任者を国教徒に限定する（審査法）を制定して、さらに1679年には正当な理由のない逮捕・投獄を禁じる（人身保護法）を制定して市民の自由を保証した。
40. 議会は立法府として活性化し始め、1670年代末には
- a. 国王の権威を重んずる（トーリ党）[保守党の前身][支持者：国教会・地主]と、
 - b. 議会の権利を主張する（ホイッグ党）[自由党の前身][支持者：非国教徒・商工業者]
- という、今日の政党の起源となる二つの党派が誕生した。
41. 1660年に国王となった（チャールズ2世）の弟で王位を継いだ（ジェームズ2世）はカトリックと絶対王政の復活に努めたので、1688年に両党派はオランダ総督のウィレム3世を招いた。ウィレム3世は、国王の長女メアリの夫である。

42. 国王（**ジェームズ2世**）は抗戦を諦め亡命したため、1689年にウィレム・メアリ夫妻は議会在まとめた（**権利の宣言**）を受け入れて、（**ウィリアム3世**）と（**メアリ2世**）としてともに王位についた。なお、この事件はイギリスで大きな混乱や流血を伴うことなく人々の自由を守ったとして（**名誉革命**）と呼ばれている。
43. 議会は同年末に議会在まとめた宣言を（**権利の章典**）として制定した。これは国民の生命・財産の保護などを定めたもので、ここに議会主権に基づく立憲王政が確立された。
44. メアリの妹である（**アン女王**）治世中の1707年、イギリスとスコットランドは合同して（**大ブリテン王国**）となった。
45. 彼女の死によってステュアート朝が断絶したため、遠縁にあたるドイツの（**ハノーヴァー選帝侯**）が法律の規定に基づいて国王に迎えられ、（**ジョージ1世**）として即位し、（**ハノーヴァー**）朝を始めた。これは現在のイギリス王朝であるウィンザー朝の直接の祖である。
[1917年の第一次世界大戦中に、敵国ドイツ由来の名であることを理由に現在のウィンザー朝へ改名]
46. 1721年には（**ホイッグ**）党の（**ウォルポール**）が首相となり、その後内閣は国王にではなく議会に対して責任を負うという（**責任内閣制**）が形成された。
47. 政治制度が安定するとともに、1694年の（**イングランド銀行**）という中央銀行が創設されると国債制度も整備され、イギリスの対外戦争を遂行する能力は急速に高まっていった。
48. フランスでは、1661年に宰相を努めていたマザランの死後、国王（**ルイ14世**）が親政を開始し、強大な権力を振るって「太陽王」と呼ばれた。彼は、財務総監にコルベールを任命し、重商主義政策を展開するとともに、大規模な宮殿を（**ヴェルサイユ**）に建設した。
49. この国王は王権神授説を主張する（**ボシュエ**）を王太子の教育係としてなど重用しその影響を強く受けている。これは彼が言ったとされる（**朕は国家なり**）という言葉に現れている。なお、当時イギリスでは立憲議会政治の特徴を説明する（**王は君臨すれども統治せず**）という表現が使われていた。
50. この国王は領土拡大のために侵略戦争を度々起こしている。彼が起こした侵略戦争は以下の4つ。
- 南ネーデルラント継承戦争[1667～1668年]
 - （**オランダ戦争**）[1672～1678年]
 - （**ファルツ戦争／アウクスブルク同盟戦争**）[1688～1697年]
 - （**スペイン継承戦争**）[1701～1713・14年]

51. この内、1701年に発生した（スペイン継承戦争）は、スペイン王女を妃に持つこの国王が、1700年にスペイン＝ハプスブルク家が断絶した際に自身の孫をフェリペ5世として王位につけさせたため発生した。これに対してオーストリアのハプスブルク家が反対し、イギリス・オランダ・プロイセンなどと連合してフランスへ対抗した。
52. この戦争は1713年に（ユトレヒト条約）でイギリス・オランダ・プロイセンと和平を結び、翌14年にラシュタット条約で神聖ローマ帝国と和平を結んだ。1713年の（ユトレヒト条約）でスペイン・フランス両国は将来合併しないという条件でフェリペ5世のスペイン王位継承が各国に認めさせた。しかし、この戦争の代償としてイギリスが
- スペインから（ジブラルタル）と（ミノルカ島）
 - フランスから（ニューファンドランド）・（アカディア）・（ハドソン湾地方）
- を得ており、この戦争の実質的な勝利者はイギリスであったことを示している。
53. フランス国民は多額の戦費と宮廷費を賄う税金の負担に苦しみ、その上1685年にカトリックによる宗教統一を目指して（ナントの勅令／王令）が廃止され、フランスにおけるカルヴァン派の（ユグノー）の商工業者が大量に亡命したことで国内産業の発展も阻害された。
54. ドイツでは、1701年に王国へ昇格された（プロイセン）がオーストリアに次ぐ第2の強国としてヨーロッパの主権国家体制の一翼を担う存在に成長した。この国の第2代王（フリードリヒ＝ヴィルヘルム1世）は財政・行政を整えて軍備を増強して絶対王政の基礎を作り上げ、「兵隊王」と呼ばれた。
55. 1740年、オーストリアの（マリア＝テレジア）がハプスブルク家の全領土を継承したことにバイエルン選帝侯などが異議を唱え、その混乱に乗じてプロイセン国王（フリードリヒ2世／大王）は資源の豊富な（シュレジエン）を占領し、（オーストリア継承戦争）[1740～1748年]が勃発した。
56. この戦争はプロイセン側にバイエルン・ザクセン・フランス・スペインが、オーストリア側にはイギリスがついたが、プロイセン側が勝利を収め、1748年のアーヘンの和約でプロイセンの（シュレジエン）領有と（マリア＝テレジア）のハプスブルク家継承が認められた。
57. 数年後、アーヘンの和約で奪われた旧領（シュレジエン）の奪還を目指す（マリア＝テレジア）は、外交政策を転換して長年敵対関係にあったフランスと同盟した。これを（外交革命）という。
58. フランスに加え、ロシアとも同盟を結んだオーストリアは1756年～1763年にかけて再度プロイセンと争う。これを（七年戦争）という。この戦争ではオーストリア側にはフランス・スペイン・ロシアがつき、プロイセン側にはイギリスがついた。この戦争は176

2年のロシアの裏切りでプロイセン有利に傾き、その後1763年にフベルトゥスブルク条約で講和が成立、プロイセンが（シュレジエン）の領有を守った。

59. プロイセン国王（フリードリヒ2世／大王）は国力増強とともに、フランスの啓蒙思想家（ヴォルテール）をサンソーシ宮殿に招くなど、君主が主体となり上から啓蒙改革を進めていく（啓蒙専制主義）を行っていた。こうした君主を（啓蒙専制君主）という。彼の考えは、1740年に発刊された『反マキャベリ論』のなかで唱えられた（君主は国家第一の僕）という言葉に現れている。
60. この国王は、自らが主体となり上から啓蒙改革を進めていく君主である（啓蒙専制君主）の典型とされるが、彼らの統治は本質的には絶対王政的な体制であった。プロイセンの統治も農場領主制[グーツヘルシャフト]で富を得て、この国の官僚・軍隊の中心勢力として君主の権力を支えた（ユンカー）と呼ばれる領主層を支柱とする非近代的性格の強いものであり、農民の地位向上は進まなかった。
61. オーストリアでも、（マリア＝テレジア）がプロイセンとの戦争に備えて数々の内政改革を行い、さらにその子（ヨーゼフ2世）はプロテスタントやギリシア正教徒に信教の自由を認めた（宗教寛容令）や農奴の人格的自由を認めた（農奴解放令）など上からの近代化に努めた。

1. ロシアでは、1630～1671年に起こった（**ステンカ＝ラージン**）の農民反乱が鎮圧された後、帝位についた（**ピョートル1世／大帝**）が、自ら西欧諸国を視察し、これを模範に改革を進めた。
2. この皇帝のもとでロシアは軍備の拡大を背景にシベリア経営を進め、中国の清朝と（**ネルチンスク条約**）を結んで両国の境界を定めて通商を開き、南方ではオスマン帝国を圧迫して黒海北部の（**アゾフ海**）に進出した。
3. 同時バルト海を支配していたスウェーデンで、年少の（**カール12世**）が王位につくと、このロシア皇帝はポーランド・デンマークと結んでスウェーデンを攻撃した。これを（**北方戦争**）という。この戦争は当初スウェーデンが優勢だったが、ロシアが体制を立て直してスウェーデンを破り、バルト海の覇者となった。
4. この戦いの途中、1712年からバルト海沿岸に新たに建設された（**ペテルブルク**）がロシアの首都とされた。
5. 18世紀後半のロシア皇帝（**エカチェリーナ2世**）[在位：1762～1796年]は皇帝として即位した夫からクーデタで帝位を奪い、その後南方では（**クリミア半島**）をオスマン帝国から奪い、東方では（**オホーツク海**）まで進出し、日本にも使節として（**ラクスマン**）を送った。
6. ロシアではプロイセンと同様、近世になってから中世よりも農民の地位が悪化した。この皇帝も治世の初期には啓蒙専制君主として種々の改革を試みたが、1773～1775年に発生した（**プガチョフ**）の農民反乱のあとは貴族と妥協して、農奴性を強化した。
7. ポーランドでは16世紀後半にそれまでポーランドを支配していた（**ヤゲウォ／ヤゲロー**）朝が断絶すると、国会による国王選挙制度である（**選挙王制**）が始まるが、国内貴族と結んだ諸外国勢力の選挙干渉が起り、ポーランドの国力は衰退した。
8. プロイセンは1772年、オーストリアを誘ってロシアに（**ポーランド分割**）を提案し、3国はそれぞれの国境に近いポーランド領を奪った。
9. これに反発してポーランドでは憲法制定など国家の近代化が試みられたが、西ヨーロッパの国々の関心がフランス革命に向かうと、1793年プロイセンはロシアと2回目の（**ポーランド分割**）を強行した。
10. ポーランドの軍人（**コシューチコ／コシチューチコ**）率いる義勇軍の抵抗も失敗した後、3国は1795年に3回目の（**ポーランド分割**）を行い、ポーランドの残りの領土も分割した。これによりポーランド国家は消滅し、以降第一次世界大戦終結後までの1世紀以上に渡って外国支配のもとに置かれた。

11. インド航路を開拓したポルトガルは、1510年にインドの（ゴア）を占領して、これをアジア貿易の根拠地とし、それまで香辛料貿易を独占していたムスリム商人と競合しつつ、（スリランカ）・（マラッカ）・（モルッカ諸島）なども支配下に置いた。
12. 1517年、ポルトガルは広州に至って明に通商を求め、1557年には（マカオ）に居住権を得て、ここを拠点に対中国貿易を繰り広げた。
13. また、1543年にポルトガル人の乗った船が日本の（種子島）に漂着したのをきっかけに、彼らは（平戸）に来航し、17世紀初めまで日本と通商関係を持った。
14. スペインは、フェリペ2世時代にフィリピンを領有し、これをメキシコの（アカプルコ）と結んで（マニラ）を拠点としたアジア貿易を展開した。
15. オランダは、1602年に世界初の株式会社である（東インド会社）を設立してアジアに進出し、ジャワ島の（バタヴィア）[現在のジャカルタ]を根拠地にポルトガル商人を排除しつつ香辛料貿易の実権を握った。
16. さらに、1623年に発生した（アンボイナ事件）を転機にイギリスの勢力をインドネシアから締め出して、後のオランダ領東インドの基礎を固めた。なお、この事件は1623年にインドネシア東部の（アンボイナ）島で、オランダ商館襲撃の陰謀を理由にして、日本人雇用者9名を含むイギリス商館員20名を殺害した事件である。この事件の後イギリス勢力はインドネシアから撤退し、インドへ拠点を移す転機となった。
17. 加えて、オランダはアジアへの中継地として南アフリカ最南部に（ケープ植民地）を1652年に築いた。1624年～1661年までは（台湾）も占領していた。なお、この地のオランダ占領は1661年に（鄭成功）がオランダ勢力を駆逐し対清闘争の拠点とするまで続いた。
18. 1600年に（東インド会社）を設立したイギリスは、（ボンベイ）[現ムンバイ]・（マドラス）[現チェンナイ]・（カルカッタ）[現コルカタ]を基地として、盛んな通商活動を展開した。そして3回に渡る（イギリス＝オランダ戦争／英蘭戦争）を通じて17世紀末には海上貿易の覇権争いで優位に立った。
19. そのイギリスの最後の競争相手となったのがフランスである。17世紀初頭に創設されながら、まもなく活動を停止したフランスの（東インド会社）は1664年に再建されて、財務総監（コルベール）のもとでインドに進出し、（ボンディシェリ）と（シャンデルナゴル）を基地としてイギリスと対抗した。

20. 18世紀にイギリス・フランス両国は北アメリカなど世界の他地域でも衝突を繰り返しており、ヨーロッパで戦争が起こると、それは海外にも広がった。また、逆に海外での勢力争いがヨーロッパの国際政局にも影響を与えていた。1756年～1763年にオーストリア・プロイセンを主軸に、フランス・イギリスなど諸国が参戦して発生した国際戦争である（七年戦争）の際、インドではイギリス東インド会社の傭兵軍を率いた（クライン）がフランスと地方政権の連合軍を1757年の（プラッシーの戦い）で打ち破り、イギリス領東インドの基礎を築いた。
21. ポルトガル領となったブラジルを除いて、ラテンアメリカの大半を植民地化したスペインは、アメリカ大陸の先住民と西アフリカから移入した黒人奴隷を働かせ、鉱山の開発に努めて莫大な金・銀を独占したが、その後オランダなどの新興国の攻撃でスペインの地位は低下していった。17世紀になると、オランダが1621年に（西インド会社）を設立し、アフリカ西岸とアメリカとの通商に乗り出した。オランダは北アメリカ東岸に（ニューネーデルラント植民地）を領有して、中心都市（ニューアムステルダム）を建設した。
22. フランスは17世紀初頭以来（ケベック）を中心にカナダへ進出し、さらにルイ14世時代には広大な（ルイジアナ）を手に入れた。
23. イギリスは17世紀初頭、北アメリカ東岸に最初の植民地（ヴァージニア）を設けた。その後、多くのピューリタンが本国での迫害を逃れて北アメリカに移住し、（ニューイングランド植民地）が形成された。これは1620年にピューリタンの一団（ピルグリム＝ファーザーズ）が帆船の（メイフラワー号）でアメリカに渡り、プリマスに定住して基礎を作ったものである。
24. 17～18世紀前半までにはイギリスは大西洋岸に（13）の植民地が南北に並ぶ形となった。
25. 18世紀にはイギリスとフランスの戦いが繰り返された。イギリスは1701年～1713・14年の（スペイン継承戦争）の結果、フランスから北アメリカの領土であるハドソン湾地方を獲得し、更にその後オーストリア継承戦争ではフランスの兵力をヨーロッパ内に留めておくため、マリア＝テレジアを援助した。
26. 北アメリカではその後、1756年～1763年の（七年戦争）と並行して、（フレンチ＝インディアン戦争）[1754～1763年]と呼ばれるイギリスとフランスの植民地戦争が戦われた。この戦争に勝利したイギリスは、1763年の（パリ条約）で
- （カナダ）
 - （ミシシッピ川以東のルイジアナ）
 - （フロリダ）
 - 西インド諸島の一部
 - （セネガル）

を獲得した。フランスは逆にミシシッピ川以西のルイジアナをスペインに譲渡したので、北アメリカにおける領土をすべて失い、ここにイギリス植民地帝国の基礎が据えられた。

27. アフリカでは、中世以来ムスリム商人が奴隷貿易を行っていたが、それは彼らのインド洋貿易の一部であった。ところが、ポルトガル人によるアフリカ西海岸の探検以来、西欧諸国による大西洋ルートの（**黒人奴隷貿易**）が始まった。
28. 16世紀に西インド諸島やラテンアメリカのスペイン植民地において、過酷な労働と伝染病のために先住民の人口が激減すると、主にギニアを中心として、アフリカの黒人を輸入して使役するようになった。さらに、17世紀にアメリカ大陸や西インド諸島でサトウキビ・タバコ・綿花などの大農園（**プランテーション**）が盛んになると、ますます大量のアフリカの黒人奴隷が求められるようになった。アフリカ大陸西岸[現ベナン]の黒人国家（**ダホメ王国**）や現在のナイジェリア西部で繁栄した（**ベニン王国**）などの黒人国家がヨーロッパ商人に奴隷を供給していた。
29. こうした奴隷貿易は、ヨーロッパから武器や雑貨などをアフリカに送り、それと交換で得た奴隷をアメリカ大陸・西インド諸島に送り込んで、そこから砂糖・綿花・タバコ・コーヒーなどの農産物をヨーロッパに持ち帰って売りさばくという（**三角貿易**）の一環として行われた。
30. 17世紀のヨーロッパは（**科学革命**）の時代と呼ばれるほど、近代的合理主義の思想や学問が本格的に確立されて、自然界の研究が進歩した。なお、これは16世紀のコペルニクスを嚆矢とし、17世紀に本格化した。
31. 天体運動の観察から出発して、物体は常に互いを引き合っているとす（**万有引力の法則**）を発見した（**ニュートン**）はこの時期を代表する自然科学者である。
32. また、事実の観察を重んじ、そこから一般法則を導く（**帰納法**）による（**経験論**）を解いたイギリスの（**フランシス＝ベーコン**）や、前提を立て、そこから論理的に結論を導き出すという数学的な論証法を用いる（**演繹法**）による（**合理論**）を打ち立てたフランスの（**デカルト**）らが近代哲学への道を開いた。
33. この内、フランスの（**デカルト**）の言葉（**われ思う、ゆえにわれあり**）は真理探求の出発点としてまず一切を疑ってみるといふ彼の方法をよく示している。
34. 自然科学の発達を支えた旺盛な探究心は、やがて人間社会の考察にも向かい、近代的な（**自然法思想**）を産んだ。これは人間の本性に基づく不変の法で、この思想によれば国家の起源は自然状態における自由・平等な個人が自発的に取り結ぶ契約に求められた。人為的に作られる実定法の上位にあるとされ、生存権・自由権・抵抗権が例として挙げられる。

35. オランダの（グロティウス）は、この思想を国家間の関係に適用して、「国際法の祖」となった。
36. イギリスでは、（ホブズ）が自然状態を「万人の万人に対する戦い」と捉えて国家主権・国王特権の絶対性を結論づけた。
37. これに対して、名誉革命の時代に生きたイギリスの（ロック）は、不法な統治への人民の反抗の権利を擁護した。
38. イギリスの経験論と大陸の合理論は、18世紀末のドイツの哲学者（カント）によって統合された。彼は、人間の認識能力に根本的な反省を加えて、（ドイツ観念論）を確立した。
39. 17～18世紀の自然科学と哲学・社会科学に関する人物名を答えなさい
- a. （ケプラー）[ドイツ]・・・惑星運行の法則
 - b. （ハーヴェー）[イギリス]・・・血液循環説
 - c. （ボイル）[イギリス]・・・気体力学
 - d. （ニュートン）[イギリス]・・・（万有引力の法則）・『プリンキピア』
 - e. （リンネ）[スウェーデン]・・・植物分類学
 - f. （ラヴォワジエ）[フランス]・・・燃焼理論
 - g. （ジェンナー）[イギリス]・・・種痘法[天然痘の予防接種]
 - h. （ラプラス）[フランス]・・・宇宙進化論
 - i. （フランシス＝ベーコン）[イギリス]・・・『新オルガヌム』
 - j. （デカルト）[フランス]・・・『方法序説』
 - k. （パスカル）[フランス]・・・『パンセ[瞑想録]』
 - l. （スピノザ）[オランダ]・・・『倫理学』
 - m. （ライプニッツ）[ドイツ]・・・『单子論』
 - n. （グロティウス）[オランダ]・・・国際法の祖・『海洋自由論』・『戦争と平和の法』
 - o. （ホブズ）[イギリス]・・・『リヴァイアサン』
 - p. （ロック）[イギリス]・・・『統治二論[市民政府二論]』
 - q. （カント）[ドイツ]・・・『純粋理性批判』

40. 合理的な知を重んじて、社会の偏見を批判する立場はすでにルネサンス期に見られたが、科学革命を経て18世紀には、一層大きな潮流となった。この、理性を絶対視し、理性という光で従来の慣習・制度・社会の問題点を批判・否定し、新たな合理的思想を展開する懐疑的態度を（**啓蒙思想**）と呼ぶ。
41. これは特にフランスで有力であり、著書『法の精神』でイギリスの憲政を讃えた（**モンテスキュー**）、カトリック教会を批判し、著書『哲学書簡[イギリス便り]』でイギリスを賛美した（**ヴォルテール**）がいる。
42. 上の2人に少し遅れて、（**ルソー**）が現れた。彼は著書に、自然状態では人間は平等であるが、私有の開始が不平等を発生させ、貧者対富者の戦いを経て不平等が確立されたと主張する（**人間不平等起源論**）、自然状態で各人が有する平等権・自由権の確保を目的に、各人が契約で政府を構成すべきこと、その際の人民主権の原則を打ち出した（**社会契約論**）を残している。共通して彼は、他の啓蒙思想家が一般に文明の進歩を讃えたのに対して、人間の自然的な善性を信じて文明化の害悪を指摘している。
43. フランスの（**ディドロ**）と（**ダランベール**）が編集した（**百科全書**）は、フランス啓蒙思想家たちの思想を集大成した百科事典で、啓蒙主義精神にのっとり科学・技術や哲学・思想・宗教などを紹介し社会的反響を呼んだ。
44. ドイツ・オーストリア・ロシアなどでは、こうした啓蒙思想が絶対王政と結びついて、君主主導で改革を進める体制である（**啓蒙専制主義**）を生み出した。
45. 啓蒙思想は経済の領域にも適用され、重商主義による国家規制の強かったフランスでは、農業を唯一の富の源泉とみなし、（**経済表**）を著した（**ケネー**）や、ルイ16世治世下の財務総監で、ギルド廃止・穀物取引の自由化・地租徴収など自由主義的政策や新たな課税を実施した（**テュルゴー**）の（**重農主義**）の理論を産んだ。これは、富の源泉は農業であるとみなし、経済活動の自由放任を主張するものである。
46. いち早く産業革命の始まったイギリスでは、（**アダム＝スミス**）が著書の（**諸国民の富／国富論**）で富の源泉を農工商の生産労働に置き、自由放任主義が富の蓄積に有効とし、「見えざる手」による市場経済の自然調和を説いた。これを（**古典派経済学**）という。
47. 17～18世紀のヨーロッパ文化、特に芸術は、君主の宮廷生活との結びつきを強め、彼らの権威を誇示するのに役立てられた。それを最もよく示すものは、17世紀のスペインやフランスで完成され18世紀初めまで西欧で栄えた美術・建築様式である、豪壮華麗な（**バロック美術**）である。これはルネサンスの調和・均整の重視に対して、光と影のコントラストの重視や豊満な肢体の描写など、躍動的で劇的な表現を特徴とする。代表的建築物はルイ14世の命で建築された（**ヴェルサイユ宮殿**）である。

48. 絵画では、フランドル派の（ルーベンス）やその門弟（ファン=ダイク）が名高く、代表作に『オルガス伯の埋葬』を持つスペインの（エル=グレコ）・『ラス=メニーナス』の（ベラスケス）・ムリリョらも数々の肖像画や宗教画で宮廷を飾った。
49. また、文学ではルイ14世時代のフランスに、
- 悲劇作家の（コルネイユ）[代表作：ル=シッド]
 - 悲劇作家の（ラシーヌ）[代表作：アンドロマック・フェードル]
 - 喜劇作家の（モリエール）[代表作：人間嫌い・守銭奴]
- らが出て、規則と調和を重んずる（古典主義）の作品を産んだ。
50. また、1635年にリシュリューが創設した学術団体である（フランス学士院／アカデミー）はフランス語の統一と純化などを目指し、フランス語はヨーロッパ諸国の上流社会で広く用いられた。
51. 18世紀になると、それまで栄えた（バロック）美術に代わり、フランスの（ワトー）に見られるような、繊細優美な（ロココ美術）が広まり、王侯貴族や富裕市民に愛好された。この様式の建築として名高いのは、プロイセンのフリードリヒ2世がポツダムに建てた（サンスーシ宮殿）である。
52. また、この頃（バッハ）・（ヘンデル）・（モーツァルト）らによって古典派音楽が完成された。
53. 商工業が盛んになっていった17～18世紀には、豊かな市民がその数を増し、社会的な重要性を高めた。彼らは文化の担い手としても大きな影響力を持つようになり、その好みを繁栄した文化が出現した。1581年の独立後のオランダでは、（レンブラント）が著作（夜警）に代表されるような明暗を強調する画報によって市民の力強さを表現し、17世紀後半のイギリスには『失樂園』を著した（ミルトン）や『天路歷程』を著した（バンヤン）などのピューリタン文学が生まれた。
54. 世界の一体化が進むとともに、西欧諸国では「生活革命」が起こり、多くの人々が海外からのタバコ・茶・砂糖・コーヒーなどの新奇な商品を盛んに消費するようになった。これらはヨーロッパに紹介された当初は貴族に独占されていたが、豊かになった市民層は日常の消費生活の面でも貴族を真似ることができるようになり、現代につながる生活文化を形作っていくことになった。すでに18世紀のロンドンには（コーヒーハウス）やクラブ、そしてパリには（カフェ）のような、人々が自由に交流することのできる場が数多く形成されていた。

55. 市民の人気を博した文学作品は、彼らが生きた社会の現実をよく反映している。18世紀前半のイギリス小説家として知られる（デフォー）が無人島での生活を描いた（ロビンソン＝クルーソー）と、アイルランドの（スウィフト）の風刺小説（ガリヴァー旅行記）は、いずれも当時盛んであった航海を伴う貿易・植民活動を背景に書かれたものであった。

1. 農業基盤の社会から工業を基礎とした資本主義経済体制への移行と、それにともなう社会の変化を（産業革命）という。これは18世紀後半のイギリスではじめに起こり、その後19世紀以降各国に広まった。
2. イギリスは国家が重商主義政策を取り、17世紀後半にオランダを、18世紀にフランスを抑えて広大な海外市場を確保した。市場向け生産を目指す農業が発達し、産業革命期に急増する都市人口を支えた。大地主は中小農民の土地や村の共同地をあわせて大規模な農地を作った。これを（第2次囲い込み）という。その後大地主はこれらの土地を進んだ技術を持った農業資本家に貸し出して経営させた。これを（農業革命）という。
3. イギリスにおける、拡大する市場に向けての大量生産を可能にする技術革新は、まず（綿工業）の分野でマンチェスターを中心に始まった。従来のイギリスの主な工業は（毛織物業）であったが、17世紀末にはインドから輸入された、より軽い綿布の需要が高まった。綿布と、その原料である綿花は、大西洋の三角貿易で重要な商品となり、その結果（綿工業）がイギリス国内に発達した。
4. 1733年、（ジョン=ケイ）によって織布用具の（飛び杼/梭）が発明されると、綿織物の生産量が急速に増えて綿糸が不足した。
 - a. その結果、1764年頃に（ハーグリーブス）による（多軸紡績機/ジェニー紡績機）
 - b. 1769年に（アークライト）の（水力紡績機）
 - c. 1779年に（クロンプトン）の（ミュール紡績機）などが次々と発明され、良質の綿糸が大量に生産されるようになった。
5. そこで再び織物機械の改良が促され、1785年、（カートライト）により（力織機）が発明された。
6. また、18世紀初めに（ニューコメン）が蒸気力によるポンプを発明していたが、1769年に（ワット）が（蒸気機関）を改良すると、これが水力に代わって紡績機などの動力として利用され、生産効率をさらに高めた。
7. こうした紡績・織布・動力の諸部門における発明は綿工業を繁栄させ、資本家は多数の労働者を雇用する機械製の大工場の経営に乗り出した。それにともなって、機械を製造する（機械工業）、機械の原料である鉄を作る（鉄工業）などの他の部門も飛躍的な発達を遂げた。
8. 製鉄法は石炭を空気と遮断した状態で燃焼させるという（コークス製鉄法）を（ダービー）親子が開発し、鉄の大量生産を可能にした。
9. 大規模な機械成功業が発達すると、大量の原料・製品・石炭などをできるだけ早く安く輸送するため、交通機関の改良の必要が生まれた。18世紀後半には国内の輸送路として（運河網）が形成されたが、19世紀に入ると（鉄道）がこれにかわった。

10. (スティーヴンソン) により 1814 年に制作された蒸気機関車は 25 年に実用化され、1830 年には (マンチェスター・リヴァプール) 間の旅客鉄道が開通した。こうして鉄道は公共の陸上の輸送機関として急速に普及した。
11. また、1807 年にはアメリカ人 (フルトン) が蒸気船を試作した。
12. こうして 19 世紀には交通・運輸の一大変革である (交通革命) が起こり、世界各地を結ぶ産業・貿易・文化の交流発展に貢献した。
13. 産業革命の結果、イギリスは良質で安価の工業製品を大量にヨーロッパ内外の市場で売り捌き、(世界の工場) と呼ばれる地位を獲得した。後にイギリスが機械技術の輸出を解禁すると、
 - a. (ベルギー) は 1831 年以降にイギリスについて産業革命を成し遂げる。
 - b. (フランス) は 1830 年の七月革命をきっかけにリヨンを中心とした絹織物工業を中心に産業革命が始まる。
 - c. ドイツでは 1834 年にドイツ関税同盟により国内市場の統合が進み、その後 40 年代に産業革命が本格化する。
 - d. (アメリカ) は 1830 年代から北部の工業化が本格化し、80 年代に世界最大の工業国となる。
 - e. (ロシア) では 1861 年の農奴解放令や 94 年の露仏同盟完成後のフランス資本導入により 90 年代から産業革命が始まる。
 - f. (日本) は政府の殖産興業政策を背景に、1890 年代半ば以降に綿織物分野から工業化が始まり、軽工業を中心に進展した。
14. 産業革命によって、人力や動物の力ではなく機械を利用して生産を行う大規模な (機械製工場) が出現すると、大量生産で安価な商品が供給され始め、従来の家内工業や手工業は急速に没落した。
15. 一方で、大工場を経営する (資本家／産業資本家) は経済の大勢を左右するようになり、社会的地位を高めた。こうして、生産手段を有する企業や個人が資本を投下し、労働者を雇って商品を生産・流通させ、資本の拡大を追求する経済システムである (資本主義体制) が確立した。
16. 産業革命の結果、都市への人口集中が起こり、例えば
 - a. (マンチェスター) ・ (バーミンガム) のような大工業都市や
 - b. (リヴァプール) のような大商業都市が生まれた。
17. 大規模な工場で働く (労働者) 階級の人々は規律正しくは働くことを求められるようになり、また団結する機会が増えたことで、労働条件の維持・改善のために (労働組合) を結成した。
18. (女性) や (子供) も鉱山や工場で働くことが可能になったが、当時の資本家の多くは利潤の追求を優先し、劣悪な環境下で長時間・低賃金な労働を強制した。その為しばしば対立が発生した。こうした産業革命による社会の変化が生み出した諸問題を (社会問題) という。

19. 北アメリカの大西洋岸にイギリス人が建設した（13）の植民地では、1619年に（ヴァージニア）で最初の植民地議会が開設されたように、一定の自治が認められていた。
20. （北部）は自営農民や自営の商工業者が多く、特に信仰の自由を求めて移住したピューリタンが多かった（ニューイングランド）では本国に対する対抗意識が強かった。
21. 対して（南部）では黒人奴隷を使用して、タバコや米を栽培する大農園（プランテーション）が拡大した結果、北部と南部では生産や労働の形態に地域差が見られた。
22. また、土地をめぐる先住民との戦闘も続いていたため、イギリス国王は1756～1763年の（七年戦争）[並行して北アメリカでは（フレンチ＝インディアン戦争）が起きていた]後には植民地人の居住地域を（アパラチア山脈）以東の地域に限定する命令を出した。
23. イギリス本国は国家が経済に介入し自国を富ませる（重商主義）を採っていたため、本国の商工業を保護する目的で植民地の自由な貿易や工業の発展を抑えようとした。その上、1756～1763年の（七年戦争）が原因で発生した財政赤字を軽減するために植民地への課税強化を図った。
24. このため、植民地人の不満が高まり、1765年にあらゆる印刷物に課税する（印紙法）が制定されたときは、植民地の代表を含まない本国議会には植民地への課税を決定する権限はないという、（代表なくして課税なし）の主張が唱えられた。
25. 1773年にイギリス東インド会社が植民地で販売する茶を免税とした（茶法）が定められると、この法に対する住民の怒りが（ボストン茶会事件）を引き起こした。これに対し本国政府は（ボストン港）を閉鎖するなど強硬な姿勢を取った。
26. 1774年、植民地側は（大陸会議）を開いて本国に自治の尊重を要求したが、翌75年には（レキシントン）と（コンコード）で武力衝突が起こり、アメリカ独立戦争が始まった。
27. 植民地側は（ワシントン）を総司令官に任命して戦い、1776年7月4日、（13）の植民地の代表は（フィラデルフィア）で独立宣言を発表した。この宣言は、『統治二論／市民政府二論』で圧政への抵抗権を主張したイギリスの（ロック）らの主張を参考にして、（トマス＝ジェファソン）らが起草した。
28. 植民地には独立派の他、国王への忠誠派や中立派も存在していたが、1776年初めに出た（トマス＝ペイン）の著書（コモン＝センス）は独立を「常識」であることと宣言し、大きな反響を呼んだ。

29. 独立軍は当初苦戦したが、イギリスと対抗していたフランスが1778年に、同じくイギリスと対抗していたスペインが1779年に参戦し、加えてロシアのエカチェリーナ2世が提唱し結成された（**武装中立同盟**）が中立国の自由な航行・交戦国の物資積載の自由を主張し間接的に独立軍を援護するなどあり、次第に優勢となった。
30. フランスの（**ラ＝ファイエット**）やポーランドの（**コシュージコ／コシチュージコ**）など、独立軍に進んで参加したヨーロッパ人もいた。
31. こうして1781年の（**ヨークタウン**）の戦いに敗れたイギリスは、1783年の（**パリ条約**）でアメリカ合衆国の独立を承認し、ミシシッピ川以東の広大な領地を譲った。
32. このアメリカ合衆国という国名は、独立を宣言した（**13**）の州が1777年のアメリカ合衆国初の成文憲法である（**連合規約**）で採用したものである。
33. アメリカ合衆国は独立したものの、まだ（**13**）の独立した州の緩い連合に過ぎず、中央政府の権力は弱かった。このため反乱などが相次いだことにより、強力な中央政府を樹立しようとする働きが強くなり、1787年フィラデルフィアで開かれた（**憲法制定会議**）で（**アメリカ合衆国憲法**）が作られた。
34. この憲法では、人民主権を基礎とした共和制の採用を決定し、各州に大幅な自治を認めながらも、中央政府の権限を強化する（**連邦主義**）を採用した。
35. この憲法では、合衆国の行政権は（**大統領**）率いる政府が握り、立法権は連邦議会にあり、司法権は最高裁判所が行使するという形で相互に抑制しあい権力の乱用を避ける（**三権分立**）の原則を定めた。
36. なお、連邦議会は各州2名ずつの代表からなる（**上院**）と人口比で代表が選出される（**下院**）から成り立っている。この内、（**上院**）には条約の批准権などが与えられた。
37. この憲法を支持し、連邦政府の権限強化を主張する（**連邦派**）とこの憲法に批判的で各州の自治権や権限の維持を主張する（**反連邦派**）の対立があり、のちに政党対立に発展した。
38. 1789年、この憲法に基づく連邦政府が発足し、（**ワシントン**）が初代大統領に就任した。この政権では、憲法を支持する（**連邦派**）のハミルトンを財務長官に、憲法に反対する（**反連邦派**）の中心人物である（**トマス＝ジェファソン**）を国務長官に任命した。
39. このアメリカ独立革命を、フランス革命やラテンアメリカ諸国の独立などとともに、大西洋を挟んで18世紀後半から19世紀初めに起こった（**大西洋革命**）として一括して捉える見方もある。

40. アメリカの独立革命に続いて、有力な絶対王政の国であったフランスで、16世紀から続いた（旧制度／アンシャン＝レジーム）を覆す革命が起こった。
41. 革命以前の国民は、聖職者が（第一身分）、貴族が（第二身分）、平民が（第三身分）と区別されていた。なお、人口の9割以上は平民の（第三身分）であった。
42. 各身分の中にも貧富の差はあったが、特に平民の（第三身分）ではその大部分を占める（農民）が領主への地代や税の負担のために苦しい生活を送る一方、商工業者などの（有産市民／ブルジョワ）は次第に富を蓄えて実力を向上させ、その実力にふさわしい待遇を受けていないことに不満を感じていた。
43. そこに啓蒙思想が広まり、1789年初めには（シェイエス）が（第三身分とは何か）という小冊子で平民たち（第三身分）の権利を主張した。
44. （フランス革命）は王権に対する貴族の反抗をきっかけに始まったが、商工業者など富を蓄えた（有産市民／ブルジョワ）が旧制度を廃棄して、その政治的発言力を確立する結果となった。
45. イギリスとの戦争を繰り返したフランスの国家財政は行き詰まり、国王（ルイ16世）は（テュルゴー）・（ネッケル）らの改革派を起用して、特権身分に対する課税などの財政改革を試みた。なお、この国王の妃はマリー＝アントワネットである。
46. 財政改革に対して特権身分が抵抗したため、ルイ13世治世の1615年以来開かれていなかった（三部会）が開かれることになった。
47. 1789年5月、ヴェルサイユで（三部会）が開かれたが、特権身分は1身分1票を持ち身分別に審議する議決方法である身分別議決法を主張したのに対し、平民を中心とする（第三身分）は特権身分の議員数と自分たちの議員数がほぼ同数であることから一人1票を投ずる個人別票決を主張し、議決方法をめぐって対立した。
48. 1789年6月、第三身分の議員は、自分たちが真の国民代表であると宣言して（国民議会）を開き、これを憲法制定まで解散しないことを誓った。これを（球戯場の誓い／テニスコートの誓い）という。この議会設立には自由主義的貴族の（ミラボー）が大きく貢献した。
49. これに特権身分からも同調者が現れると、国王も譲歩してこうした動きを認めた。しかし、まもなく国王と保守的な貴族は武力で排除しようとした。この頃パンの値上がりに苦しんでいたパリの民衆は国王や貴族に反発して、圧政の象徴とされたパリの（バスティーユ牢獄）を1789年7月14日に攻撃した。この事件後、全国的に農民蜂起が起こり、貴族領主の館が襲撃された。
50. 第三身分を中心に開かれた（国民議会）は1789年8月4日に自由主義的貴族の提案で（封建的特権の廃止）を決定し、農奴制や領主裁判権、十分の一税などを無償廃止した。

51. また、1789年8月26日、議会は（ラ＝ファイエット）らが起草した（人権宣言／人間および市民の権利の宣言）を採択した。この宣言はすべての人間の自由・平等・主権在民・言論の自由・私有財産の不可侵など近代市民社会の原理を主張するものであった。
52. 1789年10月初め、女性を先頭にしたパリの民衆は（ヴェルサイユ）に行進し、改革に否定的な王家をパリに移住させた。
53. 1790年に度量衡単位の統一が宣言され、1795年にパリを通る子午線の4000万分の1を1（メートル）とする（メートル法）が制定された。
54. 1791年9月、一院制の立憲君主制、納税額による制限選挙などを定めたフランス初の憲法である（1791年憲法）が制定された。この制定をもって国民議会は解散となった。
55. この直前である1791年6月には国王一家が王妃の故国オーストリアへの逃亡を企てた（ヴァレンヌ逃亡事件）を起こしており、すでに国王派からも見限られ、国民からの信頼は失墜していた。
56. 1791年に10月には、9月に制定された憲法に基づいて（立法議会）が開かれた。ここでは、
 - a. 革命のこれ以上の進行を望まない（立憲君主派）と
 - b. 大商人の利害を代表して共和制を主張する（ジロンド派）が対立した。
57. 革命のこれ以上の進行を望まず、憲法に基づく君主制を主張する（立憲君主派）の中心派閥は（フイヤン派）と呼ばれる。
58. 1792年春には（ジロンド）派が政権を握り、革命に敵対的な（オーストリア）に宣戦した。
59. しかし、フランス軍には王党派が多数含まれていて戦意に欠け、逆にオーストリア・プロイセン連合軍がフランス国内に侵入した。この危機に際し、パリの民衆と全国から集まった自発的な志願兵である（義勇軍）は1792年8月、国王がいた（テュイルリー宮殿）を襲い、王権を停止させた。これを（8月10日事件）という。
60. なお、現在のフランス国家（ラ＝マルセイエーズ）はこの頃マルセイユからきた義勇軍によって歌われた軍歌に由来している。
61. 1792年9月には1791年10月に開かれた（立法議会）に代わり新たに男性普通選挙による（国民公会）が成立し、王政の廃止・共和制の樹立が宣言された。
62. 1792年～1804年の（ナポレオン＝ボナパルト）の皇帝即位までのフランス初の共和政体制期間を（第一共和政）という。
63. 1792年9月に新たに開かれた（国民公会）では、（ロベスピエール）を中心とする急進的共和派の（ジャコバン）派が力を増した。彼らは1793年1月にルイ16世を処刑し、1793年6月には商工業者を中心とする穏健共和派の（ジロンド）派を議会から追放、さらに都市の民衆や農民の支持を確保するための政策として、

- a. 男性普通選挙を定めた（1793年憲法）
 - b. （封建地代の無償廃止）
 - c. 亡命貴族から没収した土地の競売
 - d. （最高価格令）による強力な価格統制などを制定した。
64. 急進的共和派の（ジャコバン）派は、内覧や国外戦争への迅速な対応を目的とし行政権など強大な権力を持つ（公安委員会）の指導権を握り、国民の兵役を義務とした（徴兵制）の実施、1792年9月22日を第1年第1日とする（革命暦）の制定など急進的な施策を強行する一方、反対派を多数処刑するなど独裁的な（恐怖政治）を行った。
65. こうした革命の動きがイギリス国内に波及することを恐れたイギリス首相（ピット）は、フランス軍がベルギー地方に侵入したのに対抗してフランス包囲の大同盟（第1回対仏大同盟）を形成した。
66. このためフランスは全ヨーロッパを敵に回すこととなり、国内でも西部地方で王党派と結びついた農民による反革命反乱（ヴァンデーの反乱）が広がった。
67. その後外敵からの脅威が遠のくと、少土地所有農民や経済的自由を求める市民層が保守化し、（ジャコバン）派による独裁政治への不満が高まった。独裁政治の中心であった（ロベスピエール）はパリの民衆の支持を失って孤立し、1794年9月に発生した（テルミドル9日のクーデター）で処刑された。
68. なお、ルイ16世などこの時期に罪人・反政府人物を処刑する際には（ギロチン／断頭台）が用いられた。
69. 独裁政治を敷いていた（ジャコバン）派が失脚した後、穏健共和派が有力となり、1795年には制限選挙を復活させた（1795年憲法）を制定し、独裁を防ぐために5人の総裁からなる（総裁政府）が樹立された。
70. しかし、1796年5月に私有財産の廃止を唱えて政府転覆を画策した（バブーフ）が死刑に処されるなど、社会不安は続いていた。
71. こうした不安定な情勢に対し、革命ですでに利益を得た有産市民層や農民は社会の安定を望んでいた。こうした状況のもと、混乱を収める力を持った軍事指導者として（ナポレオン＝ボナパルト）が頭角を現した。
72. この人物は1796年、（イタリア）遠征軍司令官としてオーストリアを破って軍隊と国民の間に名声を高め、さらに1798年には敵国イギリスとインドの連絡を断つ目的で（エジプト）に遠征した。なお、この遠征中である1799年に（ロゼッタ＝ストーン）が発見された。これは1822年にシャンポリオンによって解読された石板である。

73. 1799年までにイギリスがオーストリア・ロシアなどと（第2回対仏大同盟）を結んでフランス国境を脅かすと、5人の総裁からなる（総裁政府）は国民の支持を失った。
74. （ナポレオン＝ボナパルト）は、1799年11月に遠征から帰国した後、従来の政府を倒し、3人の統領からなる（統領政府）を立て、自らはその第一統領として事実上の独裁権を握った。この一連の出来事を、（ブリュメール18日のクーデター）と呼ぶ。1789年以来、10年間に及んだフランス革命はここに終結した。
75. 自由と平等を掲げたフランス革命は、それまで身分・職業・地域などによって分けられていた人々を、国家と直接結びつけた市民[国民]に変えようとした。革命中に実行された様々な制度改革と革命防衛戦争を通じて、フランス人の国民としてのまとまりは強まった。こうした、国民のまとまり、およびそれを基盤とする国家に対する帰属意識を（国民意識）という。そして、この意識をもった平等な市民が構成する国家を（国民国家）という。

1. 事実上の独裁権を握ったナポレオン＝ボナパルトは、革命以来フランスと対立関係にあった教皇ピウス7世と1801年に和解した。これを（**宗教協約／コンコルダート**）という。
2. また翌年1802年にはイギリスとも講和した。この時の講和条約を（**アミアンの和約**）という。
3. こうして外敵からの安全を確保したナポレオンはさらに、フランス銀行を設立して財政の安定を図り、商工業を奨励し、公教育制度を確立した。さらに、1804年3月に、私有財産の不可侵や法の前の平等、契約の自由など革命の成果を定着させる民法典（**ナポレオン法典／フランス民法典**）を公布した。
4. ナポレオンは1802年に終身の行政職である（**終身統領**）となり、その後1804年5月、国民投票で圧倒的支持を受けて皇帝に即位し、（**ナポレオン1世**）と称した。
5. ナポレオンの皇帝即位後、失脚するまでの1804～1814・15年の政治体制を（**第一帝政**）という。
6. 1805年、ナポレオン率いるフランスに対抗するため、イギリスのピットの提唱により、イギリス・ロシア・オーストリア間で（**第3回対仏大同盟**）という軍事同盟が結ばれた。
7. 1805年10月にはイギリスの海軍提督（**ネルソン**）率いるイギリス海軍がフランス海軍を（**トラファルガーの海戦**）で破った。
8. 海戦では敗れたものの、ナポレオンはヨーロッパ大陸ではオーストリア・ロシアの連合軍を（**アウステルリッツの戦い／三帝会戦**）で破った。
9. 1806年にナポレオンは、自らの保護下にバイエルンなど西南ドイツ諸国を合わせて（**ライン同盟**）を結成した。なお、この際にオーストリア皇帝フランツ2世は神聖ローマ帝国皇帝の地位を放棄したため、962年のオットー1世即位から始まる神聖ローマ帝国は名実ともに消滅した。
10. ナポレオンはさらに1807年にプロイセン・ロシアの連合軍を破り、（**ティルジット条約**）を結んだ。この中で旧ポーランド領に（**ワルシャワ大公国**）を建てた。
11. さらにナポレオンは1806年にベルリンで（**大陸封鎖令**）を出した。これは諸国にイギリスとの通商を禁じ、イギリス経済に打撃を与え、フランス産業による大陸市場の支配を目的に行われたが、イギリス市場を失った諸国の不満が募り、ポルトガル・ロシアの離反を招いた。

12. ナポレオンは自らの兄弟をスペイン王やオランダ王などの王につけ、自らはハプスブルク家の皇女を妻にするなどその勢力は絶頂に達したが、被征服地域では外国支配に反対して民族意識が成長していた。まず、1808年～14年に（スペイン）で反乱が発生した。
13. さらにプロイセンでは思想家の（フィヒテ）が「ドイツ国民に告ぐ」という講演で愛国心を鼓舞し、（シュタイン）や（ハルデンベルク）らが農民開放などの改革を行った。
14. ナポレオンはイギリスとの通商を禁じる（大陸封鎖令）を無視して（ロシア）がイギリスへ穀物を輸出すると、1812年に（ロシア）へ遠征をしたが、失敗に終わった。これをきっかけに、翌年1813年に諸国は解放戦争に立ち上がり、（ライプツィヒの戦い／諸国民戦争）でナポレオンを破り、1814年にパリを占領した。
15. ナポレオンは退位して（エルバ島）へ流され、ルイ16世の弟（ルイ18世）が王位についてブルボン朝が復活した。
16. 1815年3月にナポレオンはパリに戻り皇帝へ復位したが、6月に（ワーテルローの戦い）で大敗し、南大西洋の（セントヘレナ島）へ流された。ナポレオンが皇帝へ復位して再び退位するまでの一時的なフランス支配を（百日天下）という。
17. 1814年から翌年にかけて、フランス革命とナポレオンによる一連の戦争の戦後処理のため、オスマン帝国を除く全ヨーロッパの支配者が参加する国際会議が（ウィーン）で行われた。
18. この会議を風刺した言葉として、（会議は踊るされど進まず）がある。
19. この会議では、議長となったオーストリア外相[のち宰相]の（メッテルニヒ）の主導で列強間の合意に基づく国際秩序の再建が図られた。
20. まず、フランスの政治家（タレーラン）が唱える、フランス革命前の王朝と旧体制の復活を目指す（正統主義）によってフランスやスペインでブルボン王朝が復活した。
21. ロシア皇帝はポーランド国王を兼ね、プロイセンは東西に領土を拡大し、イギリスは旧オランダ領の（スリランカ／セイロン島）と（ケープ植民地）の領有を認められた。
22. スイスは（永世中立国）となった。
23. ドイツにはオーストリア・プロイセン以下の35の君主国とハンブルクなど4自由都市で構成される（ドイツ連邦）が新たに組織された。
24. この会議の結果、フランス革命とナポレオン体制下にヨーロッパ各地に広まった、個人の自由を尊重しそれを集団や国家に優先させようとする思想である（自由主義）と国民ないし民族という政治的共同体を重視・尊重する思想・運動である（民族主義／ナショナリズム）は抑えられ、ヨーロッパの政治的現状維持を目指す保守主義が優位に立った。

25. この会議以後、列強の協議によって、ある特定の国家または勢力による国際関係支配を阻止しようとする（**勢力均衡**）の考えと力を持つ強国の協議によって平和を維持する仕組みである列強体制が定着し、20世紀初めまで続いた。この会議で認められた国際秩序を、会議が開かれた場所にちなみ（**ウィーン体制**）という。
26. 列強体制の柱となったのは、イギリスとロシアの2大強国であった。イギリスはその経済的繁栄と圧倒的な海軍力を背景に19世紀の世界で強力な影響力を持ち、そのもとで国際的には比較的平和が保たれた。これを（**パックス＝ブリタニカ**）と呼ぶ。
27. 一方巨大な陸軍を持つロシアは1815年に皇帝（**アレクサンドル1世**）がキリスト教の友愛精神を基調とする（**神聖同盟**）を提唱してヨーロッパの殆どの君主を参加させ、またイギリス・プロイセン・オーストリアと（**四国同盟**）を結んでヨーロッパ大陸での発言力を高めた。
28. その後もドイツの学生組合（**ブルシェンシャフト**）による改革要求、スペインの（**立憲革命**）、イタリアの秘密結社（**カルボナリ**）の蜂起など、自由主義的改革を求める動きは収まらなかった。
29. ロシアでも1825年12月、ニコライ1世の即位に際して、貴族の青年将校が専制打倒や農奴制解体などの改革を求める蜂起を起こした。これを（**デカブリストの乱／十二月党員の乱**）という。
30. これらの反乱はすぐに鎮圧されたが、後にギリシアやラテンアメリカなどヨーロッパ外では独立運動が相次いだ。これに対してイギリスは（**カニング**）外相の指導の元にラテンアメリカ市場の開拓を狙って独立を支持するなど、オーストリア外相[のち宰相]の（**メッテルニヒ**）が主唱する抑圧的な現状維持政策から次第に距離を置き始めた。
31. フランスでは、ルイ18世を継いだ国王（**シャルル10世**）が厳しい制限選挙をとる立憲君主政のもとで貴族・聖職者を重視する反動政治を行い国民の不満が高まっていた。国王は1830年、国民の不満をそらすためにオスマン帝国下の（**アルジェリア**）への遠征を実行した。
32. その後選挙で反政府派が圧勝すると、（**未招集**）のまま議会を解散した。これに抗議して1830年7月、パリで革命が起こり、国王は亡命し、自由主義者として知られた（**オルレアン**）家の（**ルイ＝フィリップ**）が王に迎えられた。この革命を（**七月革命**）という。この革命で成立した立憲王政を（**七月王政**）という。
33. この革命の影響は各地に広がり、
 - a. 1830年に（**ベルギー**）が武装蜂起し独立を宣言、31年に立憲王国となった。
 - b. 1830年に（**ポーランド**）でロシアの支配に対して愛国派士官が蜂起

- c. 1830年に（ドイツ）で自由主義者および急進派による蜂起
 - d. 1831年に（イタリア）で秘密結社（カルボナリ）がボローニャを中心に蜂起
- したが、立憲王国となった（ベルギー）を除きいずれも鎮圧された。しかし西欧諸国は反自由主義・反民族運動的な政治姿勢に強調しなくなり、ドイツ・オーストリアなどの中欧諸国が中心となった。
34. イギリスでは18世紀末以来トーリ党の政権が続いていたが、1820年代に入ると自由主義的な政策が目立つようになった。
- a. 1824年には（団結禁止法）が撤廃されて労働組合の結成が認められ、
 - b. 1828年に（審査法）が廃止されて国教会に従わないプロテスタント諸派である、非国教徒に公職就任の権利が与えられ、
 - c. 1829年にオコンネルらアイルランド人の運動の結果、（カトリック教徒解放法）が成立してカトリック教徒も公職就任が可能となった。
35. また、選挙制度が産業革命後の社会の現実に合っていなかったため、選挙法改正を求める運動が激しくなると、ホイッグ党内閣が1832年に改革を実施した。これを（第1回選挙法改正）という。これにより有権者の激減してしまった（腐敗選挙区）と呼ばれる選挙区が廃止となり、その分の議席が従来は独立した選挙区として認められていなかった新興の商工業都市や人口の多い州に配分された。
36. また、選挙資格も拡大されたが、より民主的な選挙制度を求める労働者は1830年代後半から、男性普通選挙・議員の財産資格の廃止など6ヶ条からなる（人民憲章）を掲げて政治運動を起こした。これを（チャーティスト運動）という。これは1839年・1842年・1848年の3度に渡って大規模な請願運動を起こしたが、直ちに成果を上げることはできなかった。
37. 産業革命の結果、「世界の工場」となったイギリスはこの時期、対外取引に関する国家の管理や統制を排除するという、産業資本家に有利な（自由貿易政策）を実現した。
38. この画期とされるのは、（コブデン）・（ブライト）らが参加した（反穀物法同盟）の運動の結果、1846年に輸入穀物に高関税を課した（穀物法）が廃止されたことである。
39. さらに1849年にはイギリスと植民地・ヨーロッパ諸国間の貿易においてイギリスまたは相手国の船を使うことを定めた（航海法）も廃止された。
40. これに先んじて1834年には東インド会社の（中国貿易独占権）が廃止された。
41. 1821年、オスマン帝国内の（ギリシア）が独立戦争を起こすと、イギリス・ロシア・フランスはバルカン地域での利害や国内の自由主義的世論に押されて、これを支援した。

42. オスマン帝国は1829年、ロシアと条約を結んで、（ギリシア）の独立を受け入れ、翌年の（ロンドン会議）で独立が国際的に承認された。
43. 1831年にはオスマン帝国の支配下で自治を認められていたエジプトが領土を要求してオスマン帝国と開戦した。これを（エジプト＝トルコ戦争）という。
44. この戦争では、不凍港の獲得と地中海への出口を求めるロシアは（ダーダネルス海峡）・（ボスフォラス海峡）の自由通航権獲得を期待してオスマン帝国を支持した。
45. フランスはエジプトへの進出に関心を示し、イギリスは東地中海の支配権を確保するため、1840年の（ロンドン）条約で（ダーダネルス海峡）・（ボスフォラス海峡）の軍艦通過禁止を認めさせるなど、ロシア・フランスを牽制した。
46. 今後もオスマン帝国内各地の自立化の広がり、それを利用しながら勢力拡張を狙う列強の動きは続いた。ここから生じる国際対立は、西欧の側からみて（東方問題）と呼ばれた。
47. 産業革命期のイギリスでは人口が急増し、全体としての国の富は増大していたものの、労働者の生活は悲惨であった。工場労働者だけでなく、手工業者も機械制工場の発達によって生活を脅かされ、1810年代には手工業者による（機械うちこわし運動）が起こった。特にイングランド中・北部を中心に発生した（ラダイト運動）が有名。
48. こうした環境に対し、工場主（オーウェン）は労働者の待遇改善を唱え、労働組合や協同組合の設立に努力した。共産社会建設も試みたが、これは失敗に終わっている。
49. イギリスでは1833年に（工場法）が制定されて、年少者の労働時間制限など労働条件は次第に改善されていった。
50. フランスでも後に新キリスト教を提唱した（サン＝シモン）や生産・消費を共同で行う団体「ファランジュ」の設立を説いた（フーリエ）らが労働者階級を保護する新しい社会秩序を樹立しようとした。
51. 彼らのような、労働者を中心として平等・公正・友愛に基づく社会を実現しようとする思想を持つ（社会主義者）と呼ばれる人々は、工場や土地などの生産手段を社会の共有にして資本主義の弊害を除き、平等な社会を建設すべきと主張した。
52. また、フランスの社会主義者（ルイ＝ブラン）は生産の国家統制を主張して国立作業場の設置などを推進し、同じくフランスの社会主義者（プルードン）はすべての政治的権威を否定する（無政府主義）を唱えた。

53. ドイツ生まれの社会主義者（マルクス）は友人（エンゲルス）と協力して資本主義体制の没落は歴史の必然であるとする経済学説を展開した。彼らの思想はマルクス主義と呼ばれ、1848年に発表された（共産党宣言）に要約されている。また、彼らは自分たちの理論を（科学的社会主義）と称し、他の社会主義者の理論を人道主義的・ユートピア的と批判し（空想的社会主義）と呼んだ。
54. フランスでは1830年7月、パリで起きた革命をきっかけに始まった立憲王政が敷かれていたが、この王政下では銀行家など一部の富裕層に富が集中し、選挙権も多額納税者のみに与えられていた。中小資本家や民衆の間には選挙権拡大を求める動きが強くなり、政府がこれを武力で抑えようとする、1848年2月パリで再び革命が起こった。この革命を（二月革命）という。この革命の結果、国王（ルイ＝フィリップ）は亡命し、共和制の臨時政府が樹立された。この政府から始まる1848年～1852年の共和制統治期間を（第二共和制）という。
55. 臨時政府には生産の国家統制を主張して国立作業場の設置などを推進した社会主義者（ルイ＝ブラン）や労働者の代表も加えられたが、有産層や農民は急進的な政策を望まず、男性普通選挙制による1848年4月の選挙（四月普通選挙）で社会主義者は大敗して、既存の社会秩序維持を掲げる穏健共和派の政府が樹立した。
56. この結果に反発したパリの労働者は（六月蜂起）を起こしたが、鎮圧された。これは臨時政府が設立した失業者のための（国立作業場）が財政負担を理由に廃止されることになり、これに講義する労働者の行動が蜂起に繋がったものである。
57. 1848年12月の大統領選挙では、ナポレオン1世の甥にあたる（ルイ＝ナポレオン）が当選した。彼は1851年にクーデタを起こして独裁権を握り、1852年の国民投票で皇帝となり（ナポレオン3世）と称した。彼の治世を（第二帝政）と呼ぶ。
58. 1848年2月パリで起こった（二月革命）はドイツ・オーストリアにも波及した。（ウィーン）では1848年3月に蜂起が起こり、宰相（メッテルニヒ）は失脚した。
59. 続いて（ベルリン）でも民衆が放棄すると、プロイセン国王は譲歩して、自由主義的内閣が成立した。
60. これら2箇所での蜂起を（三月革命）という。
61. さらに、（ベーメン／ボヘミア）・（ハンガリー）・（イタリア）でも民族運動が高揚し、ヨーロッパ各地でナショナリズムが高まる（諸国民の春）と呼ばれる状況が生まれた。
62. ドイツでは統一国家達成と憲法制定のため、ドイツ諸邦の自由主義者らがドイツで初めての立憲議会である（フランクフルト国民議会）に結集した。
63. ヨーロッパ各地で起こったこれら一連の革命・民族運動は（1848年革命）と総称されている。

64. ロシアでは1848年の一連の革命ではオーストリアを支援して（**コシュート**）の指導するハンガリーの民族運動を制圧し、反革命の擁護者となって「ヨーロッパの憲兵」と呼ばれた。
65. ロシア皇帝（**ニコライ1世**）はロシアの立場が有利になったこの機会を利用して、南下政策を推進しようとした。そこでオスマン帝国内の（**ギリシア正教徒**）の保護を理由に1853年、オスマン帝国と開戦した。これを（**クリミア戦争**）という。
66. この戦争はイギリス・フランスがロシアの南下を阻止するためオスマン帝国を支援したので、ヨーロッパ列強同士の戦いとなった。クリミア半島の（**セヴァストープリ要塞**）を巡る激しい攻防の末、ロシアは敗れ、1856年（**パリ条約**）が結ばれた。この条約の中で、ロシアは
- a. （**黒海**）の中立化と
 - b. 1840年の（**ロンドン条約**）の取り決めに再確認させられた。
67. ロシアではなお専制政治と農奴制が強固であったが、この戦争の敗北により改革を迫られることになった。皇帝（**アレクサンドル2世**）は1861年に（**農奴解放令**）を出し、農奴に人格的自由を認めた。ただし、土地は貴族領主から買い戻さねばならず、また農民個人ではなく農村共同体（**ミール**）に引き渡されることが多かった。
68. さらに、1863～1864の（**ポーランド**）反乱の後に皇帝は再び専制政治を強化した。
69. 産業改革が十分でなかったロシアでは、急進的な改革の担い手は主として都市の知識人階級（**インテリゲンツィア**）であった。
70. 彼らの一部は農民を啓蒙すれば、農村共同体を基礎に社会主義的改革を行うことができると考え、（**ヴ＝ナロード／人民のなかへ**）という標語を掲げて農村に入り込んだ。彼らは（**ナロードニキ**）[人民主義者]と呼ばれている。
71. しかし、農民は同調せず、失望した（**ナロードニキ**）[人民主義者]の一部は（**テロリズム**）[暴力主義]で政府を倒そうとして皇帝（**アレクサンドル2世**）や政府高官を暗殺した。
72. 産業革命を経た19世紀半ばのイギリスは「世界の工場」として繁栄の絶頂にあった。（**ヴィクトリア女王**）治世下の1852年、延べ600万人以上が入場した（**ロンドン万国博覧会**）が開かれ、国内外にイギリスの近代工業力の成果を誇示した。
73. 人々の豊かな生活は政治の安定を生み、60年代にはホイッグ党から発展した（**自由党**）・トーリ党から発展した（**保守党**）の二大政党が総選挙の結果に基づいて交替して政権を担当する典型的な議会政党政治が成立した。
74. この時期には、（**保守**）党の（**ディズレーリ**）がスエズ運河会社株の買収・インド帝国の樹立・キプロスの獲得など帝国主義外交を開始した。

75. (自由) 党の (グラッドストーン) は1870年に教育法、1871年に労働組合法を制定し、さらにアイルランド問題の解決を目指した。
76. 1867年に行われた (第2回選挙法改正) で都市労働者の相当数が選挙権を獲得し、有権者が135万人から247万人に増大した。
77. さらに1884年の (第3回選挙法改正) で農業労働者などが選挙権を獲得し、約440万人と成人男性の殆どが有権者となった。
78. 他方、イギリスの圧迫を受け、1801年に正式に併合されて連合王国に組み込まれた (アイルランド) では、ケルト系住民の多くがカトリック教徒で、イギリス人不在地主に対する小作人の地位に置かれていたために生活が苦しかった。1840年代なかばに (ジャガイモ飢饉) と呼ばれる大飢饉を経験したこの地域からはその後わずか数年間で100万人以上の人々が移民としてアメリカ合衆国に渡った。1880年代以降 (グラッドストーン) が提出した (アイルランド自治法案) は議会を通過せず、この地域を巡る問題は未解決のまま20世紀を迎えた。
79. ナポレオンの甥 (ルイ=ナポレオン/ナポレオン3世) の治世 (第二帝政) は農民・資本家・労働者などそれぞれ利害を異にする勢力に支えられた。
80. 皇帝 (ナポレオン3世) は英仏通商邦訳を結んで自由貿易の原則のもとに国内産業を育成する一方、国民の人気を維持するため、1853~56年の (クリミア) 戦争を初め、1856~60年に清を相手に起こした (アロー戦争) ・1859年の (イタリア統一戦争) ・1858~67年に渡る (インドシナ) 出兵など積極的な対外政策を展開した。
81. この皇帝が (メキシコ) 遠征に失敗し、 (プロイセン=フランス/普仏戦争) に敗れるとパリで蜂起が起こり、帝政は崩壊し、臨時国防政府が1870年9月に成立した。
82. 抗戦を続けた政府が1871年に1月にドイツに降伏し、降伏後に樹立した臨時政府とドイツとの間で屈辱的な講和条約を結んだ。社会主義者やパリの民衆はこの条約に反対し、1871年3月独自に革命的自治政府を樹立した。これを (パリ=コミューン) といい、労働者などの民衆が中心となって作った世界史上最初の自治政府であった。
83. しかしこの自治政府は国内では孤立しており、パリを明け渡した臨時政府は (ティエール) の指導のもと、軍事力を使ってこの自治政府を倒した。
84. 1875年になって (共和国憲法) が制定され、第二帝政崩壊後から始める新政体である (第三共和政) の基礎が据えられた。
85. 分裂が続いていたイタリアでは、1848年2月パリで起こった (二月革命) 後、民族統一と共和政を目指して結成された政治結社「青年イタリア」を指導してきた (マッツィーニ) も参加する (ローマ共和国) がローマ教皇領に建設されたが、まもなくフランスに倒され

た。また、トリノを首都とした北イタリアの王国である（サルデーニャ王国）もイタリア統一の障害となっていたオーストリアと戦ったが敗北した。

86. しかしこの王国は革命で生まれた憲法や議会を維持し、まもなく王位についた（ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世）のもとで自由主義者の（カヴール）が首相となって鉄道建設など近代社会基盤の整備を推進した。
87. その後この王国は1859年にナポレオン3世と秘密同盟を結んでオーストリアと開戦した。これを（イタリア統一戦争）という。
88. この戦争に勝ったこの王国は（ロンバルディア）を獲得し、1860年（サヴォイア）と（ニース）をフランスに譲ることで（中部イタリア）も併合した。
89. さらに1860年、青年イタリア出身の（ガリバルディ）が（両シチリア王国）を占領し、この王国へ献上した。
90. この結果、1861年3月に（イタリア王国）が成立し、（ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世）が王位についた。その後1866年にオーストリア領であった（ヴェネツィア）を併合し、1870年には（ローマ教皇領）も占領して国家統一が実現した。
91. しかし、（トリエステ）・（南チロル）などはオーストリアにとどまった。こうしたオーストリア領に留まったイタリア系住民の多い地域のことを（未回収のイタリア）という。

1. ドイツでも連邦体制のもとで政治的分裂状態が続いたが、1834年にはライン川中流域の工業地域を持つプロイセンを中心に、オーストリアを除く大多数のドイツ諸邦からなる（ドイツ関税同盟）が発足した。これにより、商工業者が望む経済的統一はほぼ実現した。
2. 1848年の三月革命時にはフランクフルト国民議会でドイツ統一が目指されたが、オーストリア内のドイツ人地域とベーメン[ボヘミア]を含む（大ドイツ主義）と、プロイセンを中心にオーストリアを排除する（小ドイツ主義）が対立した。
3. 結局（小ドイツ主義）による自由主義的憲法がまとめられ、プロイセン王をドイツ皇帝に推したが、王の拒否にあい失敗に終わった。
4. その後統一の主導権は自由主義者から、プロイセンの政府・軍部を支配する保守的な地主貴族層である（ユンカー）層に移った。
5. この地主貴族層出身である（ビスマルク）は1862年にプロイセン王（ヴィルヘルム1世）に首相に任じられると、議会の反対を押し切って軍備を拡張した。彼の軍備拡張政策を（鉄血政策）という。
6. 1864年、プロイセンはオーストリアとともに（シュレスヴィヒ）・（ホルシュタイン）両州を巡る対立から、（デンマーク）と開戦して勝利を収めた。
7. その後、この2州の管理を巡る紛争が起き、1866年オーストリアと戦ってこれを破った。これを（プロイセン＝オーストリア戦争／普墺戦争）という。
8. この戦争はプロイセンの圧勝に終わり、その後ドイツ連邦は解体され、1867年プロイセンを盟主とする（北ドイツ連邦）が結成された。南ドイツの諸邦もプロイセンと同盟を結んだので、ドイツ統一は完成に近づいた。
9. ドイツから除外されたオーストリアは1867年マジャール人のハンガリーを王国と認める妥協[アウスグライヒ]を行い、同君連合として（オーストリア＝ハンガリー帝国）を再編した。
10. フランスのナポレオン3世はプロイセンの強大化を恐れ、スペイン王女のフランス亡命をきっかけに1868年に発生した（スペイン王位継承問題）でホーエンツォレルン家の傍系が後継者に就くことを阻止した。
11. その後1870年7月にドイツはフランスと（プロイセン＝フランス戦争／普仏戦争）を始めた。軍事力に勝るプロイセンはフランスを圧倒し、9月にはフランス北部のスタンでナポレオン3世を捕虜にした。こうしてフランス第二帝政は崩壊した。
12. 翌年1871年にプロイセンはフランスと講和を結んだが、その内容はフランスが（アルザス）・（ロレーヌ）をドイツに譲り、莫大な賠償金を支払うという厳しいものだった。

13. 1871年1月、プロイセン王（**ヴィルヘルム1世**）はヴェルサイユでドイツ皇帝の位につき、（**ドイツ帝国**）が成立した。帝国はドイツの諸邦で構成される連邦国家で、プロイセン王がドイツ皇帝を兼ねた。
14. 各邦の政治の仕組みは変わらなかったが、国民代表議会である（**帝国議会**）は25歳以上の男性普通選挙制で選ばれた。
15. 帝国宰相は皇帝にのみ責任を負い、議会の権限は制約されていた。宰相（**ビスマルク**）は約20年間なかば独裁的な権力を振るった。
16. 南ドイツで有力なカトリック教徒を警戒した彼はカトリック教徒を抑圧した。これを（**文化闘争**）という。
17. この間、工業の発展とともに増大した労働者階級の間で、強権政治を批判する社会主義運動が勢力を伸ばした。ドイツの社会主義運動は、1860年代にラサールの指導で始まり、やがてベーベルらによるマルクス主義の運動も組織された。1875年、両者は合同して（**ドイツ社会主義労働者党**）が成立した。この党は1890年（**社会民主党**）と改称している。
18. 宰相（**ビスマルク**）は、1878年に皇帝狙撃事件が起こると、これを口実に（**社会主義者鎮圧法**）を制定して社会主義政党を弾圧したが、他方では災害保険・疾病保険・養老保険などの（**社会保険**）制度を実施して労働者の統合を試みた。また、輸入される工業製品と穀物に関税を課す（**保護関税**）政策をとって工業化を進めた。
19. 宰相（**ビスマルク**）は、外交ではフランスを孤立されてドイツの安全を図るため、クリミア戦争以来機能しなくなっていたヨーロッパの列強体制を再構築した。1873年、ドイツ・オーストリア・ロシアは（**三帝同盟**）を結んだが、ロシアはバルカンで、スラヴ民族の連帯・統一を目指した（**パン＝スラヴ主義**）を利用して勢力拡大を図り、オーストリアと敵対するようになった。
20. 1875年、オスマン帝国下のボスニア・ヘルツェゴヴィナで農民反乱が発生し、翌年にはブルガリアでも独立を求める蜂起が起こった。オスマン政府がこれを武力で厳しく鎮圧すると、1877年にロシアがスラヴ民族の保護を口実にオスマン帝国へ宣戦した。これを（**ロシア＝トルコ戦争**）という。
21. この戦争はロシアの勝利の終わり、翌1878年に（**サン＝ステファノ条約**）によってブルガリアをロシア保護下のもとで自治国とすることを認めさせた。
22. しかし、オーストリア・イギリスがこれに反対したため、ドイツ帝国宰相（**ビスマルク**）は1878年に（**ベルリン会議**）を開き、列国の利害を調停した。この結果、1878年の（**サン＝ステファノ条約**）は破棄され、新たに結ばれた（**ベルリン条約**）でロシアの勢力拡大は抑えられた。
23. なお、新しく結ばれたこの条約では、
 - a. （**ルーマニア**）・（**セルビア**）・（**モンテネグロ**）の独立が承認され、

- b. (ブルガリア) はオスマン帝国内の自治国となった。
 - c. イギリスは (キプロス島) の占領権と行政権を、
 - d. オーストリアは (ボスニア・ヘルツェゴヴィナ) の占領権と行政権を認められた。
24. ドイツの国際的な発言力が強まる一方、ロシアは黒海の制海権獲得・地中海への進出を目的に進めていた (南下政策) を一時控え、中央アジア・東アジアへの進出に努めるようになり、1881年にはドイツ・オーストリア・ロシア間で新たな (三帝同盟) が結ばれた。
 25. ドイツ帝国宰相 (ビスマルク) は1882年にドイツ・オーストリア・イタリアで (三国同盟) を結んだ。さらにオーストリアとロシアの対立が激化して1881年に結んだ (三帝同盟) が1887年に消滅すると、同年ドイツ・ロシア間で (再保障条約) を結び、フランスを包囲する体制を続けようとした。
 26. ドイツの安全を図る、こうした複雑な同盟網を (ビスマルク体制) と呼ぶ。
 27. この頃、 (スウェーデン) は北方戦争に敗れてバルト海の制海権を失い、北ドイツの領土もプロイセンに奪われた。フィンランドも1809年にロシアに併合された。19世紀初めには憲法が制定され、やがて責任内閣制が確立した。
 28. (ノルウェー) は1814年の (ウィーン) 会議でスウェーデン領となったが、独自の憲法を持ち、1905年に国民投票により平和的に独立した。
 29. (デンマーク) は1864年にプロイセン・オーストリアとの戦争に敗れた結果 (シュレスヴィヒ) と (ホルシュタイン) を失ったが、以後農業・牧畜を首とする国作りに努めた。
 30. 19世紀には、国際的な連帯を求めたり、国境を超えて協力し合う運動も盛んになった。社会主義運動では、1864年に各国の社会主義者がロンドンに集まって (第1インターナショナル) が結成され、マルクスがその指導者となったが、バクーニンら無政府主義者との対立や、パリ＝コミューン後の弾圧の激化により1876年に解散した。
 31. また、クリミア戦争におけるイギリスの (ナイチンゲール) の看護活動に刺激され、スイスの (デュナン) の発案で1864年にジュネーブで (国際赤十字社) が設立された。
 32. カリブ海のスペイン領イスパニョーラ島の西部は17世紀末にフランス領となり、18世紀にはサトウキビ栽培が拡大して黒人奴隷の数が増加していた。この地で18世紀末からフランス革命の影響を受けて、 (トゥサン＝ルヴェルチュール) を指導者とする奴隷解放運動が始まった。
 33. そして、ナポレオンが派遣したフランス軍を打ち破って、1804年には史上初めての黒人共和国 (ハイチ) が誕生した。

34. この国の誕生とともに黒人奴隷も廃止されたが、その影響は諸外国におよび、イギリスでは1807年に（**奴隷貿易**）が廃止され、1833年にはイギリス領植民地での（**奴隷制**）が廃止された。
35. この国の独立運動を総称した言葉である（**ハイチ革命**）は、アメリカ合衆国やブラジルなど黒人奴隷制をなおも維持する国にも大きな衝撃を与えた。
36. ラテンアメリカでは1810年～20年代にかけて多くの国が独立した。
- 南米の北部では（**シモン＝ボリバル**）らによって1819年に大コロンビア共和国が樹立され[30年に一度瓦解後32年に再建
国]、1825年にはボリビアが完全に独立した。
 - 南米の南部では（**サン＝マルティン**）らによって1818年にチリが独立し、1821年にはペルーが開放された[独立は24年]。
 - メキシコでは司祭（**イダルゴ**）の蜂起などを経て1821年に独立が達成された。
37. またブラジルではポルトガルの王子が帝位につき、（**ブラジル帝国**）として独立した。この国は1889年以降は共和国となっている。
38. このようなラテンアメリカ諸国では、植民地生まれの白人である（**クリオーリョ**）の大地主層が独立運動の中心となった。
39. なお、ラテンアメリカ諸国の住民には、
- 植民地生まれの白人である（**クリオーリョ**）
 - 先住民の（**インディオ**）
 - 先住民と白人の混血である（**メスティーソ**）
 - 黒人
 - 黒人と白人の混血である（**ムラート**）
- などが存在していた。
40. アメリカ合衆国では、1800年に反連邦派の（**トマス＝ジェファソン**）が第3代大統領に選ばれ、以後政党間での政権交代が定着していった。
41. この大統領は1803年にフランスから（**ミシシッピ川以西のルイジアナ**）を買収し、領土を倍増させた。
42. その後1819年にはスペインから（**フロリダ**）も買収した。

43. アメリカ合衆国はナポレオン1世治下のフランスとイギリスの戦争に関しては中立を保っていたが、イギリスが海上封鎖で通商を妨害したため、アメリカ国内でイギリス領カナダへの領土拡張を掲げる強硬派が台頭して、1812年（アメリカ＝イギリス戦争／米英戦争）が起こった。
44. また、第5代大統領（モンロー）はラテンアメリカ諸国の独立を支持するため、ヨーロッパ諸国のアメリカ大陸への干渉に反対し、アメリカ合衆国もヨーロッパに干渉しないという、相互不干渉を表明する（モンロー教書）を1823年に発表した。これはその後長くアメリカ合衆国の外交政策の基本となった。
45. 第7代大統領の（ジャクソン）の時代には西部開拓が推進された。彼はアメリカ合衆国北部の起業家などを主な支持基盤としていた連邦派から発展したホイッグ党に対抗して、南部を主な基盤とする（民主党）の結成を促進した。
46. 同時にこの大統領は、先住民をミシシッピ川以西に設定した（保留地）に強制的に移住させる政策も推進した。その結果、（西漸運動）と呼ばれる西部開拓が進んでいき、追い詰められた先住民の抵抗が強まった。この強制移住法に伴い先住民が受けた悲惨な移動を指して、（涙の旅路）と呼んでいる。
47. さらに1840年代になると、西部の開拓を上から与えられた使命とする（明白な天命）説が流布されるようになった。
48. アメリカ合衆国が1845年にメキシコ領である（テキサス）を併合すると、それに反対するメキシコとの対立が激化し、1846年に（アメリカ＝メキシコ戦争）が勃発した。
49. この戦争に勝利したアメリカ合衆国は、メキシコから（カリフォルニア）などを獲得した。
50. また、イギリスとの共同管理地域になっていた（オレゴン）に関しては交渉を通じて南半分を獲得した。
51. 1848年には（カリフォルニア）で金鉱が発見され、世界中から多数の人々が到来するようになった。これを（ゴールドラッシュ）という。
52. 西部の開拓はアメリカ合衆国内の北部と南部の対立を激化させた。南部諸州が連邦議会における優位を維持するため、西部に（奴隷制）を拡大しようとしたのに対して、北部諸州は対抗して、自由州を拡大しようとしたためである。
53. 当時の南部では、18世紀末に（ホイットニー）が綿実から種を分離する装置である（綿繰り機）を発明して以来、イギリスなどへの綿花輸出が増大し、イギリスとの南部貿易を求める声が強まっていた。また南部は（奴隷制）の存続や州の自治を強く要求した。これに対して北部はイギリスに対抗するため保護関税政策と連邦主義を主張するとともに、人道主義の立場から（奴隷制）に反対する人が多く、対立を深めていった。

54. 1820年には北緯36度30分以北には奴隷州を作らないと決めた（ミズーリ協定）が結ばれたが、1854年に（カンザス）・（ネブラスカ）の両準州について自由州となるか奴隷州となるかは住民の投票で決定するという（カンザス・ネブラスカ法）が制定されると南北の対立が再燃した。
55. これを契機に奴隷制反対を唱える（共和党）がホイッグ党に代わって結成され、奴隷制を巡る南北の対立は決定的となった。
56. なおこの頃、女性作家（ストウ）は小説（アンクル＝トム的小屋）で奴隷制を批判している。
57. 1860年の大統領選挙では、民主党が分裂した結果、奴隷制反対を唱える（共和党）の（リンカン）が当選した。彼は連邦の統一維持を優先させ、奴隷制を新領土へ拡大することだけに反対する穏健派であったが、南部諸州は連邦からの離脱を決定した。
58. 1861年南部は（アメリカ連合国）を作って、ジェファソン＝デヴィスを大統領に選び、ここに北部と南部による（南北戦争）が始まった。
59. 当初はリー将軍など優れた軍人を多く抱えていた南軍に苦戦したが、1863年1月、大統領（リンカン）は南部反乱地域の（奴隷解放宣言）を出し、内外世論の支持を集め始めた。
60. そして1863年の（ゲティスバーグ）の戦いに勝利を収めて以降、グラント将軍率いる北軍が優勢となった。
61. この勝利後、追悼式典で演説した際に大統領（リンカン）は（人民の、人民による、人民のための政治）という言葉を残している。
62. 1865年、南部の首都リッチモンドが陥落してリー将軍ら南軍が降伏し、アメリカ合衆国は再統一された。
63. この戦争後、荒廃した南部の再建が共和党の主導のもとで進められ、連邦憲法修正第13条により奴隷制は正式に廃止され、解放黒人に投票券が与えられた。しかし、解放された黒人には農地の分配が行われなかったため、黒人の多くは（シェアロッパー）として貧しい生活を送った。彼らは収穫の半分程度を地主に納めなければならなかったため、分益小作人とも呼ばれている。
64. 元南軍の兵士など、一部の白人は（クー＝クラックス＝クラン／KKK）などの秘密結社を組織して、非合法手段で黒人への迫害を続けた。
65. 一方西部では、この戦争中に成立した、自営農民に無償で農地を提供する法律である（ホームステッド法）によって入植者が増加していた。
66. 西部の発展に伴い、東部と西部を結ぶ通信・交通機関も整備され、有線電信の開通に続き、1869年には最初の（大陸横断鉄道）が完成した。
67. こうした西部開拓の進展によって、1890年代には開拓地と未開拓地の協会地帯である（フロンティア）が消滅した。

68. 対外的には、メキシコから（カリフォルニア）を獲得して以後、太平洋への関心も高まり、ペリー提督は日本に来航して1854年に（日米和親条約）を結んだ。
69. また、1867年にはロシアから（アラスカ）を買収した。

1. フランス革命・ナポレオン1世による大陸支配は、革命を支えた啓蒙主義や、革命思想の普遍主義・合理主義への反発を招き、各民族や地域の固有の文化や歴史、個人の感情や想像力を重視する傾向を広く生み出した。こうした文芸思想は（ロマン主義）と総称される。
2. この思想は19世紀初頭までの（ゲーテ）[代表作「ファウスト」]など古典主義の成果を学び、やがて文学・芸術における大きな流れとなり、国民文学や国民音楽に結実する国民文化を形成した。
3. 19世紀後半になると、こうした文芸思想に対抗して人間や社会の現実をありのままに描く（写実主義／リアリズム）という文芸思潮が唱えられた。
4. さらに、この文芸思潮の延長上に、19世紀末には人間や社会を科学的に観察し、人間の偏見や社会の矛盾などを描写する（自然主義）がフランスなどを現れ、各国に広がった。
5. 外光による色の変化を重視したフランス絵画の（印象派）もこうした流れの中から生まれた。
6. 19世紀の代表的な芸術家・作家を答えなさい。
 - a. （ダヴィッド）・・・「ナポレオンの戴冠式」
 - b. （ドラクロワ）・・・「キオス島の虐殺」
 - c. （クールベ）・・・「石割り」
 - d. （ミレー）・・・「落ち穂拾い」
 - e. （モネ）・・・「印象・日の出」
 - f. （ルノワール）・・・「ムーラン＝ド＝ラ＝ギャレット」
 - g. （セザンヌ）・・・「サント＝ヴィクトワール山」
 - h. （ゴッホ）・・・「ひまわり」
 - i. （ロダン）・・・「考える人」
 - j. （ベートーヴェン）・・・「運命」「田園」「第九番」
 - k. （シューベルト）・・・「野ばら」「冬の旅」
 - l. （ヴァーグナー）・・・「タンホイザー」「ニーベルングの指環」

- m. (ゲーテ) 「ファウスト」
- n. (ハイネ) 「ドイツ冬物語」
- o. (バイロン) 「チャイルド＝ハロルドの遍歴」
- p. (グリム兄弟) 「グリム童話集」
- q. (ディケンズ) 「オリヴァー＝トゥイスト」
- r. (ヴィクトル＝ユゴー) 「レ＝ミゼラブル」
- s. (スタンダール) 「赤と黒」
- t. (バルザック) 「人間喜劇」
- u. (ボードレール) 「悪の華」
- v. (ゾラ) 「居酒屋」
- w. (ドストエフスキー) 「罪と罰」 「カラマーゾフの兄弟」
- x. (トルストイ) 「戦争と平和」
- y. (イプセン) 「人形の家」

7. 哲学や社会思想の分野では、カントが (ドイツ観念論) 哲学を完成させ、さらにヘーゲルによって (弁証法哲学) が唱えられた。
8. ヘーゲル派の (唯物論) はマルクスやエンゲルスによって受け継がれ、史的 (唯物論) の基礎となった。
9. 資本主義発展の先頭に立ったイギリスでは、近代社会を生きる市民に指針を与える思想が求められ、「最大多数の最大幸福」を標語とするベンサム (功利主義) 、 (ジョン＝スチュアート＝ミル) やスペンサーらの経験論哲学が生まれ、フランスではコントが (実証主義) による社会学を唱えた。
10. また、ロマン主義とナショナリズムの影響のもとで、歴史への関心も高まった。ドイツの (ランケ) は、厳密な史料批判に基づく近代歴史学の基礎を作り、以後19世紀を通じ、人文・社会科学の分野で歴史学や歴史的考察が重要な位置を占めた。
11. 経済学では、アダム＝スミスの流れを引き、過剰人口による社会的貧困と悪徳の必然的発生を説いた (マルサス) や、商品価値は労働量によって決定されると説いた (リカード) らの古典派経済学が経済の一般法則を研究し、自由放任主義が経済発展に必要であると主張した。

12. ドイツの（リスト）は古典派経済学とは異なり、発展段階が遅れた国民経済は、関税などによる国家の保護が必要と説いて、ドイツ関税同盟の結成に努力した。
13. さらに、マルクスは資本主義の研究を（資本論）[第1巻は1867年刊]としてまとめ、マルクス主義経済学を樹立した。
14. 自然科学の分野では、（ダーウィン）による生物学の革新が、生物学だけでなく、人文・社会科学にも広範な影響を及ぼした。彼が1859年に（種の起源）で進化論を提唱すると、それまで聖書の生物は神によって創造されたという記述を歴史的事実として信じていた人々は衝撃を受け、激しい論争を巻き起こした。
15. 19世紀後半には、ツベルクリンを創製した（コッホ）や狂犬病の予防接種に成功した（バスター）によって細菌学や予防医学が発展し、幼児死亡率を低減させ、平均寿命を伸長させた。

16. 次の19世紀～20世紀初めの自然科学・技術に関する人物を答えなさい。

- a. （マイヤー）・・・・・・・・・・エネルギー保存の法則
- b. （ヘルムホルツ）・・・・・・・・・・エネルギー保存の法則
- c. （ファラデー）・・・・・・・・・・電気化学・電磁科学
- d. （レントゲン）・・・・・・・・・・X線の発見
- e. （キュリー夫妻）・・・・・・・・・・ラジウムの発見
- f. （メンデル）・・・・・・・・・・遺伝の法則の発見
- g. （モース／モールス）・・・・・・・・・・電信機の発明
- h. （エディソン）・・・・・・・・・・電灯の発明
- i. （ベル）・・・・・・・・・・電話の発明
- j. （ノーベル）・・・・・・・・・・ダイナマイトの発明
- k. （ライト兄弟）・・・・・・・・・・プロペラ飛行機の発明

17. また、20世紀に入ると国の威信をかけて、南極・北極への探検と到達の試みである（極地探検）が競われるようになった。

- a. （ピアリ）[アメリカ]・・・・・・・・・・1909年、北極点到達
- b. （アムンゼン）[ノルウェー]・・・・・・・・・・1911年、南極点到達

18. 19世紀後半になると、列強諸国の首都は近代化の成果や国家の威信を示すために都市計画によって道路や都市交通網を整備した。フランス第二帝政時代の行政官・政治家であるオスマンによる（パリ）の改造や、ウィーンの都市計画はその代表的事例である。
19. 20世紀に入ると発行部数を大幅に増大させた大衆向けの新聞によって、さまざまな情報が伝えられ、（映画）などの新しい大衆娯楽や、（デパート）などの大規模商業施設も普及し始めた。
20. オスマン帝国[1299～1922]は16世紀にアジア・ヨーロッパ・アフリカへと領土を拡大したが、1683年の第2次（ウィーン）包囲の失敗は領土の拡大から縮小に転じるきっかけとなった。
21. その後1699年に結ばれた（カルロヴィッツ条約）によってオスマン帝国はハンガリー・トランシルヴァニアなどをオーストリアに割譲した。
22. 18世紀半ば頃、（イブン＝アブドゥル＝ワッハーブ）はアラビア半島で、厳格な唯一神信仰を説き（神秘主義／スーフィズム）や聖者崇拝などを否定する、イスラーム教の改革を唱える運動を起こした。
23. （ワッハーブ派）と呼ばれる彼を支持するアラブ人たちは中央アラビアの豪族（サウード家）と結んで（ワッハーブ）王国を建設し、後にリヤドに首都を置いた。
24. 1798年、フランスはナポレオン1世の遠征によって（エジプト）を占領したが、まもなくイギリスとオスマン帝国の連合軍に敗れ、オスマン帝国の主権が回復した。
25. しかし、この混乱に乗じて（ムハンマド＝アリー）は民衆の支持を得てエジプト総督となり、1805年にオスマン帝国もこの地位を承認した。これがエジプト最後の王朝である（ムハンマド・アリー朝）の成立である。
26. このエジプト総督は、旧勢力である軍人奴隸（マムルーク）を一掃するとともに、フランスの援助による近代的な陸海軍の創設、造船所・官営工場・印刷所の建設などを行い、エジプトの富国強兵を推し進めた。
27. このエジプト総督はオスマン帝国の求めに応じてアラビア半島に出兵し、1818年に一時（ワッハーブ）王国を滅ぼした。
28. さらに、オスマン帝国からシリアの領有権を求め、それが拒否されると、2度に渡ってオスマン帝国と戦い勝利を収めた。この戦いを（エジプト＝トルコ戦争）[1831～1833／1839～1840]という。
29. この戦いはフランスがエジプト、ロシアがオスマン帝国を援助したためにイギリスが干渉し、1840年に戦争の收拾のために開かれた国際会議（ロンドン会議）でシリア領有は阻止された。

30. なお、これに先んじて1838年にはイギリスとオスマン帝国の間で（トルコ＝イギリス通商条約）が結ばれている。これはイギリスに領事裁判権を認め、オスマン帝国の関税自主権を奪うなどの不平等な条約であった。
31. 近代化を急ぎ、また戦争によって莫大な債務を抱え込んだエジプトは、1860年代からイギリス・フランスの財務管理下に置かれ、内政の支配も受けるようになった。特にイギリスは1875年、債務に悩むエジプトからフランス人（レセップス）が建設した地中海と紅海を結ぶ全長162kmの運河である（スエズ運河）の株式会社株の4割を購入して、エジプトへの介入を強めた。
32. このような外国支配に反抗して軍人の（ウラービー／オラービー）が1881年～1882年に反乱を起こすと、イギリスは単独でエジプトを軍事占領して事実上ここを保護化に置いた。立憲制の確立を求め、（エジプト人のためのエジプト）をスローガンとする彼の反乱はその後のエジプト民族運動の原点となった。
33. 19世紀初め以降、かつてキリスト教徒の子弟を強制的に集めて編成されていた（イエニチェリ）軍団の解体など、一連の改革を進めていたオスマン帝国では、第31代スルタンの（アブデュルメジト1世）がイスタンブルの（トプカプ宮殿）に各国の使節や高官を招いて、（ギュルハネ勅令）と呼ばれる改革の勅令を出し、司法・行政・財政・軍事に渡る大規模な西洋化改革である（タンジマート）を開始した。
34. 一方、1853年～1856年にロシアがオスマン帝国内のギリシア正教徒保護を名目に発生した（クリミア）戦争後、国内に立憲制への要求が高まると、1876年大宰相（ミドハト・パシャ）の起草したオスマン帝国最初の憲法（ミドハト憲法）が発布された。
35. しかし、第34代スルタンの（アブデュルハミト2世）は、1877年に黒海の制海権とバルカン半島の支配権を巡って（ロシア＝トルコ戦争）が勃発すると、これを口実に議会を閉鎖し、1878年に憲法も停止した。
36. この戦争に敗れたオスマン帝国は、ドイツの仲裁により1878年に結ばれた（ベルリン条約）でセルビアやルーマニアなどのヨーロッパ側領土を大幅に失うことになった。
37. サファヴィー朝滅亡後のイランでは、18世紀末にテヘランを首都とする（カージャール朝）が興った。
38. この王朝は黒海とカスピ海に挟まれた（カフカス）を巡るロシアとの戦いに敗れ、1828年に（トルコマンチャーイ条約）によってロシアに治外法権を認め、関税自主権を失った上に（東アルメニア）を割譲した。
39. このような混乱を背景に、1848年、イスラーム教シーア派から生まれた新宗教で、救世主「マフディー」の再臨を説いて農民や商人、職人に広く受け入れられていた（バーク教）徒がこの王朝の専制に対して武装蜂起したが、まもなく鎮圧された。

40. アフガニスタンはイギリスによる介入によりイランからの独立を認められた。しかし、インドでの権益を守ろうとするイギリスは2度に渡ってアフガニスタンへ侵攻し（アフガン戦争）を引き起こした。この戦争の結果、1880年にアフガニスタンは外交権をイギリスへ委ね、その保護国となった。
41. イギリスの利権に関しては、1891年～1892年にかけてイギリス人業者に領内のタバコ原料買い付けから流通に関する利権が付与されたことに対する反英・反国王の運動である（タバコ=ボイコット運動）が起きている。

1. ヨーロッパ各国の東インド会社はインド各地に商館を置き、商業活動に従事していた。
 - a. オランダ東インド会社は（ジャワ）と拠点としてアジア諸地域間を結ぶ取引に重点を置いていた。
 - b. イギリス東インド会社はインドの（マドラス）や（カルカッタ）などに商館を置き、本国とインドを結ぶ取引に重点を置いていた。
 - c. フランス東インド会社は（ボンディシェリ）を中心に活動した。これらのヨーロッパ商業勢力が扱った商品の中で最も重要であったのは綿布であった。
2. 皇帝アウラングゼーブの没後、インド最後のイスラーム王朝である（ムガル帝国）は力を失い、代わりに各地の地方勢力が台頭して、互いに軍事抗争を繰り返すようになった。
3. イギリスとフランスの東インド会社はこうした争いに自ら介入して支配の拡張を目論み、互いに激しく対立することになった。そうした中でイギリス東インド会社はカーナティック戦争や1757年にベンガル太守を打ち破った（プラッシーの戦い）においてフランスを破り、1763年に結ばれたパリ条約でその優位を決定づけた。
4. イギリス東インド会社は続いて、インド内部の諸政治勢力に対しても支配を広げた。
 - a. 東部では、1765年にベンガル・ビハール両地域の（徴税権）を獲得した。
 - b. 南部では、1767～1799年にかけて（マイソール）王国との4次に渡る戦争（マイソール）戦争に勝利を収めた。
 - c. 西部では、1775～1818年にかけて3次に渡って行われた（マラーター）戦争にも勝利した。
 - d. 西北部では、1845～1849年にかけて2次に渡る（シク）王国との（シク）戦争にも勝利した。こうして19世紀半ばまでにイギリス東インド会社はインド全域を制圧することに成功した。
5. イギリス東インド会社の最大の目的は、より多くの富を効率よく徴収することにあった。その方法としては、政府と農民の間を仲介する者に徴税を任せ、その仲介者に私的土地所有権を与える（ザミンダーリー制）や、仲介者を排除して、国家的土地所有のもとで農民[ライヤット]に土地保有権を与えて徴税する（ライヤットワーリー制）などがあった。
6. しかし、貿易構造と経済体制の変化が進むにつれて、イギリス産業革命によって力をつけた産業資本家や商人たちから自由貿易を求める声があがるようになり、東インド会社の特権への批判が高まった。そして、
 - a. （1813）年にイギリス東インド会社の中国貿易・茶貿易を除く、インド貿易独占権が廃止された。

- b. (1833)年には中国貿易・茶貿易に関する独占権が廃止され、イギリス東インド会社は商業活動を停止し、インド統治機関となった。
- 19世紀後半に入るとインドは少しずつ経済回復の動きが見られるようになったが、その矢先北インドを中心にして、広範な地域でインド人傭兵（シパーヒー）による大反乱が発生した。これはイギリスから内政権が認められ間接統治された（藩王国）に対する取り潰し政策で没落した旧支配者層なども加わり大規模となったが、軍事力・組織力に優れるイギリスは間もなく巻き返し、鎮圧された。
 - この反乱ではインド人傭兵たちは名目だけの存在となっていた（ムガル帝国）皇帝を擁立したため、反乱が鎮圧された後1858年に皇帝はイギリスへの反乱罪でビルマへ流刑となった。これにより、（ムガル帝国）は名実ともに滅亡した。
 - 1858年イギリスは（イギリス東インド会社）を解散し、インドの直接統治に乗り出した。
 - イギリス本国にはインド省と担当大臣が置かれ、インドではイギリス人総督と参事会が政庁を統括する形となった。1877年には当時のイギリス女王（ヴィクトリア女王）がインド皇帝に即位した。こうしてイギリス支配下のもと、1877年に（インド帝国）が成立した。イギリスによる当地は1947年のインド独立まで続いた。
 - イギリスは大反乱の経験から、従来の強圧的政策から、インド人同士の対立を作り出す（分割統治）と呼ばれる巧妙な政策へ転換した。
 - オランダがアジアにおける拠点とした（ジャワ）では、19世紀になるとオランダ支配に対して（ジャワ戦争）と呼ばれる大規模な反乱が発生した。
 - この反乱の鎮圧により本国の財政状況が悪化すると、オランダは立て直しのために、コーヒーやサトウキビ、藍、茶など世界市場に結びつく農産物の生産を徹底的に管理し安価で買い上げるという（強制裁培制度）を導入し、莫大な利益を上げた。
 - マレー半島とビルマにはイギリスが進出した。イギリスはオランダと協定を結びマラッカ海峡を境界とする支配権の分割を取り決める一方、1826年にマレー半島の（ペナン）・（マラッカ）・（シンガポール）を海峡植民地として成立させた。
 - 1870年代に入ると、対立抗争を繰り返していた中国人秘密結社やマレー人スルタンの間の錫を巡る利権争いに介入し、軍事と外交の巧妙な制作によって支配地域を広げた。1895年にはマレー半島の4カ国と協定を結んで（マレー連合州）を結成させ、翌年にはこれを保護領とし、北ボルネオ地域の諸州と合わせて支配を確立した。
 - 広大な未開地は主にロンドンで調達される資本によって（ゴム）のプランテーションとして開発された。このプランテーションの主力労働者として南インド大量の移民が導入された。彼らは（印僑）と呼ばれる。対して、後に増えた中国からの東南アジア地域への移民者を（華僑）という。

17. ビルマでは、タウングー朝が中国人の反乱をきっかけに倒れた後、ビルマ最後の王朝である（**コンバウン朝／アラウンパヤー朝**）が興った。
18. この王朝はインド東北部のアッサムにも進出したが、インドでの支配を固めつつ合ったイギリスは、これを1824～1826年に3次に渡る（**ビルマ戦争**）で破り、ビルマを併合した。
19. フィリピンにはスペインが進出していた。スペインは1834年にそれまでの欧米勢力を排除する政策を転換し、（**マニラ**）を正式に開港した。
20. ベトナムでは、黎朝の支配のもとで政治勢力が南北に分裂していたが、1771年に圧政に苦しむ農民の反乱を背景に（**西山の乱**）が発生し、南北両政権が倒されて（**西山**）政権が建てられ統一が図られた。
21. 一方、これに対し（**阮福暎**）が、フランス宣教師ピニョーが本国から連れてきた義勇兵やタイ・ラオスの援助などを受け、（**西山**）政権を倒して1802年に全土を統一しベトナム最後の王朝である（**阮朝**）を建てた。彼は1804年に清によって（**越南**）国王に封ぜられた。
22. 19世紀半ばになると、フランスはカトリック教徒への迫害を理由にベトナムに軍事介入し始めた。これに対し、（**劉永福**）が組織した（**黒旗軍**）はベトナム北部に拠点を置いて頑強に抵抗した。
23. これを口実にフランスは北部に侵入し、1883・84年にフランス・ベトナム間で結ばれたユエ条約により北部と中部を支配下に置いた。他方、清朝はベトナムへの宗主権を主張して派兵し、（**清仏戦争**）が発生した。その結果、清は1885年の（**天津条約**）でベトナムへの宗主権を放棄し、フランスの保護権を認めた。
24. ベトナムの植民地化に成功したフランスは、1863年以来すでに保護国としていた（**カンボジア**）と合わせて、1887年に（**フランス領インドシナ**）を成立させ、1899年には（**ラオス**）おもこれに編入した。
25. 東南アジアのほとんどの地域がヨーロッパ諸国の植民地となるなか、唯一植民地化の圧力を回避したのはタイであった。タイでは18世紀の終わりに、バンコクに首都を置き現在の王家に繋がる（**ラタナコーシン／チャクリ**）朝が創始された。
26. 19世紀後半、ラーマ4世の治世で政策の転換が行われ、自由貿易の原則が確認され先進諸国と外交関係が結ばれた。その結果、米の商品かが進み、デルタ地帯の開発が進んだ。次の国王ラーマ5世（**チュラロンコン**）はイギリス・フランスとの勢力均衡策を巧みに取り植民地化を回避した。

27. 18世紀末の清朝では、四川を中心とする新開地で1796～1804年にかけて（**白蓮教徒の乱**）が発生した。この反乱は10年近くも続き、鎮圧のため清朝の財政は窮乏した。
28. 一方、18世紀後半にヨーロッパ勢力が南北両面から東アジアに積極的な進出を始めたことは、清朝を中心とする従来の東アジアの国際秩序を揺るがせた。ロシアと清の間には康熙帝時代の1689年に結ばれた（**ネルチンスク条約**）や雍正帝時代の1727年に結ばれた（**キャフタ条約**）に基づく国境での交易が行われていたが、ロシアは極東での交易増大を図った。
29. ロシアの極東での交易増大策の一環として、1792年にエカチェリーナ2世の使節（**ラクスマン**）が北海道の根室に派遣され、日本との通商を求めている。
30. 1792年にイギリスは（**マカートニー**）を清朝に派遣して、（**広州**）以外の港の解放など自由貿易を要求した。しかし乾隆帝は貿易を恩恵と見る中華の姿勢を崩さず、その要求を認めなかった。
31. 18世紀後半に広州の対外貿易の大半を占めていたイギリスでは、本国での茶の需要の増大にともなって中国茶の輸入が急速に増えていた。その結果輸入超過を引き起こし、大量の銀が中国へ流入していた。これを打開するために、19世紀初めからは中国の茶をイギリスに、イギリスの綿製品をインドに、インド産のアヘンを中国に運ぶという（**三角貿易**）を始めた。
32. この結果、中国ではアヘンの吸飲が広がり、清朝がアヘン輸入を禁止した後も（**密貿易**）が増えて大量の銀が国外に流出するようになった。
33. 清朝はこの実情を重視し、1839年（**林則徐**）を広州に派遣して取り締まりにあたらせた。彼は広州でアヘンを没収処分にしたうえ、今後アヘン貿易をしないという制約をイギリス人商人に迫った。
34. 人の健康を害するアヘン貿易についてはイギリス国内でも批判が強かったが、イギリス政府は自由貿易の実現を唱えて海軍の派遣を決定し、1840年に（**アヘン戦争**）[1840～1842年]を起こした。
35. この戦争で、清は優れた兵器を持つイギリス海軍に連敗し、1842年に（**南京条約**）を結んだ。主な内容は以下である。
 - a. （**香港島**）の割譲
 - b. 上海・寧波・福州・廈門・広州の5港の開港
 - c. 広州での外国船貿易を独占した特許商人の組合である（**公行**）の廃止
 - d. 賠償金の支払い
36. さらに1843年、追加条約として、五港[五口]通商章程と（**虎門寨追加条約**）という不平等条約を結んだ。

- a. 五港[五口]通商章程では領事が自国民を本国の方で裁き、滞在国の司法の介入を認めない[=治外法権]（領事裁判権）を、
 - b. （虎門寨追加条約）では国家が関税制度を定め、運営する権利である（関税自主権）の喪失、条約締結国の一方がより有利な待遇を他国に与えた場合、同等の待遇を相手国に求めるという（最恵国待遇）を承認した。
37. また、清は1844年にはアメリカ合衆国と（望厦条約）を、フランスとは（黄埔条約）を結び、それぞれに対してイギリスと同様の権利を認めた。
38. しかし、戦後の交易でも欧米諸国が期待したほどの利益は上がり、不満を抱いたイギリスは条約改定の機会を伺っていた。1856年廣州でイギリス船籍を主張する船の中国人乗組員が海賊容疑で清朝官憲に逮捕されるという（アロー号事件）が起こると、これを口実にフランスに呼びかけて共同出兵を行い、（アロー戦争）[1856～1860年]を起こした。この戦争は別名を（第2次アヘン戦争）という。
39. この戦争で英仏軍は廣州を占領し、海路を北上して天津に迫り、1858年に（天津条約）を結んだ。この条約では、
- a. 英仏両国への賠償金600万両の支払い
 - b. 牛莊・登州・漢口・九江・鎮江・南京・汕頭など11ヶ所の開港場の追加
 - c. 外国人の内地旅行の自由、
 - d. 外交使節の北京駐在
 - e. キリスト教布教の自由
- などを中国に認めさせた。
40. しかし翌年1859年、条約批准のために訪中した各国使節を清軍が攻撃すると、英仏軍は再度出兵して北京を占領し、1860年に（北京条約）を結んだ。この条約では1858年に結ばれた（天津条約）の内容に加え、
- a. 賠償金を600万両から800万両に増額
 - b. 天津の開港

c. 九竜半島南端の市街地をイギリスに割譲

などが決められた。

41. なお、この時の英仏軍によって（**円明園**）の離宮で徹底的な破壊活動が行われ、廃墟となった。
42. ロシアも19世紀半ば、東シベリア総督の（**ムラヴィヨフ**）のもとで中国への圧力を強化し、1858年には清と（**アイグン条約**）を結んで黒竜江以北を領有した。
43. 1860年には、1856～60年にかけてイギリス・フランス対清朝で発生した（**アロー／第2次アヘン**）戦争も仲介の見返りとして（**北京条約**）を結んでシベリア東南端に位置する沿海州を獲得し、その中の都市（**ウラジヴォストーク**）港を開いて太平洋進出の根拠地とした。
44. また、イスラーム教徒の反乱を機に（**イリ**）地方へ出兵し、（**イリ**）事件を起こした。この事件後に結ばれた（**イリ**）条約では通商上の特権を得た。
45. 19世紀後半には中央アジア南部にも侵攻し、ウズベク人の（**ブハラ＝ハン国**）・（**ヒヴァ＝ハン国**）を保護国とし、（**コーカンド＝ハン国**）を併合してロシア領トルキスタンを形成した。
46. アヘン戦争後、重税による窮乏化や清朝統治に対する不安のために民衆の間では、華北の塩の密売集団による（**捻軍**）などの結社を作って助け合っていた。
47. これらの結社は中国各地で反乱を起こしたが、そのなかで最大のものが（**洪秀全**）を指導者として興った（**太平天国**）である。彼は広東でキリスト教の伝道に接し、自らをキリストの弟と称して（**拝上帝会**）という宗教結社を作った。
48. この宗教結社の活動は弾圧を受けたが、1851年に広西で挙兵すると、その運動は貧困を逃れ救済を求める民衆を巻き込んで急速に広がった。彼らは1853年に南京を占領してここを首都と定め、（**天京**）と名付けた。
49. 彼らは（**滅満興漢**）を掲げて清朝打倒を目指し、満州の習慣である（**辮髪**）や、アヘン吸飲、女性の足指を幼時から内向きに縛り小足とする（**纏足**）などの悪習の廃止、土地の均分である（**天朝田畝制度**）を打ち出して支配下の男女を戦闘・労働に動員した。
50. この宗教結社は後に内紛を起こし衰退し、これを機に彼らを破ったのは、漢人官僚が郷里で組織した義勇軍の（**郷勇**）で、（**曾國藩**）率いる湘軍、（**李鴻章**）率いる淮軍などがその代表であった。
51. 諸外国は洋槍隊を率いたアメリカ人の（**ウォード**）や、その後を継いだ（**ゴードン**）が率いる常勝軍が清軍に協力した。

52. 1864年に反乱を起こしていた宗教結社（太平天国）が首都としていた（天京）が陥落し彼らは滅んだ。その後国内の秩序は一時的に安定し、（同治の中興）と呼ばれた。
53. 湘軍を率いた（曾国藩）、淮軍を率いた（李鴻章）、他に楚軍を率いていた（左宗棠）らは富国強兵を目指して西洋の学問や技術を導入した。これを（洋務運動）という。
54. この運動は、中国の伝統的な道德倫理を根本としながら西洋技術を利用するという、（中体西用）の立場を取っており、国家や社会の制度の大きな変革を目指すものではなかった。

1. 日本ではアメリカの海軍軍人ペリー提督の来航をきっかけに、1854年に下田・函館の開港を定めた（**日米和親条約**）、1858年に神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港を定めた（**日米修好通商条約**）を結び、開国を行った。
2. この対外危機の中で倒幕運動が起こり、幕府の大政奉還を経て、1868年に天皇親政の明治政府が成立した。これを明治維新という。明治政府は富国強兵を目指し、工業や軍事の近代化の他、1889年のドイツ憲法に倣った（**大日本帝国憲法**）の発布、1890年の（**二院制**）の議会の開設など、社会制度の面で中国より一足早い近代化改革を推し進めた。
3. 日本はロシアと、全樺太をロシア領、全千島を日本領と定めた（**樺太千島交換条約**）を1875年に結んで北方の国境を定めた。
4. 同時に、当初よりも積極的な海外進出の姿勢を示し、1874年の（**台湾**）出兵や1879年の（**琉球**）領有のほか、朝鮮にも勢力を伸ばして、宗主国の立場を取る清と対立した。
5. 中国歴代王朝は外国を対等な存在ではなく国内の延長とみなしていたため、特別に外交を扱う役所は設けられていなかった。しかし、1861年に初めて外務省にあたる（**総理各国事務衙門／総理衙門**）が設置された。
6. 朝鮮では、1860年代に入ると欧米諸国が開国を迫るようになったが、当時の国王高宗の摂政である（**大院君**）はこれを拒否した。
7. 日本は1875年に朝鮮を挑発して（**江華島事件**）を起こし、1876年に不平等条約である（**日朝修好条規／江華条約**）を結んだ。この条約の主な内容は、
 - a. 朝鮮の自主独立宣言
 - b. 釜山・元山・仁川の3港の開港
 - c. 日本公使館・領事館の設置
 - d. 開港場での日本の領事裁判権
8. 当時朝鮮内部では、攘夷派と改革派との対立に加えて、改革派の中にも日本に接近して急進的な改革を図ろうとする（**金玉均**）らと、清との関係を維持して少しずつ改革を行おうとする外戚の（**閔氏**）一族など異なる立場があった。
9. その結果、1882年の（**壬午軍乱**）や1884年の（**甲申政変**）など内乱がしばしば起こり、朝鮮を巡る日清間の対立も深まった。
10. 日清両国は1885年に（**天津条約**）を結び、両国軍の朝鮮からの撤兵、以後出兵する際には相互に事前連絡することを取り決めた。

11. しかし1894年に（**全琿準**）らが（**甲午農民戦争**）と呼ばれる農民蜂起を起こすと、両国軍が出兵して（**日清戦争**）となった。この農民蜂起は東学の乱とも呼ばれる。東学は1860年頃に（**崔濟愚**）が創始した新宗教であり、農民蜂起の指導者に東学の幹部が多かったため東学の乱と呼ばれている。
12. この戦争に敗れた清は、1895年の（**下関条約**）を結び、
- 清は朝鮮が独立国であることを承認
 - 日本へ（**遼東半島**）・（**台湾**）・（**澎湖諸島**）の割譲
 - 賠償金の支払い
 - 通商上の特権付与
 - （**開港場での企業設立**）
- を認めた。ただし、この内（**遼東半島**）はロシア・ドイツ・フランスなどの干渉により日本から中国へ返還することになった。これを（**三国干渉**）という。
13. 19世紀後半になると、ヨーロッパ大陸諸国やアメリカ合衆国でも産業革命が進められた。特にアメリカとドイツは、近代科学の成果を生かした工業部門や新技術を発展させ、世界を先導するようになった。最初の産業革命が、石炭と蒸気力を動力源に軽工業や製鉄業で起こったのに対し、新しい工業や技術は石油と電力を動力源に使い、（**重化学**）工業・電機工業・アルミニウムなど非鉄金属部門を発展させたので（**第2次産業革命**）と呼ばれている。
14. これらの新工業部門の建設には巨額の資本が必要で、資本を提供する銀行と結びついた少数の巨大企業が市場を支配する傾向が見られた。企業による市場の独占には3つの形態がある。
- （**カルテル**）・・・同一産業の複数企業が独立性を維持しながら価格や生産量に関して協定を結ぶ企業連合
 - （**トラスト**）・・・同一産業の企業が有力資本の下に吸収・合併される、競争排除を目的とした企業合同
 - （**コンツェルン**）・・・異なる産業間の企業が、株式保有を通じて単一の資本系列の下に統括されてできた企業形態
15. 急速な工業化は工場労働者の数を増大させ、都市化を進める一方、農業や中小企業を圧迫して、人々の生活基盤や環境を激変させた。工業化によって伝統的生活基盤を破壊された多くの人々は（**移民**）となって国を離れ、新しい国や地域へと移っていった。

16. 主要国の資本主義が発展し、相互の競合が激しくなると、将来の発展のための資源供給地や輸出市場として（植民地）の重要性が見直された。
17. 1880年代以降、諸列強はアジア・アフリカに殺到し、植民地や勢力圏を打ち立てた。こうした動きを（帝国主義）という。
18. 20世紀に入ると、ドイツは他の列強の植民地や勢力圏の再配分を要求して特にイギリスと対立した。イギリスは、広大な植民地帝国を維持するために、非白人系植民地では直接支配を、白人植民者の多い植民地は、イギリス帝国内最初の自治領である（カナダ）のように自治領にして間接支配を行った。
19. 1870年代以降、世界的な不況や他の工業国との競合に直面すると、1875年に保守党の（ディズレーリ）首相は（スエズ運河）会社の株を買収して運営権を握り、1877年に発生したロシア＝トルコ戦争にも干渉して、インドへの道を確保した。
20. 1880年代にエジプトを支配下に置いたイギリスは、1895年に植民地相になった（ジョゼフ＝チェンバレン）のもとで植民地と連携強化を図り、その結果1901年に（オーストラリア連邦）、1907年に（ニュージーランド）、1910年に（南アフリカ連邦）が自治領になった。
21. イギリス国内では、知識人を中心にした社会主義団体である（フェビアン協会）や労働組合が労働者独自の政党を求めて、1900年に（労働代表委員会）を結成、これが1906年に（労働党）となった。この党は社会主義を目標に掲げたが、緩やかな改革を通じてその実現を目指す方針を採った。
22. 1905年に成立した自由党内閣は、この党の協力を得て社会改革を実行し、1911年には国民保険法を制定した。また、ドイツに対抗する海軍拡張費を得るため、ロイド＝ジョージ蔵相は社会上層への税負担を増やした。保守党が強い上院がこれに抵抗すると、政府は1911年に（議会法）を制定し、予算案を含む財政法案と、下院で3期可決された法案に対しての上院の拒否権を廃止した。
23. 自由党内閣は1914年に（アイルランド自治法）も成立させた。しかし、イギリス人の多い北アイルランドはこれに反対して、アイルランド独立を主張する（シン＝フェイン）党と対立したため、政府は第一次世界大戦の勃発を理由に実施を延期した。なお、一部の独立強硬派は1916年に（イースター蜂起）と呼ばれる武装蜂起を起こしたが鎮圧された。
24. 1870・71～1940まで続く、第二帝政崩壊後の（第三共和政）下のフランスは、1890年代以降、1894年にロシアと（露仏同盟）、1904年にはイギリスと（英仏協商）を結んでドイツに対抗した。
25. フランス国内では、
 - a. 1887～89年に元陸相（ブーランジェ）を支持した反議会主義的な政治運動である（ブーランジェ事件）

- b. 1894～1899年にはユダヤ系軍人（**ドレフュス**）に対する冤罪事件である（**ドレフュス事件**）などの共和政攻撃の動きが起こったが、政府はこの危機を切り抜けた。
26. 労働運動では、政党の指導ではなく労働組合のゼネストによって一挙に社会改革の実現を目指す（**サンディカリズム**）が現れた。しかし、1905年に社会主義諸派が（**フランス社会党／統一社会党**）を結成して、この動きを抑えた。
 27. また、1905年、カトリック教会の政治介入を排除した（**政教分離法**）が発布されて共和国は安定した。
 28. ドイツでは、1888年に（**ヴィルヘルム2世**）が即位した。若い皇帝は自ら政治を指導しようとして、ロシアとの再保障条約の更新や、社会主義者鎮圧法延長に反対し、1890年に（**ビスマルク**）を罷免した。
 29. ドイツの資本主義が急速に伸長したのを背景に、この皇帝は（**世界政策**）を名のもとに強引な帝国主義政策を追求し、海軍の大拡張を図ってイギリスを脅かした。
 30. 市民層の間にも、国外のドイツ人を統合して大帝国建設を目指す（**パン＝ゲルマン主義**）運動が広がり、皇帝の政策を後押しした。
 31. ドイツ国内では、1890年に社会主義者鎮圧法が廃止されると、（**社会民主**）党は急速に勢力を伸ばし、1912年には帝国議会第一党になった。
 32. この党は、1890年以降、マルクス主義に基づいて、資本主義を革命によって倒して社会主義を実現すると主張したが、やがて党内に議会を通じての社会主義化を唱えるベルンシュタインらの（**修正主義**）が現れた。
 33. 1890年代から、ロシアの資本主義はフランスからの資本導入によって発展し、都市では大工業が急速に成長した。しかし、工業や銀行の多くは外国資本の手にあり、工場での労働条件も劣悪であった。国内市場の狭いロシアは、（**シベリア鉄道**）建設などの国家事業によって国内開発を進め、アジア・バルカン方面への進出を図った。
 34. ロシア国内では、20世紀初頭、それまで平穏であった農村で、農奴解放後も地主への従属が続くことに抗議する激しい農民運動が表れ、工場労働者のストライキも起こった。知識人や社会主義者の中からも、専制体制の転換を求める声が高まり、マルクス主義を掲げる（**ロシア社会民主労働党**）や、ナロードニキの流れを汲む（**社会革命党**）が結成された。
 35. この内、（**ロシア社会民主労働党**）は、（**レーニン**）を中心とする、党を労働者・農民を指導する精鋭の革命家集団にすることを旨とする（**ボリシェヴィキ**）と、（**プレハーノフ**）を中心とする、広く大衆に基礎を置き、中産階級とも妥協して、緩やかに改革を進めることを目指す（**メンシェヴィキ**）に分裂した。

36. 1905年、日露戦争の戦況が不利になり、民主化と戦争中止を掲げて冬宮へ請願デモを行った労働者・市民に対する軍による発砲事件である（血の日曜日事件）が起こると、農民蜂起、労働者のストライキ、民族運動が全国的に吹き出した。モスクワでは、労働者の自治組織（ソヴィエト）が武装蜂起に立ち上がり、海軍でも反乱が起こった。こうした革命運動を（第1次ロシア革命）という。
37. 自由主義者も政治改革を要求したので、皇帝（ニコライ2世）は（十月宣言）を発して、立法権を持つ国会である（ドゥーマ）の開設、市民的自由などを認め、自由主義者の（ヴィッテ）を首相に任命した。しかし、革命運動が退潮に向かうと、皇帝は再び専制的姿勢を強めた。
38. 1906年、首相になった（ストルイピン）は帝政の支持基盤を広げるため、農村共同体（ミール）を解体し、独立自営農を育成しようとしたが挫折した。
39. 19世紀末に世界第1位の工業国となったアメリカ合衆国では、巨大企業の登場によって自由競争が交代する一方、東欧・南欧からの移民の大量流入による都市の貧困問題などが表面化していた。その為20世紀初めの政権は、独占の規制や労働条件の改善など（革新主義）と呼ばれる諸改革を実施した。
40. 一方で、西部では未開拓地（フロンティア）が消滅するに連れ、海外への進出を目指す帝国主義政策を求める声も高まっていった。共和党の（マッキンリー）第25代大統領は、キューバの独立運動に乗じて、1898年（アメリカ＝スペイン／米西）戦争を起こし、勝利した。
41. この戦争に勝利した結果、フィリピンや（プエルトリコ）など、カリブ海・太平洋のスペイン領植民地を獲得するとともに、キューバに対しては財政や外交を制限する（プラット条項）を押し付け、保護国化した。
42. このような海外植民地の領有には国内に強い反対もあり、中国に対しては1899年に国務長官（ジョン＝ヘイ）が門戸開放政策を提唱したように、経済進出に重点を置く政策も登場した。
43. 暗殺された第25代大統領（マッキンリー）に替わって大統領に就任した共和党の（セオドア＝ルーズベルト）は、中米諸国に度々武力干渉を行った。これを（棍棒外交）という。他にも、パナマ運河の建設など、積極的な（カリブ海）政策を推進した。
44. 1913年に大統領になった民主党の（ウィルソン）第28代大統領は、「新しい自由」を掲げ、大企業を規制する、独占禁止のための法律である（反トラスト法）の強化や関税引き下げ、労働者保護立法などを実施した。
45. 対外的には、アメリカ民主主義の道徳的優位を説く、「宣教師外交」を推進したが、内戦状態にあったメキシコに軍事介入したり、1914年に太平洋と大西洋をつなぐ（パナマ運河）が完成するとその管理権を握るなど、中米やカリブ海地域での覇権を確立した。

46. ロンドン少数の革命家や思想家を中心に結成された労働者組織、第1インターナショナルは、1870年代に解散した。その後、欧米先進国で大衆的労働運動や社会主義運動が勢力を伸ばし、マルクス主義が社会主義思想の主流になった。1889年、パリで各国の労働運動組織を集めた新たな国際連帯組織である（第2インターナショナル）が結成された。

1. 19世紀前半、ヨーロッパ人のアフリカに関する知識は、北部とインド航路の港などアフリカ沿岸部に限られていた。同世紀半ば、イギリスの宣教師（**リヴィングストン**）やアメリカのジャーナリスト、スタンリーが中央アフリカを探検して事情を伝えた後、列強はこの地に関心を示すようになった。
2. 1880年始め、アフリカ大陸中央部の（**コンゴ**）地域を巡るヨーロッパ諸国の対立が起こると、ドイツのビスマルクは1884～85年に（**ベルリン会議／ベルリン＝コンゴ会議**）を開き、ベルギー国王の所有地として（**コンゴ自由国**）の設立を認め、さらにアフリカの植民地化の原則を定めた。
3. この後、列強はアフリカに殺到し、瞬く間にその大部分を分割して植民地にした。イギリスは1880年代始め、エジプト最初の民族運動である（**ウラービー運動**）を武力で制圧してエジプトを事実上の保護下に置き、さらにサハラ砂漠南縁部に広がる（**スーダン**）に侵入した。
4. この地域では、（**マフディー**）派が抵抗して、ゴードン指揮下のイギリス軍をハルツームで破り一時侵入を阻止したが、1899年に征服された。
5. アフリカ南部では、（**セシル＝ローズ**）の指導でアフリカ最南端の（**ケープ植民地**）から周辺に侵攻する政策が採られた。1899年には、この地に入植したオランダを始めとするヨーロッパ諸国からの移民の末裔である（**ブール人**）に対して（**南アフリカ**）戦争を起こし、激しい抵抗を受けながらも（**トランスヴァール共和国**）と（**オレンジ自由国**）を併合した。
6. このような、イギリスがアフリカ植民地化に際して採った政策を（**アフリカ縦断政策**）という。この政策では北のエジプトと南の（**ケープ植民地**）との連結を目指していた。
7. イギリスは更に、ケープタウンとカイロをつなぎ、インドのカルカッタと結びつける（**3C政策**）を進めた。
8. フランスは、1881年に（**チュニジア**）を保護国にし、さらに世界最大の砂漠である（**サハラ砂漠**）地域を抑え、アフリカを横断して（**ジブチ**）・（**マダガスカル**）と連結しようとした。
9. この計画はイギリスの縦断政策と衝突し、1898年に（**ファショダ事件**）が起こったが、フランスが譲歩して解決した。
10. その後、両国は接近して1904年に（**英仏協商**）を成立させ、エジプトにおけるイギリスの支配的地位と、（**モロッコ**）におけるフランスの支配的地位を認めあい、ドイツに対抗した。

11. ドイツは1880年代半ば、カメルーン・南西アフリカ・東アフリカなどの植民地を得たが、いずれも経済的価値に乏しかった。その為ドイツは20世紀に入ると新たな植民地獲得を目指し、1905年と1911年の2度に渡り、フランスの（モロッコ）支配に挑戦する（モロッコ事件）を起こした。しかし、いずれもイギリスがフランスを支援したため失敗し、1912年（モロッコ）はフランスの保護国となった。
12. なお、この事件は、第1次ではヴィルヘルム2世が（タンジール）に上陸して列国会議を要求し、第2次ではドイツが砲艦を（アガディール）に派遣してフランスを牽制した。
13. イタリアは、1880年代アフリカ大陸北東部の（ソマリランド）とエチオピア北部の（エリトリア）を獲得し、さらにエチオピアに侵入したが、1896年アドワの戦いで敗れ後退した。
14. しかし、1911～1912年、（イタリア＝トルコ戦争）を起こして、オスマン帝国から（リビア）〔（トリポリ）と（キレナイカ）の総称〕を奪った。
15. こうして20世紀初頭には、アフリカ全土は（エチオピア帝国）と（リベリア共和国）を除いて、列強の支配下に置かれた。
16. 太平洋地域には、スペイン・ポルトガル・オランダに次いで18世紀になるとイギリスが参入し、19世紀になるとフランス・ドイツ・アメリカ合衆国が進出した。オーストラリアは1770年にイギリスの探検家（クック）が領有宣言を行って、イギリス領となった。
17. イギリスはニュージーランド・北ボルネオ・ニューギニア東部を領有し、その過程でオーストラリアでは先住民の（アボリジニー）が奥地に追われ、ニュージーランドでは先住民（マオリ人）の抵抗が武力で抑え込まれた。
18. その後オーストラリアは1901年に自治領の（オーストラリア連邦）となった。
19. ドイツも、1880年代以降、ビスマルク諸島・カロリン・（マリアナ）・マーシャル・（パラオ）の諸島を獲得した。これらの、赤道以北の東経130～180度の西太平洋地域小諸島を（ミクロネシア）という。
20. アメリカ合衆国は、1898年の（アメリカ＝スペイン／米西）戦争の結果、スペインから（フィリピン）と（グアム）を獲得した。
21. さらにアメリカは1898年に（ハワイ）も併合した。なお、この地の最後の女王は（リリウオカラニ）である。
22. 19世紀末のラテンアメリカ諸国では、欧米諸国の重工業化の進展による原料・食料需要の高まりや、鉄道・汽船の普及・冷凍技術の発達の結果、原料や食料の対欧米輸出が一層増加していった。中米ではアメリカ、南米ではイギリスの経済的影響が大きかった。なかでもアメリカ合衆国は1889年以来（パン＝アメリカ会議）を定期的で開催して、ラテンアメリカへの影響力の拡大を図っていった。

23. メキシコでは、アメリカとの戦争に破れた後、自由党のファレス政権によって協会の土地所有を禁止する改革などが進んだが、保守党の反乱が起こり、内戦となった。これを（メキシコ内乱）[1857～1867年]という。
24. この反乱に乗じて、1860年代には（ナポレオン3世）が内政に介入する事態が発生した。この干渉はアメリカの強い反対などもあって失敗に終わったが、その後（ディアス）大統領の下で鉱山開発などによる近代化が進められた。
25. しかし、この大統領の政権が長期化して独裁的になったため、1910年に自由主義者の（マデロ）が呼びかけて（メキシコ革命）を起こし、後に農民指導者（サパタ）らが参加し、大統領を追放した。この革命は、この2人の他に（ピリャ）も革命軍を率いて革命を導いた。
26. 1890年、ドイツは対外行動の自由を広げるため、ロシアとの再保障条約更新を見送った。これに反発したロシアは工業化の資本を得るためフランスに接近し、（露仏同盟）を結んだ。フランスは外交的孤立を脱し、列強関係は流動化した。
27. ドイツはその後、（バグダード鉄道）建設を推進し、ベルリン・ビザンティウム[イスタンブル]・バグダードを結ぶ、（3B政策）によってイギリスのケープタウン・カイロ・カルカッタを結びつける（3C政策）に対抗した。また、90年代末からイギリスとの間で海軍拡張を競う建艦競争を引き起こした。
28. イギリスは長い間、どの国とも同盟を結ばない（栄光ある孤立）の立場を採ったが、東アジアにおけるロシアの進出に対抗して1902年に日本との同盟（日英同盟）を結び、ドイツの挑戦に備えて1904年フランスと（英仏協商）を成立させた。
29. やがて日露戦争に敗れたロシアが東アジアからバルカンへの進出策に転じると、ドイツ・オーストリアと衝突するようになった。そのため、ロシアはイギリスと和解し、1907年（英露協商）を成立させた。
30. イギリス・フランス・ロシアはドイツ・オーストリアを共通の脅威と見て、協力してそれぞれの植民地や勢力圏を守ろうとした。この3国の提携関係を（三国協商）という。
31. イタリアはドイツ・オーストリアと結んだ（三国同盟）の一員であったが、オーストリア領に残ったイタリア人居住地、いわゆる（未回収のイタリア）を巡ってオーストリアと対立し、フランスに接近した。この結果、ドイツは唯一の同盟国オーストリアとの連携を重視した。
32. 日清戦争での清の敗北をきっかけに、列強は清朝領土内での鉄道敷設・鉱山採掘などの利権獲得競争に乗り出した。（シベリア鉄道）の建設を進め、南進の機会を伺っていたロシアは、まず、下関条約で日本が（遼東半島）を獲得すると、1895年にフランスとドイツを

誘って日本に圧力を加えてこれを清に返還させた。これを（三国干渉）という。ロシアはその代償として清から（東清鉄道）の敷設権を得た。

33. また、ドイツが宣教師殺害事件を口実に1898年（膠州湾）を租借すると、
 - a. 同年ロシアは（遼東半島南部）を、
 - b. イギリスは（威海衛）・（九竜半島）を租借し、
 - c. フランスは1899年に（広州湾）を租借した。
34. 当時アメリカ合衆国は、中国への関心を高めていたが、進出の遅れを取り戻そうと、国務長官の（ジョン＝ヘイ）の名で、
 - a. 中国における商業活動の自由を列強に伝えた（門戸開放）、
 - b. 中国への参入機会の対等化を列強に伝えた（機会均等）、
 - c. 中国の領土と行政を保つことを列強に伝えた（領土保全）を提唱した。
35. 日清戦争敗北の衝撃の中で、中国では、日本の明治維新に倣った根本的な制度改革（变法）を主張する意見が台頭した。その中心となった公羊学派の（康有為）は、儒学の祖である孔子の教えは古い制度を守ろうとするものではなく積極的な改革を目指したものだとする新しい学説を打ち出し、国会開設や憲法制定による、立憲君主制に向けての改革を推し進めようとした。
36. この人物は、1898年に当時の清朝第11代皇帝（光緒帝）を説得して政治の革新を断行させた。これを（戊戌の変法）という。しかし、この改革に反対する保守派は（西太后）と結んで（戊戌の政変）と呼ばれるクーデタを起こし、改革を推し進めた皇帝（光緒帝）は幽閉され、（康有為）や（梁啓超）らは失脚して改革は失敗した。
37. 列強による分割が進行するにつれ、中国では民衆の排外運動が激化してきた。北京条約でキリスト教の布教が公認され、布教活動が活発化すると、各地で（仇教運動）と呼ばれる反キリスト教運動が起こった。
38. 特に、日清戦争後の欧米列強の華北への強引な進出は、民衆の民族的感情を高めた。なかでも、山東の農村の自警団組織を基盤に生まれてきた宗教的武術集団の（義和団）は（扶清滅洋）を唱えて鉄道やキリスト教教会を破壊し、宣教師や信徒を排撃した。
39. 清朝の保守排外派はこの運動を利用して列強に対抗しようとし、1900年に各国に宣戦を布告した。各国は在留外国人の保護を名目に共同出兵にあたり、日本とロシアを主力とする8カ国の連合軍は北京を占領し、在留外国人を救出した。これを（義和団事件）という。
40. 1901年、敗れた清は（北京議定書／辛丑和約）に調印し、巨額の賠償金の支払い、外国軍隊の（北京駐屯）などを認めた。

41. この事件後もロシアは中国東北の（満州）から撤兵せず、さらに朝鮮への圧力を強めた。日清戦争後の朝鮮は1897年に国号を（大韓帝国）として皇帝の称号を用い、朝鮮が独立国であることを示したが、日本とロシアは朝鮮の支配を目論んで対立を深めた。
42. 当時イギリスは南アフリカ戦争に手一杯で極東に兵を送る余力がなかったため、（日英同盟）を結んで日本にロシアを抑えさせようとし、アメリカもそれを支援した。
43. 日本は、両国の経済的支援を背景に対ロシア強硬方針を採り、1904年にロシアに宣戦した。（日露戦争）の海戦である。この戦争は（日本海海戦）でのバルチック艦隊撃破などにより日本が勝利を収めた。
44. 日本・ロシア両国はアメリカ大統領（セオドア＝ルーズベルト）の調停で1905年に（ポーツマス条約）を結んだ。この条約により、
 - a. 日本の韓国への指導・監督権
 - b. （遼東半島南部）の租借権
 - c. （南満州鉄道）の利権
 - d. （樺太／サハリン）南半の領有権を獲得した。
45. この戦争後、日本とイギリスはそれぞれロシアと（日露協約）、（英露協商）を結んだ。
46. 日本は経済的利益のためにも、大陸への支配拡大を目指すようになり、韓国に対し3次に渡る（日韓協約）を結び、韓国の外交を監督する統監府の設置や韓国の保護国化など、実質的支配を推し進めた。
47. 日本の韓国支配を推し進めた初代韓国統監の（伊藤博文）は、ハルピンで（安重根）に暗殺されている。
48. 日本の韓国支配に対し、韓国では皇帝の高宗が（ハグ）の万国平和会議に密使を送って国際世論に訴えかけるという（ハグ密使事件）を起こすが、列強に黙認された。
49. 韓国各地で民衆が（義兵闘争）と呼ばれる抗日武装闘争など抵抗運動を行ったが、日本はこれを抑え、1910年に韓国を併合した。
50. 日本はソウルに韓国統治の中枢機関である（朝鮮総督府）を置き、憲兵による武断政治を行った。
51. 1900～1901年に発生した（義和団事件）の後の清朝では、（科挙）の廃止、立憲制へ向けて（憲法大綱）の発表と（国会開設）の公約など、近代国家の建設に向けて改革に踏み切った。これらの改革を（光緒新政）と呼ぶ。
52. 海外では、海外に移住した中国系住民の（華僑）や留学生を中心に、漢人による清朝の打倒を目指す革命運動が盛んになっていた。革命団体の（興中会）を指導する孫文は、ばらばらであった革命諸団体の結集を図り、1905年に東京で（中国同盟会）を組織した。

53. この組織は、満州王朝の打倒、共和国の建設、貧富の差の抑制を内容とする、「民族・民権・民生」の（三民主義）を掲げて、革命宣伝や武装蜂起を行った。
54. 1911年、満州皇族を中心として成立した内閣は、幹線道路を国有化し、外国からの借款[借金]によって鉄道建設を進めようとした。外国から利権を回収して民営の鉄道建設を行おうとしていた民族資本家や地方有力者は、一方的な国有化に反発し、（四川）では暴動が起こった。
55. この暴動をきっかけに、1911年10月に（武昌）の軍隊の中にいた革命派が蜂起し、（辛亥革命）が始まった。蜂起はたちまち各省に広がり、1ヶ月のうちに大半の省が独立を表明した。革命軍は帰国した孫文を臨時大統領に選出し、1912年1月南京で（中華民国）の建国を宣言し、アジア初の共和国が誕生した。
56. 清側は、李鴻章が淮軍を基盤として洋務運動期に作り上げた近代的軍隊である（北洋軍）を握る実力者である（袁世凱）を起用して革命側との交渉にあたらせたが、この人物は清朝を見限り、清帝の退位と共和政の維持を条件に、孫文から臨時大統領の地位を譲り受け、北京で就任した。こうして、1912年2月の（宣統帝／溥儀）の退位により、秦の始皇帝に始まる2千年以上にわたる中国の皇帝政治は終わりを告げた。
57. しかし、共和政は安定せず、議会の力を抑え独裁政治を進めようとした臨時大統領の（袁世凱）と、これに対抗する孫文らの（国民党）は激しく対立した。
58. 孫文らの武装蜂起（第二革命）を鎮圧して正式な大統領の座についた（袁世凱）は独裁を進め、自ら帝位につこうとしたが、諸外国の不支持などにより失敗し、失意のうちに病死した。
59. この人物の死後は、列強の支援を受けた（軍閥）と呼ばれる、自ら財源を確保した私的軍団が各地に分立して互いに抗争し、北京政府の実験を争奪する不安定な状況が十数年に渡って続いた。
60. 1912年に建国された（中華民国）は、清朝の領有していた漢・満・モンゴル・チベット・ウイグルなどの諸民族が居住する地域をその領土としたが、周辺部では独立に向かう動きがおこり、1911年には（外モンゴル）が独立を宣言し、1913年には（チベット）でダライ・ラマ13世が独立を主張する布告を出した。
61. その後、（外モンゴル）では（チョイバルサン）らがソヴィエト政府の赤軍の援助を得て1921年に独立を達成し、1924年にソヴィエト連邦の影響の下（モンゴル人民共和国）が成立した。この国はソ連以外の唯一の社会主義国となった。

1. インド帝国の成立以後、インドはイギリスを中心とした世界的な経済体制の中に組み込まれていたが、その中で弁護士や官僚などのエリート層を中心に、民族的な自覚を持つ階層が出現した。シパーヒーによる大反乱を経験したイギリス側にも、インド人エリートを植民地支配の協力者として利用しようという発想が生まれた。これら双方の意図が一致して、インド人の意見を諮問する機関として1885年に（インド国民会議）が結成された。
2. これは当初は穏健な組織として出発したが、次第に民族運動の中心となっていった。イギリスは、ヒन्दゥーとイスラームの両教徒を反目させて運動を分断することを意図して、1905年に（ベンガル）州を両教徒がそれぞれ多数を占める東西2つの地域に分ける（ベンガル分割令）を発表した。
3. これに対して、国民会議では、穏健派に替わって（ティラク）らの急進派が主導権を握り、分割反対運動を展開した。
4. 1906年に（カルカッタ）で開かれた大会では、
 - a. 英貨排斥
 - b. （スワデーシ）[国産品愛用]
 - c. （スワラージ）[自治獲得]
 - d. 民族教育の4綱領を決議し、イギリスの支配に真正面から対抗する姿勢を示し、国民会議は政治組織の（国民会議派）へと変貌した。
5. 一方、イスラーム教徒は、国民会議とは別に、親英的な（全インド＝ムスリム連盟）を1906年に結成した。
6. その後、イギリスは民族運動を沈静化するため、1905年に発表された（ベンガル分割令）を1911年に撤回し、さらに首都を反英運動の中心であったカルカッタから旧都デリーへ移した。
7. インドネシアでは、20世紀初めにオランダにより「倫理政策」と呼ばれる政策が開始され、その一環として現地人官吏養成のための学校が多く設立されることになり、貴族の子弟を中心に、オランダ語の教育や専門教育が施された。そしてそれらの教育を受けた子弟の間に、次第に民族的自覚が生まれていった。こうした状況の中で、1911年に民族的な組織が生まれ、12年に（イスラーム同盟／サレカット＝イスラーム）となった。

8. フィリピンでは、1880年代に入ると、(ホセ=リサール)らが民族意識を目覚めさせる言論活動を開始し、1896年には(フィリピン革命)が始まった。
9. この革命にアメリカ合衆国が介入すると、(アギナルド)を中心とする革命軍は、日本に武器援助を求めるなどして解放を目指す運動を進め、1899年(フィリピン共和国)を樹立した。
10. しかし、1898年にアメリカ=スペイン戦争でスペインとの条約によりフィリピンの領有権を得たアメリカは、1899年にフィリピンに侵攻し、(フィリピン=アメリカ戦争)が勃発した。フィリピンは敗れ、アメリカは1902年から本格的な植民地統治を開始した。
11. ベトナムでは、(ファン=ボイ=チャウ)を中心に、フランスからの独立と立憲君主制の樹立を目指す運動が1904年に組織され、その後この組織は(維新会)と呼ばれるようになった。
12. 明治維新後に急速に近代化し、日露戦争に勝利するなど強国化を果たした日本の姿に鼓舞されて、日本から軍事援助を得ようとする活動や、日本へ留学生を送って新しい学問や技術を学ばせようとする(ドンズー運動/東遊運動)も組織された。
13. この運動は中国の国民党の助力を得ながら広東で1912年に組織された(ベトナム光復会)に引き継がれた。
14. ヨーロッパ列強の進出とオスマン帝国領土の分割を巡る覇権争い、いわゆる「東方問題」の激化は、西アジア諸国の民衆に民族の自覚を促し、イスラーム教徒としての連帯の必要性を痛感させた。各地で民族主義と、ヨーロッパ植民地主義に対抗するためにイスラーム教徒は一致協力すべきという(パン=イスラーム主義)を説いた(アフガーニー)の思想は、エジプトのウラービー運動や、イランのタバコ=ボイコット運動に大きな影響を与えた。
15. オスマン帝国では、第34代スルタンの(アブデュルハミト2世)が1878年にミドハト憲法を停止したが、これに不満を抱く青年知識人・将校ら(青年トルコ人)は、スルタンの専制政治に反対する(統一と進歩団)を結成した。
16. 彼らは1908年政府に迫ってミドハト憲法を復活させ、政権を握った。これを(青年トルコ革命)という。
17. 1796年~1925年に渡る(カージャーレ)朝治下のイランでは、政府がイギリスの会社に与えたタバコの独占利権に反対する(タバコ=ボイコット運動)が1891~92年にかけて展開された。
18. やがて専制を批判する立憲運動が起こり、1906年にはイラン最初の国民議会が開かれ、フランス人権宣言の影響を受けた憲法が公布された。これを(立憲革命)という。
19. 列強体制が分裂して、イギリス・フランス・ロシアとドイツ・オーストリアの対抗関係に移行すると、これらの列強の利害が交錯するバルカン諸国やオスマン帝国での動向が、列強の関心の焦点となった。特にオーストリアは、国内のスラヴ系諸民族に統一と連帯を目指す

(パン＝スラヴ主義)の影響が及んで分離・自治運動が激化することを恐れ、バルカン地域での(セルビア)を中心とするスラヴ系諸国の台頭を抑え込もうとした。

20. 1908年、オスマン帝国で(青年トルコ革命)と呼ばれる立憲革命が起きると、オーストリアは管理下に合った(ボスニア・ヘルツェゴヴィナ)を併合した。この地の住民は大部分がスラヴ系であったため、スラヴ系民族主義者の強い反発を呼んだ。
21. なお、この立憲革命に乗じて、(ブルガリア)1908年に独立を達成している。
22. ロシアはオーストリアのバルカン半島進出に対抗して、1912年セルビア・ブルガリア・モンテネグロ・ギリシアのバルカン4国を(バルカン同盟)に結束させた。
23. 同年、この同盟はイタリアがオスマン帝国に対して起こした(イタリア＝トルコ戦争)に乗じてオスマン帝国に宣戦し、翌年勝利した。これを(第1次バルカン戦争)[1912～1913年]という。
24. この戦争の直後、獲得した領土の分配を巡る対立から、ブルガリアと他の同盟国間での戦争になった。これを(第2次バルカン戦争)という。
25. バルカン半島は、オスマン帝国の弱体化、諸民族の独立要求、帝国主義諸国の思惑などが集中し、一触即発の状況にあったため、(ヨーロッパの火薬庫)と呼ばれた。
26. 1914年6月末、オーストリアの帝位継承者夫妻がボスニアの州都(サライエヴォ)でセルビア人の民族主義者に暗殺された。
27. オーストリアがこの事件をスラヴ系民族運動を抑える好機と見て、ドイツの支持を得て7月末にセルビアに宣戦すると、ロシアはセルビア支援を表明した。8月初め、他の列強諸国も同盟・協商関係に従って参戦し、ドイツ・オーストリアなどの(同盟国)側と、フランス・ロシア・イギリス・日本などの(協商国／連合国)側に別れて争った。これを(第一次世界大戦)という。
28. その後、オスマン帝国・ブルガリア王国が(同盟国)側で参戦し、イタリア・アメリカが(協商国／連合国)側に加わった。
29. 戦争はドイツ軍による中立国(ベルギー)への侵入で始まった。ドイツ軍はさらに北フランスに侵入したが、(マルヌ)の戦いで阻止され、以後、西部戦線では両軍とも(塹壕)に立て籠もり、航空機・毒ガス・戦車などの新兵器を投入し、多くの死傷者を出しながら一進一退を繰り返す戦況になった。
30. 東部戦線では、ドイツが(タンネンベルク)の戦いでロシア軍を破り、ロシア領内に進撃したが、国土の広さや厳しい冬の気候のため決着の見通しはたたなかった。

31. 海軍力に勝る連合国は経済封鎖によってドイツと海外との貿易を絶ち、ドイツ側も1917年に（無制限潜水艦作戦）を宣言し、指定する航路以外の船舶を無警告で攻撃して、互いに経済活動を麻痺させようとした。
32. ドイツ・オーストリアなどの（同盟国）側もフランス・ロシア・イギリス・日本などの（協商国／連合国）側も、結束を固め中立国を味方に引き入れるために、戦後の敵領土・植民地の分配を決めた（秘密条約）を結んだ。主なものでは、イタリアに「未回収のイタリア」などの領土譲渡を約束した（ロンドン秘密条約）、オスマン帝国領の分配を約束した（サイクス・ピコ協定）がある。
33. また、双方とも自治や独立を約束して植民地や民族独立運動の支援を得ようとした。イギリスはアラブ民族と（フセイン＝マクマホン協定）、ユダヤ人と（バルフォア宣言）を結び、パレスチナを含む地域での独立支援を約束して協力させ、現在に至る両者の紛争の原因を作った。
34. 1918年3月、ドイツはソヴィエト＝ロシアと（単独講和／ブレスト＝リトフスク条約）を結んだ。これによりロシアは大戦から離脱し、これを機に西部戦線で攻勢に出たが失敗した。
35. 9月にはブルガリア王国、10月にはオスマン帝国が降伏し、同月オーストリアも休戦協定を結んだ。残されたドイツも疲弊して10月に休戦交渉を申し出るとともに、急遽、本格的議会政治の大勢を整え、帝政を救おうとした。しかし、11月初め、即時講和を求める水兵が（キール軍港）で蜂起すると、革命運動が全国に広がった。皇帝はオランダに亡命し、国内の諸君主も退位して、ドイツは共和国になった。この一連の革命を（ドイツ革命）と呼ぶ。こうしてドイツ共和国政府は11月11日休戦協定を結び、大戦は終結した。
36. 大戦開戦以来、ロシア軍は敗北を重ね、国民の間では戦争継続に反対する声が広がり、1916年夏には動員に抗議する中央アジア諸民族の蜂起も起こった。1917年3月8日、首都（ペトログラード）でパンと平和を求める民衆の大規模なデモやストライキが起こると、軍隊も加わってたちまち各地に広がり、労働者・兵士は評議会である（ソヴィエト）を組織して、革命を推進した。
37. この結果、皇帝（ニコライ2世）は退位し、ロマノフ朝は消滅して帝政は崩壊した。（ドゥーマ）と呼ばれる国会の立憲民主党など自由主義諸党派の議員は、ナロードニキの流れを汲む社会主義政党（社会革命党）らの支持を受けて、臨時政府を樹立した。この出来事を（二月革命）という。
38. 1917年4月、ボリシェヴィキの指導者（レーニン）が亡命先のスイスから帰国して、革命を更に進める方針である（四月テーゼ）を示し、ソヴィエト内でボリシェヴィキの勢力拡大に努めて、7月には新たに首相となった（ケレンスキー）と対立した。

39. 9月になると、ボリシェヴィキの勢力は全国に拡大し、11月7日に武装蜂起を指揮して政府を倒し、権力を握った。翌日、全ロシア＝ソヴィエト会議で新政権成立が宣言され、全交戦国に無併合・無償金・民族自決の原則による講和を呼びかけた（**平和に関する布告**）や、農民革命を認めた（**土地に関する布告**）が採択された。これを（**十月革命**）という。
40. ソヴィエト政府はドイツと休戦したが、国際的孤立状況とドイツの優勢な軍事力を見て、1918年3月、不利な条件でドイツ側と（**ブレスト＝リトフスク条約**）を結んだ。
41. 国内では、ボリシェヴィキは憲法制定会議を封鎖して、ソヴィエトを基盤とする体制に移行し、社会主義を目指す方針を明らかにした。ボリシェヴィキは（**共産党**）と改称され、首都は（**モスクワ**）に移された。
42. 18世紀後半には、ソヴィエト体制は事実上（**ボリシェヴィキ／共産党**）の一党支配になり、地主からの土地の無償没収と農民への分配、工業・銀行・貿易の国家管理などが実行された。
43. ボリシェヴィキを指導する（**レーニン**）は、ロシアで社会主義を成功させるには、先進資本主義国での革命が必要不可欠という（世界革命論）を唱え、1919年3月、モスクワで（**コミンテルン**）と呼ばれる国際組織を創設した。
44. 革命後、旧帝政派の軍人やボリシェヴィキに反対する政党は、各地に反革命政権を樹立した。革命の拡大を恐れる連合国もこれらの政権を援助し、さらに直接（**シベリア**）などに軍を派遣した。こうして（**対ソ干涉戦争**）が発生した。
45. ソヴィエト政府は（**赤軍**）と呼ばれる軍隊を組織し、（**チェカ**）と呼ばれる治安委員会を設置して反革命運動を取り締まる一方、危機的な食料状況を解決するために、農民から穀物を強制的に徴発して、都市住民や兵士に配給する（**戦時共産主義**）を実施した。その結果、1920年には国内の反革命政権はほぼ制圧され、外国軍も次第に撤退を始めた。
46. しかし、この結果農業や工業の生産の混乱や低下をもたらし、多数の餓死者まで出す深刻な事態を招き、1921年初めには、労働者や兵士の中からもボリシェヴィキの一党支配への反抗が見られた。このため、ボリシェヴィキの指導者（**レーニン**）は国有化を緩め、穀物徴発をやめて、農民に余剰農産物の自由販売を認め、中小企業の私的営業も許可した。この転換は（**新経済政策／ネップ**）と呼ばれる。
47. 1922年12月、ロシア・ウクライナ・ベラルーシ・ザカフカースの4ソヴィエト共和国は連合して（**ソヴィエト社会主義共和国連邦**）を結成し、1924年1月には新憲法が公布された。

1. 1919年1月、連合軍代表が集まり、（パリ講和会議）が開かれた。
2. この講和の基礎になる原則は、アメリカ合衆国の（ウッドロー＝ウィルソン）大統領が、1918年1月に発表した（十四か条）であった。主な内容は、
 - a. （秘密外交）の廃止
 - b. 海洋の自由
 - c. 関税障壁の撤廃
 - d. 軍備縮小
 - e. ヨーロッパ諸国民の（民族自決）
 - f. 植民地問題の公正な解決
 - g. 国際平和機構の設立 である。
3. しかし、フランスの首相（クレマンソー）やイギリスの首相（ロイド＝ジョージ）は、植民地などの既得権益を手放さず、敗戦国にも厳しい態度で臨んだので、この原則は部分的にしか実現しなかった。
4. 1919年6月、パリ郊外のヴェルサイユ宮殿で、ドイツと連合軍との間で（ヴェルサイユ条約）が調印された。主な内容は、
 - a. ドイツの海外植民地の放棄
 - b. （アルザス）・（ロレーヌ）のフランスへの返還
 - c. （ラインラント）の非武装化
 - d. 軍備制限
 - e. 巨額の賠償金[1921年に1320億（金マルク）に決定]である。
5. オーストリア・ハンガリー・ブルガリア・オスマン帝国の旧同盟国との講和条約は、それぞれ個別に結ばれた。それぞれ、
 - a. 連合軍とオーストリアでは（サン＝ジェルマン条約）
 - b. 連合軍とハンガリーでは（トリアノン条約）
 - c. 連合軍とブルガリアでは（ヌイイ条約）

- d. 連合王国とオスマン帝国では（**セーヴル条約**）がいずれもパリ近郊で調印された。
6. 旧オスマン帝国内では、アラビア半島でイブン＝サウドが独立し、（**シリア**）はフランスの、（**イラク**）・（**トランスヨルダン**）・（**パレスチナ**）はイギリスの委任統治のもとに置かれた。
7. 1919年に結ばれた連合王国とドイツとの間に結ばれた（**ヴェルサイユ**）条約では、ウィルソンの提案した国際平和機構である（**国際連盟**）の設置も決まった。
8. この平和機構は、世界の恒久平和を目指す史上初の大規模な国際機構で、スイスのジュネーブに本部を置き、
- 最高機関の（**総会**）、
 - 主要執行機関の（**理事会**）、
 - そして（**連盟事務局**）を中心に運営され、
 - さらに労働問題の調整・勧告を行う（**国際労働機関／ILO**）と
 - オランダのハーグに設置され、紛争を裁定する権限を持つ（**常設国際司法裁判所**）が置かれた。
9. しかし、この機構にはドイツなど敗戦国とソヴィエト＝ロシアは排除され、（**アメリカ**）も国際負担に反対する上院が拒否したため、参加しなかった。
10. 1919年1月、連合王国代表が集まり開かれた（**パリ講和会議**）で決定したヨーロッパの新国際秩序を（**ヴェルサイユ体制**）と呼んでいる。
11. 1921年～22年、アメリカ合衆国大統領ハーディングの提唱で、合衆国・イギリス・フランス・日本など9カ国が参加する（**ワシントン会議**）が開かれた。この会議では、
- 合衆国・イギリス・日本・フランス・イタリアの五大国間で主力艦の保有トン数と保有比率を定めた（**海軍軍備制限条約**）、
 - 中国の主権尊重・領土保全を約束した（**九カ国条約**）、
 - 太平洋諸島の現状維持を求めた合衆国・イギリス・フランス・日本の（**四カ国条約**）が結ばれた。なお、この条約の締結により、日本・イギリス間の（**日英同盟**）は解消された。
12. この会議で決まったアジア・太平洋地域の国際秩序を、（**ワシントン体制**）と呼ぶ。
13. 1920年、ポーランドはソヴィエト＝ロシアに侵攻し、（**ポーランド＝ソヴィエト戦争**）を引き起こした。この戦争の結果ポーランドはベラルーシとウクライナの一部を得た。

14. イタリアもユーゴスラビアと国境紛争を起こし、（**フィウメ**）を獲得した。
15. しかし、1924年以降、国際協調の気運が広がって、1925年の（**ロカルノ条約**）ではドイツと西欧諸国との国境の現状維持と相互保障が決まり、この条約の結果、翌年ドイツは（**国際連盟**）に加入した。
16. 1928年には、フランスのブリアン外相とアメリカのケロッグ国務長官の提唱で、（**不戦条約／ブリアン・ケロッグ条約**）が15カ国によって調印され、国際紛争解決の手段として戦争に訴えないことが誓われた。
17. なお、1921年～22年、アメリカ合衆国大統領ハーディングの提唱で開かれた（**ワシントン会議**）で残された補助艦の制限も、1930年の（**ロンドン会議**）でまとめられ、合衆国・イギリス・日本間での保有比率が決定した。
18. イギリスでは、1918年の（**第4回選挙法改正**）で21歳以上の男性と30歳以上の女性に選挙権が拡大された。
19. さらに1928年の（**第5回選挙法改正**）で、21歳以上の男女に選挙権が認められた。
20. 第1次世界大戦後、自由党に替わって労働党が保守党に次ぐ第二党の地位につき、1924年には労働党党首（**マクドナルド**）が自由党と連立内閣を組織した。
21. アイルランドは、1922年、北部のアルスターを除いて（**アイルランド自由国**）として自治領となった。
22. 1926年と1930年のイギリス帝国会議の決議によって、1931年にイギリスと自治領の関係を定めた（**ウェストミンスター憲章**）が成立し、各自治領はイギリス連邦の一員として王冠への忠誠のもとに本国と対等の地位を得た。
23. しかし、アイルランドの独立派は1937年に王冠への忠誠宣言を廃止し、独自の憲法を定め、（**エール**）を国名として事実上連邦を離脱した。
24. 国土が戦場となったフランスは、大戦後もドイツの強国化を恐れた。そのためフランスは、ドイツに課された賠償支払いを厳しく要求し、ポワンカレ右派内閣のときには、支払い不履行を理由に（**ルール**）占領を強行した。
25. 1925年にフランス外相となった（**ブリアン**）はドイツとの和解に努め、国際協調に貢献した。
26. ドイツでは、戦争直後からドイツ共産党など革命推進勢力と（**社会民主党**）とが対立したが、（**社会民主党**）は軍部など保守勢力と結んで、1919年初め共産党を押さえ込んだ。
27. ドイツ共産党は、反戦を掲げて社会民主党最左派が組織したスパルタクス団と中心に、大戦後結成された。しかし、指導者（**ローザ＝ルクセンブルク**）と（**カール＝リープクネヒト**）は1919年初め右翼軍人に殺害された。

28. ヴァイマルで開かれた国民議会では、(社会民主)党の(エーベルト)が大統領に選出され、民主的な憲法である(ヴァイマル憲法)が制定されて、共和国の基礎が作られた。これにより生まれた共和政ドイツを通称(ヴァイマル共和国)と呼ぶ。
29. しかし、賠償支払い、帝政派や右翼による反共和国活動などによって経済と政局は安定しなかった。特に、1923年のフランスによる(ルール)占領には不服従運動で抵抗したため生産が低下し、ドイツ通貨マルクの価値が破壊的に下落し(インフレーション)が進んだ。
30. 1923年夏、ドイツ首相となった(シュトレゼマン)は(Rentenマルク)を発行してインフレーションを克服し、アメリカの協力で賠償支払いの緩和と資本導入に成功して経済を建て直し、国際協調外交を推進した。
31. 賠償支払いの緩和とは、ドイツの賠償支払い方法と期限の緩和計画である(ドーズ案)を受けて、連合国はドイツの賠償支払い額を当面軽減し、アメリカ資本によるドイツ経済復興を認めたものである。さらに、1929年、総額を圧縮し、支払期限も延長した最終支払案(ヤング案)が決定され、1932年のローザンヌ会議で賠償総額は30億金マルクに減額された。
32. 1929年まで外相を努めた(シュトレゼマン)は、(1926)年に国際連盟加盟を実現し、ドイツの国際的地位の回復を図った。
33. なお、この間の1925年に当時の大統領(エーベルト)が死ぬと、第一次世界大戦後期の陸軍参謀総長であった(ヒンデンブルク)が新たに大統領に選ばれている。
34. イタリアは戦勝国であったが領土拡大を実現できず、講和条約に不満を持っていた。一方、国民は戦後のインフレーションで生活を破壊され政府への不信を強めていた。1920年に社会党左派の指導で北イタリアの工業地帯を中心に労働者が社会改革を求めて工場を占拠し、貧しい農民も各地で土地を占拠したが、これらの運動は失敗し、地主・資本家・軍部など支配層の反撃が始まった。この流れに乗じて、ムッソリーニの率いる(ファシスト党)が勢力を拡大した。
35. 1922年、ムッソリーニは(黒シャツ隊)を組織して政府に圧力をかけ、国王の指示で首相に任命された。その後ムッソリーニはファシズム大評議会に権力を集中させて(一党独裁体制)を確立した。この事件を(ローマ進軍)と呼ぶ。
36. 対外的には、1926年に(アルバニア)を保護国化し、1929年に(ラテラノ/ラテラン)条約を結んでイタリアと国交断絶状態にあったローマ教皇庁と和解し、教皇庁(バチカン市国)の独立を認めた。
37. ムッソリーニは大衆動員を積極的に利用し、社会事業や国内開発も推進したが、市民的自由や人権を無視する国家主義を掲げ、反対派を弾圧した。この新しい政治体制や思想は(ファシズム)と呼ばれた。
38. ポーランドは1920年、ウクライナに侵入してソヴィエト＝ロシアと戦争を起こして領土を拡大したが、国内の政治議会は早くから混乱し、1926年に独立運動の指導者(ピウスツキ)がクーデタで実権を握った。

39. ソ連では1924年レーニンが死ぬと後継者争いがおこった。1922年、共産党書記長になった（スターリン）はソ連1国だけで社会主義建設ができるとする（**一国社会主義論**）を掲げて、世界革命を主張する（**トロツキー**）らを追放して実権を握った。
40. 1928年、スターリンはネップに代わって重工業化の推進による社会主義建設を指示し、（**第1次五か年計画**）を実行した。農業でも集団化と機械化が命じられ、集団農場（**コルホーズ**）・国営農場（**ソフホーズ**）建設が強行された。
41. アメリカ合衆国は第一次世界大戦中、連合国に物資・借款を提供して大きな利益を上げ、戦後は債務国から（**債権国**）に転じて国際金融市場の中心の一つになった。
42. アメリカ国内では大戦中に多くの女性が軍需生産などに協力し、1920年には（**女性参政権**）が認められ、民主主義の基礎が拡大された。
43. 1921年からはハーディング・クーリッジ・フーヴァーの3代12年にわたって共和党政権が続き、自由放任政策が取られ、20年代の合衆国経済は「永遠の繁栄」を謳歌していた。この時期に（**フォード**）車に代表される自動車や家庭電化製品などの普及によって大量生産・大量消費社会が形成された。
44. しかし、伝統的な白人社会の価値観も強調され、（**禁酒法**）が制定されたほか、1924年に成立した（**移民法**）では東欧や南欧系の移民の流入が制限された。
45. 第一次世界大戦下の中国知識人の間では、辛亥革命後の政治の混迷に失望し、民衆の自覚に基づく根本的社会改革を目指す立場から（**文学革命**）と呼ばれる啓蒙運動が始まった。
46. （**陳独秀**）の刊行した「新青年」は民主と科学を旗印に儒教道徳を批判して青年知識人層に支持された。
47. （**胡適**）は1917年、同誌上で白話[口語]文学を唱えた。
48. （**魯迅**）は「狂人日記」「阿Q正伝」などの小説で自国民の心理の暗黒面を描き出した。
49. この啓蒙運動の中心となった（**北京大学**）では、ロシア革命後、（**李大釗**）らによってマルクス主義の研究が始められた。
50. 日本でも国民の政治参加の拡大を求める（**大正デモクラシー**）の運動がおこり、社会主義への関心とともに労働運動・農民活動が活発化した。
51. 1918年の（**米騒動**）や政党内閣、1925年の男性（**普通選挙法**）はこうした流れの中で生まれた。しかし、政府はこの流れを警戒し、同時に（**治安維持法**）を成立させてこの潮流の抑制を図った。

52. 第一次世界大戦による欧米列強の後退は、日本の新たな対外進出の機会となった。大戦勃発後、ドイツに宣戦した日本は中国内のドイツの租借地（**膠州湾／青島**）と太平洋上の（**ドイツ領南洋諸島**）を占領した。
53. さらに、1915年1月、中国に対して山東のドイツ利権の継承など（**二十一か条の要求**）をつきつけた。袁世凱政権は中国の主権を無視するものとして初めは拒否したが、軍事力を背景とした日本の圧迫のもとに主要な要求の承認に追い込まれた。
54. また、日本は大戦末期に列強の（**シベリア出兵／対ソ干涉戦争**）に加わり、他国の撤兵後も革命勢力の阻止を口実に最後まで軍をとどめたため内外から批判を浴び、1922年に軍を引き上げた。
55. 日本統治下の朝鮮では、ロシア革命や民族自決の潮流に呼応して独立への要求が高まった。1919年3月1日、「独立万歳」を叫ぶデモがソウルで始まり、たちまち朝鮮全土に広がった。これを（**三・一独立運動**）という。
56. 総督府は軍隊も動員してこの運動を鎮圧したが、この事件に衝撃を受けて武断政治をある程度緩めて（**文化政治**）と呼ばれる同化政策に転換した。
57. 1919年4月には朝鮮の独立運動諸団体を統合して（**大韓民国臨時政府**）が上海で結成された。
58. 1919年のパリ講和会議で、中国は問53の要求の取り消しや山東のドイツ利権の返還を提訴したが、列国によって退けられた。これに抗議して1919年5月4日に北京大学の学生を中心に抗議デモが行われた。これを（**五・四運動**）と呼ぶ。
59. 1919年、ソヴィエト＝ロシアは中国に対し、外務人民委員代理（**カラハン**）の名で、旧ロシア政府が中国に有していた一切の帝国主義的特権の放棄を宣言し、中国国民に歓迎された。
60. 1921年には、コミンテルンの支援によって陳独秀を指導者とする（**中国共産党**）結成された。
61. 一方で、（**中国国民党**）を基盤に革命運動の推進を目指していた孫文もソ連の援助を受けて顧問を招き、1924年に国民党を改組して党組織の近代化を図るとともに、共産党員が個人の資格で国民党に入党することを認めた。これを（**第1次国共合作**）という。
62. 孫文はまた、（**連ソ・容共・扶助工農**）を掲げて軍閥打倒・帝国主義打倒の路線を打ち出した。
63. 孫文は1925年に病死するが、同年に上海の日本人経営の紡績工場での労働争議をきっかけとして広がった（**五・三〇運動**）は中国における反帝国主義運動の高揚を示すものであった。
64. 1925年7月、国民党は広州で国民政府を樹立し、翌年（**蒋介石**）率いる国民革命軍が中国統一を目指して（**北伐**）を開始した。これは当初順調に進み、1927年3月には上海・南京を占領したが、のちに国民政府内部で大衆運動の拡大を目指す共産党員ら左派とこれを警戒する右派が対立を深めた。

65. 1927年4月、蒋介石は（上海クーデタ／四・一二事件）をおこして共産党を弾圧し、（南京）に新たに国民政府をたててその主席となった。これを（国共分裂）という。
66. 1928年、北伐は再開され、まもなく北京に迫った。日本は国民政府の全国統一を妨害するため（山東出兵）を繰り返した。日本の（関東）軍は従来、日本が後援していた奉天軍閥の（張作霖）が北伐軍に敗れて北京から東北へと引き上げる途中、列車を爆破して死亡させて東北を支配することを狙ったがこの謀略は失敗し、その子（張学良）が日本に対抗するために国民政府の東北支配を認めたため1928年に国民政府の全国統一は一応達成された。
67. 蒋介石は上海を中心に銀行資本を通して中国の経済界を支配していた（浙江財閥）と結んで、アメリカ合衆国・イギリスの支援の下に国民党一党体制による統一政権を目指していた。
68. 一方、中国共産党は1927年の国共分裂後、数回の蜂起を試みたが失敗し、農村でソヴィエト政権を作る方針に転換した。（毛沢東）率いる（紅軍／共産党軍）が井冈山で築いた根拠地は次第に広がり、1931年に江西省（瑞金）に（中華ソヴィエト共和国臨時政府）が成立した。

1. 第一次世界大戦中、イギリスは民族自決という国際世論の圧力に押され、インドに自治を約束していた。しかし、大戦後の1919年（**インド統治法**）は州行政を一部のインド人に委ねただけで、自治とは程遠い内容であった。
2. また、これと同時に強圧的な（**ローラット法**）が制定され、パンジャブ地方のアムリットサルではイギリス軍が民衆の抗議集会に発砲して多数の死傷者を出す事件も発生した。
3. こうした植民地政府の圧政に対し、（**非暴力**）を掲げて民衆の指導者として登場したのがガンディーであった。
4. ガンディーは1920年の（**国民会議派**）大会で非協力運動を提示し、民族運動をエリートだけでなく民衆も加わる運動へと脱皮させた。
5. これらの民族運動は一時低迷するが、1927年、新インド統治法を制定するための憲政改革調査委員会[サイモン委員会]にインド人が含まれていなかったことから再び激化し、1929年には国民会議派内の（**ネルー**）などの急進派が完全独立（**プールナ=スワラージ**）を決議した。
6. 運動に呼び戻されたガンディーは、1930年に（**塩の行進**）を組織した。これは生活必需品である塩への課税を植民地支配の象徴ととらえ、法を犯して塩づくりを行うことで植民地支配に抵抗するものである。
7. イギリスがインドの様々な勢力をロンドンに招集し、インドの将来の地位を論議させようとした（**円卓会議**）でも合意はならず、1932年に運動は再開された。
8. こうした中で1935年に成立した（**新インド統治法**）により、州政治はインド人に移譲されることになったが、中央の財政・防衛・外交はイギリスが掌握しつづけ、やはり完全独立とは程遠いものであった。
9. 1937年にこの統治法の下で州選挙が行われ、多くの州で国民会議派が政権を獲得した。また、ムスリムが多数を占める州では、ムスリムを首班とする地域政党が勝利を収めた。こうした状況の中で、ジンナーを指導者とする（**全インド=ムスリム連盟**）は1940年、あらたにイスラーム国家パキスタンの建設を目標に掲げた。
10. 東南アジアにおいても第一次世界大戦後、民族運動が広がった。オランダが支配するインドネシアでは、1920年に（**インドネシア共産党**）が結成され、独立を唱えた。
11. 1927年にはスカルノを党首とする（**インドネシア国民党**）が結成され、翌年にインドネシアという統一された祖国・民族・言語を目指す宣言がなされた。

12. フランスが支配するインドシナでは、1925年に（ホーチミン）がベトナム（青年革命同志会）を結成し、それを母体に1930年にベトナム共産党[同年10月に（インドシナ共産党）に改称]が成立した。
13. イギリスが支配するビルマ[ミャンマー]では、1920年代から民族運動が始まり、僧侶による啓蒙運動やアウン＝サンが指導する（タキン党）と呼ばれる急進的民族主義者の台頭がみられた。
14. アメリカ合衆国が統治するフィリピンでは、立法や行政はフィリピン人への権限委譲が進められたが、経済面ではアメリカに大きく依存した商品作物生産が進んだため、窮乏化した農民たちは反乱を繰り返した。その結果、1934年に（フィリピン独立法）が成立し、1935年には（独立準備政府）が発足した。
15. タイでは長く王による専制的統治が続いていたが、財政的混乱や王族支配への批判が高まり、1932年の（立憲革命）によって王政から立憲君主制となった。
16. オスマン帝国[トルコ]は第一次世界大戦で同盟国側に立って参戦して敗れ、（セーブル）条約によってアラブ地域を喪失した。そのうえ、イギリス・ロシア・フランスが秘密裏に結んだ（サイクス＝ピコ協定）によって国土分割の危機に直面した。
17. 1919年にギリシア軍がエーゲ海沿岸地域を占領すると、軍人の（ムスタファ＝ケマル）[のちの（ケマル＝アタテュルク）]がトルコ人の主権と国土を守るために抵抗運動を指導し、トルコ大国民議会を組織した。
18. 1922年、この人物はギリシア軍を撃退して（イズミル）を回復したのち、（スルタン）制を廃止し、1924年には（カリフ）制も廃止した。
19. この間、1923年には連合国との間に（ローザンヌ）条約を結んで新しい国境を定め、治外法権の廃止、関税自主権の回復にも成功して、（アンカラ）を首都とするトルコ共和国を樹立した。
20. （ケマル＝アタテュルク）は大統領となり、1924年共和国憲法を公布し、続いて政教分離、太陽暦の採用、女性参政権の実施などを行い、さらにアラビア文字に代わって（ローマ字）を採用するなど近代化を強力に推し進めた。
21. 第一次世界大戦はトルコ以外のイスラーム諸国にも大きな転換をもたらした。1914年以来イギリスの保護国となっていたエジプトでは、戦後（ワフド党）を中心に独立運動が展開され、1922年イギリスが保護権を放棄したのに伴い（エジプト王国）が成立した。
22. 大戦中、中立を宣言しながらイギリス・ロシアの介入を受けていた（カージャー）朝のイランは、戦後自主権を回復した。しかし、その後（レザー＝ハーン）がクーデタによって実権を握り、1925年この王朝を廃して（パフレヴィー）朝[1925－1979]を開き、みずからシャー[国王]を称した。

23. この人物はトルコにならって近代化に努め、1935年には国名を他称のペルシアから（イラン）に改めた。
24. アラビア半島では、戦後イギリスの影響力が増大した。ワッハーブ王国の再興を目指す（イブン＝サウード）は、イギリスの援助を得て独立し、さらにアラビア半島の統一を目指した。
25. この人物は、アラブ独立運動の指導者であったヒジャーズ王国の（フセイン／フサイン）を破ってヒジャーズ＝ネジド王国を作り、半島の大部分を統一して1932年に（サウジアラビア王国）を建設した。
26. イギリスの委任統治領であったイラクは1932年に、またトランスヨルダンも1946年に（ヨルダン王国）としてそれぞれ独立した。
27. フランスの委任統治下にあったシリアでは、1941年に（レバノン）が分離されて1943年に独立し、1946年にはシリアも独立した。
28. パレスチナ地方については、大戦中、イギリスは1915年（フセイン＝マクマホン協定）によってアラブ人にオスマン帝国からの独立を約束する一方、1917年の（バルフォア宣言）によってユダヤ人のパレスチナ復帰運動（シオニズム）を援助する姿勢を示し、双方から協力を得ようとした。このことは現在まで続くアラブ・ユダヤの両民族間の深刻な対立の原因となった。
29. 1929年10月24日、（ニューヨーク株式市場／ウォール街）での株価の暴落から、アメリカ合衆国は空前的恐慌におそわれ、工業生産の急落、企業の倒産、商業・貿易の不振が一挙に進み、銀行など金融機関の閉鎖や倒産が相次いだ。
30. 世界経済・金融の中心であるアメリカ合衆国の恐慌は全世界に波及し、アメリカ資本が引き上げられたヨーロッパ諸国も恐慌に見舞われた。合衆国の（フーヴァー）大統領は1931年、賠償・戦債支払いの1年間停止（フーヴァー＝モラトリアム）を宣言したが、効果はなかった。
31. この恐慌はその破壊的規模の大きさと期間の長さから（世界恐慌）と呼ばれている。
32. アメリカ合衆国では1932年の選挙で民主党の（フランクリン＝ローズヴェルト）が大統領に当選し、（ニューディール）[新規まき直し]と呼ばれる経済復興政策を実施した。これはまず、銀行の救済を図ったうえで、（農業調整法／AAA）で農業生産を調整し、農作物の価格を引き上げて農民の生活を安定させたものである。
33. また、（全国産業復興法／NIRA）で工業製品の価格協定を公認し、産業の復興を促すとともに、（テネシー川流域開発公社／TVA）のような公共事業によって失業者を減らそうとした。
34. 1935年には（ワグナー法）によって労働者の団結権と団体交渉権を認め、労働組合の決済を助長した。その結果、1938年に産業別組織会議[CIO]が成立した。

35. 外交面では、1933年、合衆国はソ連を承認するとともに、ラテンアメリカ諸国にはキューバに対するプラット条項を廃止するなど内政干渉を控え、ドル経済圏に組み入れる（善隣外交）政策が取られた。
36. イギリスでは、1929年～1931年の（第2次マクドナルド内閣）が失業保険削減を含む緊縮財政を提案した。労働党が反対したため当時の首相（マクドナルド）は首相を辞職し、その後保守党などの協力を受けて（挙国一致内閣）を組織し、財政削減・金本位制の停止を実施した。
37. また、1932年の（オタワ連邦会議）ではイギリス連邦内の関税を下げ、連邦外の国に対して高関税を課す（スターリング＝ブロック／ポンド＝ブロック）が結成された。
38. フランスでは、恐慌の影響が1932年になって現れ、政府は植民地や友好国と（フラン＝ブロック）を築いて経済を安定させようとした。
39. フランス国内の政局は不安定であったが、1935年には仏ソ相互援助条約が結ばれ、翌1936年、社会党・（急進社会党）に共産党が協力して、社会党の（ブルム）を首相に反ファシズムを掲げる（人民戦線内閣）が成立した。
40. （ドル）・（ポンド）・（フラン）などの通貨を軸に経済圏を作り、他国の商品を排除する（ブロック経済）はブロック間の対立を激化させ、通称にたよる中小諸国を苦しめた。
41. 日本は第一次世界大戦期の戦時景気で工業を発展させたが、1923年頃から貿易が不調になり、1927年には（金融恐慌）が発生し、さらに世界恐慌に追い打ちをかけられた。
42. 1931年9月、日本の関東軍は中国東北地方[当時日本では「満州」と呼称]の（柳条湖）で鉄道を爆破し、これを口実に軍事行動を起こして東北地方の大半を占領した。これを（満州事変）と呼ぶ。
43. 軍部はさらに国際社会の注意をそらすために1932年には（上海事変）を起こしたが、日本の軍事行動は国際的に批判され、中国の提訴で国際連盟も（リットン調査団）の派遣を決めた。
44. 関東軍は既成事実を作るため、1932年3月に、清朝最後の皇帝であった（溥儀）を執政に据えて（満州国）を建国させた。
45. 調査団は軍事行動が自衛権の発動であるとする日本の主張を退け、国際連盟もそれを支持したため、日本は1933年3月（国際連盟脱退）を通告した。
46. 日本の侵攻はさらに熱河方面におよび、一時は長城を越えて北京に迫り、華北支配を狙うようになった。1935年、防共の名目で内モンゴル・華北に侵攻し、河北省東部に国民政府から分離した（冀東防共自治政府）を設置させた。

47. これと並行して一部の軍人は1932年の（五・一伍事件）や1936年の（二・二六事件）などのテロやクーデタ事件を起こし、国内での影響力を強めようとした。
48. 中国の国民政府は1928年から30年にかけての関税自主権回復に力を得て、国内の政治的・軍事的統一を目指し、日本の軍事行動への対応よりも共産党との戦いに力を入れた。1934年、瑞金の共産党軍は、国民政府の軍隊の攻撃を受けて、（延安）を中心とする奥地の陝西・甘肅省を目指す（長征）を実行した。
49. 1935年、国民政府はイギリス・アメリカの援助で通貨を統一した。これを（幣制改革）という。
50. その後中国の抗日運動は全国へ広まり、1935年8月中国共産党は（八・一宣言）を出して、内戦停止・（民族統一戦線）結成を呼び掛けた。
51. 西安にいた（張学良）はこの状況を見て、対共産党攻撃を促しに来た蒋介石を捕え、抗日と内戦停止を説得した。これを（西安事件）と呼ぶ。蒋介石はこれを受け入れ、その後国共は再び接近した。
52. 日本の軍部は1937年7月の（盧溝橋事件）をきっかけに軍事行動を拡大した。
53. 中国では1937年9月の（第2次国共合作）が成立し、日中両国は全面的交戦状態に入り（日中戦争）が開戦した。
54. 1937年末までに、日本は華北の要地と南京を占領したが、南京占領の際には多数の中国人を殺害して国際世論の非難を浴びた。これを（南京事件）と呼ぶ。
55. 1940年、日本は東亜新秩序建設を掲げ、（重慶政府）に対抗して南京に（汪兆銘）を首班とする親日政権を設立させたが、中国民衆の支持を得られず事態解決の展望は見えなかった。
56. ドイツはアメリカ合衆国に次いで恐慌の被害が大きく、1930年には（ナチ／国民[国家]社会主義ドイツ労働者）党と共産党などの反議会勢力が伸長して、国会は機能麻痺に陥った。
57. この党は第一次世界大戦後、（ヒトラー）を指導者にして発展した政党で、イタリアのファシズムなどに学び、（ユダヤ）人排斥を主張する人種差別主義、ヴェルサイユ条約破棄、民族共同体建設による国民生活の安定を唱えた。
58. この党は初め支持されなかったが、恐慌によって失業者が増え、社会不安が広がって議会政治が混乱すると、農民や都市の（中産層）のなかにこの党の大衆宣伝に動かされる人が多くなった。
59. 1932年の選挙でこの党は第一党となり、1933年1月（ヒトラー）は首相に任命された。

60. 新政府は1933年に発生した（**国会議事堂放火事件**）を利用して共産党など左翼勢力を弾圧し、（**全権委任法**）によって国会の立法権を政府に移し、さらに他の政党や労働組合を解散させて一党独裁を実現した。
61. 政治的反对派や（**ユダヤ**）人は（**秘密警察**）[ゲシュタポ]・（**親衛隊**）[SS]・（**突撃隊**）[SA]によって監視され、強制収容所に押し込められた。このため、社会主義者・民主主義者・（**ユダヤ**）人など多数が外国に亡命した。亡命者の中にはノーベル文学賞作家の（**トーマス＝マン**）やノーベル物理学賞を受けた（**アインシュタイン**）などがいた。
62. 1934年、（**ヒンデンブルク**）大統領が死ぬと、首相（**ヒトラー**）は大統領の権限おも併せて独裁体制を確立した。
63. ナチスは四か年計画によって軍需工業を拡張し、（**アウトバーン**）[自動車専用道路]建設など大規模な土木工事をおこして失業者を急速に減らし、イタリア＝ファシズムにならって大規模なレジャー施設やレクリエーション施設、福祉事業を整備し、さらにラジオの普及などによる大衆娯楽への配慮を示して国民の支持を得た。
64. 国内支配を確立したナチスは、1933年秋、軍備平等権が認められないことを理由に（**国際連盟**）から脱退し、1935年には住民投票によって有力な炭鉱地帯であった（**ザール地方**）を編入した。
65. 1935年、ナチスが徴兵制の復活と（**再軍備**）を宣言すると、イギリス・フランス・イタリアは抗議した。しかし、まもなくイギリスはドイツと（**英独海軍協定**）を結び、イギリスの35%の海軍力保有をドイツに認め、事実上これを追認した。
66. 1936年、ドイツは仏ソ援助条約調印を理由にロカルノ条約を破棄して（**ラインラント**）に軍を進駐させ、ヴェルサイユ体制の破壊を進めた。
67. ソ連は資本主義世界との交流が少なく、恐慌の影響を受けずに社会主義の基礎を築いたため、その計画経済は資本主義国からも注目された。しかし、共産党書記長の（**スターリン**）は古くからの有力指導者をはじめ、反对派とみなした人々に根拠のない罪状を着せ、大量に投獄・処刑して独裁的権力をふるい、彼自身への個人崇拜を強めた。そのため、この時期のソ連の体制を（**スターリン体制**）と呼んでいる。
68. 1933年に開始された（**第2次五か年計画**）では、国民生活の向上にも配慮し、1936年には（**スターリン憲法**）が発布されたが、憲法に規定された信教の自由や民族間の平等はほとんど守られず、共産党の一党支配も変わらなかった。
69. 対外的には、ソ連は国際社会への参加を進め、1934年には（**国際連盟**）にも加入した。
70. 経済基盤の弱いイタリアは、恐慌によってたちまち行き詰った。ムッソリーニは対外侵略によって苦境を脱しようとして1935年、（**エチオピア**）に侵攻し、1936年その全土を征服した。

71. イタリアはその後ナチス＝ドイツに接近し、1936年（ベルリン＝ローマ枢軸）を結成した。
72. スペインでは、1931年に王政が倒れた後、政局が混乱していた。1936年の選挙で（人民戦線派）が勝って政府を組織すると、軍人の（フランコ）は旧王党派や地主層など保守派の支持を得て反乱を起こした。
73. これに対し、イギリス・フランスは不干渉の立場を取ったが、地中海地域の支配を狙うイタリアはナチス＝ドイツとともに（フランコ）側を公然と支援した。
74. （政府／人民戦線派）側にはソ連の援助や、欧米の社会主義者や知識人の（国際義勇軍）の支援があった。これにはアメリカの（ヘミングウェイ）、フランスのマルロー、イギリスのオーウェルら著名な作家も参加し、それぞれ内戦を描いた作品を残している。
75. このため、このスペイン内戦は小規模な国際紛争になったが、（フランコ）側が1939年マドリードを陥落させて勝利した。
76. 人民戦線結成など国際共産主義運動の動きに対抗して、1936年日本とドイツは防共協定を結び、1937年にはイタリアも参加して（三国防共協定）に拡大された。
77. イタリアは1937年、日本・ドイツに倣って（国際連盟）を脱退した。
78. こうしてヴェルサイユ・ワシントン両体制に挑戦する日本・ドイツ・イタリアは（三国枢軸）を結成するに至った。

1. 1938年3月、ナチス＝ドイツはドイツ民族統合を名目に、（オーストリア）を併合し、1938年9月にはドイツ人が多く居住するチェコスロヴァキアの（ズデーテン）地方の割譲を要求した。
2. イギリスの（ネヴィル＝チェンバレン）首相は譲歩と話し合いによって解決を図る（宥和）政策をとったため、1938年9月末、イギリス・フランス・ドイツ・イタリアの4国による（ミュンヘン会議）が開かれた。この会議ではチェコスロヴァキア代表を参加させないまま、（ズデーテン）地方のドイツへの割譲を認めた。
3. しかし、ヒトラーはこれに満足せず、1939年3月、（チェコスロヴァキア）解体を強行して、西半分のベーメン[ボヘミア]・メーレン[モラヴィア]を保護領に、東半分のスロヴァキアを保護国にした。
4. さらにポーランドにも（ダンツィヒ）[現グダンスク]の返還、東プロイセンへの陸上交通路を要求した。この東プロイセンへの陸路は旧ドイツ領で、ヴェルサイユ条約で海への出口としてポーランドに与えられたものであり、（ポーランド回廊）と呼ばれていた。
5. ドイツの行動に刺激されて、イタリアも4月に（アルバニア）を併合した。
6. こうした情勢を前に、イギリス・フランスも宥和政策の限界を認め、軍備拡充を急ぎ、ソ連とも軍事同盟の交渉に入ったが、西欧諸国の態度に不信を抱いていたソ連はナチス＝ドイツとの提携に転じ、1939年8月末、（独ソ不可侵条約）を結んで世界を驚かせた。
7. これに力を得たナチス＝ドイツは9月1日、準備していた（ポーランド）侵攻を開始した。
8. イギリス・フランスはドイツに宣戦し、（第二次世界大戦）が始まった。
9. ソ連は1939年11月に（フィンランド）に宣戦し、1940年に国境地帯の軍事基地を獲得した。この戦いを（冬戦争）とも呼び、ソ連はこれが原因で国際連盟を除名された。
10. ソ連はさらにバルト3国（エストニア）・（ラトヴィア）・（リトアニア）を併合して、ルーマニアからも（ベッサラビア）を割譲させた。
11. 一方、西部戦線はしばらく平穏であったが、ドイツ軍が1940年4月（デンマーク）・（ノルウェー）に、5月に（オランダ）・（ベルギー）に侵入し、さらにフランスに侵攻して6月パリを占領した。
12. ドイツの優勢を見て、（イタリア）も1940年6月10日、ドイツ側について参戦した。
13. フランスでは第三共和政が崩壊し、（ペタン）政府が成立してドイツに降伏した。

14. フランスの北半はドイツに占領され、南半は（ペタン）の率いる（ヴィシー）政府が統治した。
15. しかし、（ド＝ゴール）らは降伏を拒否し、ロンドンに亡命政府（自由フランス政府）を組織して抗戦を呼びかけ、フランス国内にもやがて（レジスタンス）[対独抵抗運動]がおこった
16. イギリスでは1940年5月、チェンバレンに代わって（チャーチル）が首相になり、激しい空襲をしのいでドイツ軍の上陸を阻止した。
17. 1941年2月、ドイツはイタリアを支援して北アフリカに軍を派遣し、1941年4月には（バルカン半島）に侵攻し、ユーゴスラヴィアとギリシアを占領した。
18. このドイツの（バルカン半島）進出はこの地域に関心を持つソ連との関係を緊張させ、ソ連は1941年4月ドイツに備えて（日ソ中立条約）を結んだ。
19. 1941年6月、ドイツは（独ソ不可侵条約）を無視して、イタリア・ルーマニア・フィンランドとともにソ連を奇襲し、（独ソ戦）が始まった。
20. ドイツ軍は1941年末にはモスクワに迫ったが、ソ連軍は大きな損害を出しながらも押し返した。これを機にソ連はイギリスと（英ソ軍事同盟）を結んで同盟を組み、1943年にはイギリス・アメリカなどとの協調を深めるため、国際共産運動の指導組織である（コミンテルン）[共産主義インターナショナル／第3インターナショナル]を解散した。
21. ドイツは多数のユダヤ人やスラヴ系の人々を（アウシュヴィッツ）などの強制収容所で殺害した。
22. ドイツの支配に反抗して、各地で（レジスタンス）[対独抵抗運動]や（パルチザン）[武装抵抗運動]が組織された。
23. 日本は1940年9月、フランスの敗北に乗じて（フランス領インドシナ北部）に軍を派遣し、また三国防共協定を（日独伊三国同盟）へと発展させた。
24. 1941年4月には北方の安全のためにソ連と（日ソ中立条約）を結び、（フランス領インドシナ）南部にも軍を進めた。
25. アメリカ合衆国は中立を守っていたが、1941年3月（武器貸与法）によってイギリス・ソ連などに武器や軍需品を送り、反ファシズム諸国支援の姿勢を明確にした。
26. また、日本の南方進出を牽制して日本への石油供給を停止し、イギリス・オランダもこれに同調した。こうした各国の動きを日本の軍部などはアメリカ・イギリス・オランダ・中国のアルファベット表記の頭文字を組み合わせて（A B C D包囲陣）と呼んでいた。

27. 日米衝突を回避するため1941年4月から行われていた日米交渉が行き詰まると、1941年12月8日、日本軍はハワイの（パールハーバー／真珠湾）にある米海軍基地を奇襲し、マレー半島に軍を上陸させて、アメリカ・イギリスに宣戦し、（太平洋戦争）に突入した。
28. 開戦後半年間で、日本は以下の国々を占領・征服した。
- （マレー半島）[1941年12月～1942年1月に占領]
 - 香港[1941年に占領]
 - （シンガポール）[1942年に占領]
 - インドネシア[1942年に占領]
 - （フィリピン）[1942年に占領]
 - ソロモン諸島[1942年に占領]
 - （ビルマ）[1942年に征服]
29. 日本は、白人諸国による植民地支配の打破を説いた（大東亜共栄圏）を唱え、占領下の（フィリピン）・（ビルマ）では親日政権を設立させ、インドネシアでは親日組織を作らせた。
30. 一方、1930年代末から神社の参拝・日の丸掲揚・皇居遥拝・（創氏改名）などの（皇民化政策）と呼ばれる同化政策が強められた朝鮮では、開戦後の日本の支配が過酷さを増し、労働力不足を補うために、労働者が日本本土へ強制的に連行され、戦争末期には徴兵制も適用された。
31. 東南アジアの占領地では、当初、日本を欧米諸国の植民地からの解放者として迎えたところもあった。しかし、日本の占領目的は資源収奪とそれに必要な治安確保であり、軍の指揮官による（軍政）のもとで、日本語教育や神社参拝の強制など、現地の歴史や文化を無視した政策が行われた。
32. しかし、工業基盤の弱い日本は長期戦遂行能力に欠け、1942年6月の（ミッドウェー海戦）で大敗すると戦争の主導権を失った。
33. 太平洋戦争開始とともに、ドイツ・イタリアもアメリカ合衆国に宣戦し、日本・ドイツ・イタリアなどの（枢軸国）[ファシズム陣営]とアメリカ・イギリス・ソ連などの（連合国）[反ファシズム陣営]の戦争となり、文字通りの世界大戦となった。
34. 1942年後半から、（連合国）軍[反ファシズム陣営]は総反撃に移り、1943年初めソ連軍は（スターリングラード）[現ヴォルゴグラード]でドイツ軍を降伏させた。

35. 北アフリカに上陸した（**連合**）軍がイタリア本土に迫ると、イタリア国内では、軍部やファシスト党内部からも（**ムッソリーニ**）に反対する動きがあらわれ、1943年7月、（**ムッソリーニ**）は国王に解任され、ファシスト党は解散した。
36. 1943年9月、（**連合**）軍がイタリア本土に上陸すると、イタリア新政府（**バドリオ政府**）は無条件降伏を申し出た。
37. 1941年8月に（ローズヴェルト・チャーチル会談）[大西洋上会談]で発表された（**大西洋憲章**）は、その後ソ連など26か国が加わり、1942年1月の（**連合共同宣言**）で戦後構想の原則として確認された。
38. 1943年11月、ローズヴェルト・チャーチル・蒋介石の（**カイロ会談**）で対日処理方針を定めた（**カイロ宣言**）が発表され、さらにローズヴェルト・チャーチル・スターリンの（**テヘラン会議**）では連合軍の北フランス上陸作戦が協議された。
39. これに基づいて1944年6月、アイゼンハワー指揮下の連合軍は、（**ノルマンディー**）に上陸した。その後8月には（**パリ**）に入り、ドゴールは臨時政府を組織した。
40. 1945年2月、米・英・ソの3国首脳はクリミア半島の（**ヤルタ**）で会談し、（**ヤルタ協定**）を結んでドイツ処理の大綱、秘密条項としてドイツ降伏後3カ月以内のソ連の対日参戦などを決めた。
41. 連合軍の空襲で多くの都市や工業施設、交通網を破壊されたドイツは、1945年には総崩れとなった。4月末にヒトラーは自殺し、（**ベルリン**）は占領され、5月7日、ドイツは無条件降伏した。
42. 太平洋戦域では、アメリカ軍が1944年中に（**サイパン**）島とフィリピンの（**レイテ**）島を、1945年2月には（**マニラ**）も奪回し、1945年4月には（**沖縄本島**）に上陸した。
43. 1945年4月にローズヴェルトが急死したため、合衆国大統領に昇格した（**トルーマン**）は7月チャーチル[途中で労働党の（**アトリー**）と交替]・スターリンと（**ポツダム**）で会談し、ドイツ管理問題を協議するとともに、日本の降伏を求める（**ポツダム宣言**）を発表した。
44. アメリカは1945年8月6日に（**広島**）、8月9日に（**長崎**）に新兵器の原子爆弾を投下して、両市を壊滅させた。
45. 日本は1945年8月14日（**ポツダム宣言**）を受諾して降伏し、6年にわたる第二次世界大戦は幕を閉じた。
46. 連合国側は、戦後世界秩序の大枠を1941年の（**大西洋憲章**）で示していたが、その具体化は大戦末期の一連の国際会議で進められた。
47. まず、国際連盟に代わる新しい国際機関については1944年8月～10月、ワシントン郊外の（**ダンバートン=オークス**）で米・英・ソ・中の4大国会議で協議され、（**国際連合憲章**）の草案がまとまった。

48. これは1945年4～6月、連合国50か国が参加した（**サンフランシスコ会議**）で正式に採択され、同年10月に（**国際連合**）が発足した。その後1948年の第3回総会では、人種・性・宗教などによる差別を禁止した（**世界人権宣言**）が採択された。
49. 国際連合では全加盟国が平等に参加する（**総会**）を設置する一方で、米・英・ソ・中・仏の5大国が拒否権を持つ（**安全保障理事会**）を設置し、国際紛争解決のための経済的・軍事的制裁を決定する強力な権限を与えた。
50. さらに国際連合には、経済及び社会問題全般に対して必要な議決や勧告等を行う（**経済社会理事会**）が設置されたほか、（**ユネスコ**）[国際連合教育科学文化機関]・（**国際労働機関**）[ILO]・（**世界保健機関**）[WHO]などの専門機関とも連携して、様々な分野で多面的な活動が行われることになった。
51. 戦後の国際金融・経済面での協力体制を築くために、1944年7月、連合国代表がアメリカのブレトン＝ウッズに集まり、（**国際通貨基金**）[IMF]と（**国際復興開発銀行**）[IBRD・世界銀行ともいう]の設立に合意し、両組織は1945年12月に発足した。
52. 敗戦国の戦後処理については、連合国が一定期間占領して、非軍事化や民主化を進めることとなった。同時に、（**ニュルンベルク**）に国際軍事裁判所が設置され、ナチス＝ドイツの指導者の戦争犯罪が追及された。
53. オーストリアはドイツと分離されて米・英・ソ・仏の4国による共同管理下におかれ、イタリア・ハンガリー・ブルガリア・ルーマニア・フィンランドの旧枢軸国とは1947年（**パリ講和条約**）が結ばれ、イタリアは海外領土を放棄した。
54. 日本はアメリカ軍における事実上の単独占領下におかれ、民主的改革が実施された。東京にも（**極東国際軍事裁判所**）が設置されて戦争犯罪が裁かれた。1946年～48年に行われた（**東京裁判／極東国際軍事裁判**）では元首相の（**東条英機**）ら7名が死刑判決を受けた。
55. 1946年には、主権在民・象徴天皇制・戦争放棄を謳った（**日本国憲法**）が公布された。
56. 第二次世界大戦中に多くの国が戦場となった西ヨーロッパでは、戦争中にファシズムに反対し、経済再建を訴える諸勢力が政治の中心に登場した。イギリスでは、1945年7月の選挙で労働党が圧勝し、チャーチルに代わって（**アトリー**）が首相になった。
57. この人物は重要産業の国有化を進めるとともに、（**ゆりかごから墓場まで**）と言われた広範な社会福祉制度の充実を図った。
58. 1949年にイギリスから（**エール**）が離脱し、アイルランドとなった。
59. フランスでは、1946年10月、（**第四共和政**）が発足した。
60. イタリアは1945年以来（**キリスト教民主党**）が政権を担当し、46年の国民投票の結果、王政が廃止されて共和政になった。

61. フランス・イタリアでの共産党の躍進や東欧地域における親ソ政権の成立の結果、アメリカ合衆国はソ連への警戒感を強めた。1947年3月、合衆国の（トルーマン）大統領は、内戦状態にあったギリシアと、ソ連と対立していないトルコに軍事援助を与えて、ソ連の拡大を封じ込める政策（トルーマン＝ドクトリン）を宣言した。
62. また、戦後ヨーロッパの経済的困窮が共産党拡大の原因とみて、1947年6月、マーシャル国務長官はヨーロッパ経済復興援助計画（マーシャル＝プラン）を発表した。
63. 西欧諸国は援助を受け入れたが、ソ連・東欧諸国はこれを拒否し、1947年9月に各国共産党の情報交換機関として（コミンフォルム）[共産党情報局]を結成して対抗した。以後、「冷戦」と呼ばれる緊張状態が米ソ間で激化していった。

1. 東欧諸国では、ソ連の後押しを受けた共産党主導の改革が実行された。戦後国境線を西に移動させた（ポーランド）をはじめ、（ハンガリー）・（ルーマニア）・（ブルガリア）・（アルバニア）はソ連型の人民民主主義に基づく社会主義を採用し、土地改革と計画経済による工業化を進めた。
2. 1948年2月、東西側で独自の地位を守ろうとした（チェコスロヴァキア）で、マーシャル＝プランを受け入れようとした非共産党勢力が、共産党とそれを支援するソ連によって一掃されるというクーデタが発生した。
3. また、（ティトー）率いる抵抗運動によってナチスからの自力開放に成功したユーゴスラヴィアは、ソ連に対して自主的な姿勢を取ったため、1948年に（コミンフォルム）から除名されて独自の道を進んだ。
4. 東欧諸国へのソ連の影響が強化されていったのに対して、英・仏・ベネルクス3国（ベルギー）・（オランダ）・（ルクセンブルク）の西欧5か国は、1948年3月、集団的自衛条約である（西ヨーロッパ連合条約／ブリュッセル条約）を結んだ。
5. 1949年4月には、アメリカ合衆国も含めた西側12か国が（北大西洋条約機構／NATO）を結成し、武力侵略に共同で防衛することになった。
6. 他方、ソ連とアルバニア・ブルガリア・チェコスロヴァキア・ハンガリー・ポーランド・ルーマニアの東欧6か国は1949年1月、（経済相互援助会議／COMECON）を創設し、1955年5月には共同防衛を定めた（東ヨーロッパ相互援助条約／ワルシャワ条約機構）を発足させた。
7. 東西対立が厳しくなると、ドイツでは米・英・仏の占領地区とソ連占領地区の分断が進んだ。1948年6月、ソ連は西側地区の通貨改革に反対し、西ベルリンへの交通を遮断した。これを（ベルリン封鎖）と呼ぶ。後に封鎖は解かれたが、東西ベルリンはその後も分断された。
8. ボンを首都として1949年5月に成立した（ドイツ連邦共和国／西ドイツ）はキリスト教民主同盟の（アデナウアー）首相の指導で、西側の一員となって経済復興に成功し、1954年の（パリ協定）で主権を回復した。
9. 一方、ソ連地区では1949年10月、社会主義統一党を中心に東ベルリンを首都とする（ドイツ民主共和国／東ドイツ）の成立が宣言され、ドイツの分立が決定した。
10. オーストリアは1955年、米・英・仏・ソの占領4大国と（オーストリア国家条約）を結び、中立国として独立を回復した。

11. 中国は戦後、5大国の一員としての地位を認められたが、国内では大戦末期から続いていた国民党と共産党との衝突が再燃した。（蒋介石）が率いる国民党政権は、党幹部の腐敗、激しいインフレーションによる経済混乱で、民衆の批判を浴びた。
12. 共産党はこの間、支配地域で土地改革を実行して農民の支持を得、1947年から反攻に出た。国民党軍は敗退を重ね、1949年12月、（蒋介石）は台湾に逃れ、（中華民国政府）を維持した。
13. 共産党は1949年9月、国民党の統治に反対する諸勢力を北京の人民政治協商会議に招集した。会議は10月、（毛沢東）を主席、（周恩来）を首相とする（中華人民共和国）の成立を宣言し、首都を北京と定めた。
14. 1950年2月、中国とソ連は日本及び日本と結託する国を仮想敵とし、相互の安全保障を目的に結んだ軍事同盟である（中ソ友好同盟相互援助条約）をモスクワで調印した。
15. 1953年から始まった計画経済政策である（第1次五か年計画）では工業化と農業の集団化が推進され、翌1954年には新憲法が採択された。
16. 朝鮮は1943年のカイロ会談で独立が約束されていたが、戦後（北緯38度線）を境界に北半分をソ連が、南半分をアメリカ合衆国が占領下においた。
17. 南部では合衆国から帰国した（李承晩）を大統領として1948年に（大韓民国／韓国）が成立した。
18. 北部でも（金日成）を首相[72年以降は主席]として（朝鮮民主主義人民共和国／北朝鮮）の独立が宣言され、南北が分立した。
19. 大戦中、日本に占領された東南アジアの諸地域は、民族運動や抗日運動を基礎に戦後次々と独立に向かった。抗日運動が最も活発であったフィリピンは1946年（フィリピン共和国）として独立した。
20. オランダ領東インドでは、1945年8月、（スカルノ）を指導者として（インドネシア共和国）の成立が宣言された。オランダは武力で介入したが失敗し、1949年独立を達成し、（スカルノ）が初代大統領となった。
21. フランス領インドシナでは、（ホーチミン）が日本の占領下に（ベトナム独立同盟会／ベトミン）を組織し、戦争終結後（ベトナム民主共和国）の独立を宣言した。
22. しかし、フランスはこれを認めず、1949年、阮朝最後の王（バオダイ）をたて、フランス連合の一国として（ベトナム国）を発足させ、民主共和国と交戦を続けた。これを（インドシナ）戦争と呼ぶ。
23. 1954年4月、（ディエンビエンフー）で大敗したフランスは、民主共和国と（ジュネーヴ休戦協定）を結んでインドシナから撤退し、（北緯17度線）を暫定的軍事境界線として南北間を分け、2年後の南北統一選挙が予定された。

24. アメリカ合衆国は、東南アジアにおける共産主義勢力の拡大を阻止するため、1954年9月には英・仏やオーストラリア・ニュージーランド・フィリピン・タイ。パキスタンとともに（東南アジア条約機構／SEATO）を結成した。
25. 1955年には合衆国に支援された（ゴ=ディン=ジエム）政権が南部に（ベトナム共和国）を樹立したため、ベトナムは南北に分断された。
26. カンボジアは1953年に完全独立を果たし、（シハヌーク）の下で中立政策を進めた。
27. イギリス領であったマレー半島は、1957年に（マラヤ連邦）となった。
28. 戦後、イギリスからの独立が予定されていたインドでは、パキスタンの分離・独立を求める全インド=ムスリム連盟の（ジンナー）と、統一インドを主張する（ガンディー）らに対立した。
29. 1947年にアトリー内閣で（インド独立法）が制定されると、ヒンドゥー教徒と主体とする（インド連邦）とイスラーム教徒による（パキスタン）の2国に分かれて独立した。
30. インドは初代首相（ネルー）のもとで、1950年にカーストによる差別の禁止など社会の近代化を目指す憲法を公布し、共和国となった。
31. イランでは石油を独占するイギリス系企業の国有化を求める声が強まっていた。1951年政権についた（モサデグ）はこれに応じて国有化を実行した。
32. これに対して対英関係の悪化を恐れた国王（パフレヴィー2世）はクーデタによって（モサデグ）を追放した。
33. エジプトなどアラブ7国は1945年3月、（アラブ連盟／アラブ諸国連盟）を結成し、アラブの統一行動を目指した。
34. パレスチナについては、戦後イギリスの委任統治の終了を機に、国際連合によってアラブ人地域とユダヤ人地域の分割案が提示された。ユダヤ人はこれを受け入れて1948年（イスラエル）の建国を宣言したが、アラブ連盟は反対してこの国と戦争になった。これを（パレスチナ戦争／第1次中東戦争）と呼ぶ。
35. この戦争でパレスチナから追放された100万人以上のアラブ人は難民となった。彼らを（パレスチナ難民）と呼ぶ。
36. 南北に分断されていた朝鮮では1950年6月、（朝鮮民主主義人民共和国／北朝鮮）軍が南北統一を目指して境界線である38度線を越えて侵攻した。国連安全保障理事会[安保理]はこの行動を侵略と認め、その勧告に応じたアメリカ軍を中心とする（国連軍）が韓国の支援に向かった。
37. 国連軍が北朝鮮軍に反撃し、中国国境近くまで追撃すると、中国は北朝鮮側を支援して（人民義勇軍）を派遣した。

38. 朝鮮半島ではその後、38度線を挟んで攻防が続いたが、53年に休戦協定が成立し、現在も続く南北の分断が固定化されていった。この戦争を（朝鮮戦争）と呼ぶ。
39. この戦争が勃発した後、日本では（警察予備隊）[のちの自衛隊]が設置され、1951年、社会主義国と一部のアジア諸国の不参加や反対をおして（サンフランシスコ講和会議）で平和条約に調印した。
40. 日本は独立を回復し、朝鮮・台湾・南樺太・千島を正式に放棄した。しかし、（歯舞諸島）・（色丹島）・（国後島）・（択捉島）の北方4島は1855年の日露和親条約で日本の領土と認められたが第二次世界大戦後もソ連とロシア連邦は占領し続けている。
41. アメリカ軍に日本国内の基地を貸与することやアメリカ軍が日本の治安維持へ参加することなどを定めた（日米安全保障条約）も結ばれ、合衆国は事実上日本の防衛を引き受けることとなった。沖縄は合衆国の施政権下に置かれることとなった。
42. アメリカ合衆国は1951年、フィリピンと軍事援助条約を、オーストラリア・ニュージーランドとは（太平洋安全保障条約／ANZUS）を結んだ。
43. 中東地域では1955年、トルコ・イラク・イギリス・パキスタン・イランが参加する（バグダード条約機構／中東条約機構／METO）が結成された。なお、イラクは1959年に脱退し、以後（中央条約機構／CENTO）と改称している。
44. アメリカに続いて以下の国が原子爆弾の製造に成功している。
- （ソ連）[1949年]
 - （イギリス）[1952年]
 - （フランス）[1960年]
 - （中国）[1964年]
45. 1952年にアメリカ合衆国が最初の（水素爆弾）の実験を行うと1953年ソ連もその保有を明らかにした。
46. なお、1954年の（ビキニ環礁）でのアメリカ合衆国による実験で日本の（第五福竜丸）などが被曝し、日本では（原水爆禁止運動）がおこった。
47. ソ連との対立が激しくなるにつれて、アメリカ合衆国では平時でも大規模な軍隊を維持するとともに、国内の共産主義者などの活動を規制する動きが強まった。1950年頃から、（マッカーシー）らによる、左翼運動や共産主義者を攻撃する「赤狩り」旋風が始まった。この傾向は共和党上院議員（マッカーシー）が知識人や公務員の思想追求活動の先頭に立ったので、（マッカーシズム）とも呼ばれた。

48. 1953年から大統領に就任した（アイゼンハワー）は、朝鮮戦争の休戦協定を実現し、ソ連との緊張緩和を目指したが、東側に対抗する軍事同盟網の結成も進めた。
49. 経済復興が進んだ西欧諸国間でも、1950～60年代にアメリカ合衆国と同じような大量生産・大量消費社会化が進行した。同時に、2度も世界戦争の戦場になり、米・ソの狭間で地盤沈下をしていったことの反省から、地域統合によってヨーロッパの再生を図ろうとする動きが現れた。まず、1950年にフランスのシューマン外相の提案[シューマン＝プラン]を受けて、1952年にフランス・西ドイツ・イタリア・ベネルクス3国[（ベルギー）・（オランダ）・（ルクセンブルク）]の間で石炭・鉄鋼資源の共有を目指す（ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体／E C S C）が発足した。
50. この成功により1958年には（ヨーロッパ経済共同体／E E C）と（ヨーロッパ原子力共同体／E U R A T O M）の設置へと発展し、相互に関税を引き下げ、共通の農業政策や資本の自由移動が可能になった。
51. 1967年にはこれらの3共同体は合併して、（ヨーロッパ共同体／E C）となり、主権国家の枠を超えた西欧統合の基礎が作られた。
52. 西ドイツでは（アデナウアー）政権の下で経済成長と社会政策の両立を図る政策が追求され、（経済の奇跡）と言われるほどの経済成長が実現した。
53. 一方、かつての植民地や自治領の間でイギリス連邦を結成していたイギリスは、当初、この西欧統合の動きに反発し、1960年に北欧諸国と共に（ヨーロッパ自由貿易連合／E F T A）を結成して対抗した。しかし、60年代に入りE C参加を希望するようになり1973年に認められた。イギリス・デンマーク・アイルランドが加わって9か国に拡大したE Cを（拡大E C）と呼ぶ。
54. フランスでは、ベトナムから撤退した後も、アルジェリア独立問題を巡って国内対立が激しくなり、1958年に第四共和政が倒れ、（第五共和政）にかわった。
55. 大統領となった（ド＝ゴール）は、1962年に（アルジェリア）の独立を認めた後、1960年に核兵器を保有し、1964年には中華人民共和国を承認した。さらに、1966年には（北大西洋条約機構／N A T O）への軍事協力を拒否するなど、米・ソの間で独自の立場を主張した。
56. 日本は、朝鮮戦争中に国連軍への物資供給（朝鮮特需）などによって経済復興のきっかけを掴んだ。
57. 1956年には（ソ連）と国交を回復し、同時に国際連合への加入も実現して、国際社会に復帰した。
58. この頃から日本でも高度経済成長が始まったが、1960年の（日米安全保障条約）の改定をめぐって激しい国内対立も発生した。
59. また、1965年には韓国との間で（日韓基本条約）を結び、国交を正常化した。

60. ソ連では1953年にスターリンが死ぬと、外交政策の見直しが始まり、1955年にユーゴスラヴィアと和解し、西ドイツとの国交も回復した。1956年2月のソ連共産党第20回大会で、(フルシチョフ) 第一書記はスターリン体制下の個人崇拜、反対派の大量処刑などを批判し、自由化の方向を打ち出した。これを(スターリン批判) と呼ぶ。
61. さらに資本主義国との平和共存を提唱し、(コミンフォルム) も解散した。この転換は(雪どけ) と呼ばれ、東欧の社会主義諸国に衝撃を与えた。
62. ポーランドでは1956年6月、(ポズナニ) で生活改善と民主化を要求する民衆と軍・警察とが衝突した。これを(ポーランド反政府反ソ暴動／ポズナニ暴動) と呼ぶ。
63. この結果共産党は指導者を(ゴムウカ) に交替させて、自由化路線を取った。
64. 1956年10月、ハンガリーでは、社会主義体制とソ連からの離脱を求める大衆行動が全国的に拡大した。それはこの動きを軍事介入によって鎮圧し、首相(ナジ=イムレ) は後に処刑された。これを(ハンガリー反ソ暴動／ハンガリー事件) と呼ぶ。
65. 東ドイツでは、1950年代末に農業などの集団化が推進されると、東ベルリンから西側に脱出する人々が急増したため、東ドイツ政府は1961年(ベルリンの壁) を築き、脱出を阻止した。
66. それは東欧諸国の自由化の試みを抑えたが、1958年第一書記と首相を兼任した(フルシチョフ) は経済改革を実行し、大陸間弾道ミサイルの開発、世界最初の人工衛星(スプートニク1号) の打ち上げ成功[1957年]を背景に、アメリカ合衆国との直接対話を追求した。
67. アジア・アフリカの新興独立国の間には、東西対立に巻き込まれることへの危機感が高まり、東西陣営のどちらにも属さない(第三勢力) を形成しようとする潮流が生まれた。
68. 1954年、インドなど南アジア諸国の首脳がコロンボに集まり、アジア・アフリカ諸国会議の開催、核実験停止を提案し、また中国の周恩来首相はインドのネルー首相と会談して、領土保全と主権の尊重・不侵略・内政不干涉・平等と互惠・平和共存からなる(平和五原則) を発表した。
69. 1955年、インドネシアのバンドンでアジア・アフリカ29か国の代表が参加した(アジア=アフリカ会議／バンドン会議) が開かれ、平和共存・反植民地主義を謳った十原則が採択された。
70. また、1961年ユーゴスラヴィアなどの呼びかけでベオグラードに25か国が参加して第1回(非同盟諸国首脳会議) が開催され、平和共存・民族解放の支援・植民地主義の打破を目指して共同歩調をとることを誓った。

71. このような非同盟諸国の台頭に対応して、アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの発展途上国を（**第三世界**）と呼ぶようになった。
72. この非同盟運動の一翼を担ったエジプトでは、1952年ナギブや（**ナセル**）らの指導する将校団が王政を倒し、1953年共和国を樹立した。これを（**エジプト革命**）と呼ぶ。
73. その後（**ナセル**）が大統領になると、積極的中立政策を唱えて、国内の近代化を推進するためナイル川中流に（**アスワン＝ハイダム**）の建設を目指した。
74. イギリス・アメリカ合衆国は（**ナセル**）の外交姿勢に反発して、エジプトへの経済援助を停止したため、（**ナセル**）は1956年ダム建設の資金を確保する目的で（**スエズ運河**）の国有化を宣言した。これに対し、イギリス・フランス・イスラエルは、エジプトに軍事行動を起こした。これを（**スエズ戦争／第2次中東戦争**）と呼ぶ。
75. 一方、パレスチナ難民は1964年に（**パレスチナ解放機構／PLO**）を設置して、イスラエルに対する抵抗闘争を強化した。
76. このパレスチナ問題に関連して1967年にはエジプト・シリアなどがイスラエルを攻撃したが、イスラエルは逆に（**シナイ半島**）・ガザ地区・ヨルダン川西岸・ゴラン高原を占領した。これを（**第3次中東戦争**）と呼ぶ。
77. フランス支配下の北アフリカ地域では、1956年（**モロッコ**）・（**チュニジア**）が独立した。
78. アルジェリアでは、独立に抵抗するフランス人入植者や現地軍部と、民族解放戦線[FLN]との間で武装闘争が続いた。これを（**アルジェリア戦争**）と呼び、1962年に独立が達成された。
79. その他のアフリカの植民地でも1957年、（**エンクルマ**）を指導者にガーナが最初の自力独立の黒人共和国となったのをはじめ、1960年には一挙に17の新興独立国が生まれて、この年は（**アフリカの年**）と呼ばれた。
80. 1963年、エチオピアのアジスアベバで開かれたアフリカ諸国首脳会議には30か国が参加し、（**アフリカ統一機構／OAU**）を結成して、アフリカ諸国の連帯、独立後もなお残る政治的干渉や経済的支配の克服を目指した。
81. しかし、ポルトガルの植民地はなお残り、経済的利権を手放したがない旧宗主国の中には、ベルギーのように独立後も干渉して（**コンゴ動乱**）を引き起こした例もあった。
82. また、南アフリカのように少数の白人支配を維持するために、（**アパルトヘイト**）と言われる極端な人種隔離政策をとる国もあった。
83. 新興独立国家の政治・経済は不安定で、独立直後の勢いは失われ、慢性的な貧困に苦しみ、国際機関や欧米諸国の援助に依存する例が多く見られた。1964年には、発展途上国71か国が（**国連貿易開発会議／UNCTAD**）を結成し、南北の経済格差の是正を目指したが十分な成果は上がらなかった。

1. ラテンアメリカ諸国は、第二次世界対戦後もアメリカ合衆国の強い影響下に置かれた。1947年、米州の共同防衛と相互協力を約したリオ協定が採択され、1948年、合衆国が主導するパン＝アメリカ会議で（米州機構／OAS）の結成が合意された。
2. 他方、この地域では、強い民族主義に根ざした政権が登場し始め、外国から輸入していた工業製品を自国で生産する政策が採用されたり、合衆国の干渉に反発する動きも出てきた。アルゼンチンでは1946年大統領になった（ペロン）が、反米的な民族主義を掲げて社会改革を行った。
3. キューバでは親米的な（バティスタ）による独裁政権が続いていたが、1959年、（カストロ）が指導する革命運動が成功した。これを（キューバ革命）と呼ぶ。
4. 革命政府が土地改革を実行し、アメリカ合衆国への砂糖企業を接収すると、1961年（アイゼンハワー）政権はキューバと断交した。
5. アメリカ合衆国では1961年、史上初めてカトリック教徒の大統領として民主党の（ケネディ）が就任した。この人物は（ニューフロンティア）政策を掲げて内政の改革や柔軟な外交に積極姿勢を見せた。
6. 1962年にキューバでソ連の支援によるミサイル基地の建設が発覚すると、（ケネディ）政権はソ連船の機材搬入を海上封鎖で阻止した。そのため、米ソ間で一気に緊張が高まる（キューバ危機）が発生したが、合衆国のキューバ内政への不干渉と交換に、ソ連がミサイル基地を撤去する合意が成立した。
7. これ以後、米ソ両国は緊張緩和の方向に転じていった。1963年には、米・英・ソ3国間で（部分的核実験禁止条約）[地下を除く核実験禁止条約]が調印され、1968年には米・英・ソなど62か国が（核拡散防止条約／NPT）に調印した。
8. 1969年からは米ソ両国間で（第一次戦略兵器制限交渉／第一次SALT）が始まり、1972年に核兵器の現状凍結協定が、翌年には核戦争防止協定が結ばれた。
9. （ケネディ）大統領は、国内では（キング）牧師に指導された（公民権運動）に理解を示したが、1963年11月に南部遊説中に暗殺された。
10. 後継者には副大統領の（ジョンソン）が就任し、1964年に選挙権や公共施設での人種差別を禁止する（公民権法）を成立させ、（偉大な社会）計画を提唱して「貧困との戦い」を推進した。

11. ソ連では、1964年に（フルシチョフ）が解任され、コスイギン首相・（ブレジネフ）第一書記の体制に変わり、自由化の進展は抑えられた。
12. 一方、社会主義国の中では石油資源を持つルーマニアが独自色を強めたり、1968年にはチェコスロヴァキアで（プラハの春）と呼ばれた民主化を求める市民運動が起こり、共産党書記長になった（ドプチェク）は自由化を推進した。
13. 自由化の波及を恐れたソ連は、（ワルシャワ条約機構）軍を率いてチェコスロヴァキアに軍事介入し、改革の動きを抑えた。
14. 米・ソの緊張緩和の影響はまずヨーロッパに現れた。西ドイツでは1969年に戦後初めて（社会民主）党を中心とする連立政権が成立し、（ブランド）首相はソ連や東欧の社会主義国との関係改善を図る（東方外交）を始めた。
15. 1970年、西ドイツはソ連と武力不行使条約を結び、ポーランドと戦後国境（オーデル＝ナイセ線）を認めた国交正常化条約を締結するなど、東欧諸国との外交正常化を進めた。
16. 1972年、米・英・仏・ソ4国がベルリンの現状維持協定を結んだのを受けて、同年末、東西両ドイツは相互に承認しあい、翌年1973年両国ともに（国際連合）に加盟した。
17. 1975年には、ヘルシンキにアルバニアを除く全ヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国・カナダの首相が参加して、（全欧安全保障協力会議／CSCE）が開催され、主権尊重、武力不行使、科学・人間交流の協力をうたった（ヘルシンキ宣言）が採択された。
18. 中国は、1950年代前半に戦前の農工業生産額を超えたが、やがて強引な工業化・農業集団化政策や共産党支配への批判があらわれた。毛沢東は批判勢力に反撃し、急激な社会主義建設を目指す（大躍進）運動を指示して、農村での（人民公社）設立を進めた。
19. しかし、請求な大規模集団化や専門技術の軽視により、生産の急減など多大な犠牲を出して失敗し、1959年には毛沢東に代わって（劉少奇）が国家主席となり経済計画を見直した。
20. 1959年、（チベット）では反中国運動が起こり、これを鎮圧した中国軍はインド軍とも衝突した。これを（中印国境紛争）と呼ぶ。なお、この事件の後、チベット仏教の指導者（ダライ＝ラマ14世）はインドへの亡命を余儀なくされた。
21. 内外の危機が重なる中で、党主席に止まった毛沢東は、アメリカ合衆国との対決路線を取り、ソ連の平和共存路線を批判した。これに対しソ連は1960年に中国への経済援助を停止し、ソ連人技術者を引き上げた。こうした中ソ対立は1963年から公開論争に発展し、1969年には中ソ国境で（中ソ国境紛争）と呼ばれる軍事衝突も起こった。

22. 毛沢東の方針は、中国共産党内でも対立を引き起こした。1966年、毛沢東と軍の指導者の林彪らは、劉少奇・（鄧小平）らを資本主義の復活を図る修正主義者[（実権派）や（走資派）と呼ばれた]と非難し、全国に（プロレタリア文化大革命）という新たな革命運動を呼びかけた。
23. これに応え、若い世代を中心に（紅衛兵）など全国的な大衆運動が組織され、党幹部や知識人を批判、追放した。劉少奇が失脚し、その後国家主席は廃止された。
24. 1971年には毛沢東の後継者とみられた林彪が失脚し、1976年1月に周恩来首相が、同年9月に毛沢東が死ぬと、華国鋒首相は江青[毛沢東夫人]ら文化大革命推進派（四人組）を逮捕して党主席を兼任し、1977年文化大革命の終了を告げた。
25. 10年にわたる文化大革命は中国内部に深刻な社会的混乱をもたらしたが、1981年、鄧小平を中心にした新指導部は農業・工業・国防・科学技術の（四つの現代化）を推進し、その後の中国は改革開放・路線に転じていった。
26. 南ベトナムでは（ゴ=ディン=ジエム）政権が独裁色を強める中で1960年に南ベトナムの解放をめざす（南ベトナム解放民族戦線）が結成され、ベトナム民主共和国[北ベトナム]と連携して、ゲリラ戦を展開した。
27. 1963年、（ジエム）政権が軍のクーデターによって倒されると、解放戦線の攻勢は激しくなった。これに対してアメリカ合衆国のケネディ政権は本格的な軍事援助を開始し、1965年からはジョンソン政権が北ベトナムへの爆撃（北爆）に踏み切る一方、南ベトナムへ地上兵力を派遣して、1968年には50万人を超えた。これを（ベトナム戦争）と呼ぶ。
28. 1968年大統領選挙で当選した共和党の（ニクソン）は、地上勢力を南ベトナム政府軍に委ね、アメリカ軍の犠牲を軽減する方針（ニクソン=ドクトリン）を表明した。
29. 日本では沖縄の米軍基地がベトナム戦争に利用されていたことへの批判が高まり、（沖縄）返還問題が浮上した。こうして、1972年に（沖縄）返還が実現した。
30. アメリカ合衆国は、1971年にキッシンジャー大統領補佐官を北京に送り、ソ連と対立関係にあった中国に関係正常化の提案を行い、翌年72年には（ニクソン）が訪中し、毛沢東との間で関係正常化に合意した。
31. この米中接近は日本にも大きな衝撃を与え、日本の田中角栄首相が1972年に北京を訪問して国交正常化し、1978年には（日中平和友好条約）を締結した。
32. ベトナム戦争はその後1973年1月に（ベトナム和平協定／パリ和平協定）が成立し、（ニクソン）大統領はアメリカ軍の南ベトナムからの撤退を実現させた。

33. しかし、(ニクソン)大統領は、1972年の大統領選挙で再選を目指した共和党の(ニクソン)陣営が、首都ワシントンにあった民主党本部を盗聴しようとした(ウォーターゲート)事件を起こしたため1974年に辞任に追い込まれた。
34. 1975年4月、北ベトナム軍と解放戦線は(サイゴン)[現ホーチミン]を占領し、1976年南北を統一した(ベトナム社会主義共和国)が成立した。
35. カンボジアでは、1970年にクーデターでシハヌーク元首を追放した親米右派勢力と、(ポル=ポト)の指導する赤色クメールなど解放勢力との内戦が続いていた。
36. 1975年、解放勢力が勝利を収めて(民主カンプチア/民主カンボジア)を名乗った。
37. 第三世界では、1960年代頃から強権的支配のもとで、政治運動や社会運動を抑圧しながら近代化を強行していく、(開発独裁)と呼ばれる体制が登場し始めた。
38. 大韓民国の李承晩は抑圧的な反共体制をとっていたが、1960年、民主化と経済発展を求める学生らの運動が起こり失脚した。その後、軍人の(朴正熙)が1961年にクーデターによって権力を握り、大統領となって日本と国交を結び、強権体制をとりながらも経済発展に力を入れた。
39. インドネシアでは、スカルノ大統領が国内の共産党との協力し、中国との関係を強める政策をとっていた。しかし1965年の(九・三〇事件)を機に軍部が実権を握り、共産党は弾圧され、スカルノは失脚した。
40. イランでも、国王パフレヴィー2世の指導で、反対派を弾圧しながら、1963年から(白色革命)と呼ばれる経済・社会の近代化事業が開始された。
41. 東南アジアでは、1963年にマラヤ連邦がシンガポールや英領ボルネオと合体して(マレーシア)となったが、1965年に中国系住民を中心として(シンガポール)が分離、独立した。
42. 1967年にはインドネシア・マレーシア・フィリピン・シンガポール・タイの5か国が(東南アジア諸国連合/A S E A N)を結成して地域協力を目指した。
43. インドでは、戦後、国民会議派の政権が長く続き、非同盟外交とともに計画経済が推進された。また、パキスタンとの間で(カシミール)地方の帰属などを巡って衝突を繰り返したうえ、1971年には言語の違いから東パキスタンが(バングラデシュ)として独立するのを支援した。

44. アメリカ合衆国の財政は、ベトナム戦争の戦費や社会保障費の増大によって悪化したうえ、日本・西ヨーロッパの先進工業国の躍進などによって、1971年には1世紀近く続いた貿易収支の黒字も赤字に転換した。(ニクソン)大統領は71年、ドルの金兌換停止・10%の輸入課徴金の導入を発表し、世界に衝撃を与えた。これを(ドル＝ショック)と呼ぶ。
45. ドルを基軸通貨として、アメリカ合衆国1国が世界経済を支えてきた戦後の(ブレトン＝ウッズ)国際経済体制は転換点を迎え、1973年に先進工業国の通貨は(変動相場)制に移行し、世界経済は合衆国・西ヨーロッパ・日本の三極構造に向かい始めた。
46. 1973年、エジプト・シリア・とイスラエルの間で(第4次中東戦争)が起こると、サウジアラビアなど(アラブ石油輸出国機構／OPEC)は、イスラエルを支援する諸国に対して原油輸出の停止や制限の処置を取った。
47. 同時に、(石油輸出国機構／OPEC)は原油価格の大幅引き上げを決定したため、安価な席を前提に経済成長を続けてきた先進工業国は深刻な打撃を受けた。これを(第1次石油危機／第1次オイルショック)と呼ぶ。
48. 1975年以降毎年、経済成長の鈍化、多国籍企業の問題、環境汚染など、相互に共通する問題に対応するため、(先進国首脳会議／サミット)が開催されるようになった。
49. アメリカ合衆国では、不況克服のための公共投資によって財政赤字が増大した。そのため、1981年に大統領に就任した(レーガン)は、民間経済の活力再生を重視して、減税や規制緩和によって(小さな政府)を目指す新自由主義的改革を提唱した。
50. これと同じような政策の導入は、イギリスの(サッチャー)保守党政権、西ドイツの(コール)中道右派連立政権、日本の(中曽根康弘)自民党政権でも見られ、国営企業の民営化や規制緩和が進められた。
51. 途上国では低賃金によるコスト削減を誘い水に外国企業を誘致し、労働集約的な工業品を先進国に輸出する路線が拡大していった。その結果、韓国・台湾・香港・シンガポール・ブラジル・メキシコなどで始まった(新興工業経済地域／NIEs)への動きが、タイ・マレーシア・中国・ベトナムなどに波及していった。
52. 一方で、先進工業国では工場が国内に流出して雇用機会が減ったが、コンピューターなど最先端の部門の研究と生産で競争を乗り切るようになった。そのため、1980年代にはアメリカ合衆国・西欧・日本の中で先端技術開発をめぐる激しい競争が発生し、自動車やコンピューターなどの部門で貿易の不均衡を中心とした国家間の対立が起きた。これを(貿易摩擦)と呼ぶ。
53. 貿易収支の赤字に苦しむアメリカ合衆国が、1985年に米・英・西独・仏・日の先進5カ国による(プラザ合意)でドル安を容認すると、日本企業などは円高不況により大規模に途上国への工場移転を開始した。

54. 高度経済成長が進むにつれて、先進国では大気や河川・土壌などの環境汚染が指摘されるようになった。1972年にはストックホルムで（国連人間環境会議）が開催され、地球規模で環境保全するため、国連環境計画[UNEP]の設置が決定された。
55. 1979年にはアメリカ合衆国のスリーマイル原子力発電所で放射能漏れの事故が起こり、1986年にはソ連の（チェルノブイリ原子力発電所）で深刻な事故が発生し、原子力発電の将来にも問題が指摘されるようになった。
56. このような環境危機に対応して、1987年には国連の委員会が地球環境の保全と両立可能な（持続可能な発展）の重要性を指摘する報告書を発表した。
57. 他にも、西ドイツでは1980年に環境保護を主目的とした（緑の党）結成された。
58. 1970年代後半になると、アメリカ合衆国の（カーター）大統領は、人権を重視する外交を展開し、1977年にはパナマ運河をパナマに変換する条約を成立させた。
59. イランでは、1979年1月に国王パフレヴィー2世による近代化路線に反対する（イラン革命）が発生し、宗教指導者（ホメイニ）を中心とする（イラン＝イスラーム共和国）が成立した。
60. この結果、国を支援してきた合衆国とイランの対立が激しくなり、石油価格が急騰して新たな中東危機の焦点となった。これを（第2次石油危機／第2次オイルショック）と呼ぶ。
61. また、1979年12月には、ソ連が（アフガニスタン）の社会主義政権を救援するために軍事侵攻したが、それに抵抗する勢力のゲリラ戦に直面した。
62. 従来の対ソ外交を批判し、（強いアメリカ）の復活を訴えたのが（レーガン）大統領であった。この人物はソ連を「悪の帝国」と非難し、宇宙空間での戦略防衛構想などの大規模な核兵器の軍備拡張を推進したり、西ヨーロッパへの中距離核兵器の配備計画を推進した。その結果、米ソ間の関係は（第2次冷戦）と言われる緊張した状況になった。
63. しかし、1985年にソ連の書記長に就任した（ゴルバチョフ）は、行き詰まった社会主義体制を立て直すため、情報公開[（グラスノスチ）]による言論の自由化や国内の改革[（ペレストロイカ）]を提唱し、柔軟な新思考外交の推進も表明した。
64. アメリカ合衆国は、軍縮によって大規模な財政赤字を削減する効果を期待して、ソ連との対話を重視し始めた。1987年の首脳会談では（中距離核戦力／INF）の全廃に合意し、米ソ間の緊張緩和が進んだ。
65. それを受け、ソ連軍は1989年に（アフガニスタン）から撤退し、同年12月には、合衆国の（ブッシュ）大統領とソ連の（ゴルバチョフ）書記長は地中海の（マルタ）島で首脳会談を開催し、冷戦の終結を宣言した。

1. ポーランドでは、1980年から（ワレサ）を指導者として自主管理労組（連帯）が組織され、政府に改革を求めた。1989年には複数政党制の下で選挙が行われ、圧勝した（連帯）を中心とする連立政権が発足した。
2. ルーマニアの場合は、（チャウシェスク）の独裁体制が続いていたが、1989年12月に反体制運動が勝利を収め、（チャウシェスク）夫妻は処刑された。
3. 東ドイツでは、1989年10月に西側への脱出者が急増して（ホネカー）書記長が退陣し、11月には（ベルリンの壁）が解放され、東西ドイツ間の自由な行き来が認められた。
4. マーシャル=プランに対抗するためソ連と東欧6カ国が設立した経済協力機構である（経済相互援助会議／コメコン／COMECON）やソ連・東ドイツ・東欧6カ国によって設立された安全保障機構である（ワルシャワ条約機構／東ヨーロッパ相互援助条約）が1991年に解消されて、東欧社会主義権は消滅した。
5. ソ連では、ゴルバチョフの指導下でペレストロイカが推進され、1989年に複数候補者制の選挙に基づく連邦人民代議員が選出された。90年には共産党の指導にかわり、強力な権限を持つ（大統領制）が導入され、ゴルバチョフが大統領に選出された。
6. 経済では、中央指令型の計画経済から（市場経済）への移行が始まり、スターリン体制下で犠牲になった人々の名誉回復も行われた。
7. さらに、東欧における急速な民主化はソ連邦内の諸民族にも大きな影響を与え、バルト3国をはじめとした独立運動が始まった。1991年8月には連邦の維持を主張する保守派のクーデタが失敗し、ウクライナ・アゼルバイジャンなどほとんどの共和国が連邦からの離脱を宣言し、連邦を結びつけていた（ソ連共産党）もう解散した。
8. 1991年12月、（エリツィン）を大統領とする（ロシア連邦）[旧ソ連内のロシア共和国]を中心に、ウクライナ・ベラルーシなどの11の共和国が（独立国家共同体／C I S）を結成し、これによりソ連邦は解体した。
9. ロシアでは、1996年に（エリツィン）が大統領に再選されたが、市場経済への移行は遅れ、政治も不安定であった。（チェチェン）の民族紛争など多くの問題が未解決のまま、1999年末（エリツィン）は辞任し、2000年の選挙で（プーチン）が後継者に当選した。
10. その後、ロシアは資源輸出などによる経済成長を実現し、2008年には（プーチン）に代わって（メドベージェフ）が大統領に就任したが、（プーチン）は首相となり影響力を残した。

11. 2012年（ブーチン）は大統領選挙に再出馬して当選し、大統領職に復帰した。
12. 第二次世界大戦中のアメリカ合衆国で始まったコンピューターの開発は、1946年に実現した。その後、小型の電気信号増幅装置であるトランジスターや、半導体電子回路の集合体である（集積回路／IC）などの開発で小型化と低価格化が進み、90年代に入るとパーソナル=コンピューターという形で一般家庭にも普及するようになった。
13. また、1990年代にはインターネットが広く利用され始め、携帯電話の普及なども加わり、（情報技術革命／IT革命）が急速に進行し、大量の情報が国境を越えて瞬時に行き交う状況となった。
14. 第二次世界大戦後の世界では1947年に成立した「関税と貿易に関する一般協定／GATT」を中心として工業製品の輸入関税の大幅な引き下げが実現し、貿易の自由化が進展していった。一方、農産物の関税と流通・運輸・金融などのサービス部門や特許などの知的所有権に関わる通商の壁は残されていた。そこで1986年9月から南米のウルグアイに124か国の代表が集まり、これらの分野の関税引き下げをめぐる交渉を始めたが、交渉はしばしば暗礁に乗り上げた。しかし、1994年には自由化交渉も妥結し、1995年、（世界貿易機関／WTO）が発足して、農作物や金融・知的所有権・サービス取引面での自由化が始まった。
15. また、EC諸国は1985年12月に単一欧州議定書に調印し、商品だけでなく、人間の移動や金融取引の域内自由化にも踏み込んだ。さらに、1993年11月に（マーストリヒト）条約が発行し、（ヨーロッパ連合／EU）が発足、1999年1月からは貿易などの決済通貨として（ユーロ）を発行し、2002年からは一般市民の取引にも（ユーロ）が導入された。
16. 一方、アメリカ合衆国側は西欧経済が排他的ブロック化に向かうものと警戒し、カナダとの間で1988年に自由貿易協定を締結し、1994年にはメキシコも加えて、（北米自由貿易協定／NAFTA）を発足させた。
17. また、アジア太平洋地域では1989年に（アジア太平洋経済協力会議／APEC）が開かれた。
18. アフリカでは、1963年に結成されたアフリカ統一機構[OAU]が2000年の首脳会議で紛争の平和解決や経済統合の推進を目指して協力の強化を決定し、2002年に（アフリカ連合／AU）が結成された。
19. 経済面では1995年に発足したWTOでの利害調整が期待されているが、先進国で構成される（G8）サミットに加えて、ブラジル・インド・中国など有力新興国も含めた（G20）の会合も設定された。
20. こうした動きの一方で、冷戦終結後の世界では、情報通信手段の技術革新により、情報の国際的な交流が活性化し、貿易や金融面などでも世界的規模で自由な流通が促された。こうしたさまざまな面における世界の一体化を（グローバル化）と呼ぶ。

21. ラテンアメリカは金融・通貨危機に加えて、工業化による中産階級の成長の結果、開発独裁と呼ばれた多くの軍事独裁政権が1980年代には倒され、民政移管が実現していった。チリは1973年に（アジェンデ）を首班とする左翼連合政権がピノチェトを中心とする軍部のクーデタで倒されてから軍部独裁政権下にあったが、1983年の経済危機以来、軍部を批判する運動が高まり、1988年の国民投票で民生移行が決定された。
22. アジアの場合は1990年代に民主化が進行した。韓国では、1979年に（朴正熙）大統領が暗殺され、1980年に（光州）で民主化運動が発生した。これを（光州事件）と呼ぶ。
23. 1992年末の選挙では32年ぶりに文民出身の（金泳三）が当選し、文民政治の定着に努めた。
24. 1998年には軍部独裁政権時代に弾圧を受けていた（金大中）が大統領となり、民主化とともに朝鮮の南北対話を目指す太陽政策を推進した。
25. 台湾デモ1987年に戒厳令が解除され、1988年から総統になった（李登輝）が民主化を推進し、2000年の総統選挙では初めて国民党に属さない（陳水扁）が当選した。
26. 1997年にタイの通貨バートの急落をきっかけに東南アジア諸国・韓国に広がった通貨危機である（アジア通貨危機）で民衆の不満が高まったインドネシアでは、1965年の九・三〇事件以来独裁体制を維持してきた（スハルト）政権が1998年に倒れ、民政に移管した。
27. 中国では、文化大革命で失脚していた（鄧小平）を中心とした新指導部が成立した。彼らは（人民公社）の解体と農業生産の請負制、外国資本・技術導入による解放経済、国営企業の独立採算化などを一連の経済改革（社会主義市場経済化）を実行し、それなど近隣国家との関係改善にも努めた。
28. しかし、急激な改革による社会の動揺を背景に、共産党の一党支配の持続や民主化なき経済改革への不満が学生・知識人の間に広がった。1989年、彼らは（天安門）広場に集まり、民主化を要求したが、政府はこれを武力で抑えた。これを（天安門事件）と呼ぶ。
29. この事件の後、趙紫陽総書記は解任され、（江沢民）が後任に任命された。
30. 1997年にはイギリスから（香港）が返還されている。
31. 2002年には（胡錦濤）が総書記となり、急速な経済成長が実現した。
32. 他方、中国国内のチベット自治区や新疆ウイグル自治区では、経済発展につれて漢族の流入が増加した結果、民族対立が激化し、チベットでは（2008）年に、新疆では（2009）年に暴動が発生した。

33. ソ連社会主義圏に属したモンゴル人民共和国でも、ペレストロイカ・ソ連解体と並行して1990年、自由選挙が実行され、1992年には（社会主義）体制から離脱し、国名もモンゴル国となった。
34. 南北統一後のベトナムは、南部の社会主義化をめぐる混乱やカンボジアへの介入で経済活動が低迷し、南部から船で脱出する人々[ポート=ピープル]が難民となったために国際的な批判を浴びた。しかし1986年、（ドイモイ）政策[刷新政策]のもとに緩やかな市場開放に向かい、原油生産の成功や海外企業の進出による工業化の進展で、経済状況は好転している。
35. カンボジアでは（ポル=ポト）が指導する民主カンプチア[民主カンボジア]が、農業基盤に閉鎖的共産主義社会の建設を強行し、反対する人々を多数処刑した。
36. これを批判する反（ポル=ポト）派を支援して、ベトナムは1978年末カンボジアに軍を派遣し、（ヘン=サムリン）を元首とするカンボジア人民共和国を樹立させた。
37. 民主カンプチア[民主カンボジア]を支持していた中国は、ベトナムの行動を非難し、1979年2月、ベトナムに対し軍事行動を起こしたが、まもなく撤退した。これを（中越戦争）と呼ぶ。
38. ベトナムの行動は国際的な非難を受け、1989年にベトナム軍は撤退し、1991年にカンボジアの両派間で和平協定が調印された。1993年の総選挙で憲法制定議会が成立し、新憲法が採択されて、（シハヌーク）を国王とする（カンボジア王国）が樹立された。
39. このようにアジアの多くの社会主義国は開放体制に移行したが、朝鮮民主主義人民共和国[北朝鮮]では、独自の閉鎖的社会主義体制を維持している。1994年には核兵器保有の疑念からアメリカ合衆国との対立が激化した。その後、（朝鮮民主主義人民共和国）・（大韓民国）・（中国）・（日本）・（アメリカ合衆国）・（ロシア）の6か国による、朝鮮半島の非核化をめざす六カ国協議の枠組みが導入された。
40. ユーゴスラヴィア連邦では、1980年のティトーの死や、ソ連邦の解体による共産主義政党の影響力の低下により、90年代に入ると、連邦の解体が進行した。まず、1991年に（クロアチア）・（スロヴェニア）が分離を宣言すると、セルビアとの間で内戦が発生した。これを（ユーゴスラヴィア内戦）と呼ぶ。
41. 1997年にはアルバニア系住民が多いセルビアの（コソヴォ）地区でも内戦が勃発した。
42. 1999年にはセルビアに対するNATO軍の空爆が行われた。その後、民族浄化と呼ばれる、アルバニア系住民の大量殺害への関与により指導者（ミロシェヴィッチ）が逮捕され、国際戦犯裁判にかけられる事態も発生した。

43. 旧ソ連邦の周辺部でも同様の傾向が現れ、北カフカス地域の（チェチェン）では、1994年に独立を求めてロシアとの間で内戦が発生した。
44. 南部アフリカでは長年続いた白人少数支配体制が1980年代以降、消滅した。1965年にイギリスから一方的に独立したローデシアは、解放勢力の武装闘争や国際養老の批判に直面して1980年、黒人主体の（ジンバブエ）に生まれ変わった。
45. 南アフリカ共和国は第二次世界対戦後、多数派である黒人を隔離する（アパルトヘイト）政策を導入していたが、（アフリカ民族会議／ANC）の抵抗や国際連合の経済制裁を受けた結果、1980年代末に白人のデクラーク政権はアパルトヘイト政策の見直しを始めた。1991年に差別法を全廃し、1994年には平等な選挙権を認めた結果、（アフリカ民族会議／ANC）が過半数を制して、その指導者である（マンデラ）が大統領に当選した。
46. 同時に、アフリカでは内戦が多発し、多くの死者や難民を出した。1991年から92年には（ソマリア）で内戦が発生し、94年の（ルワンダ）における内戦では約100万人の犠牲者が出た。
47. エチオピアでは、1974年、軍部のクーデタによって（ハイレ＝セラシエ）皇帝の専制と貴族制が倒され、社会主義が宣言された。しかし、経済改革に失敗し、多数の難民が出て、1991年、（エリトリア）戦線など反政府勢力による攻撃で、社会主義政権は崩壊した。

1. 中東におけるアラブ諸国とイスラエルの対立は、1967年の第3次中東戦争以外さらに厳しくなった。1970年、ナセルを継いだエジプトの（サダト）大統領は、1973年シリアとともにイスラエルに反撃し、まもなく停戦になった。これを（第4次中東戦争）と呼ぶ。
2. その後、エジプトの（サダト）大統領は戦争による決着を断念して、イスラエルとの和平に転じ、1979年（エジプト＝イスラエル和平条約）が締結された。
3. この大統領は1981年に暗殺されるが、後継のムバラク大統領はその政策を引き継ぎ、イスラエルから（シナイ半島）の返還を実現させた。
4. しかし、パレスチナでは、イスラエルが占領地を併合する姿勢を見せたため、（パレスチナ解放機構／PLO）とアラブ人の抵抗が強まった。
5. 1993年、イスラエルの（ラビン）首相と（パレスチナ解放機構）の（アラファト）議長は話し合いによる解決を目指し、アメリカ大統領（クリントン）を仲介として相互承認、パレスチナ人の暫定自治政府の樹立で合意した。
6. しかし、1995年（ラビン）首相がユダヤ教急進派に暗殺されると、双方とも武力対決路線に立ち戻った。このうち、パレスチナ人のイスラエル政府に対する抵抗運動を（インティファダ）と呼ぶ。
7. エジプトがアラブ世界の指導的地位から離れると、それに変わって、イランとイラクが主導権を狙って登場してきた。1979年のイラン革命で成立した（イラン＝イスラーム共和国）はイスラームを国家原理に掲げ、欧米諸国との対決も辞さない姿勢を示した。
8. イスラーム教の理念を尊重し、イスラーム法によって秩序づけられた共同体を建設しようとする立場を（イスラーム原理主義）と呼ぶ。
9. イラクでは1968年以来、アラブの統一と社会主義を掲げるバース党が権力を握り、1979年党の実権を得た（サダム＝フセイン）が大統領になった。
10. この大統領は、1980年、国境紛争を理由に、88年まで続く（イラン＝イラク）戦争を起こした。
11. さらに90年には（クウェート）に侵攻したが翌91年9月、国際連合の決議によるアメリカ軍を中心にした多国籍軍の反撃を受けて撤退した。これを（湾岸戦争）と呼ぶ。

12. アジアでは少数民族問題による地域紛争が起きている。トルコ・イラン・イラクの（クルド）人問題や、インド・パキスタン間の対立、スリランカでのシンハラ系多数派とタミル系少数派の内戦などが収まらず、インドネシアでも2002年に（東ティモール）が分離、独立した。
13. 湾岸戦争後、ペルシア湾岸地域にアメリカ軍の駐留が続き、パレスチナ問題も未解決の状況下で、イスラーム急進派の中では反米感情が高まっていった。2001年9月11日、アメリカ合衆国の旅客機が乗っ取られ、ニューヨークとワシントンのビルに突入する（同時多発テロ事件）が発生した。
14. これに対し共和党の（ブッシュ）大統領は、アフガニスタンの（ターリバーン）政権の保護下にあるイスラーム急進派組織（アル＝カーイダ）が事件の実行者であるとして、同年10月、同盟国の支援のもとにアフガニスタンに対し軍事行動を起こし、（ターリバーン）政権を崩壊させた。これを対テロ戦争と呼ぶ。
15. アメリカ合衆国はさらに2003年3月、フセイン政権が中東地域の脅威になっているとの理由でイギリスとともにイラクを攻撃し、この政権を倒した。これを（イラク戦争）と呼ぶ。
16. イラクは米軍を中心にした占領統治下に置かれ、日本も復興支援のため、自衛隊の戦争時の援助活動を認める（イラク復興支援特別措置法）に沿って自衛隊を派遣した。
17. 冷戦時代の国際連合は、米・ソが対立し、平和維持のための有効な役割を發揮できない場合が多かった。それに対して、冷戦終結後はロシアとアメリカ合衆国が協調する事例が増え、国連の役割が増大し始めている。特に、国連加盟国から派遣された（国連平和維持軍／PKF）などが紛争地域で停戦監視・兵力の引き離し・選挙監視・人道支援などを行う（国連平和維持活動／PKO）がその例である。しかし、派遣軍の指揮権や中立性の確保などの問題が残されている。
18. 平和的に紛争を解決していく努力が今後ますます重要になっていく一方、インドとパキスタンが（1998）年に核保有宣言を行うなど、核保有国が増加しており、核拡散防止条約の実効性を高める努力や、核兵器の制限、廃絶の交渉が必要になっている。
19. 2009年4月、アメリカ合衆国の（オバマ）大統領がチェコ共和国の（プラハ）で核兵器の廃絶を訴えたことをきっかけに、国際連合の場でも核軍縮交渉の動きが始まっている。
20. また、通常兵器においても、1993年に化学兵器禁止条約が締結され、97年には対人地雷全面禁止条約が調印されたが、これらの条約成立には国際的な（非政府組織／NGO）の活動が大きな役割を果たした。

21. 20世紀は、「大衆の世紀」や「戦争と革命の世紀」など、様々に特徴付けられるが、「科学技術の世紀」という特徴も持っている。19世紀末に放射線が発見され、物質の最小単位への関心が高まり、20世紀初めに（**アインシュタイン**）の相対性理論などによって時間と空間の認識が大きく変化するとともに、物質の構造を解明する（**量子力**）学が急成長した。
22. その結果、物質の最小単位が原子・陽子・中性子などからなることが解明されたうえ、1938年には核爆発による膨大なエネルギーの発生が実証された。これがアメリカ合衆国による（**原子爆弾**）の開発に結びつき、莫大な国家予算を裏付けに科学技術が軍や産業と結合して発展するビッグ＝サイエンス時代が始まった。
23. また、20世紀初めにライト兄弟が発明した（**飛行機**）は第1次世界大戦中に軍用機に転用されたうえ、第2次世界大戦中には戦略爆撃機やジェット機の開発によって長距離飛行が可能となり、戦後には民間の大量輸送を実現した。
24. 米・ソの核軍拡競争の一環として開発が進んだロケットの分野では、1957年にソ連が人工衛星の（**スプートニク1号**）の打ち上げに成功した。
25. アメリカ合衆国も58年にアメリカ航空宇宙局[NASA]を設置してロケット開発を急ぎ、1969年には（**アポロ11号**）によって人類史上初めて人間の月面着陸に成功した。
26. さらに、医学や生物学の分野での発見や発明も急速に進んだ。1953年には遺伝子の基本となるDNAの構造が解明され、分子生物学が急速に発達し、73年には遺伝子組み換え技術が開発された。90年初めからは人間の遺伝子配列の解読を目指すヒトゲノム計画が始まり、2003年には解読が完成した。また、90年代末には細胞の操作により同一の遺伝子を持つ生命の誕生を可能にする（**クローン技術**）が羊や牛に応用され、難病治療の医薬品開発などが可能になる反面、人間への応用禁止など生命倫理上の問題を巡って激しい論争が進行している。
27. 科学技術の発展は世界の各地で急速な経済成長による生活水準の向上を生み出すとともに、医療の発達にも助けられて（**人口爆発**）と呼ばれる人口の急増も生み出した。
28. また先進国における急速な重工業化は、都市の過密や大気・河川の汚染、有害廃棄物などの深刻な環境破壊を生み出した。70年代に入ると、環境保護に関して政府や運動の国際的連携が図られるようになり、72年にはスウェーデンのストックホルムで国連人間環境会議が開催され、国連環境計画が発足した。73年の第1次石油危機後の経済停滞で環境への関心は一時後退したが、1985年に（**オゾン＝ホール**）と呼ばれる、南極や北極上空の成層圏にある（**オゾン**）層の濃度減少が発見され、地球温暖化の危険が指摘されるようになった。

29. これを受けて、92年にはブラジルのリオデジャネイロで（環境と開発に関する国連会議／地球サミット）が開催され、各国が二酸化炭素の排出量を減少させる必要性で合意し、97年の地球温暖化に関する（京都会議／地球温暖化防止会議）でその目標値が設定された。
30. このような環境保護運動の進展は、人間と自然の強制を重視するエコロジーの思想や文化を定着させ、他方では、高度経済成長による人口の都市集中は消費者運動を始めとする新しい市民運動の登場も生み出した。さらに、男女平等を目指す（フェミニズム）と呼ばれる女性解放運動の定着によって日本では「ワークライフバランス」など、仕事と家庭の両立可能な社会の構築を求める声も高まっている。
31. 近代ヨーロッパの思想は合理的精神を持った個人の自立が自明の前提となっていたが、19世紀末になると、巨大組織の登場や戦争の多発などによって、個人の孤立や非合理的感情の高まりが強く意識されるようになった。哲学ではニーチェが神不在の時代における虚無主義の哲学を探求し、潜在意識の世界については（フロイト）が解明を進め、精神分析学を確立した。
32. また、20世紀初めには、自立した個人に代わって義務教育の普及や労働者政党の成長などに裏付けられて「大衆」の台頭が見られた。その結果、労働者階級の政権獲得と国際的団結による社会主義社会の実現を説く（マルクス主義）の影響が様々な分野で高まり、ロシア革命家中国の革命に影響を与えるとともに、プロレタリア文学など芸術の分野にも影響が広がった。
33. 他方、（マックス＝ヴェーバー）のように、現代社会における官僚制の拡大傾向に警鐘を鳴らす社会学者も登場し、アメリカ合衆国では、観念的体型よりも経験を重視する（デューイ）らの（プラグマティズム）が台頭した。
34. 世界規模での自由競争が推奨された結果、国内外で膨大な所得格差が発生し、投機的な活動がリーマンショックなどの深刻な経済危機を生み出した。これに対して、人間社会における何らかの共同性の回復や福祉国家の役割を見直す動きも出てきている。その結果、民族集団がそれぞれの文化の独自性を保持しつつ、他民族の文化を尊重し共存を図る（多文化主義）などの新しい思想や生活スタイルが模索されるようになっている。